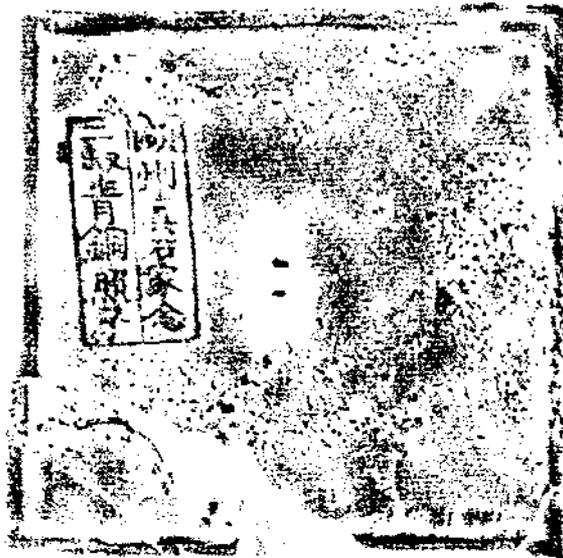


光永・岡ノ下遺跡

土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書



2000.11

高知県教育委員会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

光永・岡ノ下遺跡

土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書

2000.11

高 知 県 教 育 委 員 会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



調査前全景(東上空より)



447

土師器(皿)



531

湖州方鏡



綠釉陶器1



綠釉陶器2



古式土師器, 須惠器, 土師質土器, 瓦器

序

財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターでは、高知県教育委員会が平成8年度から建設省四国地方建設局の委託を受けた土佐市バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施しております。土佐市はこれまでに本格的な発掘調査は実施されておらず、遺跡の状況が不明瞭な地域でしたが、この調査を契機に四国横断自動車道の西への延伸等により大規模発掘調査が次々に実施され、全国的に貴重な発見もあり、土佐市の歴史が徐々に解明されてきております。

本書は、平成8年度に実施した土佐市バイパス建設に伴う光永・岡ノ下遺跡(土佐バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書)の発掘調査報告書です。当遺跡では、県内初出土となった湖州方鏡を始めとして、古墳時代の祭祀遺物、古代の官衙関連遺物そして中世前半の集落などを確認しており、搬入された緑釉陶器や暗文の施された土師器、在地生産を示唆する瓦器の出土など歴史解明に欠くことのできない数多くの資料が出土しています。この報告書が地域の歴史解明や考古学研究の資料、さらには埋蔵文化財の保護につながれば幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたっては、建設省四国地方建設局高知工事事務所及び土佐市バイパス監督官事務所の埋蔵文化財に対する深い御理解と御協力を賜ったことに心から謝意を表すると共に、調査、報告書作成では関係各位に多大な御指導並びに御教示を頂いたことに心より厚くお礼申し上げます。

平成12年11月

財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター

所長 門田 伍朗

例言

- 1.本書は土佐市バイパス建設に伴い平成8年度に実施した光永・岡ノ下遺跡の発掘調査報告書である。
- 2.本調査は、高知県教育委員会が建設省四国地方建設局から受託し、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。
- 3.光永・岡ノ下遺跡は高知県土佐市高岡町に所在する古墳時代から中世にかけての複合遺跡で、古墳時代では祭祀跡、古代では官衙関連遺構・遺物、中世では集落跡を確認している。中でも、緑釉陶器、暗文の施された土師器、県内初出土の湖州方鏡は注目される。発掘調査は平成8年、9年、12年に実施した。発掘調査面積は、平成8年度A区が2,486m²（延べ面積：3,444m²）、B区が524m²、C区が2,524m²、平成9年度B区が220m²、C区が524m²、平成12年度C区が70m²であり、延べ調査面積は6,785m²であった。
- 4.発掘調査は次の体制で行った。

平成8年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 古谷碩志

総務：同次長兼総務課長 田岡英雄，同主幹 吉岡利一，同主事 石川 馨

調査総括：同調査課長 岩崎嘉郎

調査担当：同調査第四係長 廣田佳久，同専門調査員 泉 幸代，同主任調査員 伊藤 強，
同調査員 小野由香・田中涼子，技術補助員 有田千帆・大原直美

臨時職員：大崎奈智子，滝本幸子

平成9年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 古谷碩志

総務：同次長兼総務課長 津野洲夫，同主幹 吉岡利一・石川 馨

調査担当：同調査第四班長 廣田佳久，同専門調査員 宮地早苗・泉 幸代，同主任調査員
伊藤 強，同調査員 田中涼子，技術補助員 有田千帆・大原直美

臨時職員：滝本幸子，中村美樹

平成10年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 古谷碩志

総務：同総務課長 津野洲夫，同主幹 大原裕幸・石川 馨

調査担当：同調査第四班長 廣田佳久，同専門調査員 名木 郁，同主任調査員 伊藤 強，
同調査員 田中涼子，技術補助員 大原直美

臨時職員：中村美樹，福留美穂

平成11年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 河崎正幸

総務：同総務課長 島内信雄，同主任 山本三津子，同主幹 大原裕幸

調査担当：同調査第四班長 廣田佳久，同専門調査員 高橋厚彦，同主任調査員 伊藤 強・
畠中宏一，同調査員 田中涼子・下村 裕，技術補助員 大原直美

臨時職員：福留美穂，市村敏江

平成12年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 門田伍朗

総務：同総務課長 島内信雄，同主任 山本三津子，同主幹 大原裕幸

調査担当：同調査第四班長 廣田佳久，同専門調査員 高橋厚彦・岩本繁樹，同主任調査員

伊藤 強・江戸秀輝，同調査員 田中涼子・下村 裕・技術補助員 大原直美

臨時職員：原真由美，福留美穂

5. 本書の執筆は調査を担当した廣田，伊藤，田中がそれぞれ執筆し，編集等は廣田が行った。現場写真は3名が行い，遺物写真は廣田が撮影した。
6. 遺構については，SB(掘立柱建物跡)，SA(塀・柵列跡)，SK(土坑)，SD(溝跡)，P(ピット)，SF(祭祀跡)，SX(性格不明遺構)，SR(自然流路)，SC(集石遺構)等の略号も併用している。遺構番号は遺構ごとに通し番号とした。また，掲載している遺構の平面図の縮尺はそれぞれに記しており，方位Nは公共座標におけるGNであり，遺跡付近(国土基本図 - ID18)の真北はGNに対し東に $0^{\circ}16'$ ，磁北はGNに対し西に $5^{\circ}48'35''$ 振っている。なお，D13(X=55,200,Y=-6,700)は北緯 $33^{\circ}29'32''$ ，東経 $133^{\circ}25'40''$ である。
7. 遺物については，原則として古式土師器が縮尺1/4，他の土器，鉄器，石器が縮尺1/3で掲載し，各挿図には縮尺を表示している。遺物番号は通し番号で挿図と図版の遺物番号は一致している。なお，報告書中で土師質土器としているものはロクロないし回転台を使用しない土師器に対しロクロないし回転台を使用した素焼き土器の総称として使用している。所謂「回転台土師器」，「ロクロ土師器」などと云われるものに当たる。
8. 現地調査及び本報告書を作成するにあたって，下記の方々のご指導並びに貴重なご教示，ご助言を賜りご協力頂いた。記して感謝の意を表したい。
山中敏史(奈良国立文化財研究所)，久保智康(京都国立博物館)，鈴田由紀夫(九州陶磁文化館)，森島康雄(京都府埋蔵文化財調査研究センター)，鈴木康之(広島県立歴史博物館)，百瀬正恒(京都市埋蔵文化財研究所)，橋本久和(当時高槻市教育委員会)，前田佳久(神戸市立博物館)
9. 整理作業は下記の方々に行って頂いた。また，同センターの諸氏から貴重な助言を得た。記して感謝する次第である。
整理作業員
島村加奈，森田史子，岸本洋子，元木恵利子，坂本エリ，岸田美智，竹村小百合，森田直美，松田美香，岩井涼子，井上紹子，安岡明子，吉野絵里，森川 歩，森沢美紀，石元清香，片山紀子，岡宗裕美
10. 調査にあたっては，建設省四国地方建設局高知工事事務所，土佐市バイパス監督官詰所，社団法人高知県建設技術公社のご協力を頂いた。また地元住民の方々に，遺跡に対する深いご理解とご援助を頂き，厚く感謝の意を表したい。
11. 出土遺物は，平成8年度が「96 - 4TI」，平成9年度が「97 - 4TI」，平成12年度が「99 - 4TI」と註記し，財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第 章 序章(廣田)

1. はじめに.....	1
2. 調査の契機と経過.....	2
(1) 契機と経過.....	2
(2) 確認調査.....	3
調査地区の状況.....	4
遺跡の概要.....	8
(3) 調査の方法.....	11
3. 遺跡の地理的・歴史的環境.....	12
(1) 地理的環境.....	12
(2) 歴史的環境.....	12

第 章 調査の概要

1. 調査の経過.....	19
(1) 調査の経過(伊藤).....	19
(2) 調査日誌抄(田中).....	19
2. 調査の概要.....	26
(1) A区(伊藤).....	26
層序.....	27
堆積層出土遺物.....	28
(2) B区(田中).....	45
層序.....	45
堆積層出土遺物.....	46
(3) C区(田中).....	51
層序.....	52
堆積層出土遺物.....	53
3. 遺構と遺物.....	68
(1) A区(伊藤).....	68
古墳時代.....	68
古代.....	69
中世.....	82
(2) B区(伊藤).....	89
中世.....	89
(3) C区(田中).....	102
中世.....	102

第 章 考察

1. 古墳時代(伊藤).....	125
2. 古 代(伊藤).....	125
3. 中 世(田中).....	126
4. 緑釉陶器について(伊藤).....	129
5. 湖州方鏡について(廣田).....	130
6. ま と め(田中).....	132

第 章 自然科学分析

土佐市バイパス調査出土遺物 ,湖州鏡の科学的分析	135
--------------------------------	-----

挿 図 目 次

Fig. 1 高知県土佐市及び土佐市バイパス関連遺跡群位置図.....	1
Fig. 2 土佐市バイパス関連遺跡群位置図(S = 1/100,000).....	2
Fig. 3 平成2年度当時の周知の遺跡及び試掘対象地区(S = 1/10,000).....	3
Fig. 4 野田地区試掘トレンチ位置図(S = 1/2,500).....	4
Fig. 5 天神地区試掘トレンチ位置図(S = 1/2,500).....	5
Fig. 6 林口地区・藤波地区試掘トレンチ位置図(S = 1/2,500).....	6
Fig. 7 真幸町地区・蓮池地区試掘トレンチ位置図(S = 1/2,500).....	7
Fig. 8 確認された遺跡及びグリッド設定図(S = 1/10,000).....	11
Fig. 9 土佐市遺跡分布図(S = 1/100,000).....	13
Fig.10 周辺の遺跡分布図(S = 1/25,000).....	14
Fig.11 遺跡の範囲と調査対象区域図(S = 1/2,500).....	20
Fig.12 調査区設定図(S = 1/2,000).....	21
Fig.13 A区記者発表	23
Fig.14 C区現地説明会	25
Fig.15 A・B区調査区及び調査年度(S = 1/1,000).....	27
Fig.16 A区セクション図	28
Fig.17 A区第 層出土遺物実測図(土師器・須恵器・緑釉陶器).....	31
Fig.18 A区第 層出土遺物実測図(瓦器・土師質土器・白磁・青磁・土製品).....	32
Fig.19 A区第 層出土遺物実測図(石製品).....	33
Fig.20 A区第 層出土遺物実測図(土師器1).....	34
Fig.21 A区第 層出土遺物実測図(土師器2).....	35
Fig.22 A区第 層出土遺物実測図(土師器3).....	36
Fig.23 A区第 層出土遺物実測図(土師器4).....	37
Fig.24 A区第 層出土遺物実測図(土師器5).....	38

Fig.25	A区第 層出土遺物実測図(土師器6)	39
Fig.26	A区第 層出土遺物実測図(須恵器1)	41
Fig.27	A区第 層出土遺物実測図(須恵器2)	42
Fig.28	A区第 層出土遺物実測図(緑釉陶器・黒色土器)	43
Fig.29	A区第 層出土遺物実測図(土製品・石製品)	44
Fig.30	B区セクション図	45
Fig.31	B区第 層出土遺物実測図(土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦器・東播系須恵器)	47
Fig.32	B区第 層出土遺物実測図(土師質土器・瓦質土器・備前焼)	48
Fig.33	B区第 層出土遺物実測図(白磁・青磁)	49
Fig.34	B区第 層出土遺物実測図(土製品・石製品)	50
Fig.35	C区調査区及び調査年度(S = 1/1,000)	51
Fig.36	C区セクション図	53
Fig.37	C区第 層出土遺物実測図(土師器・須恵器)	54
Fig.38	C区第 層出土遺物実測図(瓦器)	57
Fig.39	C区第 層出土遺物実測図(東播系須恵器)	59
Fig.40	C区第 層出土遺物実測図(土師質土器1)	61
Fig.41	C区第 層出土遺物実測図(土師質土器2・瓦質土器)	62
Fig.42	C区第 層出土遺物実測図(白磁)	65
Fig.43	C区第 層出土遺物実測図(青磁・青白磁・土製品)	66
Fig.44	C区第 層出土遺物実測図(石製品)	67
Fig.45	SF - 1遺物出土状態	68
Fig.46	SF - 1出土遺物	69
Fig.47	SK - 2	69
Fig.48	SK - 4	70
Fig.49	SK - 4出土遺物	71
Fig.50	SK - 5	71
Fig.51	SK - 6	72
Fig.52	SK - 5・6出土遺物	72
Fig.53	SD - 2・3セクション図	73
Fig.54	SD - 2・3, P - 1出土遺物	74
Fig.55	SX - 1	75
Fig.56	SX - 3	76
Fig.57	SX - 1~3出土遺物	76
Fig.58	SX - 4	77
Fig.59	SX - 4出土遺物	77
Fig.60	SX - 5出土遺物	79

Fig.61	SR - 1・2出土遺物	81
Fig.62	SC - 1出土遺物	82
Fig.63	SB - 1	82
Fig.64	SB - 2	83
Fig.65	SB - 3	83
Fig.66	SA - 1	84
Fig.67	SK - 7	84
Fig.68	SK - 9	84
Fig.69	SK - 11	85
Fig.70	SK - 14	85
Fig.71	SK - 7・9・11・14出土遺物	86
Fig.72	SD - 4～7セクション図	88
Fig.73	SD - 4～7出土遺物	88
Fig.74	P - 3～5出土遺物	89
Fig.75	SB - 4	89
Fig.76	SB - 5	90
Fig.77	SB - 6	90
Fig.78	SB - 7	91
Fig.79	SB - 8	91
Fig.80	SA - 2	91
Fig.81	SA - 3	91
Fig.82	SA - 4	92
Fig.83	SA - 5	92
Fig.84	SK - 19・20	93
Fig.85	SK - 24・SD - 12	94
Fig.86	SK - 43	96
Fig.87	SD - 9・12～14・17～19セクション図	99
Fig.88	B区遺構出土遺物	101
Fig.89	SB - 9	102
Fig.90	SB - 10	102
Fig.91	SB - 11	103
Fig.92	SB - 12	104
Fig.93	SB - 13	104
Fig.94	SB - 9～11・13出土遺物	105
Fig.95	SB - 14	105
Fig.96	SB - 15	106

Fig. 97 SB - 16	106
Fig. 98 SB - 17	107
Fig. 99 SA - 6	107
Fig.100 SA - 7	107
Fig.101 SB - 14 ~ 16 ・ SA - 7出土遺物	108
Fig.102 SK - 44	108
Fig.103 SK - 47	109
Fig.104 SK - 48	109
Fig.105 SK - 44 ~ 49 ・ 51出土遺物	110
Fig.106 SK - 52遺物出土状態	111
Fig.107 SK - 52出土遺物	111
Fig.108 SD - 22 ・ 25 ~ 27セクション図	113
Fig.109 SD - 27遺物出土状態	114
Fig.110 SD - 28 ・ 33 ・ 34セクション図	115
Fig.111 SD - 29遺物出土状態	116
Fig.112 SD - 35 ~ 39 ・ 41セクション図	117
Fig.113 SD - 22 ・ 25 ・ 27 ~ 29 ・ 33 ~ 37出土遺物	119
Fig.114 C区ピット出土遺物	123
Fig.115 SR - 3セクション図	124
Fig.116 湖州鏡 背面(分析部位表記)	139
Fig.117 湖州鏡 鏡面(分析部位表記)	139
Fig.118 顕微鏡写真 微量片(×15)	140
Fig.119 顕微鏡写真 微量片,裏(×15)	140
Fig.120 顕微鏡写真 微量片,断面俯瞰(×20)	140

表目次

Tab. 1 土佐市の遺跡	13	Tab.10 湖州鏡(鏡面)測定条件	137
Tab. 2 周辺の遺跡一覧	15	Tab.11 湖州鏡(鏡面)定性結果	137
Tab. 3 A区土坑計測表	86	Tab.12 湖州鏡(鏡面)定量結果	137
Tab. 4 A区・B区塀・柵列跡計測表	92	Tab.13 湖州鏡(背面)測定条件	138
Tab. 5 B区土坑計測表	97	Tab.14 湖州鏡(背面)定性結果	138
Tab. 6 C区塀・柵列跡計測表	108	Tab.15 湖州鏡(背面)定量結果	138
Tab. 7 C区土坑計測表	112	Tab.16 湖州鏡(破片断面)測定条件	138
Tab. 8 A区・B区掘立柱建物跡計測表	127	Tab.17 湖州鏡(破片断面)定性結果	138
Tab. 9 C区掘立柱建物跡計測表	128	Tab.18 湖州鏡(破片断面)定量結果	139

図版目次

- 巻頭図版1 調査前全景(東上空より)
 巻頭図版2 土師器
 湖州方鏡
 巻頭図版3 緑釉陶器1
 緑釉陶器2
 巻頭図版4 古式土師器,須恵器,土師質土器,
 瓦器
 PL. 1 A区調査前全景(東より)
 A区調査前全景(西より)
 PL. 2 A区遺構検出状態(西より)
 A区遺構完掘状態(北より)
 PL. 3 A区北部古代遺構検出状態(西より)
 A区北部古代遺構完掘状態(西より)
 PL. 4 A区遺構検出状態(東より)
 A区遺構検出状態(西より)
 PL. 5 A区遺構完掘状態(東より)
 A区遺構完掘状態(西より)
 PL. 6 A区南壁セクション
 A区東壁セクション
 PL. 7 SF-1遺物出土状態1
 SF-1遺物出土状態2
 PL. 8 SF-1古式土師器(395)出土状態
 SF-1古式土師器(394)出土状態
 PL. 9 SX-5土師器(447)出土状態
 SK-4須恵器(402)出土状態
 PL.10 古式土師器出土状態, SF-1古式土師器
 (398)出土状態, 須恵器出土状態, SK-1
 (東より), SK-2(南より), SK-6バンクセ
 クション, SD-2土師質土器(418)出土状
 態, SD-4(東より)
 PL.11 SX-2須恵器(432)出土状態, SX-3(南よ
 り), SX-5遺物出土状態, SR-2(西より),
 SR-2・3完掘状態, SC-1検出状態, SK-7
 (東より), SK-9(南より)
 PL.12 SK-11短刀(481)出土状態, SK-11短刀
 (481)出土状態, SD-4(南より), SD-5(西
 より), SD-6(南より), SD-8(南より), A
 区南壁セクション, A区水没状態
 PL.13 B区遺構検出状態(西より)
 B区遺構完掘状態(西より)
 PL.14 B区遺構検出状態(西より)
 B区遺構完掘状態(西より)
 PL.15 B区遺構検出状態(南より)
 B区遺構完掘状態(南より)
 PL.16 B区南壁セクション
 B区北壁セクション
 PL.17 SK-12(西より), SK-16(西より), SK-18
 (南より), SK-19・20(南より), SK-19瓦
 器小皿出土状態, SK-19瓦器小皿出土
 状態, SK-23(南より), SK-32(北より)
 PL.18 SK-34(北より), SD-9(西より), SD-10
 (東より), SD-12(西より), SD-12・13(南
 より), SD-13, SK-27(南東より), SD-17
 (南より), SD-20, SK-38(北より)
 PL.19 C区調査前全景(西より)
 C区北東部調査前全景(南東より)
 PL.20 C区遺構検出状態(東上空より)
 C区遺構完掘状態(東上空より)
 PL.21 C区遺構検出状態(西より)
 C区遺構完掘状態(西より)
 PL.22 C区南壁セクション東部
 C区南壁セクション中央部1
 PL.23 C区南壁セクション中央部2
 C区南壁セクション西部
 PL.24 C区北東部検出状態(東より)
 C区北東部完掘状態(東より)
 PL.25 C区南東部遺構検出状態(南より)
 C区南東部遺構完掘状態(南西より)

- PL.26 C区東部遺構検出状態(東より)
C区東部遺構完掘状態(東より)
- PL.27 SB-11(東より)
SB-12・13(東より)
- PL.28 SB-14,SA-7(南より)
SB-17・18(北より)
- PL.29 SK-52遺物出土状態(南より)
落ち込み部分完掘状態(北より)
- PL.30 第層瓦器(278)出土状態,第層土師質土器(296)出土状態,第層土師質土器(324)出土状態,第層青磁(373)出土状態,第層遺物出土状態(南より),SK-44(南より),SD-24・27(西より),SD-22(南より)
- PL.31 SD-25(南より),SD-27(東より),SD-27遺物出土状態(南より),SD-27遺物出土状態(北より),SD-28(南より),SD-29(南より),SD-29土師質土器(558)出土状態(南より),SD-29遺物出土状態(東より)
- PL.32 SD-30(西より),SD-31(北より),SD-33(南より)SD-34(南より)SD-35(東より),SD-41(北より),SR-3(南より),根石検出状態
- PL.33 土師器(杯・皿)
緑釉陶器(椀)
- PL.34 土師質土器(羽釜)
白磁(碗)
- PL.35 青磁(碗・皿・杯)
古式土師器(高杯)
- PL.36 土師器(甕)
須恵器(蓋・皿)
- PL.37 須恵器(杯)
須恵器(壺・甕)
- PL.38 緑釉陶器(椀)
土製品(土錘)
- PL.39 土師器(甕),須恵器(杯・椀・甕)
瓦器(椀・小皿)
- PL.40 土師質土器(杯・小皿・椀)
土師質土器(鍋・羽釜)
- PL.41 白磁(碗・皿)
青磁(碗・小碗・杯)
- PL.42 石製品(砥石)
須恵器(蓋・杯・高杯)
- PL.43 瓦器(椀)
瓦器(椀)
- PL.44 瓦器(椀)
瓦器(椀)
- PL.45 瓦器(小皿)
東播系須恵器(片口鉢)
- PL.46 土師質土器(杯)
土師質土器(杯・椀)
- PL.47 白磁(碗)
白磁(皿)
- PL.48 青磁(碗・皿)
青磁(碗)
- PL.49 青磁(碗)
土師器(蓋),須恵器(蓋)
- PL.50 土師器(甕)
土師器(甕),須恵器(杯)
- PL.51 土師器(甕),須恵器(蓋),土製品(土錘)
須恵器(蓋),緑釉陶器(椀)
- PL.52 土師質土器(小皿),瓦質土器(羽釜),土製品(土錘)
土師器(甕),黒色土器(椀),備前(鉢)
- PL.53 瓦器(椀),東播系須恵器(片口鉢),土師質土器(杯)
白磁(碗),青磁(碗・皿)
- PL.54 瓦器(椀),土師質土器(小皿・椀)
土師質土器(杯・小皿・椀)
- PL.55 瓦器(椀・小皿),青磁(碗)内面
瓦器(椀・小皿),青磁(碗)外面

- PL.56 瓦器(椀)
白磁(碗),青磁(碗)
- PL.57 須惠器(杯・椀),瓦器(椀),土師質土器
(杯)内面
須惠器(杯・椀),瓦器(椀),土師質土器
(杯)外面
- PL.58 湖州方鏡
鉄製品(刀子)
- PL.59 土師器(椀),土師質土器(小皿),白磁
(碗)
土師質土器(杯・椀),白磁(碗・皿)
- PL.60 白磁(碗),青磁(碗)内面
白磁(碗),青磁(碗)外面
- PL.61 瓦器(椀)内面
瓦器(椀)外面
- PL.62 瓦器(椀・小皿)内面
瓦器(椀・小皿)外面
- PL.63 古式土師器(壺・甕),須惠器(高杯・壺)
- PL.64 古式土師器(甕・高杯)
- PL.65 古式土師器(高杯)
- PL.66 土師器(甕),須惠器(高杯),石製品(砥
石・叩石)
- PL.67 古式土師器(壺),白磁(皿),石製品(砥
石・叩石)
- PL.68 古式土師器(甕・高杯),土師器(皿),石
製品(砥石・叩石)
- PL.69 古式土師器(壺・甕・高杯),土師器(甕)
- PL.70 古式土師器(高杯),土師器(甕・鉢・高
杯・甗),黑色土器(椀),東播系須惠器
(片口鉢)
- PL.71 東播系須惠器(甕),土師質土器(小皿),
瓦質土器(羽釜),青白磁(合子蓋),染付
(碗),近世陶器(甕),土製品(土錘),石製
品(石包丁)
- PL.72 土師器(甕・杯),須惠器(蓋・鉢),土製
品(土錘)
- PL.73 須惠器(蓋),瓦器(椀),土師質土器(杯・
椀),白磁(碗),青磁(碗),土製品(土錘),
古錢
- PL.74 土師器(皿),須惠器(蓋・杯・皿),緑釉
陶器(椀)
- PL.75 古式土師器(甕・鉢),須惠器(皿・壺),
土師質土器(杯),土製品(土錘),石製品
(砥石)
- PL.76 土師器(杯),須惠器(蓋・杯)
- PL.77 須惠器(皿・椀)
- PL.78 須惠器(壺),緑釉陶器(椀),土師質土器
(小皿)
- PL.79 瓦器(椀・小皿),土師質土器(杯),青磁
(碗)
- PL.80 土師質土器(杯・小皿・椀),白磁(碗)
- PL.81 土師器(蓋・杯・小皿),須惠器(杯),白
磁(碗・皿)
- PL.82 土師器(皿),須惠器(蓋・杯・皿・盤),
鉄製品(刀子)
- PL.83 須惠器(杯),瓦器(椀),土師質土器(杯・
小皿),鉄製品(短刀)
- PL.84 瓦器(小皿),土師質土器(杯・小皿),土
製品(土錘)
- PL.85 瓦器(椀),土師質土器(杯・小皿)

付図目次

- 付図1 A区遺構平面図(S = 1/200)
付図2 B区遺構平面図(S = 1/200)
付図3 C区遺構平面図(S = 1/200)

第 章 序章

1. はじめに

本書は、高知県教育委員会が建設省四国地方建設局から業務委託を受けた土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査について、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが平成8年度、平成9年度、平成11年度に実施した光永・岡ノ下遺跡の発掘調査の結果をまとめたものである。この一連の調査は建設省四国地方建設局高知工事事務所が実施している土佐市バイパス建設工事に伴い工事区域内に所在する遺跡(埋蔵文化財)の内、工事の影響を受けるものについて事前に発掘調査を行い記録保存を図ることを目的としている。

光永・岡ノ下遺跡¹⁾は平成7年度に実施した事前の試掘調査によって確認された遺跡で、本書で報告するのは主に平成8年度本調査を実施した地区で、土地買収の関係上、平成9年度と平成12年度にもその一部を調査し、合わせて報告している。また、平成9・10年度に実施した天神遺跡(『天神遺跡』として報告)とは隣接しており、遺跡の立地と時代を考慮すれば総合的な捉え方が必要となつてこよう。それぞれ遺構の中心は微高地上にあるが、その間にある後背湿地にも生産関連ではないかとみられる遺構が残存しており、単に微高地上で遺跡の範囲を括ることは便宜上止むを得ないとしても当時の生活区域を表しているとは言い難い。一方、この土佐市、中でも高岡町は旧地形が起伏に富んでいたことが発掘調査によって明らかになって来ており、現況で遺跡の範囲を把握することは難しく、判明している自然堤防などの旧地形で捉えることが肝要であろう。本遺跡に限って見れば、居住域は南北に延びる自然堤防上にあり、そこから繋がる後背湿地が生産域とみることができる。ただ、その後背湿地から続く微高地(天神遺跡)とも有機的な繋がりがみられる。



Fig.1 高知県土佐市及び土佐市バイパス関連遺跡群位置図

2. 調査の契機と経過

(1) 契機と経過

土佐市バイパスは国道56号線の渋滞緩和と高知自動車道のアクセス(土佐市インターチェンジ)道路として計画されたもので、埋蔵文化財について具体的な調整を開始したのは平成7年度からであった。ここでは平成11年度までに実施した市道都市計画道路1号線(以下「都計道路」という)以西の関連調査⁽²⁾について記す。平成12年度も続行中である都計道路以东の関連調査については土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書 以降に譲る。なお、平成6年度に都計道路と接する西側の試掘調査を高知県教育委員会が行っているが古代の遺物が出土したものの明確な遺構は確認されていない。この部分は平成8年度の本調査の結果、丁度光永・岡ノ下遺跡と野田遺跡の間の後背湿地であることが判明している。

まず、平成7年度に都計道路から国道56号線に接する部分について建設省四国地方建設局高知工事事務所と埋蔵文化財の取り扱いについて高知県教育委員会を交え調整を行った。その結果、周知されている林口遺跡も含め今までに周辺で発掘調査が行われておらず遺構の遺存状況が全く不明であるため土地の買収が完了した箇所の試掘調査を行うこととした。遺構が確認されてもルート変更が困難であるため確認調査費用についても原因者負担で行うこととなった。確認調査を年度途中で実施することとなったが県での予算化が難しく、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターと直接委託契約を結び行うこととなった。確認調査の結果、林口遺跡に加え新たに二つの遺跡(光永・岡ノ下遺跡、天神遺跡)が確認され、火渡川に隣接する部分と藤並地区を除く箇所が本調査を要する箇所となった。

この結果を受け、平成8年度から平成11年度の計画で都計道路から以西の発掘調査を実施することとなり、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが建設省四国地方建設局から業務委託を受けた高知県教育委員会の委託を受け発掘調査を実施した。当初は平成8・9年度に本調査を行い、平成10・11年度に整理作業を行う計画で、平成8年度はほぼ当初計画どおり実施できたが、平成9年度

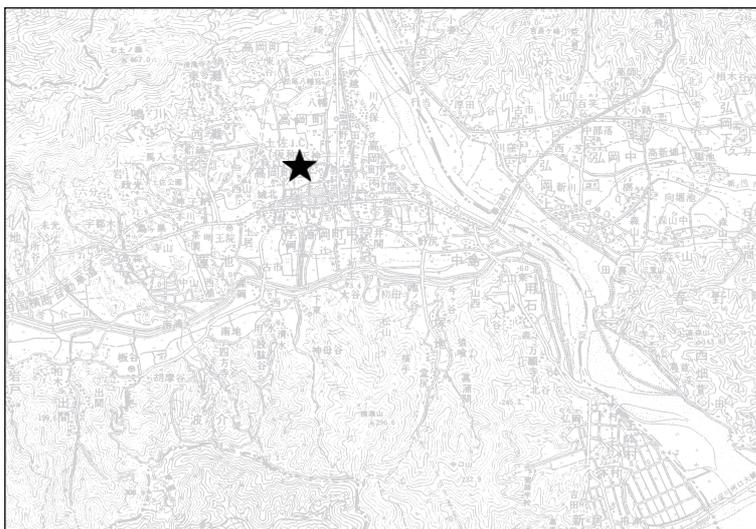


Fig.2 土佐市バイパス関連遺跡群位置図(S=1/100,000)

は予算の削減や土地の未買収などによって天神遺跡の北半分の本調査しか実施できず、止むなく当初計画を1年延長することとなった。平成10年度は天神遺跡の南半分と林口遺跡の南側の本調査及び新たに追加された真幸町部分の試掘調査を実施した。真幸町の試掘調査では新たに中世の遺構が検出され、蓮池城跡北面遺跡が隣接することから当該遺跡範囲の拡がりも捉えられた。平成11年度は残っていた林

口遺跡の北半分と蓮池城跡北面遺跡の本調査及び追加された都計道路から東の県道伊野高岡線までの試掘調査を実施し、新たに中世の遺構が検出された。当該部分には周知の遺跡は所在しないが、立地からみて隣接する野田遺跡の範囲拡大と捉えられた。なお、土佐市バイパス建設にかかる国道56号線の幅員の拡張に伴う確認調査を行い新たに遺構が確認された蓮池城跡北面遺跡についても本調査を実施した。平成12年度はこれまでの整理業務と並行して野田遺跡の本調査を実施している。

(2) 確認調査

当初確認調査は工事が予定されている野田地区、天神地区、林口地区、藤並地区の4地区を対象とし、平成7年度に2回に分けて実施した。第1次が野田・天神・藤並地区を対象に平成7年6月19日～7月18日、第2次が林口地区を対象に平成8年3月11日～3月14日にそれぞれ実施した。調査は5×5mのトレンチを野田地区に7カ所(TR-1～7)、天神地区に9カ所(TR-8～16)、林口地区に4カ所(TR-17～20)、藤並地区に2カ所(TR-21・22)の合計22カ所設定して行った。

平成10年度には新たに追加された真幸町地区の試掘調査を平成10年11月26日、12月1・4日、平成11年3月1～3日に実施した。調査は3×3mのトレンチ1カ所(TR-24)、5×5mのトレンチ8カ所(TR-23・25～31)の合計9カ所設定して行った。

平成11年度には土佐市バイパスにかかる国道56号線の幅員拡張に伴う蓮池地区の確認調査が新

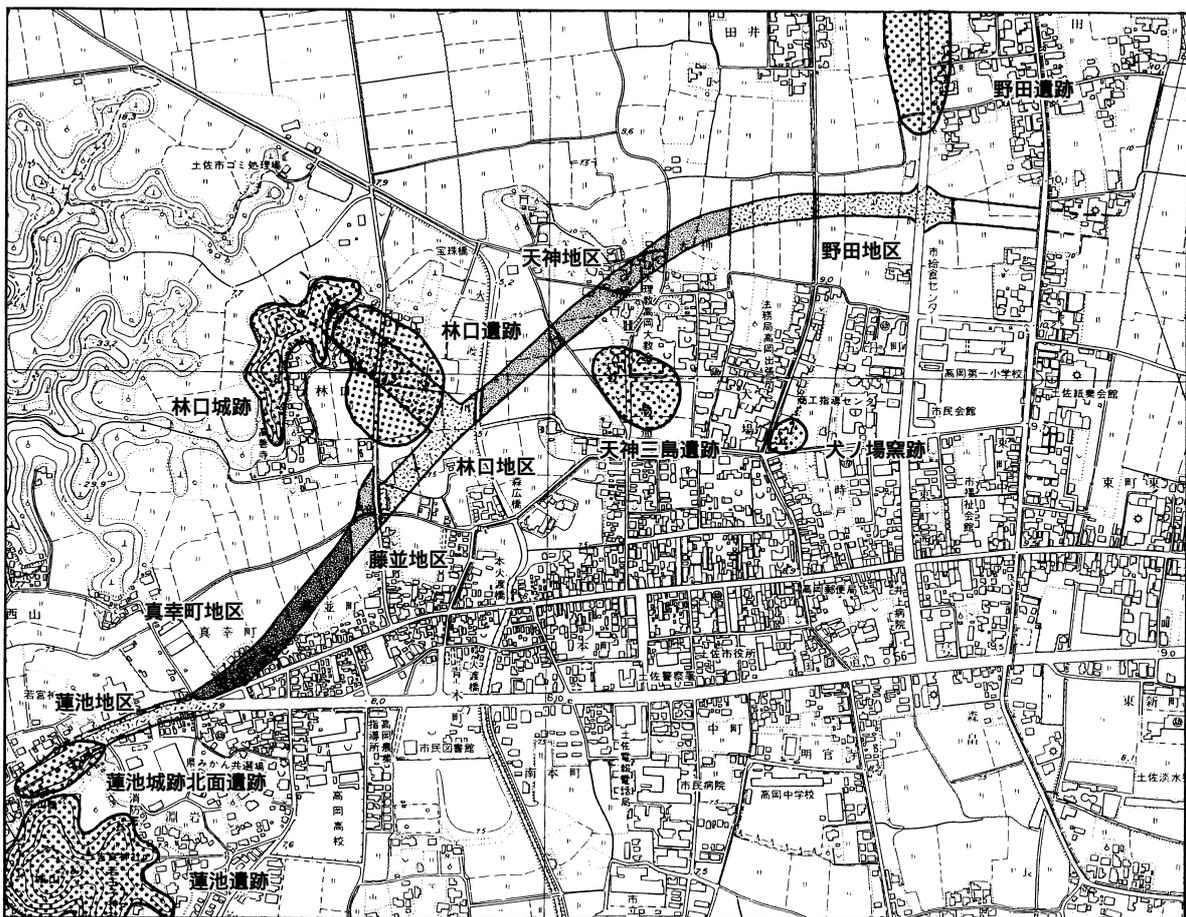


Fig.3 平成2年度当時の周知の遺跡及び試掘対象地区(S=1/10,000)

たに追加され、平成11年9月21・22・27日(国道南側)、平成12年1月5日(国道北側)に実施した。調査は5×5mの試掘トレンチを6カ所設定して行い、遺構が確認された南側については引き続き本調査を行った。

調査地区の状況

野田地区

7カ所に試掘トレンチを設定して調査を行った。設定箇所は調査が可能な都計道路とその東側約20mの範囲に3ヶ所(TR-1~3)と都計道路の西約120mにある用水路から西に約100mの範囲の5ヶ所(TR-4~7)であり、前者からは明確な遺構は検出されなかったが、後者特に用水路に近い箇所に設定したトレンチ(TR-4)から良好な遺物包含層と柱穴などの遺構を検出した。西側に設定した3ヶ所(TR-5~7)のトレンチからも遺物包含層並びに遺構を検出したが、色調が薄くかつ包含する遺物も少なく遺構密度も低くなっていた。この状況から判断して、用水路のある部分が丁度自然堤防に当たり、ここを中心に遺跡が展開しているものと推測され、遺構の密度が少なくなる西側は后背湿地ではなかったかと考えられた。

天神地区

確認調査当時は、宅地が残っており試掘できる箇所は畑地が荒地に限られ、9カ所に試掘トレンチを設定して調査を行った。まず、三島神社が鎮座する低位段丘の残丘(以下「残丘」と言う)の北側に設定したTR-8から弥生土器の集中箇所が検出された。約60cmの客土の下が粘土化しており、湧水が激しく遺構の確認までは至らなかったが遺物の出土状況からみて遺構の存在が充分考えられた。平成9・10年度の本調査の結果、これらの遺物は祭祀関連の遺物と判明した。同残丘の西側に設定した試掘トレンチ(TR-9~11)では弥生時代と古代から中世初めの遺物包含層と遺構を検出した。さら



Fig.4 野田地区試掘トレンチ位置図(S=1/2,500)

に、西側の火渡川左岸部に設定した試掘トレンチ(TR - 12~16)では、火渡川に近いTR - 15・16から河川による堆積層が著しく遺物包含層等は確認できなかったもののTR - 12~16から中世の遺物包含層並びに遺構が検出され、TR - 14の西側から旧河川になるものと判断された。

以上のように天神地区では火渡川隣接部分以外から遺構、遺物が確認でき、本調査が必要であると判断された。

林口地区

林口遺跡の南端部に当たり確認調査当時は水田であり、4カ所に試掘トレンチを設定して調査を行った。火渡川に近いTR - 17・18では表土層直下から中世と近世の遺構が検出され、西側のTR - 19・20では中世の遺物包含層も確認され、遺構の遺存状況も良好であった。この試掘調査では本調

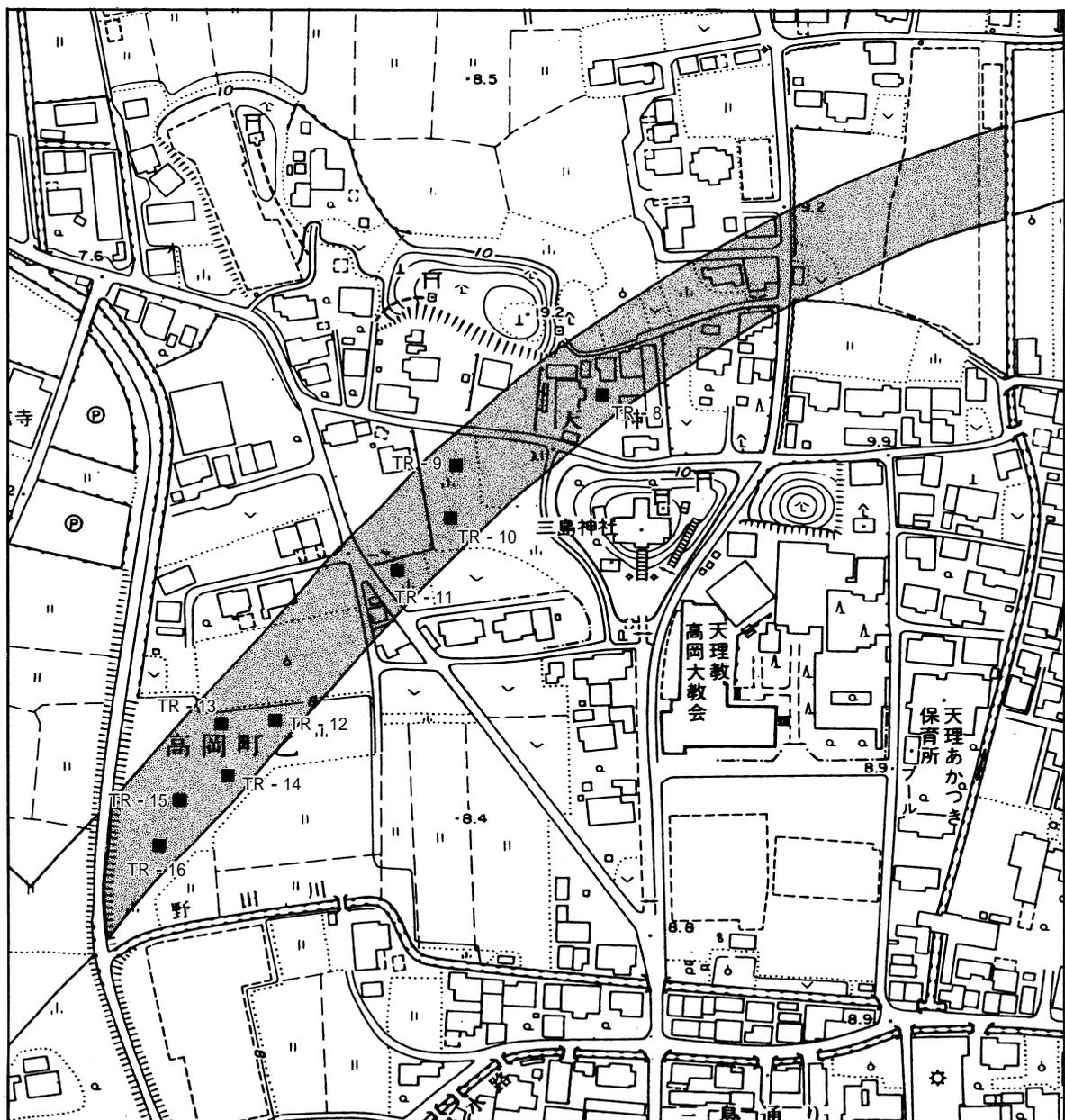


Fig.5 天神地区試掘トレンチ位置図(S=1/2,500)

査(『天神遺跡・林口遺跡』)で検出した屋敷の区画溝と大溝³⁾は丁度TR - 19とTR - 20の間にあり検出されていない。

この結果、林口遺跡でも遺物包含層並びに遺構が遺存していることが判明し、本調査が必要であると判断された。なお、林口遺跡西隣にある林口城跡については工事範囲が城本体から外れておりかつ、工事部分が既に墓地化しているため今回の調査対象地区から除外した。

藤並地区

林口地区とは市道を挟んだ西側に当たり、試掘トレンチを2カ所(TR - 21・22)設定して調査を行った。遺構が検出された林口地区とは隣接するが、土層の堆積状態は大きく異なり、TR - 19・20でみられたような遺物包含層や基盤となる土層は検出されず、粘土化した土層が顕著で低湿地状態を

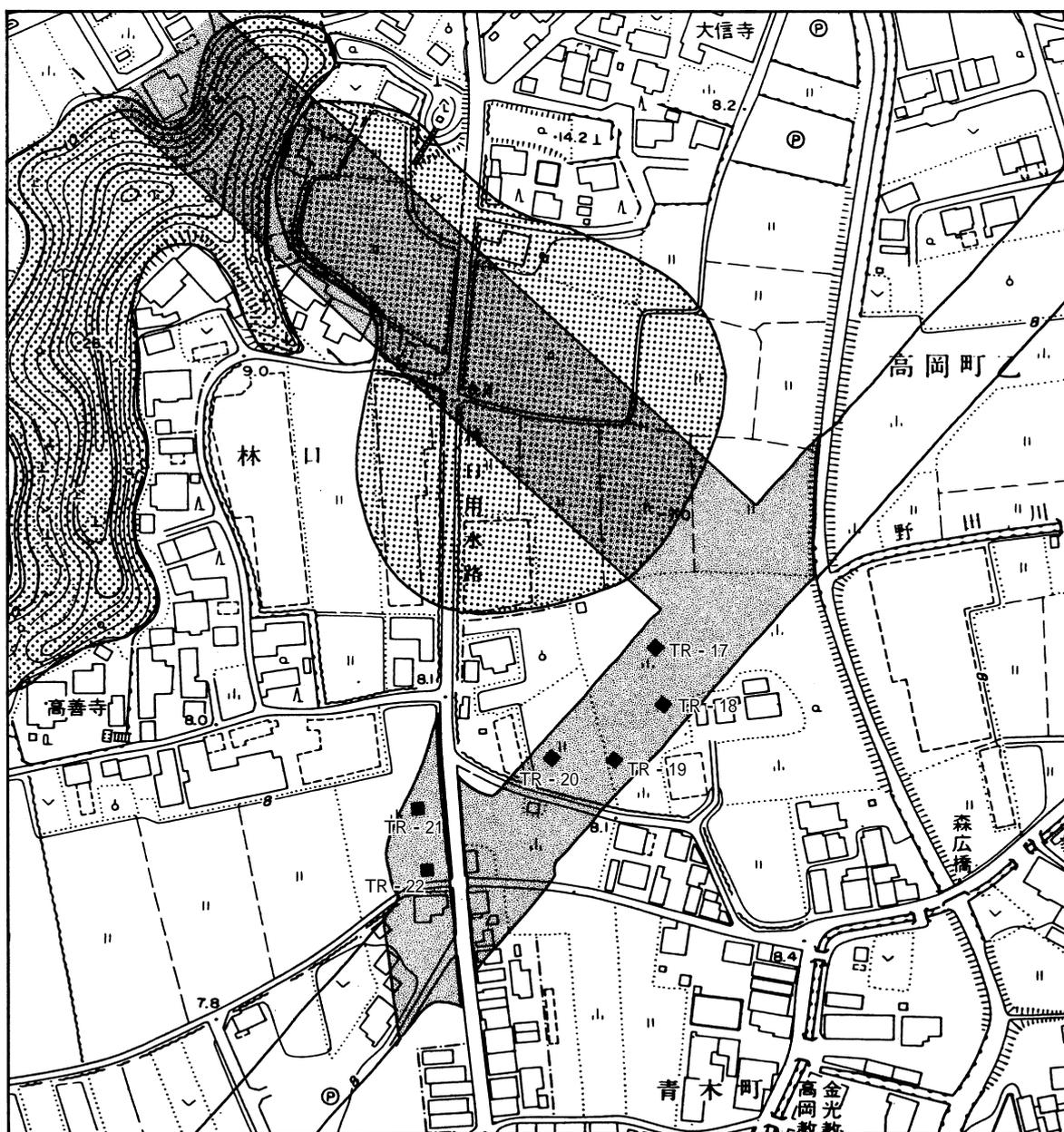


Fig.6 林口地区・藤波地区試掘トレンチ位置図(S=1/2,500)

呈していた。現況でもこの藤並地区から真幸町の間は低湿地となっており、古代においてもほぼ同じ状況を呈していたものと推察され、後述する真幸町地区のTR - 21 ~ 23の調査結果でもそのことを示していた。ただし、北に設定したTR - 21ではTR - 22ほどの堆積土層の粘土化は見られず、地形的にみて北東方向に向って徐々に地形が高くなっている可能性があり、林口遺跡の北側に続くものとみられる。

この結果から本調査は必要ないと判断された。

真幸町地区

新たに追加された調査地区で、前述のようにその大半は現況でも低湿地状態であり遺構が存在する可能性が極めて少ないのではないかと推測された。ただし、国道56号線に隣接する部分については宅地化されておりやや様相を異にするのではないかとみられた。低湿地部分については試掘トレンチを3カ所 (TR - 23 ~ 25)、遺構の存在の可能性が考えられた部分については試掘トレンチを6カ所 (TR - 26 ~ 31) 設定して調査を行った。東側のTR - 23・24は藤並地区のTR - 22とほぼ同じ状況を呈しており、遺物包含層は全くなく、旧表土下は粘土化していた。西側のTR - 25からは基盤層とみられる土層も検出され土坑1基を確認したが、全く遺物がなく時期判断はできないものの埋土の状況

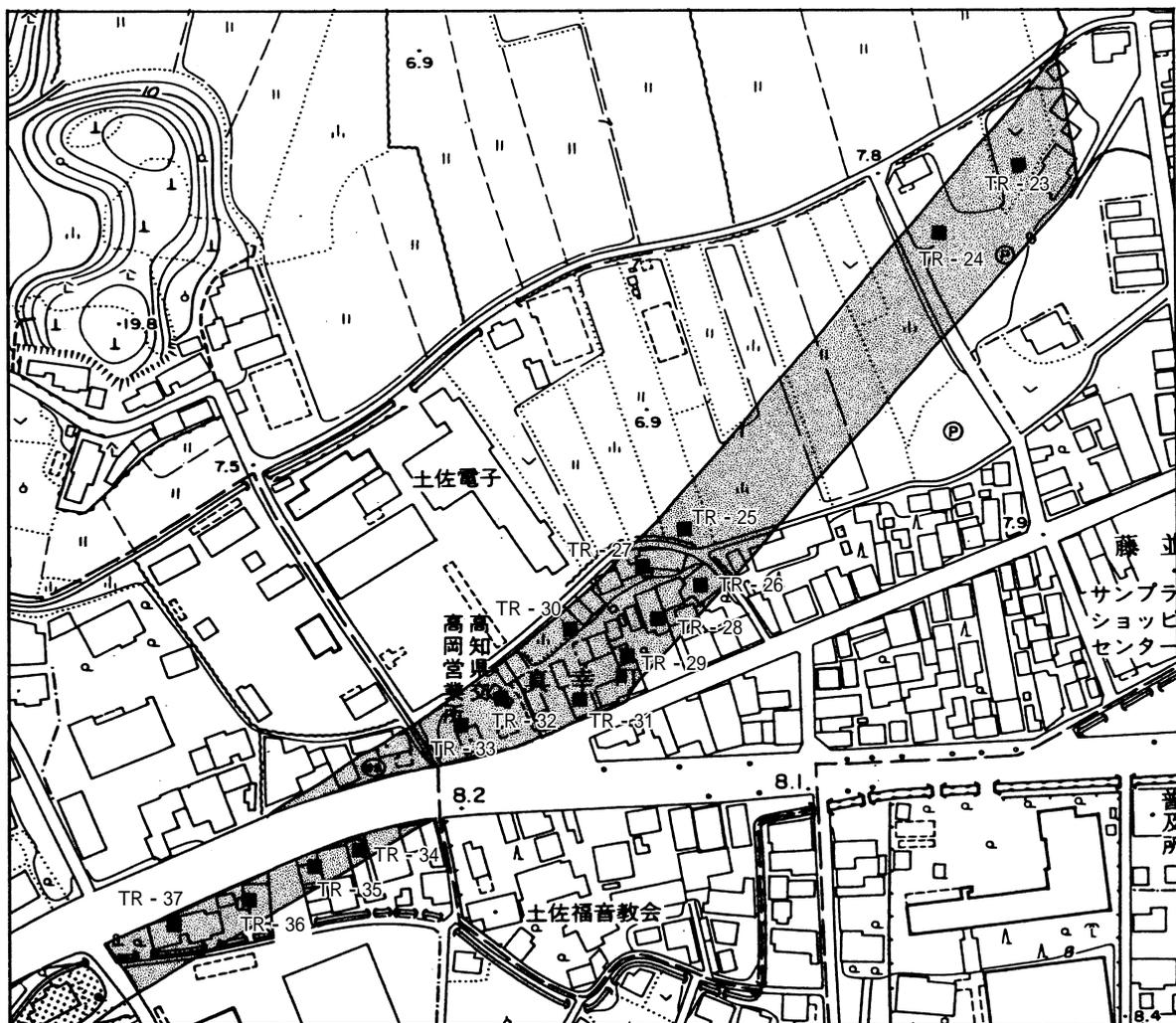


Fig.7 真幸町地区・蓮池地区試掘トレンチ位置図(S=1/2,500)

から考えると近世以降の所産とみられ、少なからず遺構が存在する可能性を示した。西端に設定した各試掘トレンチでは宅地化の際の客土が認められ、TR - 28・30・31から中世の遺物包含層、TR - 30・31からは遺構も検出された。TR - 27・29からは染み状のピットを検出したのみで遺物包含層は確認できず、TR - 26からも遺構は検出されなかった。

以上の結果から本地区では遺構が確認された南西端部が本調査の必要な箇所と位置付けられた。

蓮池地区

土佐市バイパスにかかる国道56号線の幅員拡張に伴って平成11年度に新たに追加された調査地区で、試掘トレンチを国道の北側に2カ所(TR - 32・33)、南側に4カ所(TR - 34・37)設定して調査を行った。北側のTR - 32・33は真幸町地区のTR - 26と似た状況で、遺物包含層はなく、土層の粘土化が進んでおり、遺構は確認されなかった。南側ではTR - 35・37から畝状遺構が検出されたが、間に設定したTR - 34・36では土層の粘土化が著しく、TR - 35・37で見られたような遺物包含層や基盤層は確認されなかった。このことから本地区は起伏した地形であるものとみられ、微高地部分にのみ遺構を確認することとなった。調査範囲も狭く、遺構が確認された部分の本調査を引き続き行った。

遺跡の概要

ここでは試掘調査で確認され、平成11年度までに本調査を終えた光永・岡ノ下遺跡、天神遺跡、林口遺跡、蓮池北面遺跡の4遺跡についての概要を記す。なお、本書で報告する光永・岡ノ下遺跡については調査結果を踏まえ詳述するが、他の遺跡についてはそれぞれの報告書で詳述する。

光永・岡ノ下遺跡

平成7年度に実施した確認調査では古代の遺物もみられたものの検出されたのは12～13世紀の遺構であった。平成8年度に実施した本調査の結果、古墳時代、古代、中世の各時代の遺物、遺構が検出され、古墳時代から中世にかけての複合遺跡であることが判明した。

まず、立地をみると各時代とも南北に延びる仁淀川の自然堤防との関わりで捉えることができる。古墳時代では祭祀関連と見られる遺物の集中箇所が自然堤防の東斜面で検出され、かつて都計道路建設の際隣接する野田遺跡から遺物が出土したこと⁽⁴⁾を加味すると自然堤防の斜面部で何らかの祭祀が比較的古くから広範囲に行われていたのではないかと推察される。今回の調査では住居跡等は確認されなかったものの集落がこの自然堤防上に立地していた可能性も考えられる。古代では、遺構、遺物は自然堤防の東側で検出され、8世紀後半から9世紀の暗文が施された土師器や洛北系の緑釉陶器など官衙関連遺物が県内の遺跡としては比較的多く出土している。今回の調査では目立った遺構は検出されなかったものの周辺に関連施設が存在する可能性が高く、南約400mにある犬ノ場窯跡との関連も注目されよう。今回の調査では中世が本遺跡を特徴付ける時代となった。遺構は南北に延びる仁淀川の自然堤防上に立地しており、微高地に溝で区画された屋敷を造っている。屋敷墓とみられる短刀を副葬した墓坑も検出され、中でも注目されるのは県内初の湖州方鏡の出土である。平面プランは明確にできなかったものの古銭、白磁、土師質土器と共に副葬したものとみられる。一方、遺物では、土師質土器がその多くを占めるものの搬入品も少なからず出土している。その中で、瓦器の出土が比較的多くかつ一元的に畿内からの搬入とは言い難いものも出土している。

形態的には和泉型と言われるものであるが、全般に炭素の吸着が悪く、赤褐色を呈するものが目立ち、中には瓦器の作りで色調が土師質土器と全く同じものもある。また、細部の形態もやや異なり、時期的に の後半から の初めに当たるものであるが、体部の内湾度が強く底部が深い作りとなり、高台が断面逆台形ないし蒲鉾状を呈する比較的しっかりしたものがみられる。これらの特徴から在地生産が行われていたことが考慮され、胎土分析でも在地生産を示唆する結果を得ており、周辺部で生産されていた可能性がより一層強まった。

これら主たる遺構、遺物が出土した微高地から下る低地部分では企画性を持った溝跡が検出され水田耕作との関連を考えたが、土壌分析ではそれを裏付ける結果は得られなかった。しかし、考古学的にその配置状況から推察すると水田が営まれていた可能性も十分考えられるのではなからうか。

このように微高地上が居住域となり西側の後背湿地部分が生産域であった可能性も否定できない。これら遺構の拡がりを見た場合、自然堤防の延びる方向に沿ってくるものとみられる。自然堤防上には江戸時代野中兼山によって造られた前述の用水路が南流しており、遺跡はこの用水路に沿った形で展開するものとみられる。本シリーズ^⑥で詳述する予定であるが、本遺跡と野田遺跡はそれぞれ南流する用水路上、換言すれば仁淀川の自然堤防上に展開するものとみられ、その遺跡範囲は南北に細長いものと考えられる。現在宅地化しているのも立地に適したこの自然堤防上であり、古代においても同様であったものと考えられる。

天神遺跡

光永・岡ノ下遺跡同様平成7年度の試掘調査で確認された遺跡である。巨視的に見ると三島神社の鎮座する残丘の裾部に展開する遺跡と位置付けることが可能であるが、調査箇所が残丘の北側と西側であり、実際どのように遺構が展開するかは今後の調査を待たなければならないであろう。

遺物としては縄文時代から近代に至るものが見られるものの生活の痕跡を残すのは弥生時代、古代、中世及び近世以降であり、当該期の複合遺跡と位置付けることができる。

まず、弥生時代では前期の土器もみられるが、その中心は後期後半であり、土佐市初の竪穴住居跡や祭祀関連遺構などを検出している。住居跡は一般のそれとは様相をやや異にするもので残丘北裾の東斜面に掘削されていた。遺構面が2面あり、それぞれ祭祀の様相を窺わずものである。住居跡の周辺には祭祀土坑や祭祀行為の形跡とみられる土器集中が点在し、中には手づくね土器も見られた。残丘西側でも斜面部を利用した祭祀跡が検出されている。

古代は、主に残丘の西側に展開し、方形の掘方を持った掘立柱建物跡や溝跡が検出され、官衛の様相を窺わず。その拡がりが残丘の南側ではないかとみられ、今後の調査に期待される。併せて、畝跡ではないかとみられる畝状遺構が西斜面に展開する。この畝状遺構は、続く中世そして近世の時期にもほぼ同じ部分の上層で検出されており、長期間同じ西斜面を利用したことになり興味深い。単に立地に適していたという側面以外に集落形態の中で捉える必要があり、今後周辺の調査が実施されればその様相がより一層解明されよう。

中世は、立地的にみて光永・岡ノ下遺跡と有機的な繋がりが看守される。残丘の北側では光永・岡ノ下遺跡から続く後背湿地に接しており、その後背湿地から急激に微高地となり、集落が営まれる。一方、残丘の西側では低湿地を囲む形で集落が営まれ、南側に拡大している。それぞれ溝に区画

されており、屋敷の要素を呈している。時期的にも光永・岡ノ下遺跡と同じ12世紀後半から13世紀に当たり、瓦器を始めとした搬入品が目立った。偶然にも集落と低湿地との境部分を調査したことで投棄された状態の瓦器を始めとした当該期の多くの遺物が出土し、本地方の土師質土器や瓦器の様相を解明する資料を得ることができた。また、県内では初めて龍泉窯系青磁がほぼ完存して出土したことも注目される。

近世以降では、前述の畝状遺構が注目される。

林口遺跡

遺跡は火渡川右岸に位置する縄文時代、弥生時代、中世、近世以降の複合遺跡であり、遺構面が他の遺跡に比べ表土下比較的浅い部分に遺存しており、比較的発見されやすい状況にあったことが、従前から周知されていた要因であろう。今回の一連の調査では、縄文時代、中世、近世以降の遺構が検出され、中世の遺構がその多くを占めていた。ほとんどが屋敷の一部とみられるもので、その多くが溝で区画され、土器を投棄した箇所や廃棄土坑なども確認されている。遺跡の立地は、林口城跡が残存する残丘から南東に延びる尾根に沿った微高地上にあり、火渡川に向かって傾斜する。この微高地は南に拡がり、北側は林口城跡の北の尾根に続く。その南東に延びる尾根と北の尾根との間は低湿地となっている。また、遺跡の西側も広範囲の低湿地となっている。

まず、縄文時代は当遺跡の南端部の微高地縁辺で検出されている。時期的には後期に当たり北にある居徳遺跡群との関連が考慮される遺構である。調査範囲が限定されていたためその全容は明確ではないが、立地は平成8年度調査のA区とは低湿地を挟んだ南側の微高地上にあるとみられ、東側への拡がりと考えられる。

中世では、各調査区から確認されており、それぞれ屋敷の一角に当たるとみられ、少なくとも3区画が想定される。平成8年度の調査では明確に溝に囲まれた屋敷跡が検出され、削平の影響が見られるものの12棟の建物跡が検出され、やや時期が下った戦国時代末頃の石組井戸跡も確認されている。平成11年度の調査では、建物跡の確認数は少ないものの区画溝が検出され、土器を投棄した場所や廃棄土坑が確認され、さらに県内初の蝙蝠扇の出土など遺物面からも屋敷の様相が推察される。一方、林口城跡東山麓部から城との関連が考慮される遺構も検出されている。城跡自体は比較的遺存状況が良く、詰、堀切等が現存しており、今回調査対象となった掘切から続く馬の背状の尾根部分は近世以降墓地化しており調査対象から除外した。その東山麓部で山の斜面を削平して作ったと見られる平場と低湿地に続く斜面部には多数の杭列が検出され、さらにその1カ所から階段と見られる段部と土橋も確認され、城の防御施設と縄張を考えるうえで注目される。他方、西山麓部は低湿地となっており遺構、遺物は確認されていない。

近世では平成8年度の調査で円形桶側を6段重ねた井戸跡などが検出されている。

蓮池北面遺跡

平成6年度に実施された高知県遺跡詳細分布調査の際発見された蓮池城跡の北側に拡がる遺跡である。遺構が確認されたのは今回の調査が最初で、調査の結果、いくつかの微高地上で遺構が検出されている。確認された遺構は12世紀後半から13世紀頃の掘立柱建物跡、溝跡、畝状遺構などで一般の集落とみられる。他の調査区に比べ調査範囲が狭く、今回の調査では蓮池城に直接関連する遺構、遺

物は確認されなかった。

(3) 調査の方法

確認調査の結果 ,工事対象区域のほぼ全域から遺構が検出され ,東西約2km ,南北約1kmが調査対象区域^④となったことを受け ,対象区域の航空写真測量を行い500分の1の地形図作成から開始した。調査地区にはそれぞれ3級基準点及び3等水準点を埋設すると共に各基準点からの方位標も設定し調査に備えた。

まず ,測量に関しては ,国土座標系第4座標系(系)の基準点を使用し , $X = 55,500.000\text{m}$, $Y = -8,000.000\text{m}$ (北緯 $33^{\circ}30'02''$,東経 $133^{\circ}24'50''$)を原点としA1(100mグリッド :大グリッド)と呼称した。調査区域が狭いX軸(南北)にアルファベット ,調査区域が広いY軸(東西)にアラビア数字を配し ,将来仁淀大橋まで計画されている工事に対応できるものにした。なお ,原点A1の真北は $+0^{\circ}02'51''$ である。100mグリッド(大グリッド)の下には ,20mグリッド(中グリッド)を設定し ,A1 - 1と枝番を付し ,実際調査で使用する4mグリッド(小グリッド)にはさらに枝番をA1 - 1 - 1と付した。なお ,急遽調査が追加された箇所については ,既存の基準点を使用して独自でトラバース測量を実施して調査に臨んだ。

調査は ,基本的に遺物包含層直上まで機械力(アイオン ,ユンボ ,キャリア等)を導入し ,遺物包含層

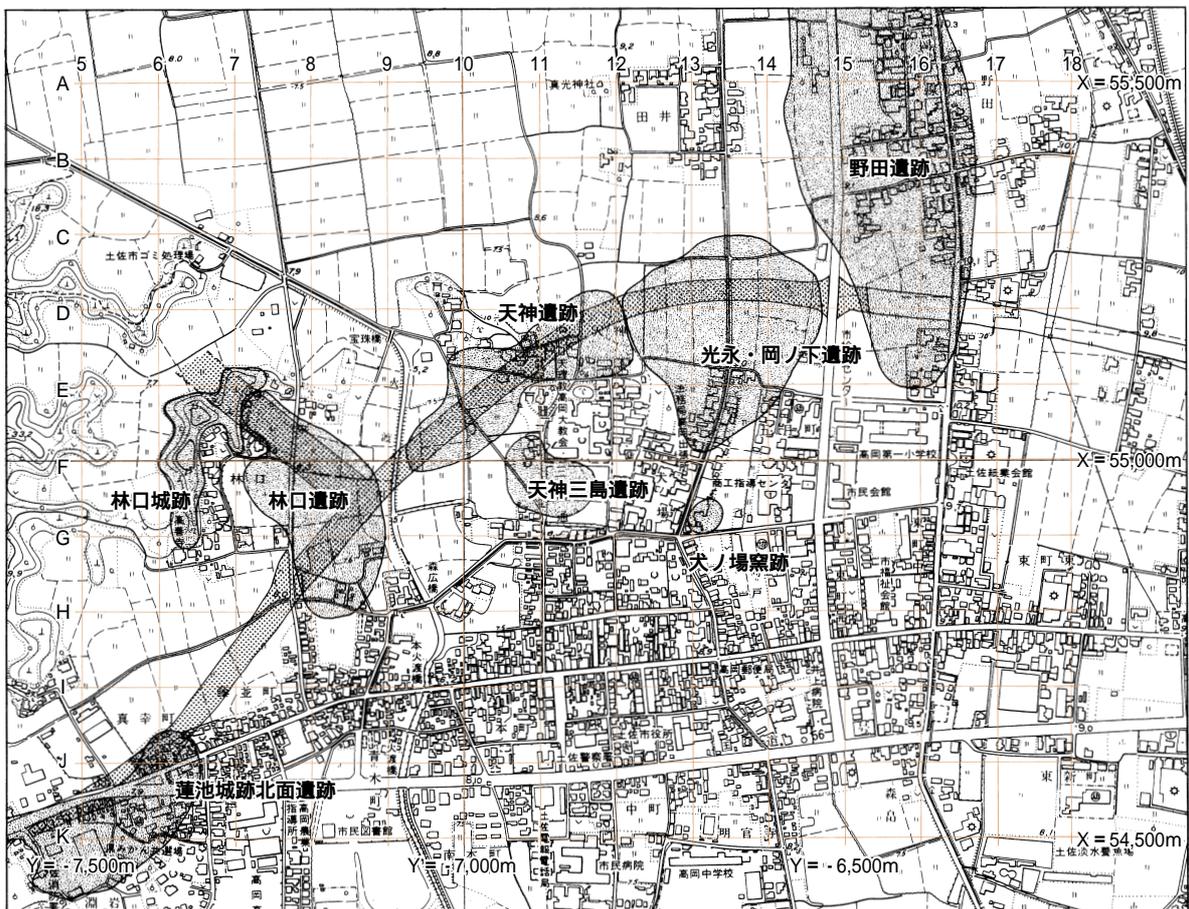


Fig.8 確認された遺跡及びグリッド設定図(S=1/10,000)

以下は人力で行った。平成8年度の調査は、調査面積が約10,000m²が見込まれ、かつ、調査地区が比較的まとまっていたため、高知県初の工事請負方式を採用し、重機の借り上げから現場作業員の雇用まで業者に委託して行った。平成9年度以降は調査面積が狭くかつ調査区が細切れ状態となったため埋蔵文化財センター直営で実施した。また、現場実測については、人力での実測と航空測量を併用した。一つの調査地区の面積が広がった平成8年度は実機のヘリコプター、調査地区の面積の狭かった平成10年度以降は産業ヘリコプター(ラジコン)を使用して行った。平成9年度はすべて人力で測量を行った。

3. 遺跡の地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境

遺跡の所在する土佐市は四国山地を源とする仁淀川下流域の右岸に位置し、北と西を虚空藏山系、南を横瀬山系を境とする。仁淀川に面する部分には大量の扇状地性堆積物が堆積して低地を形成し、遺跡の立地に適した環境を作りだしている。両山系からは小河川が形成され、波介川に注いでいる。この波介川は上流域で両山系の中央、中流域では虚空藏山系寄り、下流域では扇状地性低地によって横瀬山系の山麓部を東流した後南流し仁淀川に注いでいる。また、波介川中流域以西は虚空藏山系の低位段丘の残丘が多く、横瀬山系との間には氾濫原性低地を形成している。この氾濫原性低地には虚空藏山系を水源とする火渡川、白川川、末光川、野老谷川、甲原川や横瀬山系を水源とする塚地川、神母谷川、板谷川などが流れ、前者は南或は東に向かって流れ、後者は北流してそれぞれ波介川に注いでいる。この扇状地性低地と氾濫原性低地は高岡平野と呼称され、対岸の春野町の平野部と併せて吾南平野とも言われる。遺跡の多くは扇状地性低地上に立地し、中でも南北に延びる自然堤防上に顕著である。また、先の虚空藏山系の残丘の内、低地部分の残丘裾部にも遺跡が散見される。

一方、海岸部である宇佐地区には小規模な扇状地性低地と防洲が形成され、遺跡の立地を構成する。

このような地理的環境にある土佐市では、遺跡の多くが仁淀川の扇状地性低地と仁淀川の流に沿って形成された自然堤防上に立地する。しかし、それらの大半は土佐市の市街地を構成しており、確認されている遺跡の絶対数は少ない。扇状地性低地には自然堤防の形成に伴って後背湿地ができ、生産域としての水田耕作が行われていた可能性も考えられる。今回の対象区域である三島神社が鎮座する残丘以西では氾濫原性低地が散見され、扇状地性低地や残丘に伴う微高地と隣接しており、起伏に富む地形を構成している。よって、天神地区以西では現況だけで遺跡の所在やその範囲を把握し難い状況となっている。

(2) 歴史的環境

土佐市は、比較的広い平野部を有することで高岡郡内では最も多くの遺跡数を誇るもののその絶対数は南国市の1/3に満たない。これは、これまで発掘調査がほとんど実施されることがなく、本格的な遺跡分布調査も平成4・5年度に行われた高知県遺跡詳細分布調査まで実施されなかったことに起因するものと考えられる。発掘調査の件数の少なさは言い換えれば大規模開発がなかったともいえるが、学術調査もほとんど実施されていない。

平成7年度以降、土佐市バイパス建設や高知自動車道の延伸工事などが本格化し、事前の確認調査

が行われるようになると新たな遺跡が続々と発見されると共に周知の遺跡の範囲が大きく拡大し、平成9～11年度は県内で最も多くの発掘調査が実施されている箇所となった。確認調査の結果を受けた本発掘調査では土佐市の歴史解明に繋がる資料には枚挙の暇がなく、さらに新聞のトップを飾る発見など県内の歴史に新たな1ページを加える考古資料も出土した。平成6年度までの遺跡総数は92遺跡であり、平成7年度以降に新たに確認された遺跡や範囲が拡大した遺跡は、土佐市バイパス関係で5遺跡⁽⁷⁾、高知自動車道関係で7遺跡⁽⁸⁾を数え、8遺跡が新たに確認され現在100遺跡を数える。増加件数に比べ発掘調査面積が広く土佐市バイパス関係で約35,000m²、高知自動車道関係で約63,000m²の全体で約98,000m²となり、現在進行している発掘調査面積を合わせると100,000m²を越えるものとみられ、総調査面積は南国市、中村市に次ぐものとなった。

まず、これらの発掘調査や遺跡分布調査さらにこれまでに表採された遺物の分布状況を見てみると、前述の地形をなす土佐市では大きく3地域に遺跡の集中分布がみられる。最大の分布域は扇状地

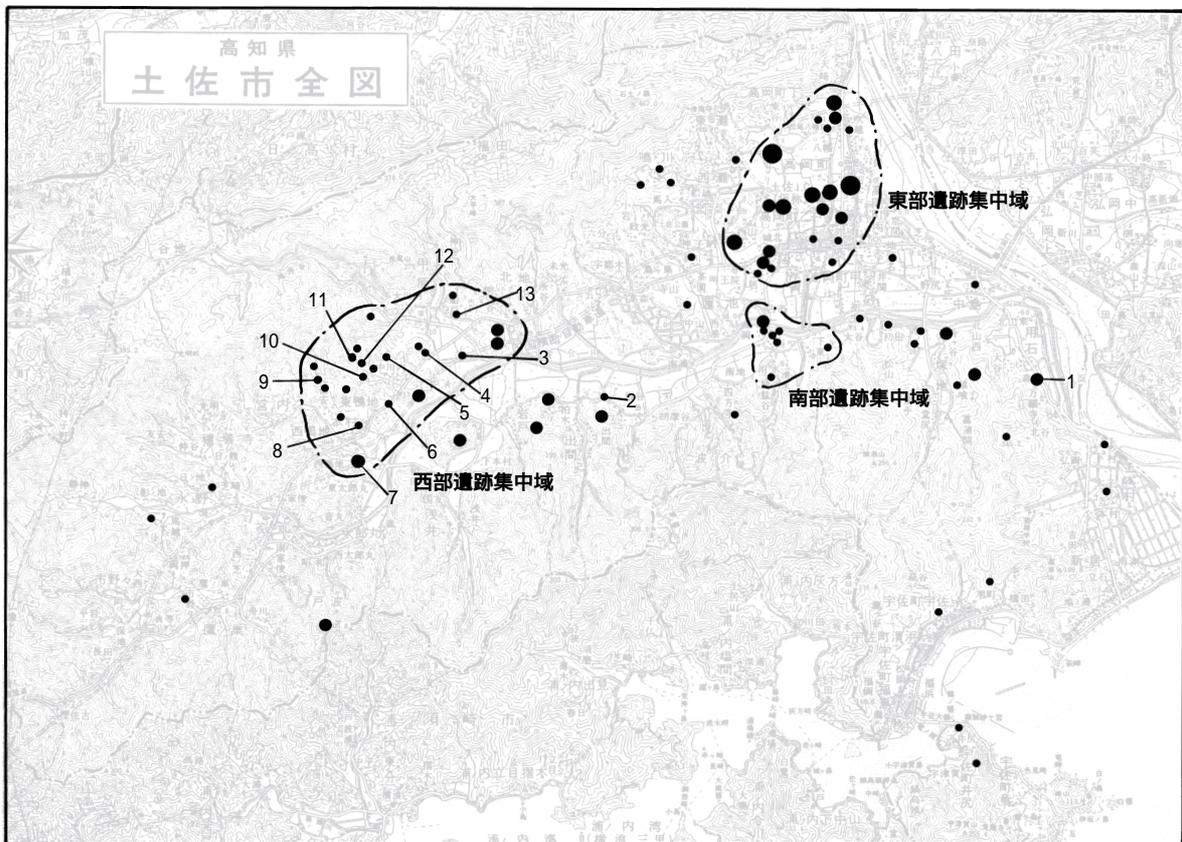


Fig.9 土佐市遺跡分布図(S=1/100,000)

Tab.1 土佐市の遺跡

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	甫木山遺跡	弥生	6	江良澤遺跡	弥生	11	久保田遺跡	中世
2	土居山古墳	古墳	7	西鴨地遺跡	古墳～中世	12	森光遺跡	弥生
3	甲原中川内遺跡	中世・近世	8	本村遺跡	弥生・中世	13	船戸遺跡	古墳・中世
4	鍛冶屋ヶ端遺跡	弥生	9	二宮神社近傍遺跡	縄文			
5	入沢遺跡	弥生	10	竹ヶ端遺跡	弥生			

性低地の中心部である高岡町から西の残丘裾部の鳴川にかけての地域(東部遺跡集中域)で ,前述の発掘調査の大半が実施された箇所でもある。これらの遺跡は扇状地性低地と自然堤防及び残丘から続く微高地上に立地し ,隣接する低地部分で水田耕作が行われていたものとみられる。実際居徳遺跡群では土層断面に弥生時代の水田が認められ ,広範囲に水田耕作が行われていたものとみられる。横瀬山系北麓の波介古市から塚地にかけても遺跡の集中(南部遺跡集中域)がみられ ,縄文時代から中世にかけての散布地や古墳が確認されている。もう一つの集中地域は ,波介川上流部の甲原川と永野川の合流する甲原から西鴨地にかけての地域(西部遺跡集中域)である。遺跡数は24ヵ所と東

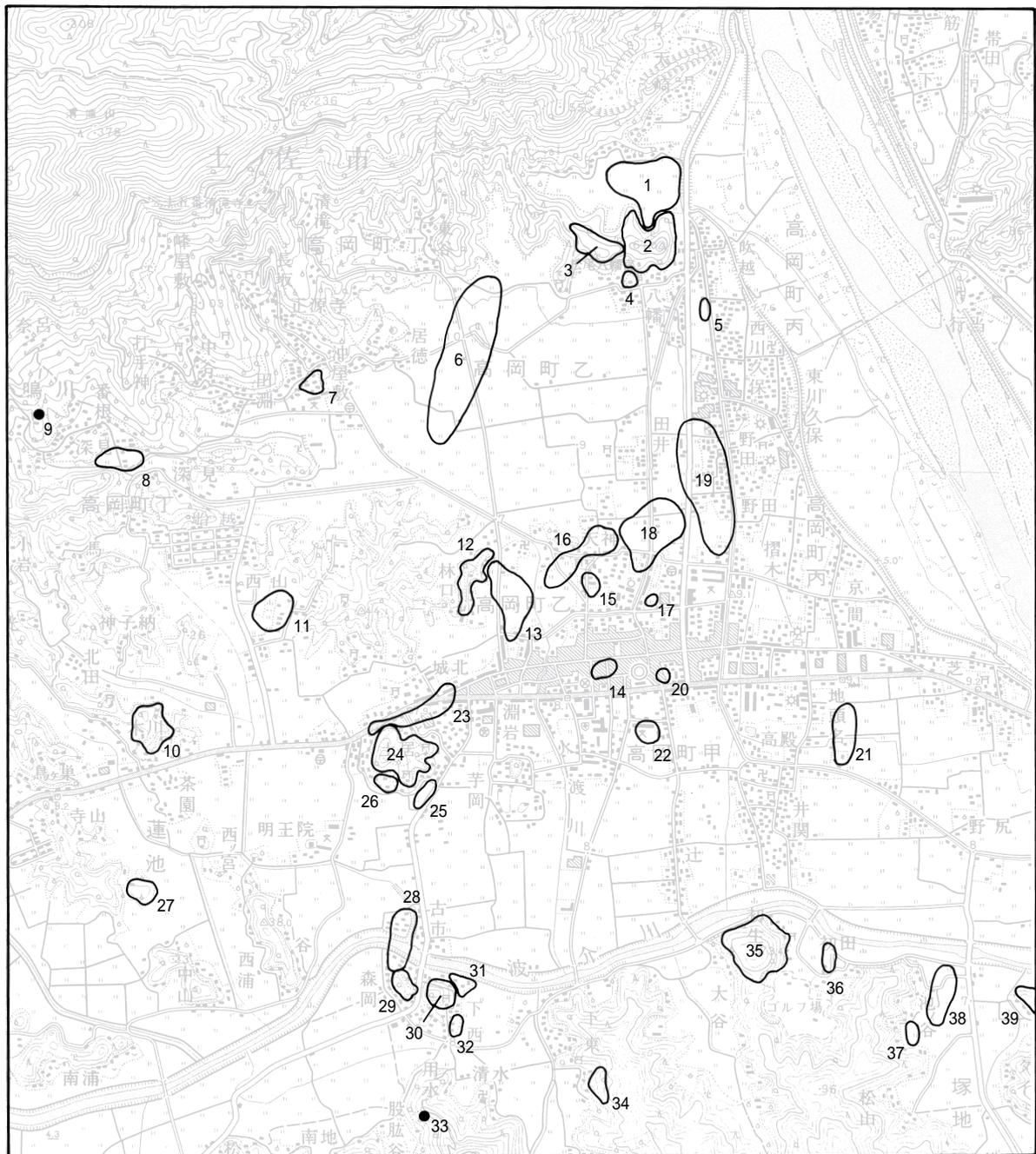


Fig.10 周辺の遺跡分布図(S=1 / 25,000)

部遺跡集中域とほぼ同数であるが、遺跡の立地が残丘とその裾部に限られており全般に遺跡の範囲が狭く、小さな遺跡が多いのが特徴である。

次に、これら遺跡を時代を追ってみてみることにする。

縄文時代では、これまでに草創期のサヌカイト製の尖頭器が二宮神社近傍遺跡⁹から発見され、同遺跡から磨製石斧また周辺部から晩期の土器と共に炉石と焼土があったとの記録¹⁰が残り、倉岡遺跡では晩期の土器が出土し、野田遺跡などから土器が表採されていたが、平成9・10年度実施された居徳遺跡群¹¹の発掘調査によって後期から晩期にかけての多量の土器と共に木製品が出土し、土佐市の縄文文化を大きく塗り替えることとなった。中でも大洞式土器、木胎漆器、土偶、鏃など特筆する遺物が出土し、本県のみならず西日本の縄文晩期社会を考察するうえで一石を投じた。これらのほとんどは遺物包含層と自然流路から出土しており、集落は隣接する微高地上にあったものとみられる。集落跡は確認されていないものの高知を代表する大集落が存在したことは間違いないであろう。南約1kmにある林口遺跡からも後期の遺物、遺構が検出されており、居徳遺跡群と関連する集落が存在した可能性も考えられる。

弥生時代は縄文時代に比べ飛躍的に遺跡数が増加するが、その多くは後期後半のもので、土佐市バイパス関連で出土した弥生土器の大半もこの時期のものである。これは全県的にみられる現象でもあり、ほぼその状況を示す結果とも言えよう。遺跡数は少ないものの前期の土器が居徳遺跡群、土佐市バイパス関連の天神遺跡と林口遺跡から出土している。居徳遺跡群からは比較的まとまって出土しており、集落が存在したものと考えられている。中期から後期前半では、御太子宮遺跡¹²から中期中葉の石皿、鳴川深見遺跡からは扁平片刃石斧、波介¹³からは中期後半頃の磨製石剣が出土している。中でも注目されるのは天崎遺跡から出土した4本の中広形銅鉾¹⁴であろう。調査の結果中世の再埋納と判明したもののかつては周辺に存在したものとみられ、丁度、東部遺跡集中域を挟んだ横瀬山系山麓の波介法福寺遺跡(波介万法寺遺跡)から出土している2本の銅鉾(広形銅鉾、中広形銅鉾)と対峙した形となっている。集落遺跡では、高地性集落とみられる甫岐山(甫木山遺跡)が横瀬山系東

Tab.2 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	天崎遺跡	弥生	14	高岡本町遺跡	縄文・弥生・中世	27	寺山遺跡	中世
2	人麻呂様城跡	中世	15	天神三島遺跡	弥生～中世	28	森岡遺跡	古墳
3	曾我山城跡	中世	16	天神遺跡	弥生～近世	29	篠本山城跡	中世
4	八幡遺跡	古墳	17	犬ノ場寮跡	古代	30	土居山城跡	中世
5	御太子宮遺跡	中世	18	光永・岡ノ下遺跡	古墳～中世	31	倉岡遺跡	縄文・弥生
6	居徳遺跡群	縄文～古代	19	野田遺跡	縄文～中世	32	波介西本村遺跡	中世
7	東灘沖屋敷遺跡	古墳・中世	20	明官寺遺跡	古墳	33	股谷古墳	古墳
8	鳴川深見遺跡	弥生	21	地頭名遺跡	古代	34	波介法福寺遺跡	弥生
9	宮ノ谷古墳	古墳	22	明官寺大古遺跡	弥生	35	三宝山城跡	中世
10	城ヶ森城跡	中世	23	蓮池城跡北面遺跡	中世	36	初田遺跡	古代・中世
11	北高田遺跡	弥生	24	蓮池城跡	中世	37	西土居遺跡	弥生
12	林口城跡	中世	25	勝賀野次郎兵衛屋敷跡	中世	38	池ノ谷遺跡	中世
13	林口遺跡	縄文～中世	26	蓮池城跡南面屋敷跡遺跡	中世	39	今ヶ谷遺跡	古代

端標高50～80mの所で発見されている。斜面部で住居跡の断面とみられる堆積が認められ、昭和35年には小規模な発掘調査が実施され、中期末の土器と共に石包丁、大型蛤刃石斧、扁平片刃石斧、砥石、石錘、石鏃が出土し、住居跡は確認されなかったものの5～6棟の住居の存在が推定されている。平地遺跡ではほぼ同時期の北高田遺跡がある。居徳遺跡群と同じく高知自動車道建設に伴って発掘調査され、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、柵列、土坑などが検出されている。空白期を埋める集落跡となっていると共に田村遺跡群を中心とする中央部とはやや異なる文様を持った土器構成が指摘されている。後期後半は前述のとおり遺跡数の増加に伴って分布も西部遺跡集中域にも広がる。土佐市バイパス関連の調査では住居跡¹⁵を始めとして祭祀関連とみられる土器集中が多数検出され、居徳遺跡群でも数多くの土器が出土しており、比較的大きな集落を構成していたことが推測される。これ以外にタタキ目を有する土器が表採等で確認されている遺跡は野田遺跡、明官寺大古遺跡¹⁶、竹ヶ端遺跡、森光遺跡、江良澤遺跡、本村遺跡、入沢遺跡などである。

古墳時代になると一転して遺跡数の減少がみられる。確認されている古墳自体も総数5基(宮ノ谷古墳、大サルバミ古墳、股谷古墳1・2号墳、土居山古墳)と少なく、現状で確認できるものは3基(宮ノ谷古墳、大サルバミ古墳、股谷古墳1号墳)で、内2基(宮ノ谷古墳、大サルバミ古墳)は横穴式石室の一部が残存する程度である。これらの古墳はすべて後期古墳で時期的には6世紀末から7世紀初め頃にかけてのものと考えられ、香長平野から県内の要所に古墳が築造され始めた頃¹⁷に当たる。古墳以外では、居徳遺跡群や土佐市バイパス関連遺跡から古式土師器が出土し、さらに居徳遺跡群からは県内最大とみられる中期の祭祀跡が発見されている。中期の祭祀跡については中村市具同中山遺跡群(遺跡範囲約180,000m²)が代表的な遺跡であり、県内の主要河川沿いなど¹⁸に分布しており、居徳遺跡群(遺跡範囲約80,000m²)は具同中山遺跡群とは立地を異にし、どのような祭祀が行われていたか注目され、具同中山遺跡群が中筋上流域の高岡山古墳群や平田曾我山古墳などの前期古墳との繋がりが考慮されるのに対し、どのような出現の素地を持っていたかも高知県の古墳時代中期の様相を解明するうえで重要であり、報告書の刊行が待たれる。天崎遺跡からも住居跡に隣接する形で祭祀跡が検出されている。また、注目される遺物としては明官寺太古遺跡出土とみられる県内唯一の子持勾玉が挙げられる。これ以外に船戸遺跡から手づくね土器を含む土師器が出土し、西にも祭祀遺跡の拡がりが見られると共に本村遺跡、久保田遺跡、鍛冶屋ヶ淵遺跡、波介西本村遺跡、入沢遺跡などからも須恵器や土師器が表採されている。

古代では、これまでに須恵器片が表採された地頭名遺跡、御太子宮遺跡、初田遺跡、西本村遺跡、高岡本町遺跡などの遺跡及び土佐市唯一の須恵器窯である犬ノ場窯跡が知られていたが、土佐市バイパス関連の調査で光永・岡ノ下遺跡から官衛関連とみられる9世紀代の緑釉陶器や暗文の土師器が出土し、周辺部に関連施設の存在が考えられ、天神遺跡から官衛関係とみられる建物跡等も検出されており、犬ノ場窯跡も含めた高岡町天神付近が古代の要所であったとみることができる。また、西の西鴨地遺跡からは官衛関連の緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器等の搬入品、製塩土器、斎串や人形などの木製祭祀具、鉈尾や丸鞆などの帯金具が在地の供膳具、煮沸具と伴出しており、周辺に官衛関連施設の存在が考慮される。これ以外では居徳遺跡群から土器と共に木器が出土している。

中世になると遺跡数の増加がみられ、52遺跡が確認されており、このうち大平氏の居城である蓮

池城跡を始めとした城館跡が24カ所を占める。集落遺跡では土佐市バイパス関連遺跡を始めとして野田遺跡、天崎遺跡、甲原中川内遺跡等で屋敷跡などの遺構が確認されており、光永・岡ノ下遺跡では在地の土師質土器や白磁などと共に湖州方鏡を副葬した土坑墓、天神遺跡では完形の龍泉窯系青磁碗、瓦器など多数の搬入品などが出土している。

近世以降の遺跡はこれまで登録されていなかったが、発掘調査によって検出される機会が増え、土佐市バイパス関連遺跡では、林口遺跡で掘立柱建物跡、井戸跡、土坑墓など、天神遺跡では畠跡とみられる畝状遺構などが検出されており、今後も中世の遺構と重複する形で発見される機会が多くなるものとみられる。なお、低湿地部分を中心として戦後から昭和30年頃に埋設されたとみられる水田排水施設である暗渠が遺存している。

註

- (1) 光永・岡ノ下遺跡とは「光永〔A・B区〕」「岡ノ下〔C区〕」の小字を合わせた遺跡名である。なお、遺跡の立地並びにその性格を考慮すれば、小字の寄せ集めより「犬ノ場遺跡」とした方が遺跡をより良く表現していると思われる。
- (2) 平成8年度から平成11年度まで実施した都計道路以西の土佐市バイパス関連遺跡の発掘調査報告書は以下の4冊である。
 - 『光永・岡ノ下遺跡』土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書
 - 『天神遺跡、林口遺跡』土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書
 - 『天神遺跡』土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書
 - 『林口遺跡、蓮池城跡北面遺跡』土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書
- (3) 『天神遺跡・林口遺跡』の第 4章林口遺跡でSD-1・2として報告している。
- (4) 詳細は不明であるが、遺跡台帳によると建設工事の際縄文土器、弥生土器、須恵器などが出土したとのことである。
- (5) 本年度本調査を実施している野田遺跡について『野田遺跡』土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書として平成13年度に刊行する予定である。
- (6) 当初計画では、都計道路から西の国道56号線までの間が調査対象区域であった。
- (7) 光永・岡ノ下遺跡、天神遺跡が新たに発見され、林口遺跡、蓮池城跡北面遺跡、野田遺跡は遺跡範囲が大きく拡大した。
- (8) 天崎遺跡(弥生～中世)、居徳遺跡群(縄文～古墳)、人麻呂様城跡(弥生～近世)、北高田遺跡(弥生)、北地アリノ木遺跡(弥生～近世)、西鴨地遺跡(古代・中世)、甲原中川内遺跡(中世～近世)などである。
- (9) 『土佐市史』では徳安C地点遺跡となっている。
- (10) 野田耕一郎「波川流域の環境と戸波甲原付近の遺跡群」『県立佐川高校研究誌第2号』や岡本健児「第 4章 縄文時代」『土佐市史』1978年による。なお、縄文土器などは徳安A地点(二宮神社南方80m)から表採されている。
- (11) 平成11年度から3ヵ年計画で整理作業が行われており、平成13年度にはその成果が発表される予定である。
- (12) 土佐市史では吹越の道路工事中に発見された(吹越遺跡)と記されており、本遺跡ないし周辺部に当たるとみられる。
- (13) 出土地点の詳細は不明

- (14) (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『天崎遺跡』1999年
- (15) 土佐市で初めて発掘調査で確認された住居跡であり、『天神遺跡』で報告する。
- (16) 土佐市史では高岡中学校校庭遺跡となっており、本館建設工事中に地表下約5m付近の礫層から炉石、須恵器と共に発見されており、流れ込みと考えざるを得ない。
- (17) 廣田佳久「横穴式石室の地域性 四国 - 高知県 - 」『季刊考古学』第45号 雄山閣 1993年など
- (18) 具同中山遺跡群(中筋川)、古津賀遺跡(後川)、川北遺跡(安芸川、伊尾木川)、介良遺跡(介良川)などの河川沿いの遺跡や早咲遺跡など平野部に立地する遺跡がある。

参考文献

- 『土佐市史』土佐市史編集委員会 1978年
- 『日本の古代遺跡39高知』保育社 1989年
- 廣田典夫『土佐の須恵器』1991年
- 『高知県遺跡地図』高知県埋蔵文化財発掘調査報告書第43集 高知県教育委員会 1998年
- 『埋蔵文化財センター年報』第6号1996年度 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 1997年
- 『埋蔵文化財センター年報』第7号1997年度 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 1998年
- 『埋蔵文化財センター年報』第8号1998年度 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 1999年

第 章 調査の概要

1. 調査の経過

(1) 調査の経過

光永・岡ノ下遺跡は、平成7年度に実施した土佐市バイパス工事に伴う事前の試掘調査によって所在が確認された遺跡である。遺跡の範囲は、野田地区から南西方向へ土佐市バイパス工事区域内全般に広がりを見せ、西井筋用水を挟む約6,000m²を光永・岡ノ下遺跡と命名した。遺跡は仁淀川の扇状地性低地に立地しており、現況は一部宅地を含む水田であった。遺跡の中心は、微高地をなす西井筋用水付近であり、南北にも広がりを見せるものと考えられる。時期的には8世紀後半～10世紀と12世紀前後の2時期に分かれるものとみられ、特に古代に関しては、当遺跡の南に所在する高岡郡下では数少ない須恵器の窯跡である犬ノ場窯跡との関連が注目された。

本調査は調査区を便宜上、東からA区、B区、C区とし、平成8年7月11日から平成9年2月10日まで実施した。但し一部に、買収の関係上発掘不可能な部分が残し、これについては平成9年5月30日から7月1日までと、平成12年1月24日、25日に本調査を実施した。平成8年、9年、12年合わせて実働151日であった。

(2) 調査日誌抄

A区 1996年7月11日～11月18日

- | | |
|---|---|
| 7.11 調査前風景を写真撮影する。 | 遺物包含層の掘削・遺構検出を始める。 |
| 7.17 安全柵を設置する。午後から西側より機械掘削を行い、遺物包含層(第 層)の上面まで掘削する。 | 8. 2 調査区西部の遺物包含層の掘削・遺構検出を行う。ピット数個を検出した。紡錘形の土錘が1点出土した。 |
| 7.18 引き続き機械で遺物包含層まで掘削する。第層より土錘、土師質土器の杯の一部が出土した。 | 8. 5 引き続き調査区西部の遺物包含層の掘削・遺構検出を行う。北西隅の攪乱部分に幅3mのトレンチを設定する。 |
| 7.19 雨のため作業中止。 | 8. 6 引き続き調査区西部の遺物包含層の掘削・遺構検出を行う。ピット、土坑などを検出した。 |
| 7.22 引き続き機械で遺物包含層まで掘削する。調査区北側に出土遺物が多いようである。土師質土器、須恵器、黒色土器などが出土する。 | 8. 7 調査区の北側を中心に遺物包含層の掘削・遺構検出を行う。出土遺物が多く、遺残状態の良い遺物については写真撮影を行った。 |
| 7.23 機械掘削は半分程度終了し、調査区東半分の掘削を行う。古代末から中世にかけての土師器・須恵器の杯・皿などが多く出土した。 | 8. 8 調査区の北側を中心に遺物包含層の掘削・遺構検出を行う。検出した遺構は、ピット、土坑、溝2条であった。 |
| 7.24 引き続き機械掘削を行う。調査区中央部から東に向かって地形が下がっていた。遺物も東へ行くほど少なくなり、細片が多いようである。 | 8. 9 調査区の南側を中心に遺物包含層の掘削・遺構検出を行う。南側は遺構が少ない。 |
| 7.25 機械掘削が終了する。調査区北東隅にトレンチを設定する。 | 8.12 調査区中央部の遺物包含層の掘削・遺構検 |

出を行う。土坑などを検出した。

8.13 雨のため作業中止。

8.19 引き続き調査区中央部の遺物包含層の掘削・遺構検出を行う。南側は出土遺物が少なかった。遺残状態の良い遺物は写真撮影を行った。

8.20 引き続き調査区中央部の遺物包含層の掘削・遺構検出を行う。遺物は北側の方が多いようである。

8.21 調査区中央部の遺物包含層の掘削・遺構検

出を行う。南側はかなり地形が下がっており、深いところでは遺物包含層が厚さ40cm認められた。土坑より短刀が出土した。西側より遺構配置図の作成を始める。

8.22 調査区中央部の遺物包含層の掘削・遺構検出を行う。古式土師器がまとめて出土し、写真撮影を行う。土坑より出土した短刀の平面実測を行う。

8.23 調査区中央部の遺物包含層の掘削・遺構検出

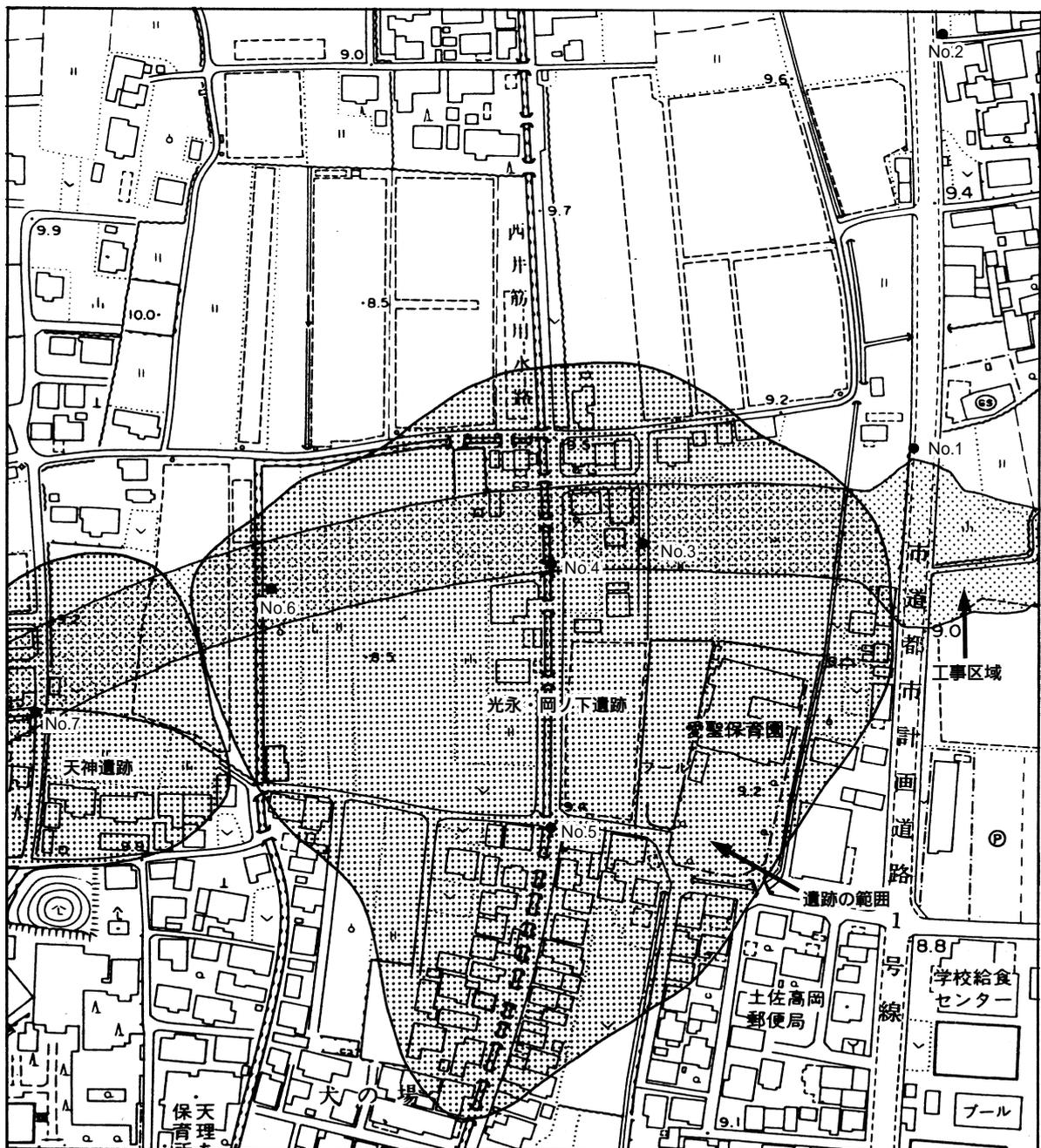


Fig.11 遺跡の範囲と調査対象区域図(S=1/2,500)

を行う。平面プランは検出できなかったが、須恵器の壺が良い状態で出土したので、写真撮影を行った。

8.26 調査区中央部の遺物包含層の掘削・遺構検出を行う。北側の一部は第 層の中で遺構が確認できたため、遺構掘削、平面測量、写真撮影を行い、第 層の上面まで掘削することにした。遺構より須恵器の盤が完形で出土した。緑釉陶器も1点出土した。3時前より雨が降り出し、作業を中止した。

8.27 雨のため作業中止。

8.28 調査区中央部の遺物包含層の掘削・遺構検出を行う。古式土師器の小型壺がほぼ完形で出土した。午後より雨のため作業を中止した。

8.29 調査区東部の遺物包含層の掘削・遺構検出を行う。礫が集中するところより緑釉陶器が出土した。土師器の甕がほぼ完形で出土した。

8.30 調査区東部の遺物包含層の掘削、遺構検出を行う。第 層で遺構検出した部分を精査する。午後より雨のため作業中止。

9. 2 調査区東部の遺物包含層の掘削、遺構検出を行う。第 層検出遺構の検出状態を写真撮影

した。

9. 3 調査区東部の遺物包含層の掘削、遺構検出を行う。第 層検出遺構の遺構配置図を作成し、埋土の確認をする。

9. 4 調査区東部の遺物包含層の掘削、遺構検出を行う。第 層検出部分の遺構調査を始める。

9. 5 調査区東部の遺物包含層の掘削、遺構検出を行う。調査区の北東部に礫を敷き詰めた遺構を検出した。第 層検出部分の遺構調査はほぼ終了した。溝状遺構より土師質土器の小皿が完形で出土した。

9. 6 調査区東部の遺物包含層の掘削並びに遺構検出を行う。第 層検出部分の遺構調査、平面測量を終了した。

9. 9 調査区東部の遺物包含層の掘削、遺構検出を行う。第 層検出部分の完掘状態を撮影し、第 層上面まで掘削する。

9.10 調査区東部の遺物包含層の掘削、遺構検出を行う。北側で古式土師器がほぼ完形の状態で集中して出土する。

9.11 調査区東部の遺物包含層の掘削、遺構検出を



Fig.12 調査区設定図(S=1/2,000)〔公共座標値の後のカッコはグリッド記号を示す〕

行う。北側の古式土師器が集中する部分の写真撮影・平面測量を行う。

9.12 調査区東部の遺物包含層の掘削、遺構検出を行う。北側の土器集中部のレベル測量後、土器を取り上げる。

9.13 雨のため作業中止。

9.17 雨のため作業中止。午後より雨が上がったので、C区の調査前全景を撮影する。

9.18 明日の航空撮影に備えて全面精査を行う。

9.19 遺構検出状況の写真撮影と航空撮影を行う。

9.20 遺構配置図の作成が終了し、遺構の埋土を確認する。南東隅の遺構が検出されなかった部分の下層確認を行う。

9.24 本日より調査区の東側から遺構の調査を始める。土坑、自然流路跡等の調査を行う。

9.25 引き続き調査区東部の遺構の調査を行った。4時頃より雨が降り出したため、作業を中止した。

9.26 雨のため作業中止。C区の機械掘削を始める。

9.27 調査区東部の遺構調査、遺構セクション図の作成、写真撮影をする。性格不明遺構等を調査すると共に自然流路跡の平面測量をする。

9.30 雨のため作業中止。午後より雨が上がったため、南壁の土層断面図の作成を始める。集石遺構の平面図も終了した。

10. 1 雨のため作業中止。午後より南壁の土層断面図を作成する。

10. 2 調査区東部の遺構調査、セクション図の作成・写真撮影をする。性格不明遺構等を調査する。自然流路跡の周辺を下層確認のために掘り下げる。

10. 3 調査区中央部の溝跡等を調査する。2時過ぎより雨が降り始めたため、作業を中止する。

10. 4 引き続き調査区中央部の遺構の調査をする。ピットは、遺物を含んでいるものが多い。

10. 7 調査区西部の遺構の調査に移る。南壁の土層断面図の作成・写真撮影を行う。土坑墓より短刀が出土する。下層確認のため、調査区南東部に東西方向のトレンチを設定する。

10. 8 雨のため作業中止。

10. 9 引き続き調査区西部の遺構の調査を行う。下層確認のため、調査区南東部に南北方向のトレンチを設定する。調査区東部のトレンチからは緑釉陶器が出土した。

10.11 引き続き調査区西部の遺構の調査をする。土坑等の調査を行う。土坑墓のリン分析のためのサンプルを採取する。

10.14 雨のため作業中止。

10.15 調査区西部の土坑、自然流路跡等の調査を行う。

10.16 引き続き調査区西部の土坑、溝跡等の調査を行う。土坑から須恵器の杯がほぼ完形で出土した。土坑のリン分析のためサンプルを採取する。

10.17 引き続き調査区西部の土坑、自然流路跡等の調査を行う。土坑からは朱塗りの土師器の杯が出土した。

10.18 引き続き調査区西部の土坑、性格不明遺構等の調査を行う。

10.20 引き続き調査区西部の遺構の調査を行う。土坑、性格不明遺構を調査する。性格不明遺構から暗文の入った土師器の皿が出土した。

10.21 引き続き調査区西部の性格不明遺構等を調査し、その中より方形の土坑を検出した。

10.22 引き続き調査区西部の遺構の調査を行う。土坑等を調査する。遺構の調査を終了し、航空撮影・航空測量を行う。

10.23 平面図・南壁土層断面図の作成を行う。

10.24 平面実測を行う。午前11時より記者発表を行う。

10.25 引き続き平面実測を行う。

10.26 午後1時から3時まで現地説明会を開催する。100名程度の参加者があった。

10.28 雨のため作業中止。

10.29 引き続き平面実測を行う。

10.30 引き続き平面実測を行う。

10.31 雨のため作業中止。平面実測を行う。

11. 1 平面図とレベル実測を終了する。

11. 5 下層確認のため、機械で掘り下げ、2次検出

を始める。

11. 6 2次検出は機械掘削・遺構検出をし、遺構配置図を作成する。暗文入りの土師器皿が出土した。

11. 7 2次検出の遺構検出状態の写真撮影を行い、遺構の調査を始める。機械で東西方向のトレンチを設定する。

11. 8 遺構の調査と南東隅に機械でトレンチを設定する。

11.11 遺構の調査とセクション図の作成を行う。雨のため午後から作業を中止した。

11.12 遺構の調査とセクション図の作成を行う。南東隅のトレンチの遺構検出をする。

11.13 平面実測をする。南東隅のトレンチ内検出遺構の調査をする。

11.14 2次検出の遺構完掘状態を写真撮影する。

11.15 東西トレンチの土層断面図を作成する。

11.18 南東隅のトレンチの土層断面図を作成し、A区の調査をすべて完了した。

Fig.13 A区記者発表

B区 1996年11月29日～1997年1月8日

11.29 B区の北東部の機械掘削・遺構検出を行う。遺物はかなり少ない。

11.30 機械掘削を終了し、遺構検出を行う。

12. 2 遺構検出・遺構配置図の作成をする。

12. 3 全面精査を行う。遺構配置図を完了する。

12. 4 遺構検出状態の写真撮影・航空撮影を行う。平板測量を行う。

12. 5 雨のため作業中止。基準点を設置する。

12. 6 遺構の埋土を確認する

12. 9 遺構の調査を開始する。残りの良い遺物が多い。

12.10 雨のため作業中止。

12.11 北部の遺構の調査、セクション図の作成を行う。

12.12 北部の遺構の調査を行う。

12.13 南部の遺構の調査を行う。

12.16 引き続き南部の遺構の調査を行う。

12.17 雨のため作業中止。

12.18 東部の遺構の調査を行う。ピットから土師質土器や白磁が出土した。

12.19 引き続き東部の遺構の調査を行う。

12.20 引き続き遺構の調査を行う。

12.24 遺構の調査と並行して平面実測を始める。

12.25 遺構の調査を終了し、平面実測を行う。

12.26 引き続き平面実測を行う。

12.27 引き続き平面実測を行う。

1. 6 午後より作業を行う。平面実測を行う。

1. 7 平面実測・レベル測量を行う。

1. 8 平面実測・レベル測量を完了し、B区北東部の調査をすべて完了する。

1997年5月30日～1998年6月19日

5.30 B区に残りの部分の機械掘削を始める。客土を除去する。

6. 2 機械で客土を除去する。

6. 3 機械で遺物包含層まで掘削する。雨のため4時に作業を中止する。

6. 4 機械掘削と並行して東から遺物包含層掘削

と遺構検出を始める。

6. 5 機械掘削と並行して調査区東部の遺物包含層掘削と遺構検出をする。

6. 6 調査区中央部の遺物包含層掘削と遺構検出をする。

6. 9 前日の雨のため、水抜きをする。午後より

遺物包含層の掘削と遺構検出を始める。

6. 10 調査区中央部の遺物包含層の掘削と遺構検出を行う。

6. 11 雨のため作業中止。安全柵を設置する。

6. 12 遺構検出を終了し、遺構検出状態の撮影、平板測量、遺構配置図の作成、グリッド杭の設置を行う。

6. 13 遺構の埋土を確認し、東から遺構の調査を始める。

6. 16 東部の遺構の調査を行う。土層断面図の作成をする。

6. 17 中央部の遺構の調査を行う。

6. 18 遺構の調査が終了し、遺構完掘状態を撮影する。

6. 19 平面実測・レベル測量が終了し、B区の発掘調査が完了する。

C区 1996年9月17日～2月10日

9. 17 調査前全景を撮影する。

9. 26 雨のため作業中止。C区の機械掘削を始める。

10. 22 東から遺物包含層の掘削を始める。

10. 23 遺物包含層掘削を行う。遺物は少ないようである。

10. 24 遺物包含層掘削を行う。午前11時より記者発表を行う。

10. 25 遺物包含層掘削、遺構検出を行う。

10. 26 午後1時から3時まで現地説明会を開催する。100名程度の参加者があった。

10. 28 雨のため作業中止。

10. 29 遺物包含層掘削、遺構検出を行う。中世の遺物が多く出土する。

10. 30 遺物包含層掘削と遺構検出は中央部まで完了する。

10. 31 雨のため作業中止。

11. 1 遺物包含層掘削、遺構検出を行う。

11. 5 引き続き中央部の遺物包含層の掘削を行う。北側でピット、溝2条を確認した。

11. 6 引き続き中央部の遺物包含層掘削をする。中央部から南西部に向かって地形が下がっており、北側でのみ遺構検出をする。

11. 7 引き続き中央部の遺物包含層掘削を行う。南側が大きな落ち込みになることが判明した。

11. 8 引き続き中央部の遺物包含層の掘削をする。落ち込みの部分は範囲を確定してから掘削することにした。

11. 11 中央部の遺物包含層の掘削を行う。落ち込

み内より湖州鏡が出土する。雨のため午後から作業を中止した。

11. 12 中央部の遺物包含層の掘削をする。湖州鏡は写真撮影と平面実測をして取り上げる。

11. 13 引き続き中央部の遺物包含層の掘削をする。先日湖州鏡が出土した付近から古銭が出土した。

11. 14 中央部の遺物包含層の掘削をする。

11. 15 C区は西半分に進み、落ち込みの範囲をほぼ確定した。

11. 18 引き続き西部の遺物包含層の掘削を行う。遺物はほとんどない。

11. 19 引き続き西部の遺物包含層の掘削を行う。調査区の西半分は遺物包含層が非常に薄い。

11. 20 引き続き西部の遺物包含層の掘削を行う。北側は東西方向の溝を3条確認するが、南側には遺構がない。

11. 21 調査区西部の遺物包含層の掘削を行う。出土遺物は少ない。

11. 22 引き続き調査区西部の遺物包含層の掘削を行う。調査区の北から南まで伸びる溝を検出した。

11. 25 引き続き調査区西部の遺物包含層の掘削を行う。南北方向の溝2条を検出した。遺物は少ない。

11. 26 引き続き調査区西部の遺物包含層の掘削を行う。北西隅で自然流路を検出した。

11. 27 午前中雨のため作業中止。午後より作業を始める。

11. 28 遺物包含層の掘削が終了する。遺構配置図の作成を始める。

11. 29 遺構配置図を作成する。

- 11.30 引き続き遺構配置図を作成する。
- 12. 2 引き続き遺構配置図を作成する。明後日予定する航空撮影に備えて全面精査する。
- 12. 3 全面精査を行う。遺構配置図を完了する。
- 12. 4 遺構検出状態の写真撮影・航空撮影を行う。
- 12. 5 雨のため作業中止。平板測量を行う。
- 12. 6 基準点を設置する。
- 12.10 雨のため作業中止。
- 12.16 遺構の埋土の確認を始める。
- 12.17 雨のため作業中止。
- 12.19 東側から遺構の調査を始める。溝の切り合いが複雑である。
- 12.20 引き続き遺構の調査を行う。
- 12.24 引き続き遺構の調査を行う。
- 12.25 溝跡,土坑等を調査する。
- 12.26 遺構の調査を行う。溝跡等の調査を行い,まとめて遺物が出土した。
- 12.27 溝跡から出土した土器の平面実測を行う。
 - 1. 6 午後より作業を行う。遺構の調査を行う。溝跡,土坑等を調査する。落ち込みの掘削を始める。
 - 1. 7 遺構の調査を行う。落ち込みの北側の遺構の掘削,落ち込みの掘削を行う。遺物はない。
 - 1. 8 引き続き落ち込みの北側の遺構の調査,落ち込みの掘削を行う。
 - 1. 9 引き続き落ち込みの北側の遺構の調査,落ち込みの掘削を行う。落ち込みの掘削は半分終了した。遺物は少ない。
 - 1.10 調査区北東部の溝跡等の遺構の調査に並行して,落ち込みの掘削を行い,落ち込み内の遺構を検出した。
 - 1.13 調査区中央部の溝跡等の遺構の調査を行う。また,落ち込み内で溝を多数確認する。
 - 1.14 調査区中央部の溝跡等の遺構の調査を行う。また,落ち込みの掘削を終了し,遺構配置図の作成をする。溝より瓦器と土師質土器の椀が出土し,平面実測を行う。
 - 1.16 SD - 35・38等の調査を行う。落ち込み内の遺構配置図の作成及び埋土を確認する。

- 1.17 引き続きSD - 35・38等の調査を行う。落ち込み内の遺構の調査を始める。
- 1.20 SD - 33とSR - 3等の調査を行う。
- 1.21 調査区西部の落ち込み内の遺構を調査する。
- 1.22 引き続き調査区西部の落ち込み内の遺構を調査する。
- 1.23 SR - 3等の調査をする。
- 1.24 雨のため作業中止。
- 1.27 引き続き遺構の調査を行う。落ち込み内の遺構掘削が終了する。
- 1.28 SR - 3とSD - 38等の調査を行う。航空撮影に備えて全面精査を始める。
- 1.29 遺構の掘削が終了し,全面精査を行う。
- 1.30 全面精査を行う。11時より記者発表を行う。
- 1.31 全面精査を行い,道具を片付ける。午後より航空撮影・航空測量をする。
 - 2. 1 遺構完掘状態の写真撮影を行う。1時から3時まで現地説明会を開催する。約85名の参加者があった。
 - 2. 3 調査区東部の平面測量を行う。
 - 2. 4 調査区中央部の平面測量を行う。南壁土層断面の写真撮影を行う。
 - 2. 5 調査区中央部の平面測量を行う。
 - 2. 6 調査区西部の平面測量を行う。
 - 2. 7 平面測量を完了する。レベル測量・土層断面図の作成を始める。
 - 2. 8 レベル測量・土層断面図を作成する。
 - 2.10 レベル測量を終了し,C区の調査を完了する。

Fig.14 C区現地説明会

1997年6月6日～7月1日

- 6. 6 C区北東部の機械掘削を始める。
- 6. 9 前日の雨のため、水抜きをし、引き続き機械掘削を行う。
- 6. 10 機械掘削が終了する。
- 6. 11 雨のため作業中止。
- 6. 12 北側から遺物包含層の掘削を始める。
- 6. 13 北部の遺物包含層掘削と遺構検出を行う。
- 6. 16 中央部の遺物包含層掘削並びに遺構検出を行う。
- 6. 17 引き続き中央部の遺物包含層掘削並びに遺構検出を行う。
- 6. 18 南部の遺物包含層掘削と遺構検出を行う。
- 6. 19 引き続き南部の遺物包含層掘削並びに遺構検出を行う。
- 6. 20 遺物包含層掘削が終わり、遺構検出状態を撮影する。
- 6. 23 雨のため作業中止。北東部の遺構配置図の作成、埋土の確認を行う。
- 6. 24 北側から遺構掘削を始める。
- 6. 25 中央部の遺構の調査を行う。
- 6. 26 北東部の遺構の調査が終了する。遺構完掘状態を撮影する。南東部の機械掘削を始める。
- 6. 27 北東部の平面実測と土層断面図を作成する。南西部の遺物包含層の掘削を始める。
- 6. 30 北東部の平面実測・レベル測量を終了し、北東部の発掘調査が完了する。南西部の遺構検出と遺構検出状態の撮影、遺構配置図の作成、埋土の確認を行い、遺構の調査を始める。
- 7. 1 南西部の遺構の調査を終了し、遺構完掘状態の撮影・平面実測・レベル測量を行い、南西部の発掘調査が完了した。

2000年1月24日～1月25日

- 1. 24 北東部と南西部の間の未調査部分の機械掘削を始める。検出面まで機械で掘削し、遺構検出を行う。遺構検出状態の写真撮影を行い、遺構配置図の作成、遺構の埋土を確認し、遺構掘削を始める。
- 1. 25 引き続き遺構の調査を行い、終了する。遺構完掘状態の写真撮影・平面実測・レベル測量を行い、発掘調査をすべて完了する。

2. 調査の概要

(1) A区

A区は本年度調査区の東端に当たり、当初古代から中世の時期を予想し調査に臨んだ。西から第一層を機械掘削後、中世の遺物包含層を掘削し、遺構検出を行った。中世の遺構が確認できたのは調査区西部で、掘立柱建物跡、土坑墓、側溝と考えられる溝跡などを検出した。また、調査区西北隅では、表土下約0.8mまでを攪乱されていた。古代の遺物包含層は調査区西端部を除き、ほぼ全面で確認できた。検出された遺構は溝跡、土坑、ピット、集石遺構、自然流路等で、性格の不明確な遺構もみられたが、出土遺物からは周辺部に官衙関連施設の存在が想定される。古墳時代については明確な遺物包含層は確認できなかったものの、北東部で古式土師器が集中して出土した。遺存状況は比較的良く、原形を保っているものが多く、祭祀関連遺構ではないかとみられる。

A区全体においては、2層の遺物包含層及び、3時期の遺構を確認し、出土遺物の総点数は約14,000点を数えた。

層序

- 第 層 表土層
- 第 層 褐色(10YR4/4)シルト層
- 第 層 灰オリーブ色(5Y5/3)シルト層
- 第 層 灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト層
- 第 層 褐色(10YR4/4)シルト層
- 第 層 褐色(10YR4/4)シルト質粘土層
- 第 層 オリーブ褐色(2.5YR4/4)砂質シルト層

遺物包含層は第 層(中世),第 層(古代)であり,それぞれ表土下約30cmと約40~50cmを測り,比較的浅く一部削平されている。遺構を検出したのは第 層上面,第 層上面であった。中世の遺構埋土はにぶい黄褐色砂質シルトであり,若干のマンガンを含む。古代の遺構埋土は褐色~暗褐色砂質シルトであった。地形は西が微高地状で,東に向かって緩やかに傾斜する。

第 層は現在の耕作土であり,厚さ20~25cmを測る。現況は水田である。

第 層は間層であり,調査区東部の一部分で確認した。第 層の上部が酸化して強い褐色に変色したものと考えられる。

第 層は旧耕作土と考えられる。厚さは5~30cmを測り,東部に行くほど厚さを増す。

第 層は調査区西部のみで確認された12~13世紀の遺物を含む中世の遺物包含層であるが,灰オリーブ色を基調にややマンガンを含む。包含する遺物量は少ない。厚さは約15cmを測り,西北部では整地のために削平を受け消失する。

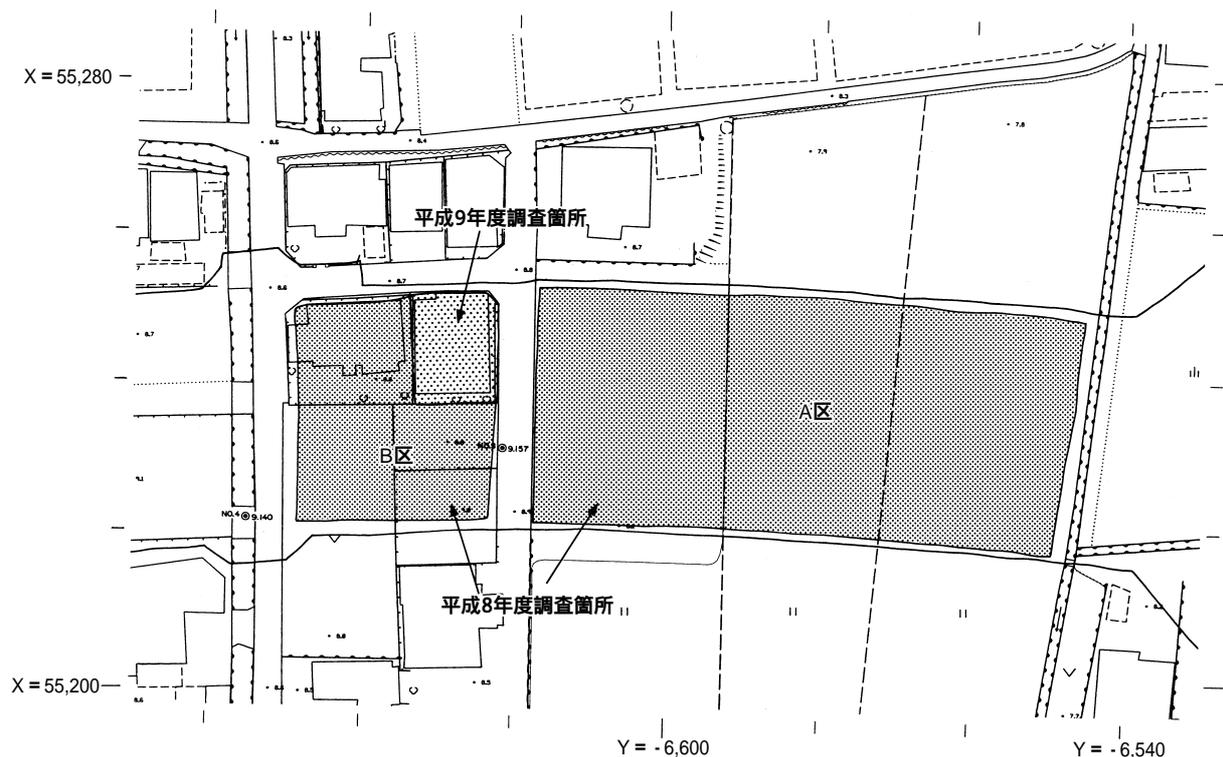


Fig.15 A・B区 調査区及び調査年度(S=1/1,000)

第 層も遺物包含層であり、古墳時代及び古代の遺物を包含するが、主として8～10世紀のものが多し。また、第 層に伴う遺構をこの上面で検出したが、埋土は若干褐色が強くなり、やや砂質であるだけで、遺構の判別に困難を要した。中世の遺構の拡がりには調査区西部に限られた。

第 層は自然堆積層であり、第 層に伴う遺構がこの上面で検出された。古代の遺構埋土も若干暗褐色に近くなり、砂質が強くなるだけで、判別が非常に困難であった。東部に行くほど標高が下がっており、第 層上面で西部と東部を比較すると約60cmの比高差がある。

第 層は調査区の一部でのみ確認した。無遺物層であった。

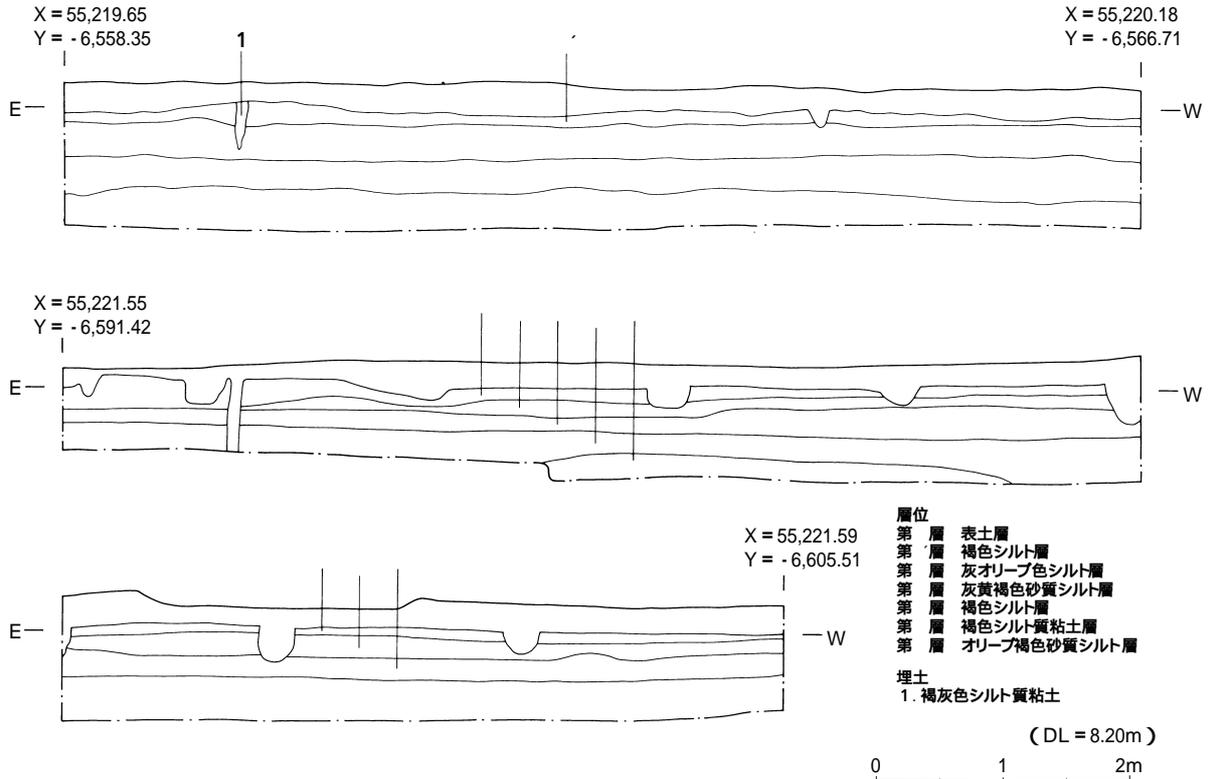


Fig.16 A区 セクション図

堆積層出土遺物

第 層出土遺物

緑釉陶器 (Fig.17 - 1)

1は碗で底部の一部のみ残存する。硬質であり、高台は削り出し高台である。外底面の一部を除いて、明オリーブ灰色に施釉される。底部内外面にはトチンの跡が残る。

瓦質土器 (Fig.17 - 2)

2は羽釜で脚基部の破片である。外面全体に煤が付着する。

肥前系陶器 (Fig.17 - 3)

3は筒形の碗の口縁部片であり、外面には菊文が施される。

第 層出土遺物

土師器 (Fig.17 - 4~9)

4・5は杯である。4は1/8ほど残存し、口径13.2cm、器高3.2cm、底径8.2cmを測る。口縁部は体部か

らほぼ外上方に上がり、端部を丸く仕上げる。摩耗が著しいため、調整は不明である。5は1/3ほど残存し、口径13.2cm、器高2.8cm、底径9.0cmを測る。口縁部は体部から緩やかに外反し、体部内外面に回転ナデ調整を施す。6～8は皿である。口縁部は平らな底部から外上方に上がり、一旦外傾した後、上部につまみ上げ口縁部内面に沈線状の段をなす。6は1/2ほど残存し、口径22.5cm、器高2.4cm、底径16.0cmを測る。体部内面はヨコナデ調整の後、放射線状の暗文を施す。丁寧なヘラ磨きが施されており、焼成も良好で、畿内からの搬入品である可能性が高い。7は1/4ほど残存し、口径15.5cm、器高2.0cm、底径12cmを測る。焼成は不良で全体的に摩耗が著しいが、体部内外面には回転ナデ調整が確認できる。8は1/5ほど残存し、口径17.3cm、器高2.3cm、底径13.0cmを測る。内外面ともに摩耗が著しいが僅かに回転ナデ調整が確認できる。9は甕の口縁部で口径15.6cmを測る。口縁部が「く」の字状に外反し、端部を強いヨコナデ調整で仕上げる。胴部外面にはタタキ目、内面にはヨコ方向のハケ目及び、指頭圧痕が確認できる。

須恵器 (Fig.17 - 10～24)

10・11は杯蓋である。10は1/2ほど残存し、口径は14.4cmを測る。天井部はやや凹み、口縁端部を下方に屈曲させる。つまみは擬宝珠形を呈し、径2.4cmを測る。内面は回転ナデ調整を施すが、外面は全体に自然釉が付着し調整は確認できない。11は口径12.7cmを測り、つまみは欠損する。天井部は平たく、緩やかに下がり口縁端部を下方に小さく屈曲させる。内外面に回転ナデ調整を施す。12～17は杯であり、口縁部が斜め外上方に真直ぐ上がる。12は1/3ほど残存し、口径15.2cm、器高3.5cm、底径12.0cmを測る。焼成が悪く摩耗が著しいため、調整は不明である。13は1/3ほど残存し、口径13.2cm、器高3.9cm、底径8.8cmを測る。外底面は回転ヘラ切り後未調整である。焼成は不良である。14は口径9.8cm、器高3.7cm、底径6.6cmを測るやや小さめの杯である。底部は回転ヘラ切りの後ナデ調整、体部には回転ナデ調整を施す。15は1/2ほど残存し、口径11.6cm、器高4.1cm、底径7.2cmを測る。外底面は回転ヘラ切りの後ナデ調整を施し、「八」の字状に開く高台を有する。体部から口縁部にかけては回転ナデ調整を施す。16は他の杯よりも口縁部が大きく開くもので、口径13.9cm、器高4.1cm、底径7.2cmを測る。内底面にはナデ調整、体部から口縁部にかけては回転ナデ調整を施す。外底面は回転ヘラ切りの後ナデ調整を施し、真下を向く高台を有する。17は底部が完全に残存するが、口縁部は欠損する。底径は8.0cmを測り、外底面は回転ヘラ切り未調整で、高さ0.3cmを測る「八」の字状の小さな高台が付く。体部には回転ナデ調整を施す。18～21は皿である。18は1/4ほど残存し、口径14.4cm、器高2.1cm、底径10.6cmを測る。口縁部は斜め外上方へ上がり、端部を丸く仕上げる。口縁部内面には段の痕跡を見せるが、摩耗が著しく不明瞭である。焼成は不良である。19・20は口縁部が底部から外上方に上がり、一旦外傾した後、端部を上につまみあげること口縁部内面に段をなす。19は1/8ほど残存し、口径は17.6cm、器高2.6cm、底径14.0cmを測る。20は1/5ほど残存し、口径17.8cm、器高2.1cm、底径12.0cmを測る。焼成が不良で、摩耗しており調整は不明である。21は口縁部内面の段が沈線状を成すもので、1/4ほど残存し口径16.2cm、器高2.3cm、底径11.2cmを測る。焼成はやや不良であり、体部内外面は回転ナデ調整、外底面は回転ヘラ切り未調整である。22は高杯で、杯底部と脚台部が残存する。一部回転ナデ調整が確認できるが、焼成は不良で、摩耗が著しい。23は長頸壺の胴部で、頸部以上は欠損する。胴径16.4cm、底径8.2cmを測る。胴部は回転ナデ調整で仕上げられ、肩部に

は自然釉の吸着が見られる。底部には「ハ」の字状に開く高台が付く。24は短頸壺であり、口縁部から肩部にかけての一部が残存する。口径は7.4cm、回転ナデ調整が認められ、肩部には若干の自然釉が残る。

緑釉陶器 (Fig.17 - 25~29)

25は椀の底部で底径5.8cmを測る。硬質であり、高台は削り出し高台である。体部外面は回転ヘラ削りである。内底面には1次焼成時の重ね焼きの跡が残る。釉調は明オリーブ灰色で、一部暗オリーブ灰色に変色しており、外底面は無釉である。26~28は椀の口縁部で、口縁端部を若干外反させる。26は硬質であり、焼成は不良である。釉調は淡黄色である。27も硬質で、口径17.0cmを測る。回転ナデ調整を施し、口縁部の外反がやや強い。釉調はオリーブ灰色である。28は軟質で、釉調は浅黄色である。29も椀の口縁部で、真直ぐに立ち上がる。釉調は明オリーブ灰色である。

瓦器 (Fig.18 - 30~32)

30~32は椀であり、3点とも和泉産のものと考えられる。口縁部に強いヨコナデを施し、体部外面には指頭圧痕が明瞭に残る。30は口縁部から底部にかけて1/4ほど残存し、口径13.8cm、器高3.1cm、底径3.4cmを測る。内面には圏線状、内底面には平行線状のヘラ磨きを施し、外底面には断面三角形の扁平な高台が付く。31は口縁部から体部にかけて1/4ほど残存し、口径13.0cmを測る。内面に圏線状のヘラ磨きが確認できる。32は口径15.0cmを測る。摩耗が著しく調整は不明である。外面には炭素の吸着が見られず、赤褐色を呈する。

土師質土器 (Fig.18 - 33~41)

33・34は杯である。33は口径14.4cm、器高4.7cm、底径5.8cmを測り、口縁部の一部が欠損する。口縁部は体部から外上方に真直ぐのび、非常に薄手の作りとなっている。体部外面には若干のロクロ目が確認されるが、摩耗が著しいため、調整は不明である。34は1/3ほど残存し、口径14.0cm、器高3.7cm、底径6.4cmを測る。体部は内湾気味に上がり口縁部が若干外反する。内底面にはロクロ目が残る。摩耗が著しく調整は不明である。35は杯の底部であり、底径6.6cmを測る。底部から一旦真直ぐ上がり、その後大きく外に開くもので、摩耗が著しく調整は不明である。36は小杯であり、ほぼ完形である。口径8.7cm、器高3.9cm、底径4.2cmを測る。凹凸のある底部から一旦外上方へ真直ぐ上がり、口縁部において強く内傾する。調整は雑であり、底部、体部にはロクロ目を残す。37、38は椀であり、底部の一部が残存する。37は底径8.0cmを測り、内傾する高台を有する。高台は高さ1.1cmと比較的高めで、底部への接合部分は未調整である。38は底径8.7cmを測り、真下を向く高台を有する。高台は高さ1.0cmと、比較的高い。調整は摩耗が著しく不明である。39~41は摂津型の羽釜で、いずれも口縁部の破片である。39は口径22.3cmを測り、幅2.2cmの鐔がほぼ水平に付く。口縁部にヨコナデ調整を施し、端部が若干内傾しており、胴部外面にはタテ方向の粗いハケ調整が確認できる。40は幅1.7cmを測る鐔が水平に付き、口縁部をヨコナデ調整により仕上げる。41は幅2.2cmを測る鐔が水平に付き、口縁部を平らに仕上げる。

白磁 (Fig.18 - 42~44)

42は玉縁状口縁を持つ碗の口縁片であり、口径14.4cmを測る。内外面に灰オリーブ釉を施し、口縁部折り返しの形跡が確認できる。白磁碗 類に分類できる。43は碗の口縁片で口径15.0cmを測る。

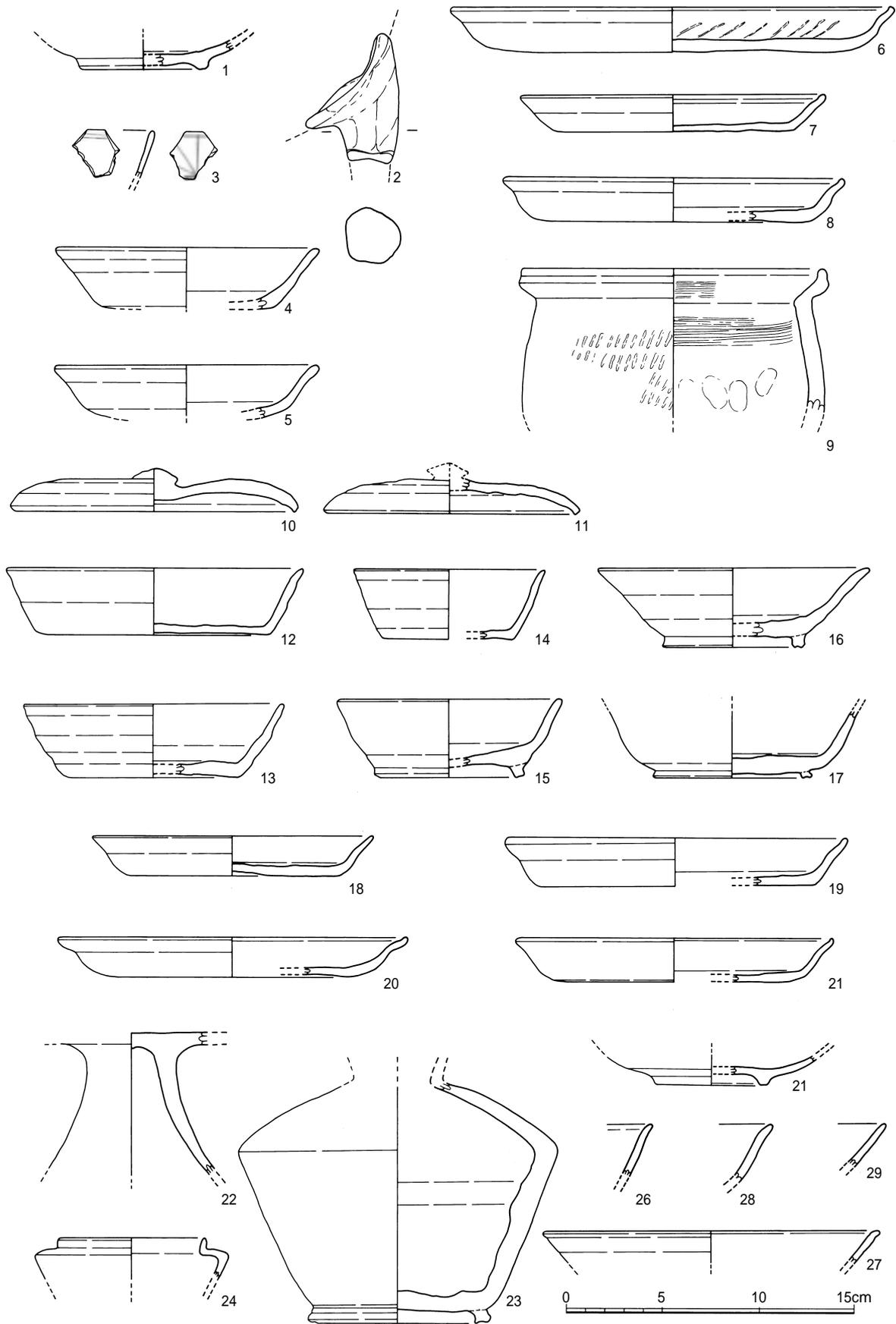


Fig.17 A区 第 層出土遺物実測図(土師器・須恵器・緑釉陶器)

口縁端部を外反させ、内面の口縁下約1.0cmに一条の沈線を巡らし、全面に透明釉を施す。白磁碗類に分類できる。44は碗の底部片で底径5.8cmを測る。高台は削り出し高台で、内面に施釉され、内底面に一条の沈線を施す。

青磁 (Fig.18 - 45 ~ 49)

45・46は碗の体部片であり、オリーブ黄色釉を施す。外面に細かな櫛目文を持ち、内底面には段を有す。47は皿の体部である。口径11.0cm、器高2.4cm、底径5.6cmを測る。外面は体部中位で屈曲し、

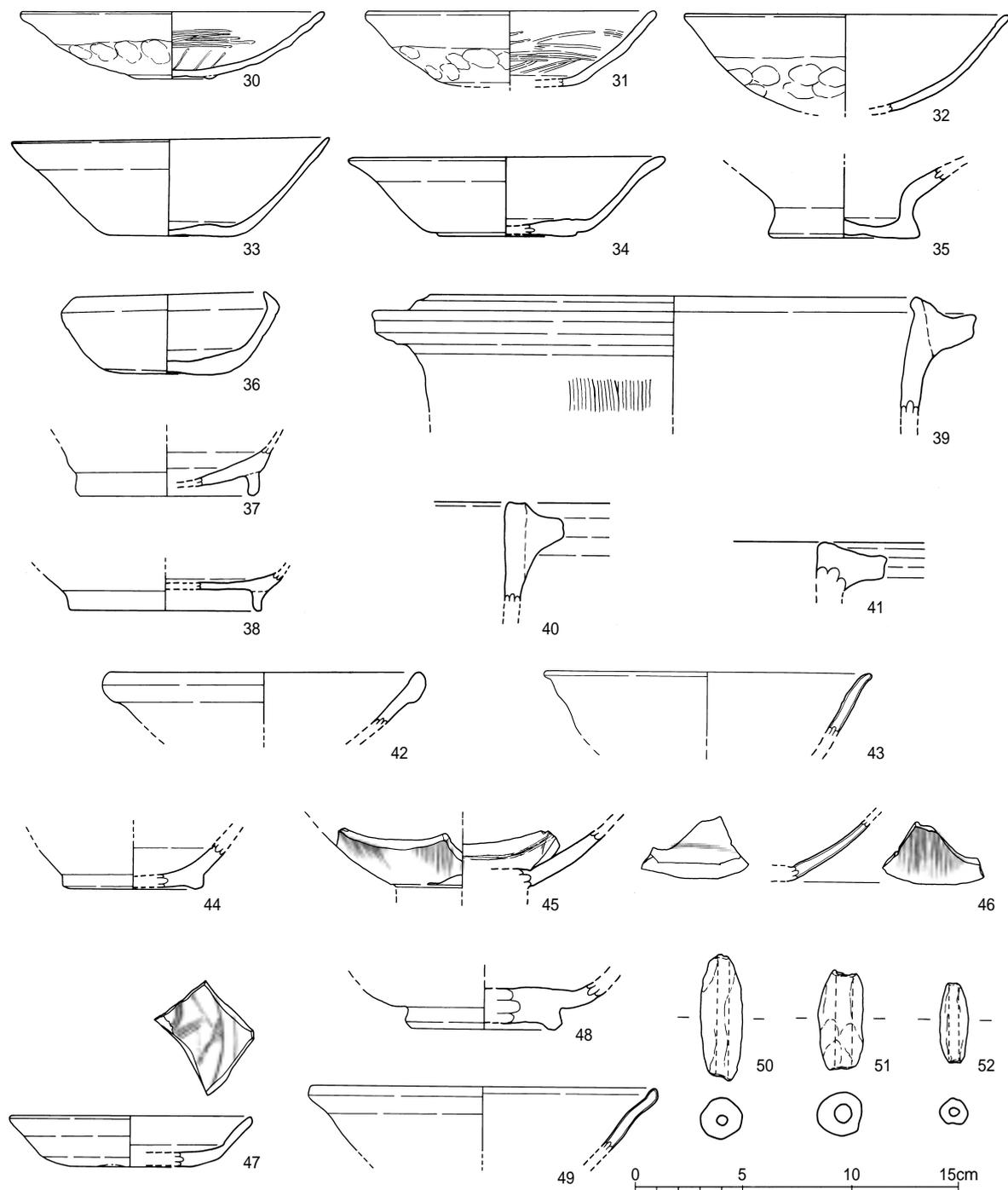


Fig.18 A区 第 層出土遺物実測図(瓦器・土師質土器・白磁・青磁・土製品)

口縁部は真直ぐのびる。体部と内底面の境には段を有し、外底面を除きオリーブ黄色釉を施す。45～47は同安窯系のものと考えられる。48は碗とみられる底部片で、底径6.6cmを測る。外底面の一部を除き、オリーブ色の釉を施す。49は杯の口縁部片で、口径15.8cmを測る。口縁部はやや外反し端部をつまみ上げ、白灰色の釉を施す。龍泉窯系のものと考えられる。

土製品 (Fig.18 - 50～52)

50～52はすべて管状土錘で、紡錘形を呈する。復元すると50,51は全長4.6～5.9cm,全幅1.9～2.1cmを測る。52は小さめで、全長3.7cm,全幅1.3cmを測る。

石製品 (Fig.19 - 53・54)

53は砥石で、一部欠損する。材質は細粒砂岩で4面使用する。54は叩石で、両面の中央部及び側面の一部に弱い敲打痕が残る。材質は砂岩である。

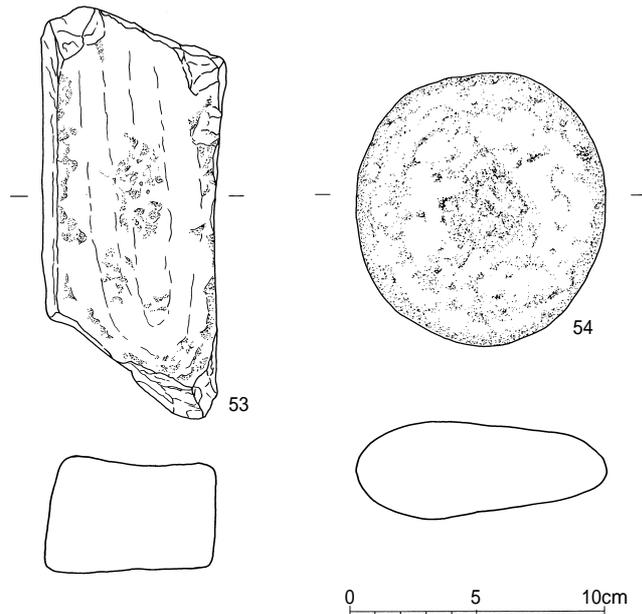


Fig.19 A区 第 層出土遺物実測図(石製品)

第 層出土遺物

土師器 (Fig.20～25 - 55～108)

55～95は古墳時代の土師器である。55～57は壺で小型のものである。55はほぼ完存し、口径5.0cm,器高9.9cm,胴径9.4cmを測る。底部は丸味を持ち、胴部はやや扁平な球形を呈する。口縁部は比較的長く、外上方に立ち上がる。摩耗が著しく調整は不明である。56は口縁部片で口径7.8cmを測る。胴部は球形を呈すると考えられる。口縁部は外上方に立ち上がる。摩耗が著しく調整は不明であるが、頸部付近に指頭圧痕が残る。57も口縁部片であり、口径7.2cmを測る。口縁部は外上方に上がり、端部はやや内傾する。摩耗が著しく調整は不明である。58はやや大型の甕であり、胴部は球形を呈する。口縁部は外上方に真直ぐ上がり、端部を外につまみ出す。2/3ほど残存し、口径16.4cm,器高24.6cm,胴径21.9cmを測る。口縁部内面にはヨコ方向のハケ調整が施される。胴部は摩耗が著しく外面の調整は不明であり、内面にはヘラ削りが確認できるが、単位は不明である。59～61は大型の甕で、胴部はほぼ球形を呈し、口縁部は「く」の字状に外反する。59は1/2ほど残存するが、底部は欠損する。口径15.8cm,胴径25.6cmを測り、頸部にはヨコナデ調整を施す。胴部外面には一面にタタキ目があり、一部その上にハケ調整を施す。内面にはヘラ削りが施され、その上にも部分的にハケ調整を施す。60はほぼ完存し、口径14.4cm,器高22.5cm,底径19.2cmを測る。摩耗が著しく外面の調整は不明である。内面にはヘラ削りによるものと考えられる砂粒の動きが確認できる。61は3/4ほど残存し、口径15.9cm,器高22.5cm,胴径20.6cmを測る。全体的に摩耗が著しいが、胴部外面にはハケ調整が確認できる。頸部にはヨコナデ調整,胴部内面にはヘラ削りを施す。62～64は小型の甕であり、胴部はほぼ球形を呈する。62は2/3ほど残存し、口径13.4cm,器高13.9cm,胴径15.2cmを測る。

口縁部は「く」の字状に外反する。胴部外面には、タタキ目を消すようにナデ調整が施される。胴部内面にはナデ調整、口縁部にはヨコナデ調整を施し、頸部内面には指頭圧痕が残る。63は口縁部から胴部にかけて残存する。口径14.0cm、胴径15.8cmを測る。口縁部は外反して短く上がり、端部を外方向へつまみ出す。内外面ともナデ調整を施す。64は口縁部から胴部にかけて残存する。口径14.0cmを測り、口縁部は外反して上がる。胴部は摩耗して不明瞭であるが、ナデ調整を施す。口縁部にはヨコナデ調整を施す。65は甕の口縁部から上胴部にかけての破片である。口径19.7cmを測り、口縁部は「く」の字状に外反する。摩耗が著しく調整は不明である。66は甕の胴部破片で、2/3ほど残存する。胴径18.3cmを測り、球形に近い胴部を有し、口縁部は外上方に上がると考えられる。外面には一部摩耗するが、胴部以下にタタキ目が残る。67・68は甕の頸部から胴部にかけての破片である。67は胴径16.4cmを測り、外面には粗いタテ方向のハケ目が残る。68は外面にはタタキ目が残る、その上にナデ調整を施す。内面は胴部にはナデ調整、口縁部には粗いハケ調整を施す。69は甕の底部片である。丸底の底部であり、内面にはヘラ削りの後、ナデ調整を施す。外面にもナデ調整を施

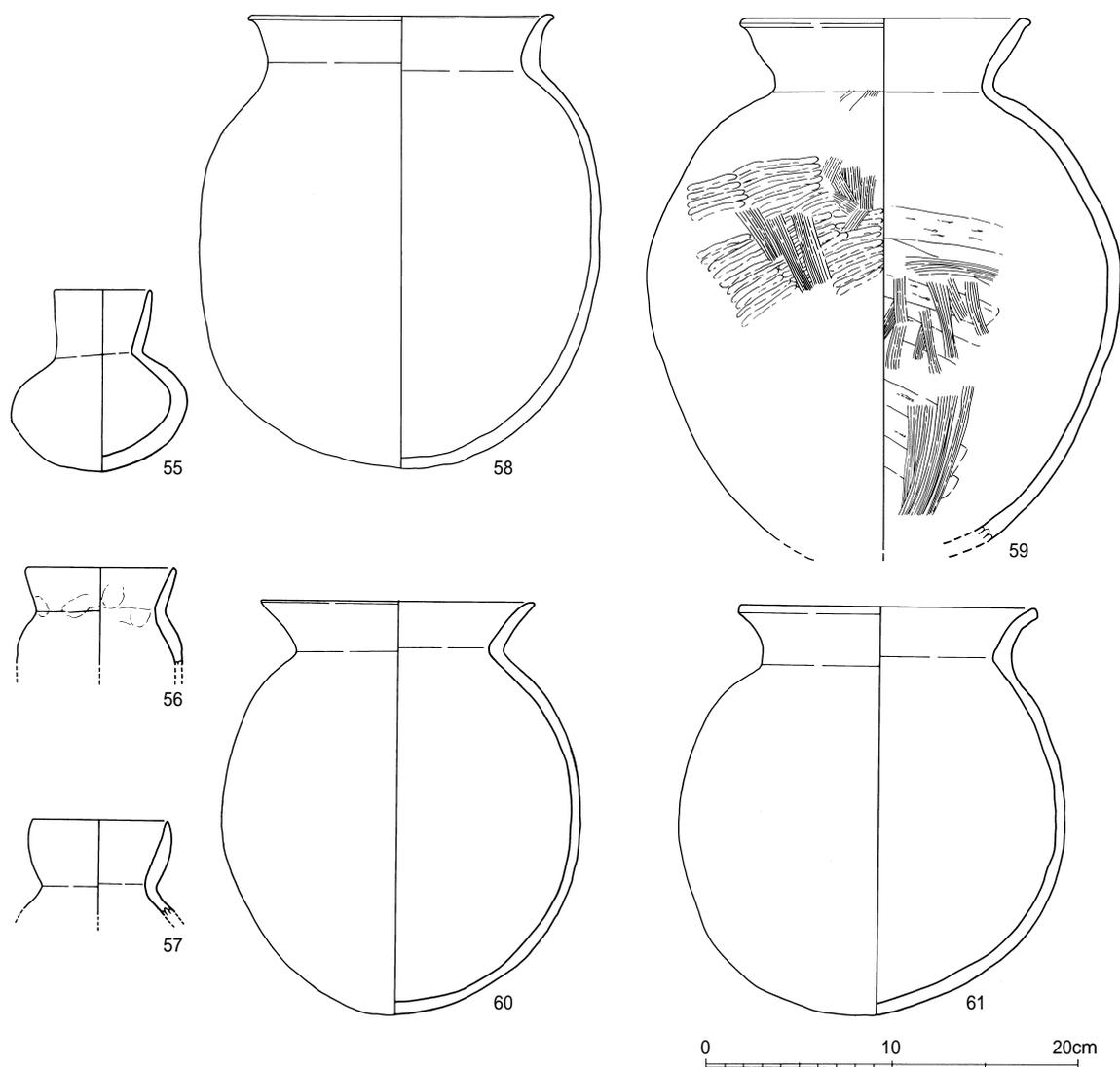


Fig.20 A区 第 層出土遺物実測図(土師器1)

す。70は小型の鉢であり、口縁部はかなり欠損するが、他の部分はほとんど残存する。口径10.3cm、器高4.0cm、底径3.5cmを測り、平底の底部を有する。体部は内湾しつつ上がり、口縁端部を丸く仕上げ。摩耗しており調整は不明であるが、内外面に指頭圧痕が確認できる。71は鉢であり、胴部の一部のみ残存する。胴径は13.0cmを測り、体部は扁平な球形を呈する。口縁部は一旦屈曲して、外上方に上がると考えられる。内面には指頭圧痕が残るが、他の調整は摩耗が著しく不明である。72~74は高杯であり、杯部は稜を持って上がる。脚部は中空でやや開く柱脚に、さらに大きくラッパ状に開く裾部が付く。72はほぼ完存する。口径17.3cm、器高13.3cm、底径10.6cmを測り、杯部、脚部外面にはナデ調整が施され、脚部内面にはヨコ方向のヘラ削りが施される。杯部内面は摩耗が著しく、調整は不明である。73もほぼ完存する。口径16.9cm、器高12.7cm、底径10.4cmを測り、口縁部はやや外反する。杯部及び、脚部外面は摩耗が著しく調整は不明である。脚部内面にはヘラ削りが施される。74は杯部の1/2を欠損し、口径16.3cm、器高12.1cm、底径10.5cmを測る。全体的に摩耗が著しく、調整は不明であるが、脚部内面にはヘラ削りが施される。75の高杯は、杯部に緩やかな稜を持つもので、脚部の1/2と口縁部の一部が残存する。口径15.0cm、器高12.4cm、底径11.4cmを測り、脚部は中空でやや開く柱脚に、さらに大きくラッパ状に開く裾部が付く。全体的には摩耗するが、口縁部にはヨコナデ調整、脚部外面にはナデ調整、裾部にはヨコナデ調整が施される。脚部外面は不明瞭であるがヘラ磨きを施した可能性も考えられる。脚部内面にはヨコ方向のヘラ削りが施される。76~79の高杯は脚台部の欠損するもので、杯部は明瞭な稜を持って上がる。76は杯部の1/3ほど残存し、口径は17.7cmを測り、口縁部はやや外反する。口縁直下に軽くヨコナデ調整を施し、口縁部外面にタテ方向のハケ調整を施す。77は杯部の1/2が残存し、口径15.6cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整、杯底部にはナデ調整を施す。78は杯部の1/3ほど残存し、口径16.4cmを測る。口縁部

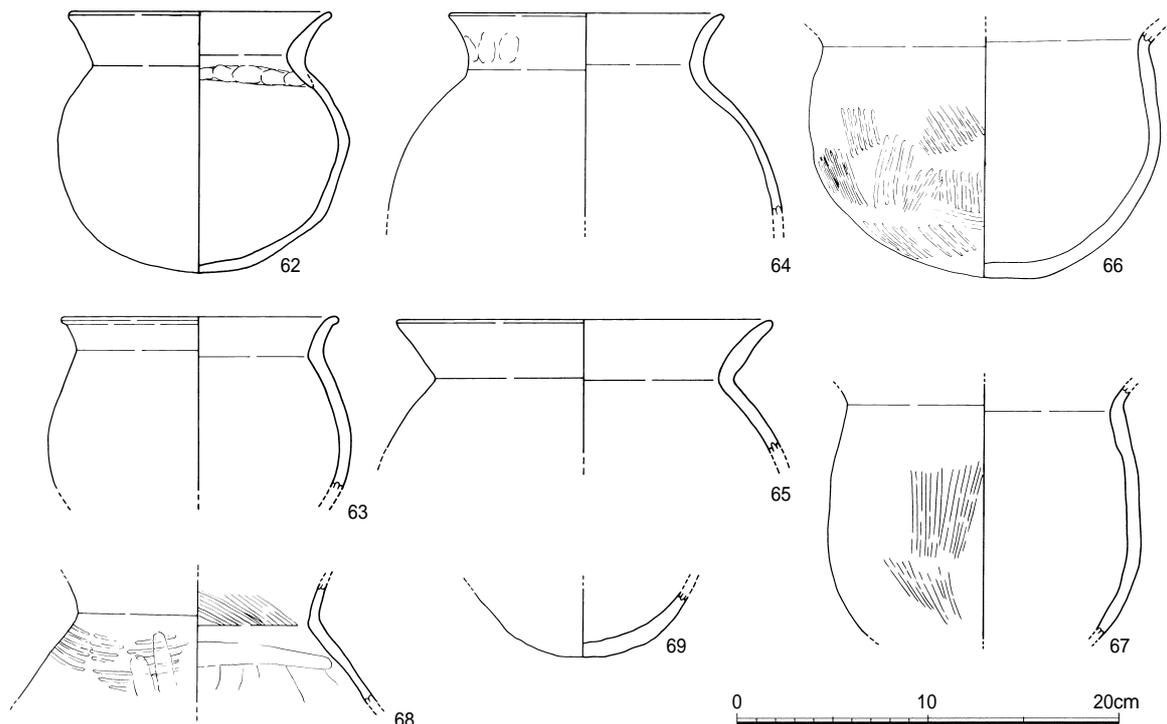


Fig.21 A区 第 層出土遺物実測図(土師器2)

はやや外反する。摩耗が著しく、調整は不明である。79は杯部の1/4ほど残存し、口径15.6cmを測る。杯部は稜を持って上がり、口縁部は外反する。内外面ともナデ調整を施す。80も脚台部の欠損するもので、杯部は稜を持たず緩やかに上がる。杯部の1/2ほど残存し、口径17.7cmを測る。杯部内面にはヘラ磨きを施した痕跡が残るが、摩耗しており不明瞭である。口縁部外面にはナデ調整を施す。焼成が著しく悪い。81~86は高杯の脚部で、中空でやや開く柱脚に、さらにラッパ状に開く裾部が付く。81は杯底部から脚部にかけて残存する。底径は9.6cmを測り、脚部内面にはヨコ方向のヘラ削りを施す。外面は摩耗が著しく調整は不明である。82は裾部を一部欠損し、底径12.8cmを測る。円形のスカシ窓が三方に穿たれるものの、一つは貫通していない。外面はナデ調整の後、ヘラ磨きが施されると考えられるが、摩耗しており不明瞭である。内面にはヘラ削りが施される。83は杯底部から脚部にかけて残存し、底径11.5cmを測る。脚部外面にはハケ調整、内面にはヘラ削りを施す。84は底径11.8cmを測る。摩耗が著しく、裾部のナデ調整は確認できるが他は不明瞭である。85は裾部を一部欠損し、底径10.2cmを測る。外面は摩耗しており不明瞭であるが、ナデ調整が施される。内面にはヘラ削りが施される。86は底径12.2cmを測る。脚部外面には部分的にヘラ磨きが見られるが、摩耗しており不明瞭である。内面にはヘラ削り調整を施す。裾部にはヨコナデ調整を施す。87は中空で大きく開く柱脚に、さらに大きくラッパ状に開く裾部がつき、円形のスカシ窓が四方に穿たれる。脚部は比較的低く、裾部の1/2を欠損する。底径13.2cmを測り、外面にはナデ調整、内面にはヘラ削りを施す。88~90は杯部、裾部を欠損し脚部のみで残存するものである。中空でやや開き気味の脚部で、外面にはナデ調整、内面にはヘラ削り調整を施す。91も脚部のみで残存する。外面にナデ調整を施す。92~94は裾部の破片で、大きくラッパ状に開く。92は底径12.4cmを測り、内面

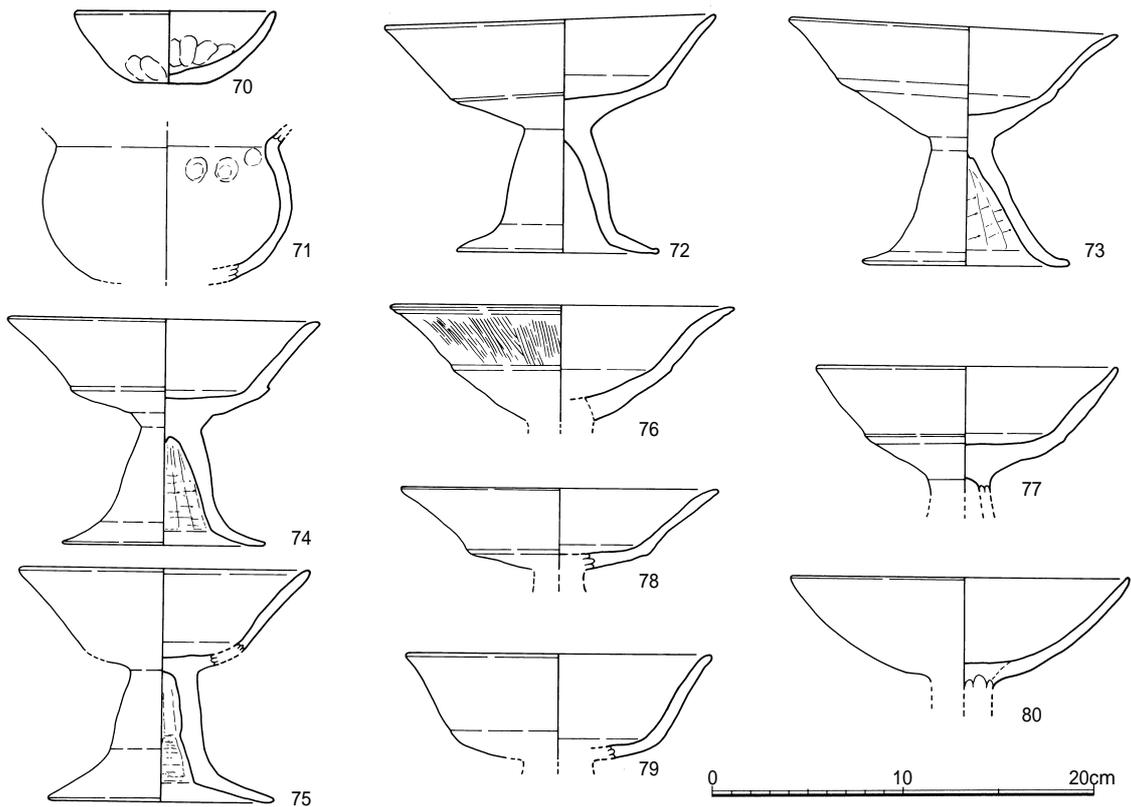


Fig.22 A区 第 層出土遺物実測図(土師器3)

にはヘラ削りを施す。外面はヨコナデ調整の後，ヘラ磨きを施す。93は底径10.8cmを測り，外面にはナデ調整，内面にはヘラ削りを施す。94は底径12.2cmを測り，外面はヨコナデ調整の後，ヘラ磨きを施すと考えられるが不明瞭である。95は甑の底部である。丸底の底部に孔を穿つ。外面はナデ調整，内面は摩耗しており調整は不明である。

96～108は古代の土師器である。96・97は杯である。96は1/2ほど残存し，口径14.0cm，器高3.0cm，底径8.0cmを測る。口縁部は底部から真直ぐに立ち上がる。摩耗が著しく調整は不明である。97は1/3ほど残存し，口径13.4cm，器高2.7cm，底径9.5cmを測る。ヘラ切りの底部から，口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。底部及び体部内面については丁寧なヘラ磨きが確認できる。外面は若干摩耗しており，調整は不明である。98は杯の口縁部であり，口径13.6cmを測る。口縁部は真直ぐ立ち上がり，口縁端部を内傾させる。内面には丁寧なヘラ磨きが施される。外面には若干摩耗するが，回転ナデ調整が確認できる。99は椀の口縁部であり，口径15.4cmを測る。腰の張りが強く，体部はやや内湾し，口縁端部を外に折り曲げる。外面には回転ナデ調整が施される。100～102は甕の口縁部で，ややふくらむ胴部から，口縁部は「く」の字状に外反する。100は1/8ほど残存する。口径23.5cmを測り，口縁端部は浅い凹面をなす。胴部外面にはタテ方向にハケ調整，口縁部内面にはヨコ方向にハケ調整を施す。101は1/6ほど残存し，口径25.2cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整を施し，端部を若干つまみ上げる。内面にはヨコ方向にハケ調整を施す。胴部外面にはタテ方向にハケ調整を施す。102は1/6ほど残存し，口径16.2cmとやや小型のものである。頸部には強いヨコナデ調整が認められ，胴部外面にはヨコ方向のハケ調整の後，タテ方向に粗いハケ調整を施す。内面は摩耗が著しく，調整は不明である。103～105も甕の口縁部で，ほぼ直立する胴部から，口縁部は「く」の字状

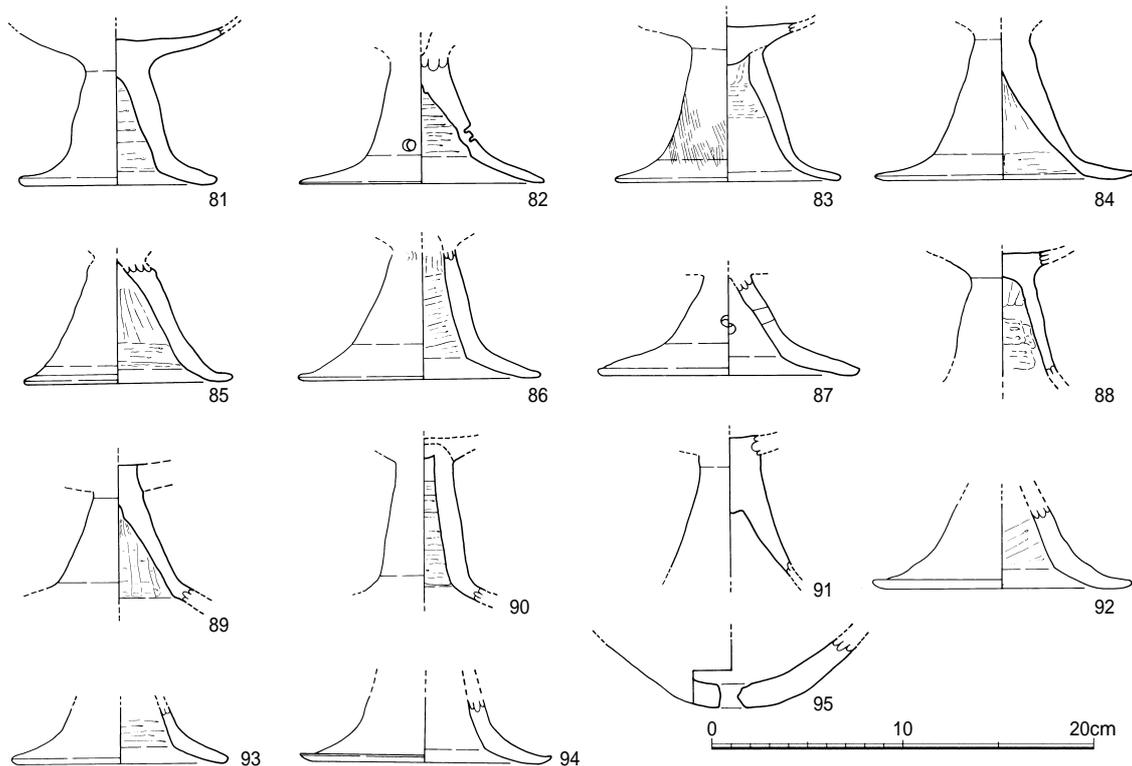


Fig.23 A区 第 層出土遺物実測図(土師器4)

に強く外反する。103は1/6ほど残存し，口径26.6cmを測る。口縁端部をつまみ上げ上部に拡張する。胴部外面には細かいタテ方向のハケ調整，内面にはヨコ方向のハケ調整を施す。104は口径29.0cmを測り，口縁端部には浅い凹面をなす。胴部外面にはタテ方向のハケ調整，口縁部内面にはヨコ方向のハケ調整を施す。105は口径23.8cmを測り，端部を若干つまみ上げる。胴部外面にはタテ方向のハケ調整，口縁部内面にはヨコ方向のハケ調整を施す。106は，口縁部から胴部中位まで残存する。口径26.3cmを測り，口縁部は「く」の字状に強く外反する。口縁端部をつまみ上げ内面には粗いハケ目が残る。胴部外面にはタテ方向のハケ調整，中位に一部ヨコ方向のハケ調整を施す。107は鉢の口縁部であり，口径25.6cmを測る。内湾する体部から口縁部はやや外反し，内外面にナデ調整が確認できる。内面にはヘラ磨きを施す。108は高杯の脚台部である。外面は面取りされており，内面にはヘラ状工具による圧痕が残る。

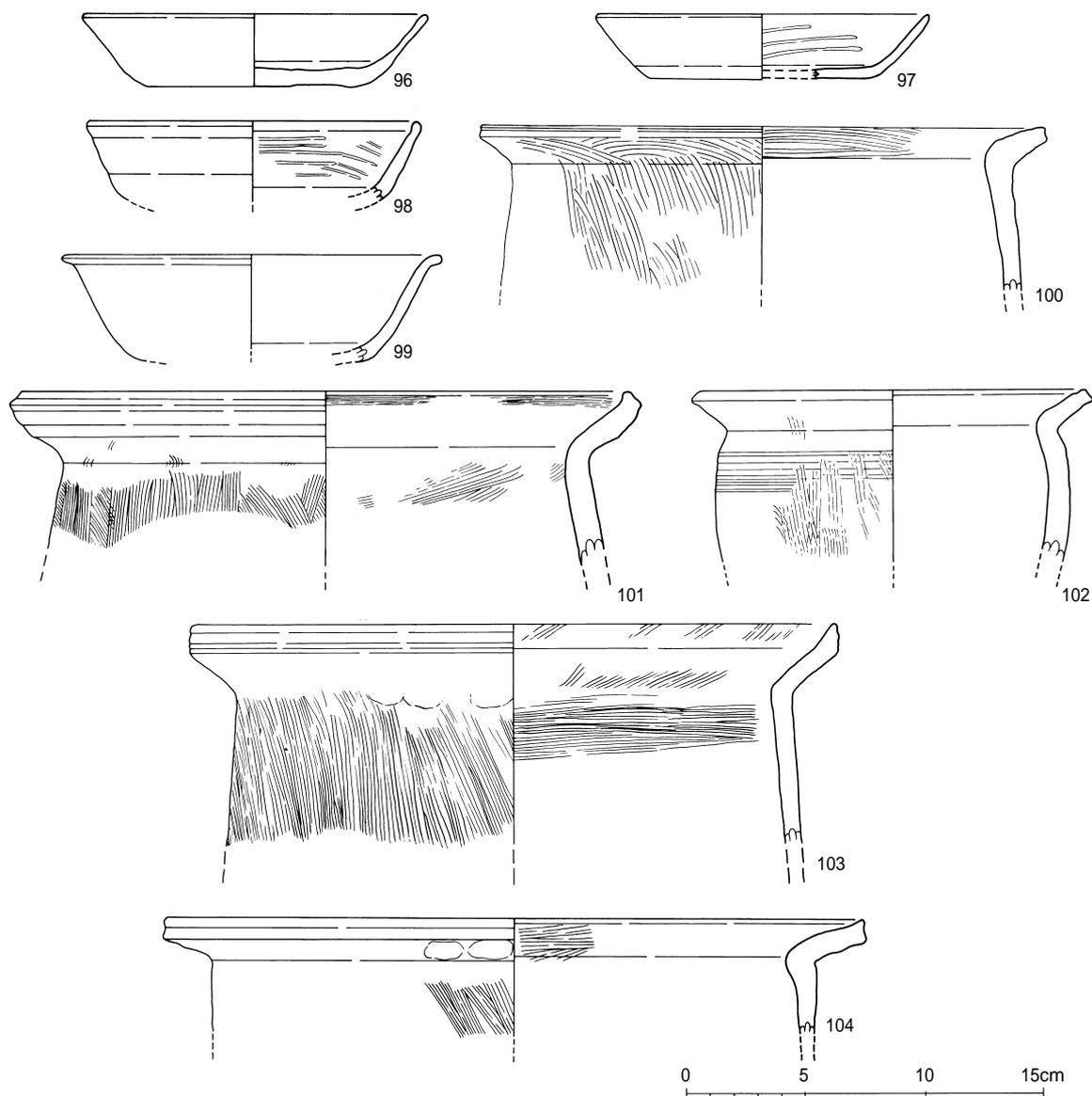


Fig.24 A区 第 層出土遺物実測図(土師器5)

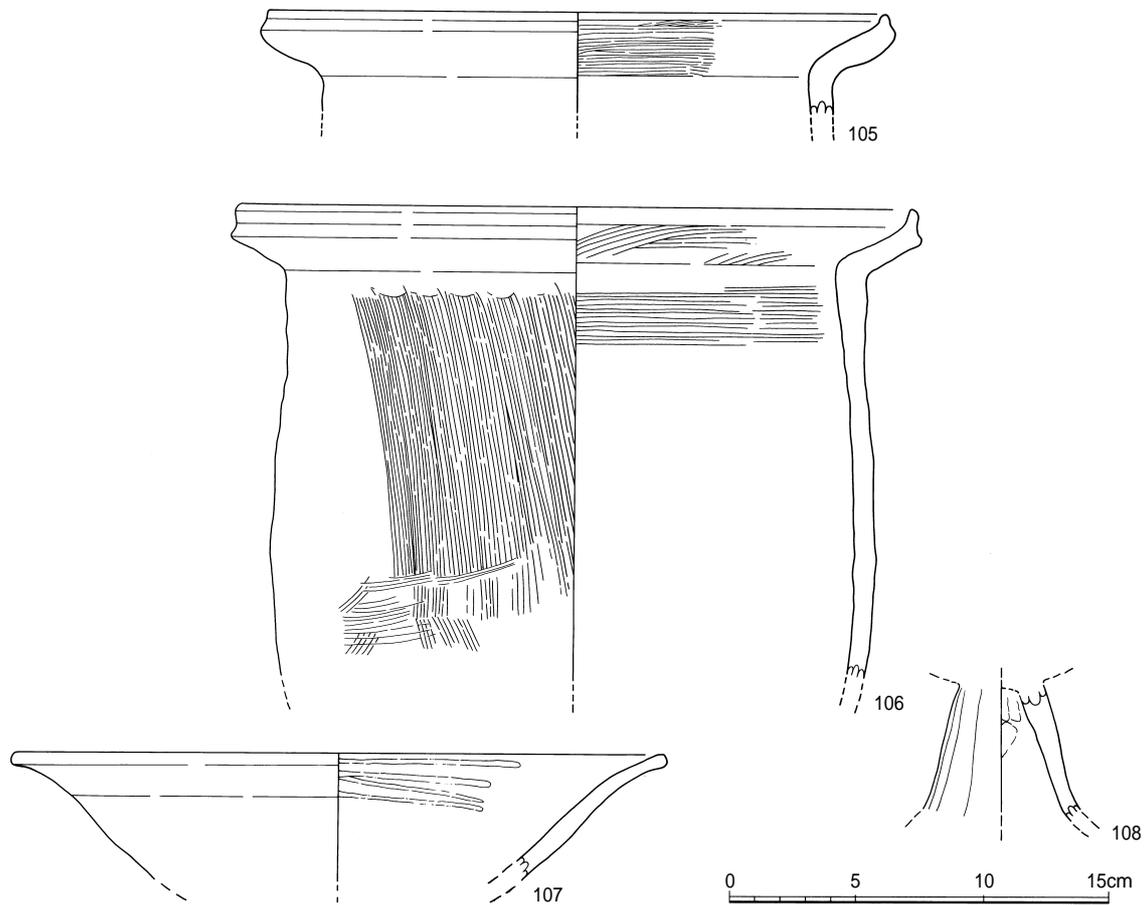


Fig.25 A区 第 層出土遺物実測図(土師器6)

須恵器 (Fig.26・27 - 109 ~ 155)

109 ~ 114は蓋で、平らな天井部から、口縁部は斜め下方に下がり、端部を下方に屈曲させる。天井部外面には回転ヘラ削り、口縁部には回転ナデ調整が確認できる。109は完形で口径12.6cmを測り、扁平な擬宝珠形をつまみを有する。外面2/3に自然釉が付着する。110は1/3ほど残存し、口径15.6cmを測る。扁平な擬宝珠形をつまみを有する。111は1/2ほど残存し、口径15.1cmを測る。擬宝珠形をつまみを有し、天井部には回転ヘラ削り調整を施す。112は口縁部が欠損する。扁平な擬宝珠形をつまみを有し、平らな天井部には回転ヘラ削り調整を施す。113・114は共に天井部の一部が欠損するもので、口縁部は斜め下方に下がり、端部を下方に屈曲させる。113は口径14.6cmを測り、外面には回転ナデ調整を施す。114は口径13.5cmを測り、外面は回転ヘラ削り調整の後、回転ナデ調整を施す。115 ~ 117は杯で、高台を持たないものである。115は1/6が残存し、口径13.7cm、器高3.0cm、底径7.3cmを測る。口縁部は斜め外上方に真直ぐ上がる。焼成が著しく不良で、断面が灰白色を呈し、調整は不明である。116も断面が灰白色を呈する焼成不良のもので、口径は14.7cm、器高2.9cm、底径9.9cmを測る。口縁部は内湾して立ち上がる。摩耗が著しく調整は不明である。117は1/8が残存し、口径13.0cm、器高3.7cm、底径6.8cmを測る。器壁が厚く、外底面には回転ヘラ切り痕が残る。体部は内湾し、口縁部を丸く仕上げる。摩耗が著しく調整は不明である。118 ~ 121の杯は平らな底部から強く屈曲し、口縁部が外上方に真直ぐに上がるものである。底部には0.2 ~ 0.5cmの高台が付く。118

は1/4ほど残存し、口径13.0cm、器高4.5cm、底径9.0cmを測る。口縁部から体部内外面には、回転ナデ調整が施される。119は1/2ほど残存し、口径12.5cm、器高3.5cm、底径8.4cmを測る。体部内外面に回転ナデ調整が確認できる。内底面にはナデ調整を加え、内面の一部には自然釉が付着する。高台は低く、0.2cmを測る。120は1/2ほど残存し、口径12.9cm、器高3.8cm、底径8.2cmを測り、口縁部から体部内外面には、回転ナデ調整が見られる。121も口縁部から体部にかけて回転ナデ調整を施す。1/2ほど残存し、口径14.0cm、器高4.2cm、底径8.4cmを測る。122～129は杯の底部で、すべて口縁部は欠損する。122・123は底径6.9～9.1cmを測り、0.5cm前後の高台を有する。体部外面には回転ナデ調整を施す。124～126は底径6.3～9.2cmを測り、0.3cm前後の低い高台を有する。体部内面に回転ナデ調整を施す。127は底部の1/2ほど残存する。底径8.1cmを測り、約0.4cmの高台が付く。128は底部の2/3ほどが残存する。底径7.6cmを測り、0.5cmほどの高台が付く。外底面は、回転ヘラ切り未調整である。127・128は内底面がきれいに研磨されており、若干の墨の痕跡も残る。ともに硯に転用されていた可能性が考えられる。129は1/2ほど残存し、底径8.2cmを測る。体部内外面には回転ナデ調整を施す。130～134は皿である。口縁部は平らな底部から外上方に上がり、端部を上につまみ上げ、口縁部内面に段をなす。130は3/4ほど残存し、口径15.2cm、器高2.4cm、底径11.6cmを測る。体部は回転ナデ調整により仕上げられているが、他の調整は不明である。131は1/5ほど残存し、口径17.3cm、器高2.3cm、底径14.0cmを測る。焼成が甘く、摩耗が著しい。132は1/8ほど残存し、口径19.8cm、器高2.2cm、底径16.0cmを測る。摩耗が著しく、調整は不明である。133は1/3ほど残存し、口径16.5cm、器高2.4cm、底径12.6cmを測る。外底面は回転ヘラ切りの後、ナデ調整を施す。口縁部は回転ナデ調整で仕上げる。134は口径15.0cm、器高2.4cm、底径11.9cmを測る。口縁部から体部にかけて回転ナデ調整が認められるものの、焼成が不良で不明瞭である。135～137も口縁部内面に段を有する皿で、口縁部が比較的大きく開くものである。135は1/4ほど残存し、口径15.6cm、器高1.9cm、底径11.6cmを測る。焼成はかなり悪く摩耗が著しい。136は1/5ほど残存し、口径16.3cm、器高2.2cm、底径12.1cmを測る。底部切り離しは回転ヘラ切りである。摩耗が著しく、調整は不明である。137は口径13.8cm、器高1.3cm、底径10.0cmと、他のものよりやや小さめである。底部切り離しは回転ヘラ切りで、口縁部に1ヶ所穿孔が残る。138の皿は口縁内部に段を持たないもので、1/2ほど残存し、口径15.3cm、器高2.4cm、底径11.5cmを測る。口縁部は外上方へほぼ真直ぐ上がる。底部は内外面ともに、凹凸が著しく作りが雑である。139は椀であり、底径5.2cmを測る。底部から体部にかけて残存し、口縁部は欠損する。底部は回転ヘラ切りで、0.3cmを測る小さな高台が付く。体部には回転ナデ調整を施す。140は椀の口縁部片で、回転ナデ調整が確認でき、端部は丸く仕上がる。内面の一部に黒色の吸着物が見られる。141は椀の底部である。円盤状高台を有し、体部外面には回転ヘラ削りを施す。外底面には回転糸切り痕が確認できる。142～144は高杯の脚台部である。142は底径10.5cmを測り、杯底部とラッパ状に短く開く脚台部が残存する。脚台部は回転ナデ調整によって仕上げられている。143は脚台部の1/2ほど残存する。全体的に摩耗が著しく、調整は不明である。144は杯底部と「八」の字状に開く脚台部が残存するが、裾部は欠損する。内外面に回転ナデ調整が確認できる。145は広口壺の口縁部である。口縁部外面に小さな断面三角形の突帯を有し、その下方に4条単位の波状文を施す。146～148は壺の底部で「八」の字状に開く高台を有する。146は1/2ほど残存し、

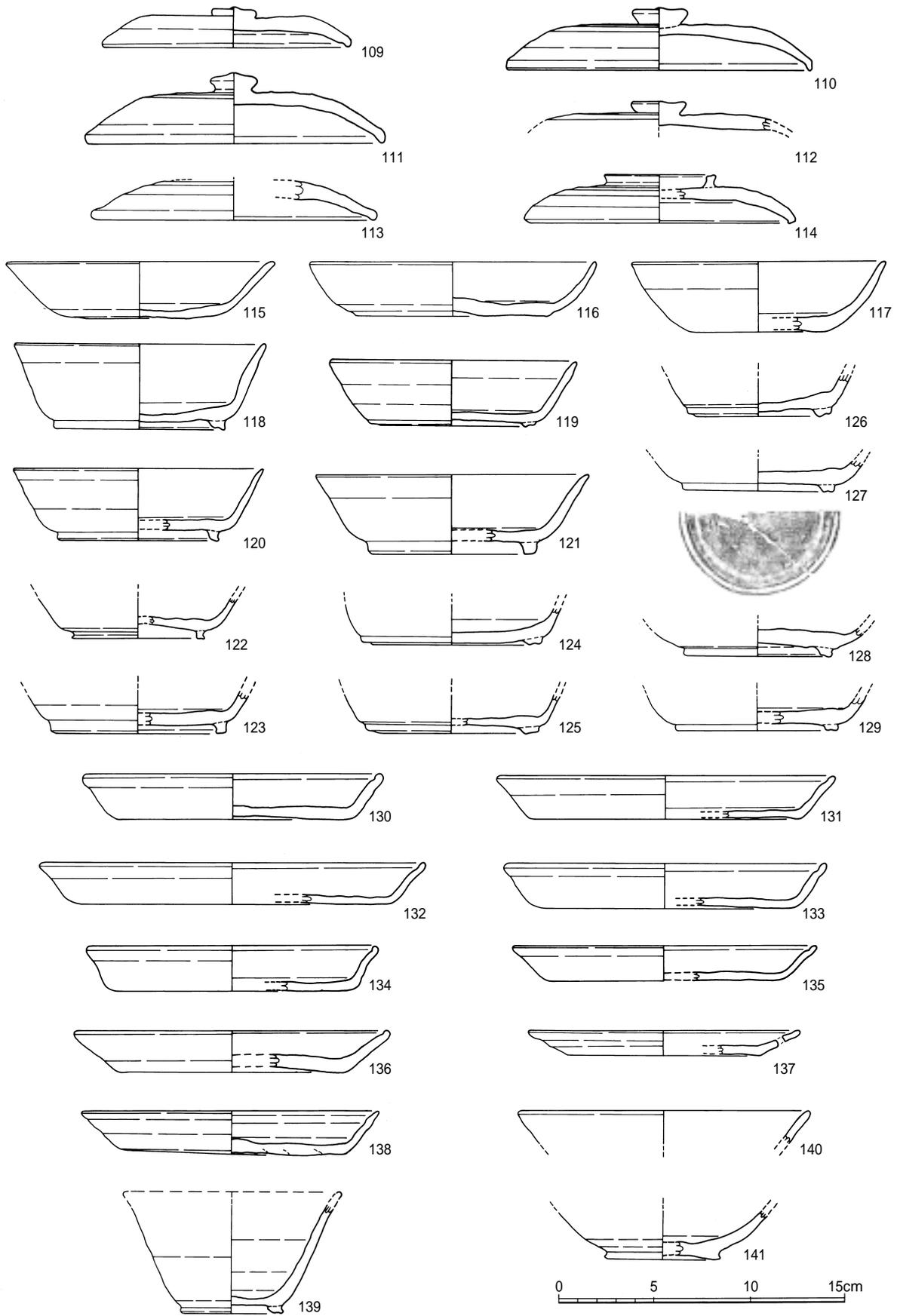


Fig.26 A区 第 層出土遺物実測図(須恵器1)

底径10.0cmを測る。底部回転ヘラ切りで、内面にかなりの凹凸が残る。体部外面には回転ヘラ削り調整を施し、一部自然釉の吸着を確認できる。体部内面には回転ナデ調整を施し、焼成の段階で生じた亀裂が残る。147は1/5ほど残存し、底径14.7cmを測る。底部から体部にかけて回転ナデ調整が確認でき、内底面には若干の自然釉が付着する。148は1/3ほど残存し、底径13.4cmを測る。高台が1.4cmと高く、体部内外面には回転ナデ調整を施す。内底面にはナデ調整を施すものの、かなり凹凸が著しい。149・150は真下を向く高台を有する。149は1/3ほど残存し、底径11.0cmを測る。やや摩耗するものの、体部外面には回転ヘラ削り調整、また内面には回転ナデ調整が確認できる。150は

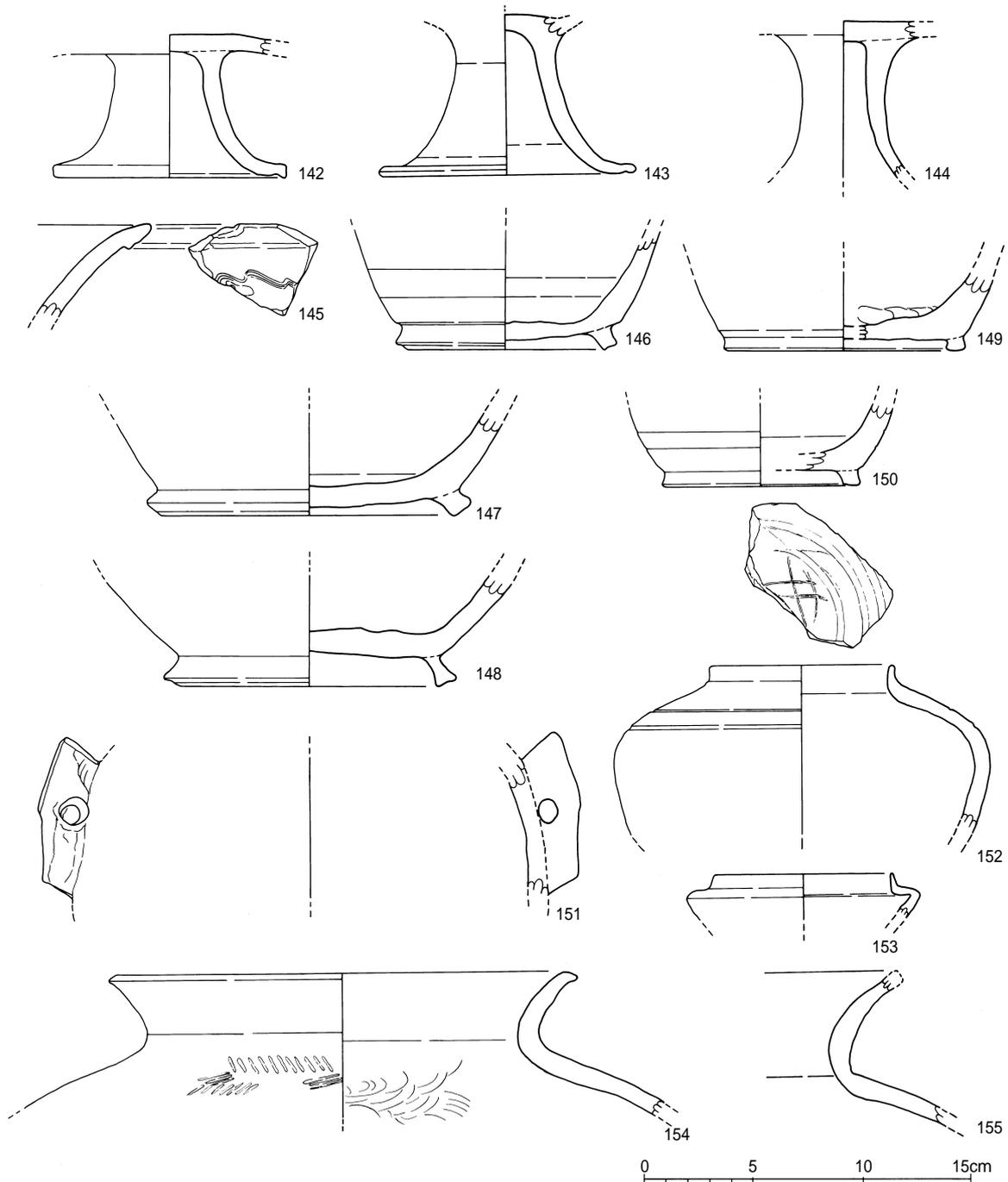


Fig.27 A区 第 層出土遺物実測図(須恵器2)

1/8ほど残存し、底径8.8cmを測る。外底面に#字状のヘラ記号が確認できる。体部には回転ナデ調整が確認できる。151は壺の胴部破片であり、把手が付く。胴径21.5cmを測り、内面は回転ナデ調整で仕上げる。外面には所々自然釉の吸着が見られる。152・153は短頸壺である。152は口縁部から体部にかけて1/6ほど残存する。口径8.2cmを測り、胴部外面には回転ナデ調整を施す。肩部には自然釉が付着し、2条の沈線が確認できる。153は口縁部で口径8.2cmと小型のものである。回転ナデ調整が確認できる。154・155は甕の口縁部である。154は口頸部が強く外反し、端部は面をなす。外面には、平行のタタキ目が残り、その上に自然釉が付着する。内面は同心円文が残り、その上を弱く擦り消す。155は端部が欠損する。内外面ともに回転ナデ調整を施す。内面には若干、同心円文の痕跡が残る。

緑釉陶器 (Fig.28 - 156 ~ 166)

156~162は碗の口縁部の破片で、すべて硬質である。156・157は口径11.7~12.5cmを測り、口縁部内面にごく浅い窪みを有する。口縁部は体部から外上方に真直ぐ上がる。釉調は灰白色で、これら2点の口縁片は同一個体である可能性も考えられる。158は口径14.8cmを測り、口縁部は体部から外上方に真直ぐ上がる。回転ナデ調整で仕上げ、灰オリーブ色の釉を施す。159も口縁部が体部から外上方へ真直ぐ上がる。口径13.8cmを測り、灰オリーブ色の釉を施す。口縁部の傾きから皿である可能性も考えられる。160は体部が若干内湾するもので、回転ナデ調整で仕上げる。灰オリーブ色の釉を施す。161・162はやや強いヨコナデ調整により口縁部を外反させたもので、ともに回転ナデ調整で仕上げ、灰オリーブ色の釉を施す。162は口径15.4cmを測る。163~166は碗の底部である。163は底径8.4cmを測る円盤状高台である。軟質で、胎土は浅黄橙色であり、底部内外面ともに浅黄色の釉を施すが剥落が著しい。164も円盤状高台を有する底部で、底径8.0cmを測る。硬質であり、体部外面は回転ヘラ削りの後回転ナデ調整を施したものと考えられる。内底面には1次焼成時の重ね焼きの痕跡が残り、全面に灰オリーブ色の釉を施す。165は底径6.4cmを測る硬質のもので、底部の1/2ほど残存し、削り出し高台を有する。底がかなり厚い作りになっており、外底面を除き、浅黄色の釉を施す。

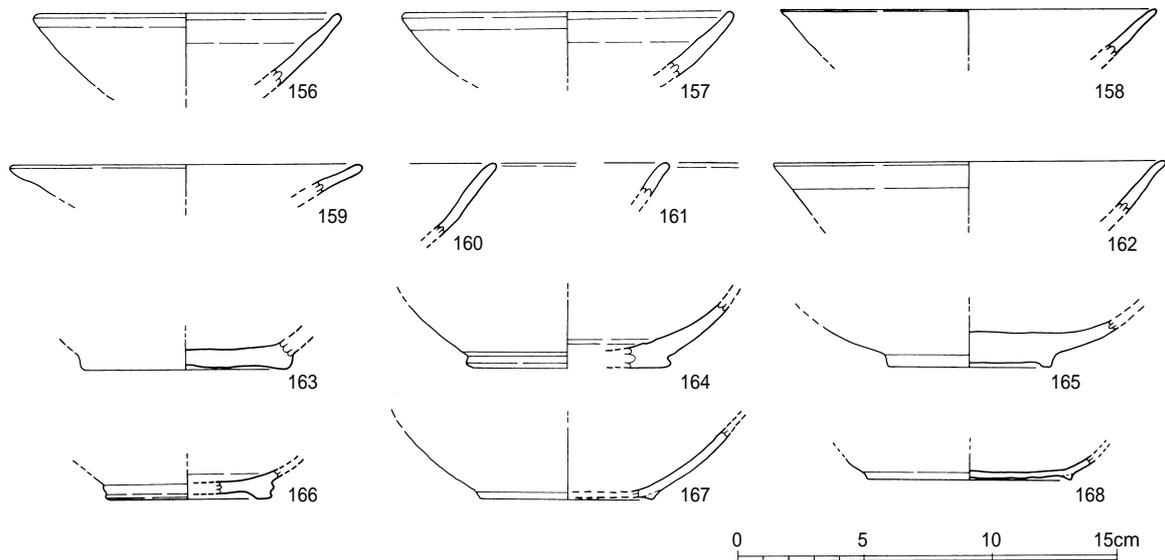


Fig.28 A区 第 層出土遺物実測図(緑釉陶器・黒色土器)

内底面には1次焼成時の重ね焼きの痕跡が残る。166は底部の1/6ほど残存し、削り出し高台を有する。底径は6.3cmを測る。硬質であるが焼成が悪く、断面は部分的に灰黄色を呈する。高台以外の部分には浅黄色の釉を施す。

黒色土器 (Fig.28 - 167・168)

167・168は碗であり、内面に炭素を吸着させた底部の破片である。底径は6.8～8.0cmを測り、断面三角形の小さな高台を貼り付ける。摩耗が著しく調整は不明であるが、167は内面にヘラ磨きが若干確認できる。炭素の吸着は比較的良好である。

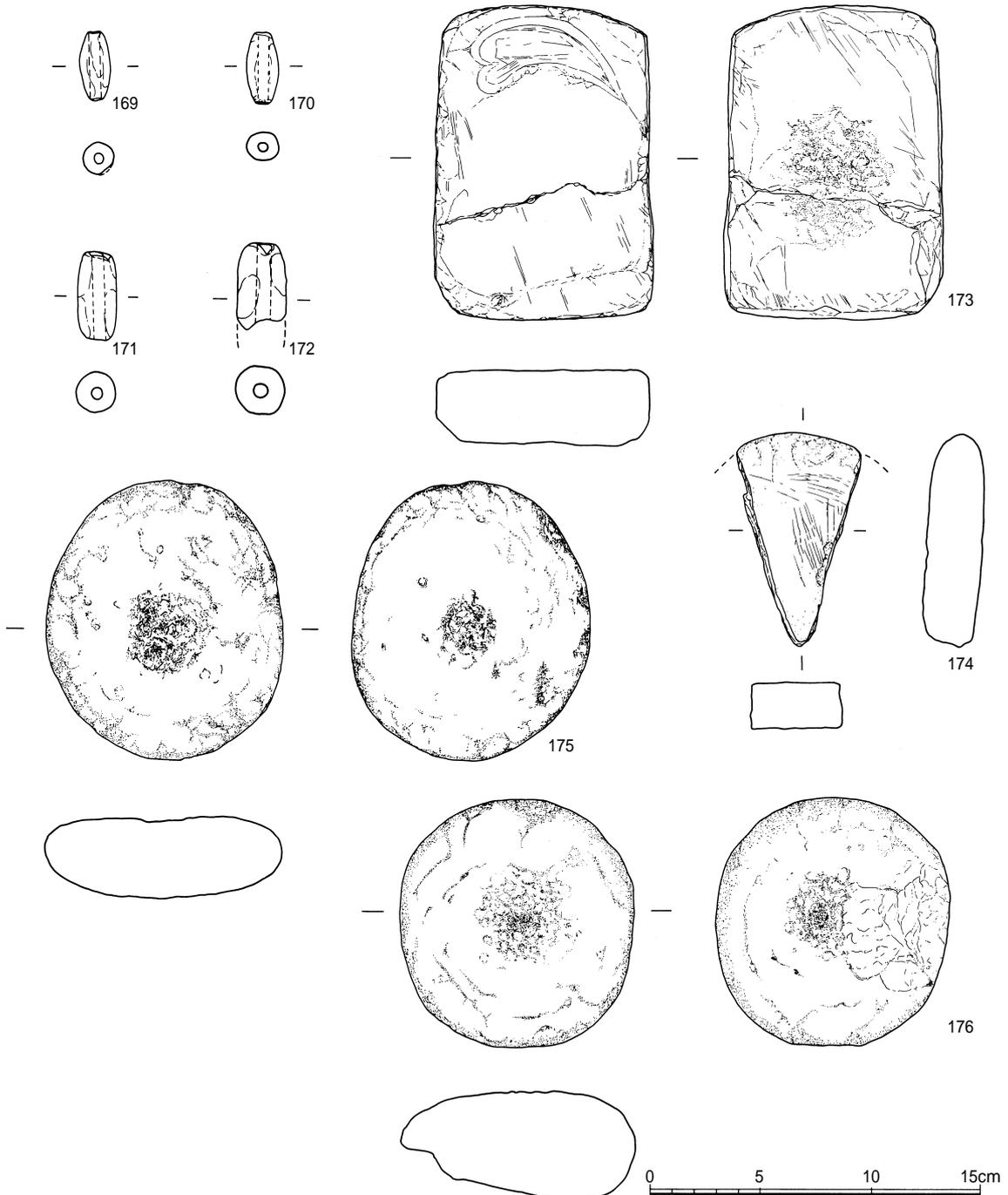


Fig.29 A区 第 層出土遺物実測図(土製品・石製品)

土製品 (Fig.29 - 169 ~ 172)

169 ~ 172は管状土錘である。169・170は紡錘形を呈し、全長3.2 ~ 3.3cm、全幅1.4 ~ 1.5cmとやや小振りである。171・172は円筒形で、復元すると全長4.2 ~ 4.5cm、全幅1.8 ~ 2.2cmを測る。

石製品 (Fig.29 - 173 ~ 176)

173・174は砥石と考えられる。173はほぼ完存しており、6面を使用する。端部に「ハート」状の掘り込みが認められる。材質は石英斑岩である。174は1/8ほど残存する。2面を使用しており、これも材質は石英斑岩である。175・176は叩石である。175は片面に強い敲打痕が、もう片面には弱い敲打痕が残る。材質は砂岩であり、完存する。176は片面中央部に敲打痕がある。材質は砂岩であり、一部剥離する。

(2) B区

B区はA区の西側に位置し、調査区のほぼ中央部に当たる。この調査区は2回に分けて調査を行っており、平成8年度に北東部、平成9年度に残りの部分を調査した。調査前は一部宅地になっており、削平を受けている部分もあったが、中世の遺物包含層を確認した。この調査区では中世の掘立柱建物跡、溝、土坑などの遺構が検出され、遺物も比較的多かった。B区で認められた基本層序は以下のとおりである。

層序

- 第 層 灰色(7.5Y4/1)粘土質シルト層
- 第 層 黄褐色(10YR5/6)粘土質シルト層
- 第 層 灰オリーブ色(5Y4/2)シルト層
- 第 層 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト層
- 第 層 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト層
- 第 層 にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土質シルト層

層位中、遺構が検出されたのは第 層上面であった。

第 層の表土層は、現在の耕作土であり、厚さ20 ~ 30cmを測る。現況は畑地と宅地であったが、調査区全面で第 層が認められた。なお、宅地跡については厚さ約1.30mの客土の下に認められた。

第 層は床土で鉄分が沈澱しており、2 ~ 5cm堆積していた。

第 層は厚さ約10cmを測る。0.5 ~ 2cm大のマンガン粒を含む層で、遺物は認められなかった。

第 層は厚さ約10cmを測る。2mm大のマンガン粒を多く含む層で、遺物は認められなかった。

第 層は中世の遺物包含層である。厚さ20 ~ 30cmを測る。調査区の北東部では特に遺物を多く含んでいた。A区

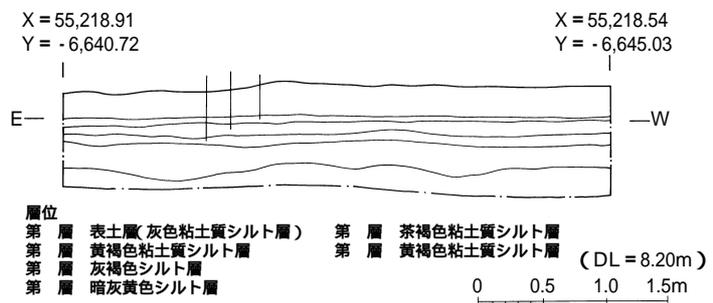


Fig.30 B区 セクション図

の西端の遺物包含層より10～20cm標高が低い。

第 層は自然堆積層で遺構検出面になっている。

堆積層出土遺物

第 層出土遺物

近世陶器 (Fig.31 - 177)

177は底径5.8cmを測る。低く太い削り出し高台を持つ。高台の内側にはロクロ目が残る。釉は内面にのみ灰色味を帯びた緑色釉を薄く施すが、焼が甘いため釉に透明感がない。

第 層出土遺物

土師器 (Fig.31 - 178)

178は甕である。「く」の字状に外反する口縁部で、端部はつまみ上げている。内面は粗いヨコ方向のハケ調整、頸部外面には指押さえ、胴部にはタテ方向のハケ調整を施す。長胴になるタイプである。

須恵器 (Fig.31 - 179～182)

179は杯で、底径7.1cmを測る。内外面とも回転ナデ調整で、外底面は回転糸切りである。180は椀である。体部は内湾気味に上がり、口縁部を外反させ、外上方につまみ上げているものである。内外面とも回転ナデ調整である。181は壺で、底径11.3cmを測る。底部は器壁が薄く、体部は外上方に直線的にのびる。内外面とも回転ナデ調整で、外面には自然釉がかかる。外底面はナデ調整で、板状の圧痕が残る。182は古墳時代後期と見られる甕の口縁部で、外上方に直線的にのびる。外面には低い断面三角形の突帯の上下に、3本単位の櫛描波状文を施す。

緑釉陶器 (Fig.31 - 183)

183は椀で、底径7.5cmを測る。体部は内湾し、底部は輪高台で、削り出す。硬陶で、全面に明緑色の釉を薄く施す。京都系のものと見られる。

瓦器 (Fig.31 - 184～187)

184～186は椀である。184は口径15.3cm、器高3.9cm、底径3.8cmを測るもので、器壁が薄い。口縁部外面には強いヨコナデ調整を施し、体部外面と高台の内側には指頭圧痕が残る。高台は低く、断面は蒲鉾形である。内面はヘラ磨きが施されていたと見られるが、摩耗するため不明瞭である。185は底部の破片で、底径4.6cmを測る。外面は指頭圧痕が残り、底部には断面蒲鉾形の低い高台が付く。体部内面は部分的に幅3mmのヘラ磨きが見られ、内面には幅1mmの細い平行線状の暗文が見られる。186は口径15.3cm、底径3.6cm、器高3.9cmを測る。焼成が甘く、摩耗するため炭素が殆ど残っておらず、内面には暗文が部分的に認められる程度である。187は小皿で、口径7.3cmを測る。丸い底から内湾気味に立ち上がり口縁部に至る。口縁部にはヨコナデ調整を施し、外底面には指頭圧痕が見られる。

東播系須恵器 (Fig.31 - 188～190)

188は椀で、口径15.5cmを測る。直線的な体部に肥厚して丸く納めた口縁部がつき、口縁部内面に僅かに段が見られる。189・190は片口鉢である。189は口縁端部を僅かに上方へつまみあげ、端面は

体部に対してほぼ直角で凹線が見られる。口縁部外面には重ね焼き痕が残る。190は口径22.0cmを測る。軟質で褐色色を呈する。体部は直線的で、上下に肥厚する口縁部が付く。口縁部外面には重ね焼き痕が見られる。

土師質土器 (Fig.32 - 191~209)

191~196は杯である。191・192はやや厚い底部から緩やかに立ち上がり、直線的な体部を持つ。191は底径5.9cmを測る。器面は摩耗するため調整は不明瞭である。192は底径7.8cmを測る。外底面は回転糸切りで、板状の圧痕がみられる。また、胎土に砂粒を多く含んでいる。193は口径13.8cmを測る。底部から緩やかに立ち上がり、口縁部は外反する。194は底径6.2cmを測る。低い円盤状高台になっている。195は口径11.6cm、器高2.3cm、底径5.3cmを測る小型の杯である。外底面は回転糸切りで、体部は直線的に伸び、大きくひらく。196は底径5.6cmを測る。円盤状高台で、外底面は回転糸切りを行う。底部の内面は高台内まで落ち込む。調整は内外面とも回転ナデ調整である。197~204は小皿である。形態はほぼ同じで、底部の器壁がやや厚く、口縁部は内湾気味に短く立ち上がり、端部を丸く納める。回転ナデ調整で、底部内面はその後ナデ調整を加える。197は口径7.9cm、器高1.4cm、底径4.9cmで外底面は回転ヘラ切りである。198は口径8.2cm、器高1.4cm、底径7.0cmでやや大きい。外底面は回転糸切りである。199は口縁端部が欠損する。底径4.7cmで、外底面は回転糸切りである。200は口径6.7cm、器高1.3cm、底径4.3cmで、外底面は回転糸切りである。201は口径6.5cm、器高1.4cm、底径4.2cmである。口縁部は直線的で器壁は薄い。外底面は回転糸切りである。202は口径7.4cm、器高1.6cm、底径5.0cmである。口縁部は外反し、やや器壁が厚い。底部は回転糸切りである。203は口径7.4cm、器高1.3cm、底径5.3cmである。底部は摩耗するため調整は不明瞭だが、器壁が厚く口縁部が短い。204は口径7.3cm、器高1.7cm、底径4.7cmである。摩耗するため調整は不明瞭であるが、底部は回

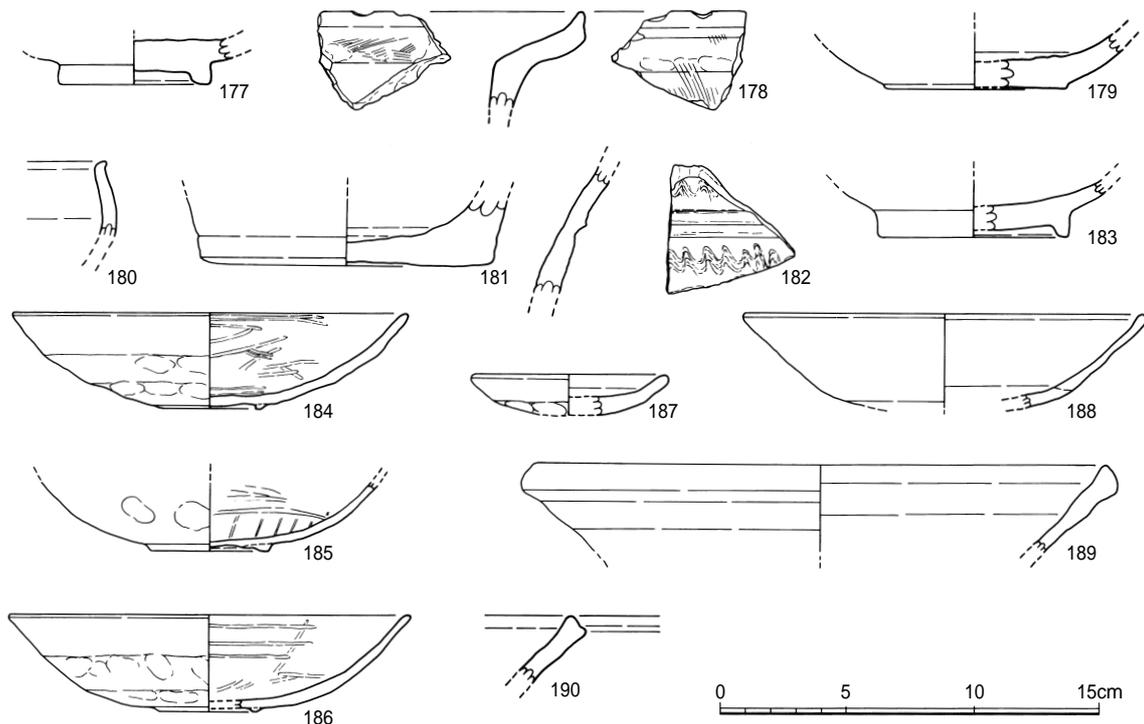


Fig.31 B区 第 層出土遺物実測図(土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦器・東播系須恵器)

転糸切りと見られる。205・206は椀である。205は底径5.1cmで円盤状高台の底を持つ。底部は摩耗するが、回転糸切りとみられる。206は底径6.4cmで円盤状高台の底をもち、体部は内湾して立ち上がる。体部外面は回転ナデ調整、底部は回転ヘラ切りである。体部外面には炭素が吸着する。207は鍋で、口径27.2cmを測る。胴部は内湾して立ち上がり、「く」の字状に屈曲して内湾する口縁部に至る。調整は外面に指頭圧痕が僅かに残るのみである。208・209は羽釜である。208は口縁部の破片で、鏝を欠損する。口縁部は大きく内傾し、端部を短く外反させ丸く納める。鏝は胴部に対してほぼ直角に付き、上方に直線的にのびると見られる。和泉型の釜である。209は羽釜の脚で先端部を欠く。断面はほぼ円形で、全面ナデ調整を施す。

瓦質土器 (Fig.32 - 210・211)

210・211は羽釜である。210は口縁部の破片で、口径23.0cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がり、端部を肥厚させ丸く納める。鏝は幅1.6cmでほぼ水平に付き、端部は下方に肥厚させる。211は口縁部の破片である。器壁はやや薄く、内傾して立ち上がり、端部を丸く納める。口縁部と胴部の境に

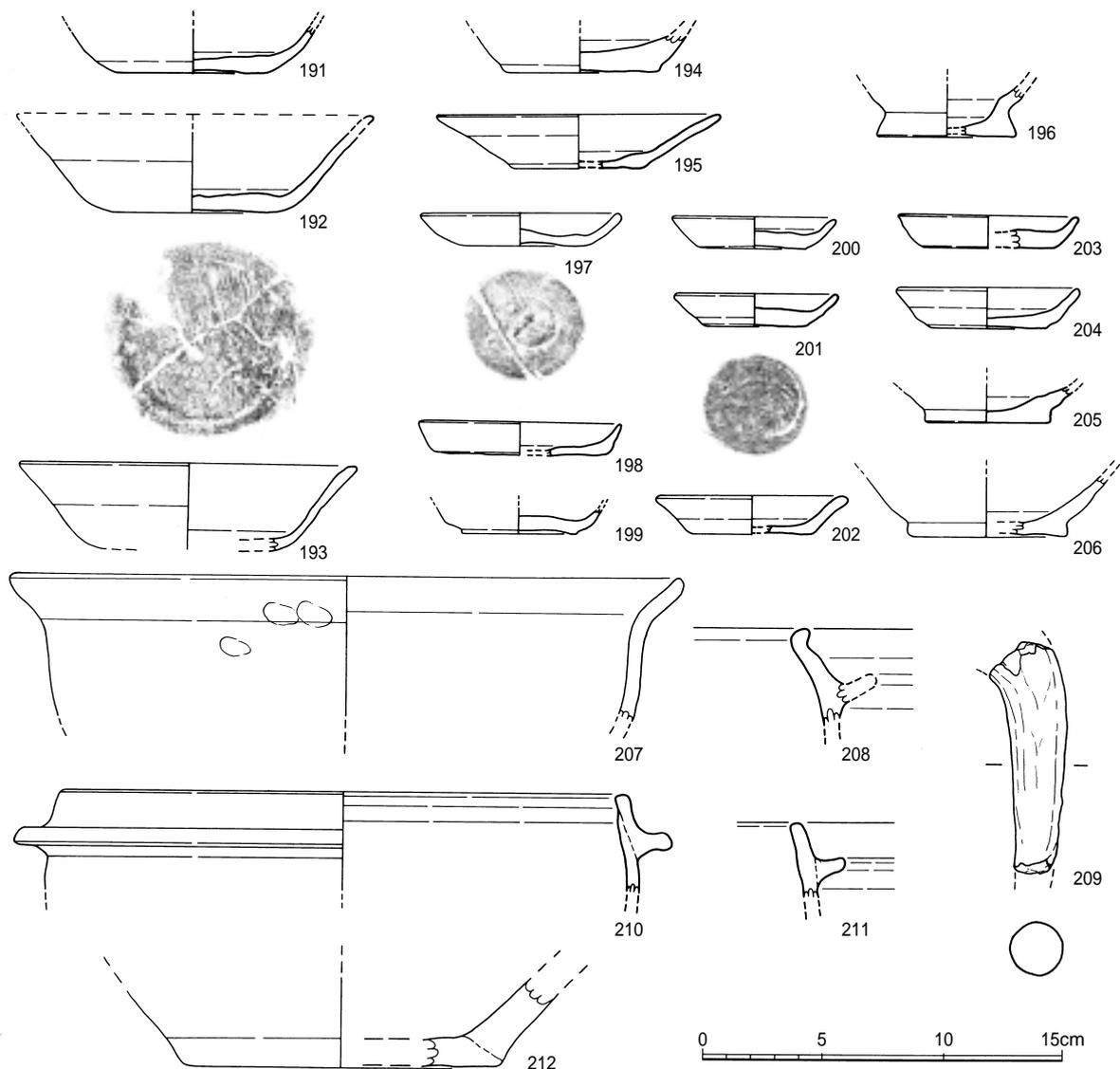


Fig.32 B区 第 層出土遺物実測図(土師質土器・瓦質土器・備前焼)

は幅1.2cmの上方にのびる鍔が付く。

備前焼 (Fig.32 - 212)

212は壺の底部で、底径12.8cmを測る。底部から直線的にのびる体部が付く。底部と体部の境には接合痕が見られる。調整は体部内外面に回転ナデ調整、底部内外面にナデ調整が施される。

白磁 (Fig.33 - 213~217)

213~216は碗である。213は口縁部の破片で、口径は14.4cmを測る。体部はやや内湾して立ち上がり、口縁部を外反させ、端部を丸く仕上げている。器面には灰白色の釉を薄く施す。214は底部の破片で、底径6.5cmを測る。細く高い直立した削り出し高台を持つ。体部外面には高台の境付近まで乳白色の釉を薄く施す。見込にも、一部釉が流れ込んでいところがある。215は底径5.6cmを測る。214と同じような高台が付く。外面には畳付付近まで灰白色の釉を薄く施す。見込にも灰白色の釉が薄く施釉されており、8本単位の櫛目文が見られる。216は底径6.2cmを測る。幅の太い削り出し高台を有する。高台は部分的に幅が狭いところもある。外面は高台まで部分的に灰白色の釉を薄く施す。内面は全面に釉を施すが、厚さにムラがある。217は皿で、口径10.2cmを測る。平らな底部から直線的に開く体部をもち、口縁部を外反させる。内外面とも乳白色の釉を約1mmの厚さに施釉し、口縁端部は釉ハギを行う。

青磁 (Fig.33 - 218~225)

218~223は龍泉窯系の碗である。218は口径14.4cmを測る。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は

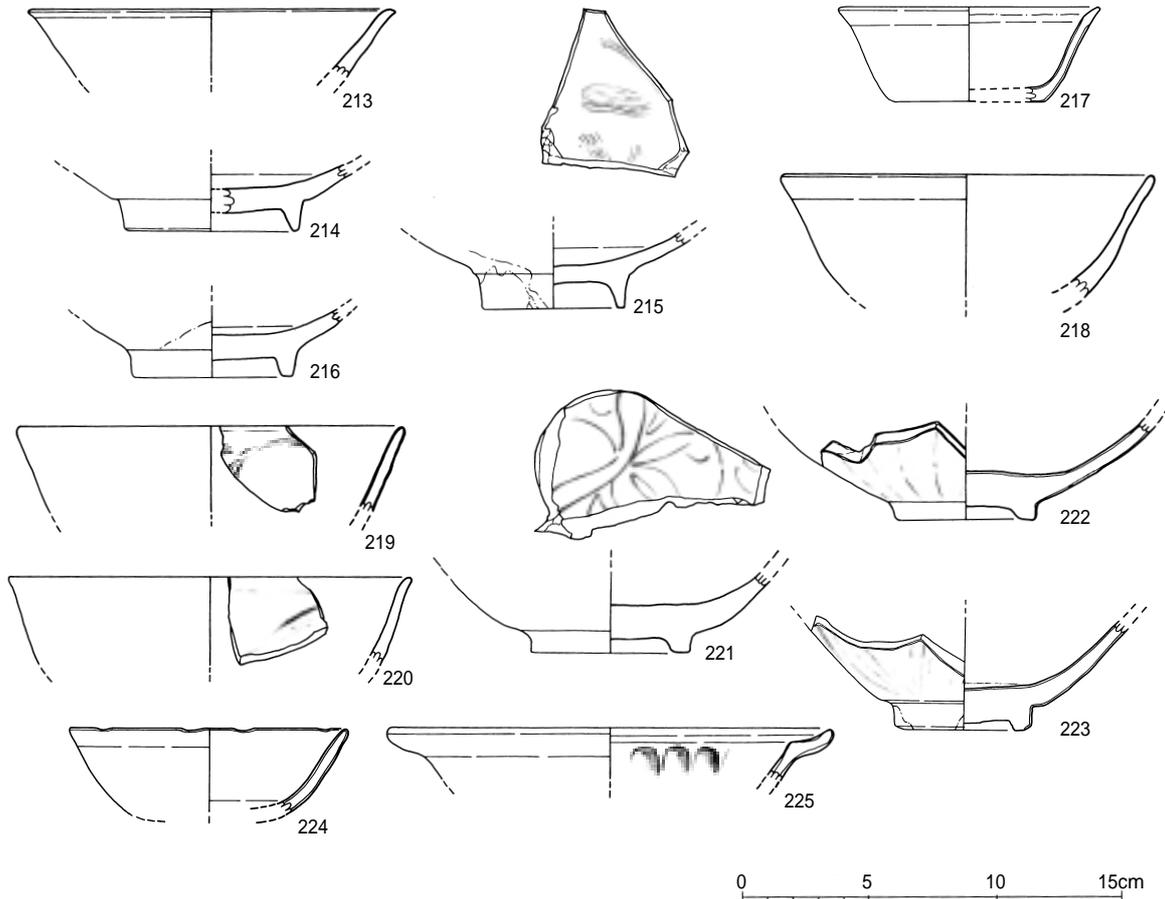


Fig.33 B区 第 層出土遺物実測図(白磁・青磁)

直線的で端部を丸く納めるものである。器面には0.2mmの厚さにオリ - ブ色の釉を施す。219は口径15.0cmを測る。直線的な口縁部で端部を丸く仕上げている。器面は明緑色の釉を0.4mmの厚さに施す。内面には3条の沈線による文様が施される。220は口径15.6cmを測る。体部は内湾し、口縁部を外反させるものである。表面はオリ - ブ色の釉を0.2mmの厚さに施すが、焼成が甘く透明感がない。内面には沈線による文様が施される。221は底部の破片で、低く太い削り出し高台を持つ。底径は6.2cmを測る。底部の器壁が厚いもので、体部は内湾して立ち上がっている。器面には一部高台の内側まで黄緑色の釉を0.1mmの厚さに施す。内面には片彫りの劃花文が施される。222は底径5.4cmを測る。低く太い削り出し高台を持つ。体部外面には鎬蓮弁文が施される。器面には内面と外面の畳付外側まで青味を帯びた緑色釉を0.5mmの厚さに施す。焼成が甘いためか釉に透明感がなく、外底面の無釉の部分は赤褐色を呈する。223は底径4.7cmを測る。221と同じような高台を持つが、体部はやや立ち上がる。体部外面には鎬蓮弁文が施される。釉は淡緑色で0.4mmの厚さで内面と外面の畳付まで施す。224は龍泉窯系の小碗である。口径は10.1cmを測る。内湾して立ち上がり、直線的にのびる。口縁端

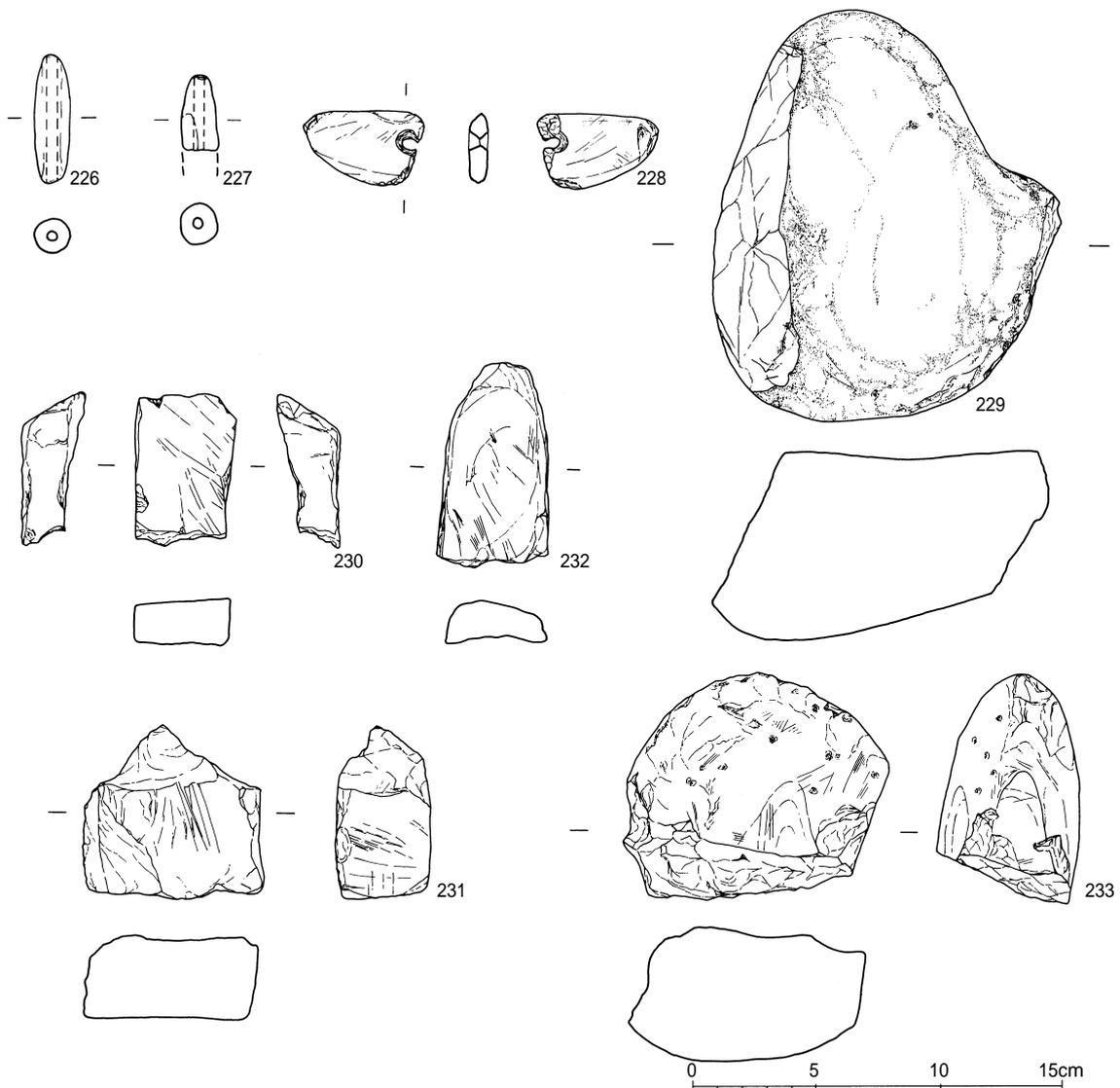


Fig.34 B区 第 層出土遺物実測図(土製品・石製品)

部は輪花となる。器面には水色の釉を1mmの厚さに施す。225は龍泉窯系の杯である。口径17.0cmを測る。体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部は受け口状に屈曲して端部は真上につまみ上げている。表面は緑黄色の釉を0.5～2.0mmの厚さに施す。体部内面には片彫りの蓮弁文が施される。

土製品 (Fig.34 - 226・227)

226は紡錘形の土錘で一部欠損する。全長5.3cm,全厚1.4cm,孔径0.4cm,重さ8.1gを測る。227は紡錘形の土錘で約1/2が残存する。幅1.4cm,孔径0.4cmを測る。

石製品 (Fig.34 - 228～233)

228は石包丁で、約1/3が残存する。全体を研磨によって仕上げ、湾曲した刃部を持つ片刃石包丁である。紐孔は1孔のみ残存し、両側から穿孔する。石材は頁石である。229は叩石で、一部を欠損する。残存部では一面にのみ敲打痕が見られる。石材は細粒の花崗岩である。230～233は砥石である。230は両端を欠損するが、残存部では片面と側面の3面を使用する。石英斑岩を利用する。231は大半を欠損するが、両面と側面の3面を使用する。石材は石英斑岩である。232は大半を欠損するが、残存部では3面の使用が認められる。石材は石英斑岩である。233は一部のみ残存する。残存部では片面と側面の2面を使用する。石材は石英斑岩である。

(3) C区

C区はB区の西側に位置する調査区で、土地買収の関係上4回に分けて調査した。平成8年度にほぼ全域を調査し、平成9年度に北東部と南東部、平成11年度に北東部と南東部の間を調査した。調査前

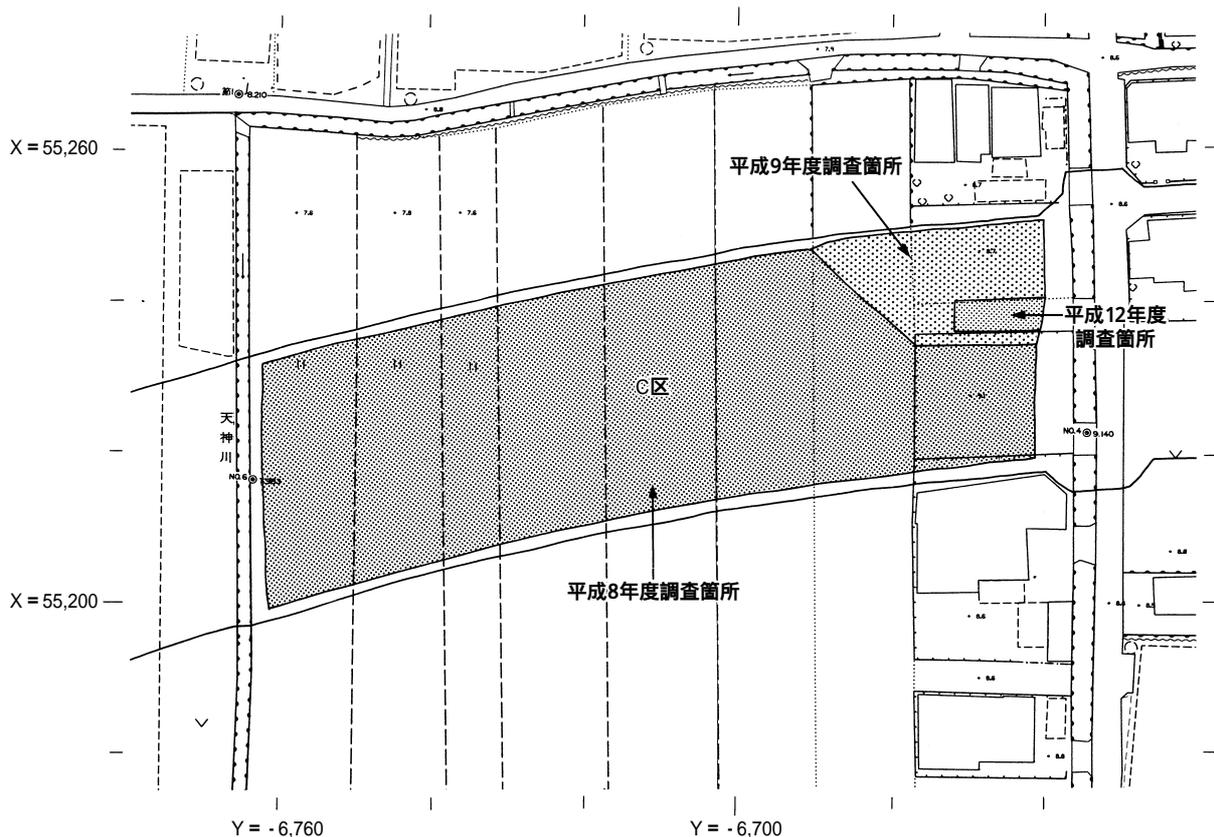


Fig.35 C区 調査区及び調査年度(S=1/1,000)

は畑地と宅地であり、調査区の東側にある用水路から西に向かって緩やかに地形が傾斜していた。

調査の結果、遺構は調査区の東半分が多く検出されたが、調査区の中央部から地形が急に落ち込んでおり、西半分は遺物包含層が非常に薄く、遺構、遺物も少なかった。この調査区の東半分と西半分は同時期の遺物包含層が見られるものの様相を異にしていた。

層序

- 第 層 灰色(N5/0)粘土質シルト層
- 第 層 にぶい黄橙色(10YR7/2)シルト層
- 第 層 にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土質シルト層
- 第 層 にぶい黄橙色(10YR6/3)粘土質シルト層
- 第 層 灰黄褐色(10YR4/2)砂層
- 第 層 灰黄褐色(10YR6/2)シルト層
- 第 層 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト層
- 第 層 にぶい黄橙色(10YR6/3)粘土質シルト層
- 第 層 にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト層
- 第 層 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト層
- 第 層 暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト層
- 第 層 暗褐色(10YR3/3)シルト質粘土層
- 第 層 浅黄色(2.5Y7/3)粘土質シルト層
- 第 層 灰黄色(2.5Y7/2)粘土質シルト層
- 第 層 黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト層

層位中、遺構が検出できたのは第 層上面と第 層上面であった。調査区の東半分では第 層上面、西半分では第 層上面が遺構検出面であった。

第 層は調査区全域でみられる層である。旧耕作土で厚さ約15cmを測る。下層部には鉄分が沈澱した床土が認められた。

第 層は調査区全域でみられる層で、厚さ20～30cmを測る。2～5mm大のマンガンを多く含んでいた。

第 層は調査区西部で認められた層である。厚さは約15cmを測り、微砂を多く含んでいた。

第 層は調査区西部で認められた層である。厚さは約20cmを測る。

第 層は調査区西部で認められた層である。厚さ10～20cmを測る細砂層である。仁淀川の氾濫の際の堆積層と見られる。

第 層は調査区の中央部で認められた層で、褐色粘土質シルトのブロックや2mm大のマンガンを含んでいた。

第 層は調査区の西端を除くほぼ全域で認められた。厚さは20～40cmを測り、西に向かって色が薄くなる。

第 層は調査区西部で認められた層である。細砂を多く含んでいる。

第 層は調査区の西端でのみ認められた層である。

第 層は中世の遺物包含層である。調査区の西端を除くほぼ全域で認められ、厚さは15～40cmで、

西の方が厚くなっていた。遺構が多く検出された調査区東半分では遺物が多く、炭化物も含まれていたが、西半分では遺物はほとんど含まれていなかった。

第 層は調査区西半分の落ち込み内で認められた層である。落ち込みの斜面では厚さ約30cmを測るが、西に向かって薄くなり、薄いところは厚さは3cm程度であった。

第 層は調査区東半分の遺構検出面になった層である。B区の第 層に対応する。調査区の東半分でのみ認められた。2mm大のマンガンを多く含んでいる。

第 層は落ち込み内の遺構検出面となった層である。厚さは5～15cmを測る。

第 層は落ち込み内で認められた層で、2cm大のマンガンを非常に多く含んでいる。この層まで掘り込んで作られている遺構もあった。

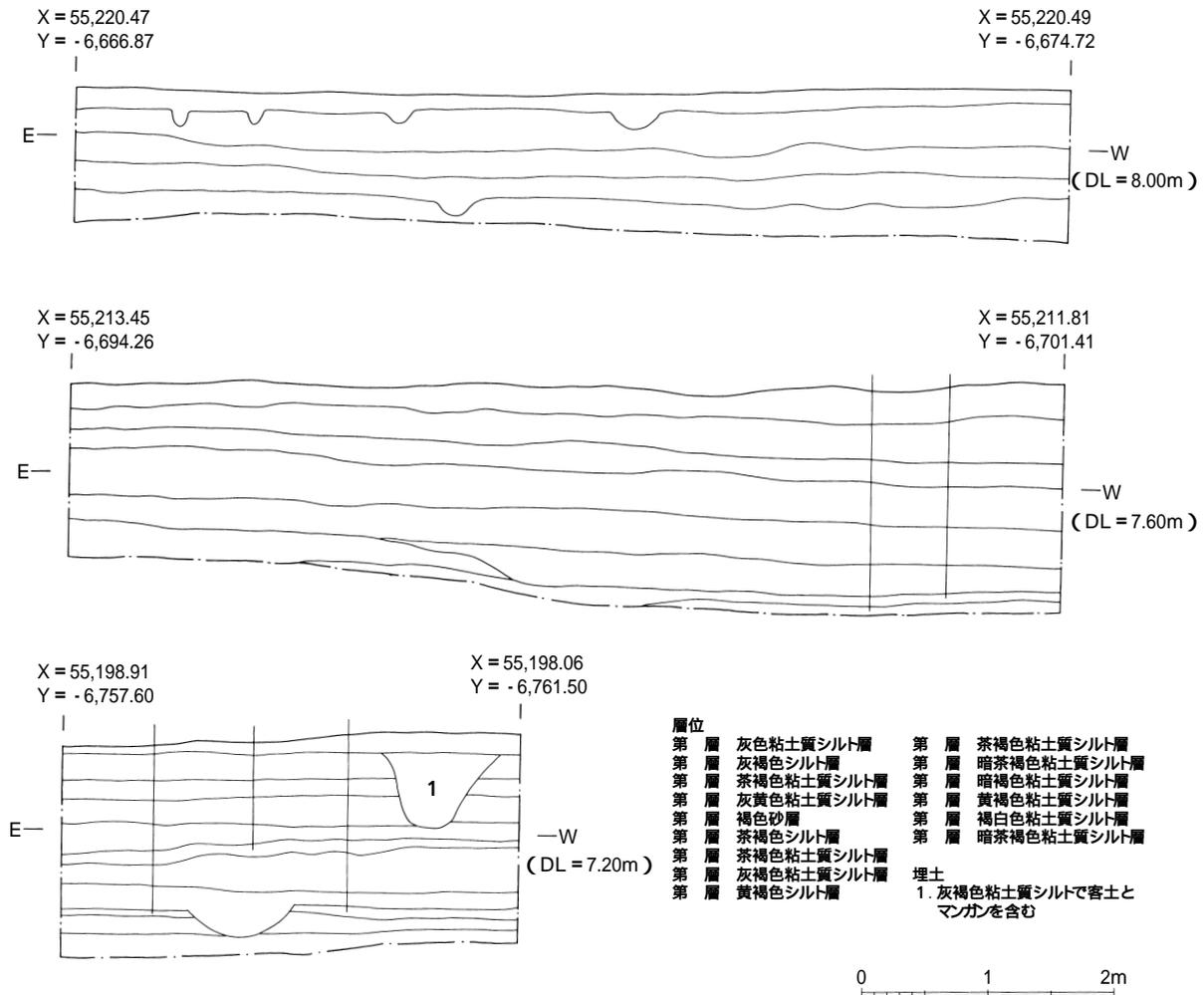


Fig.36 C区 セクション図

堆積層出土遺物

第 層出土遺物

染付 (Fig.37 - 234)

234は碗で、底径4.6cmを測る。細く高い高台を有し、体部は緩やかに内湾する。見込は濃い青色の花柄のスタンプを施し、回転カキ目調整を行う。外面は高台から体部にかけて幅3mmの青色の線が3

条巡る。器面にはやや青味を帯びた透明釉を薄く施釉し、見込は輪状に釉ハギを行い、畳付も釉ハギを行う。

近世陶器 (Fig.37 - 235)

235は甕の口縁部で、口径26.4cmを測る。口縁部は外反し、端部をつまみ上げ、内面には段を有する。調整は回転ナデ調整である。

第 層出土遺物

土師器 (Fig.37 - 236・237)

236は甕である。頸部は「く」の字状に屈曲し、直線的に短くのびる口縁部を持つ。口縁部はヨコナデ調整、体部はナデ調整を行っており、接合痕も観察できる。外面は煤化する。237は杯で、口径13.5cmを測る。器壁は薄く、体部はやや内湾気味に立ち上がる。底部は回転ヘラ切り、体部はナデ調整、口縁部は強いヨコナデ調整を施しており、僅かに内湾する。

須恵器 (Fig.37 - 238~248)

238・239は杯蓋である。238は口径14.4cmを測る。器高は低く、天井部はほぼ平らで、緩やかにカ - プして口縁部に至る。端部は下方に小さく屈曲させる。外面と口縁部内面は回転ナデ調整、体部内面はナデ調整を施す。焼成が甘く褐色を呈し、口縁部には重ね焼き痕が残る。239はつまみで、やや扁平な擬宝珠形を呈する。240~243は杯である。240は底部の破片で底径10.5cmを測る。直立した高台をもち、外面は回転ナデ調整、内面はナデ調整である。241は底部の破片で胎土に砂粒を多く含んでいる。直立した低い高台をもち、底径は8.2cmを測る。調整は外面と体部内面に回転ナデ調整、底部内面にナデ調整を施す。また、外面の体部から高台の接地面付近まで自然釉がかかる。242は口

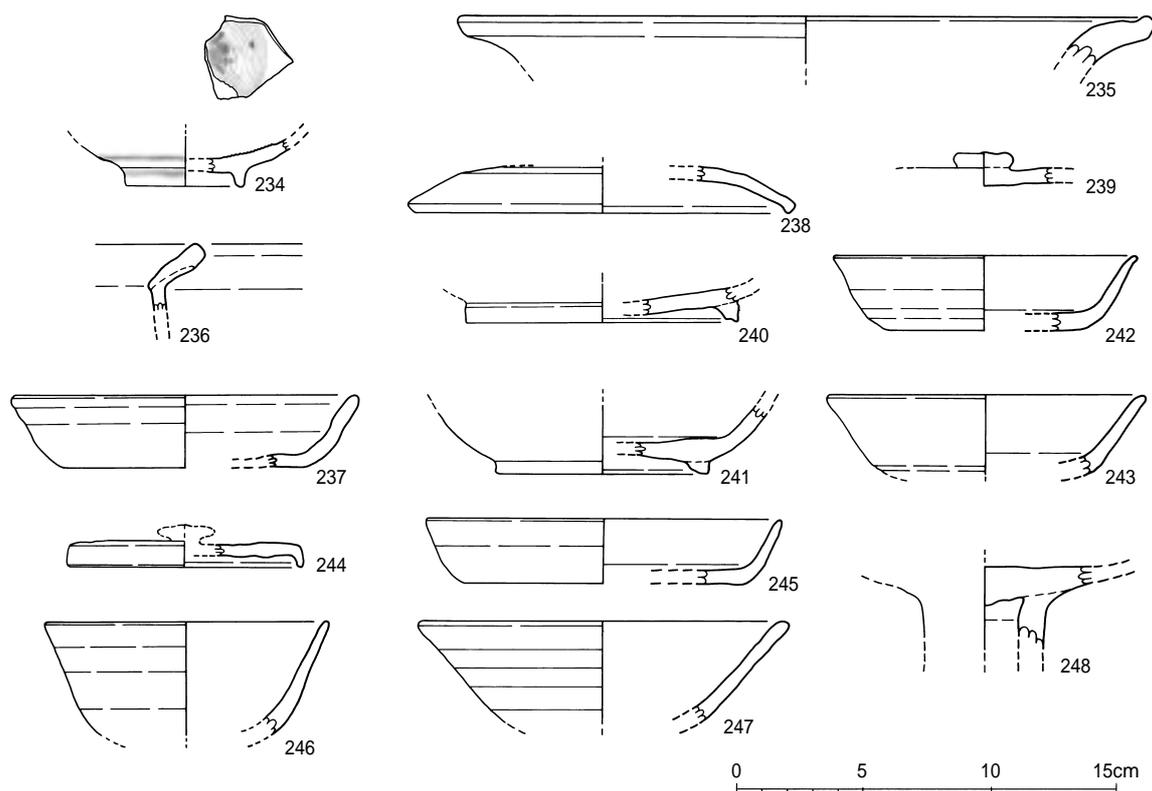


Fig.37 C区 第 層出土遺物実測図(土師器・須恵器)

縁部の破片で口径11.6cmを測る。調整は口縁部内外面に回転ナデ調整，底部内面にナデ調整を施す。焼成が甘く褐色を呈する。243は口縁部の破片で，口径12.2cmを測る。外上方に真直ぐのびる口縁部で，端部は丸く納める。調整は内外面とも回転ナデ調整である。244は壺蓋で，つまみを欠損する。口径9.0cmを測る。天井部は平らでほぼ直角に屈曲して口縁部に至る。外面と口縁部内面は回転ナデ調整，体部内面はナデ調整を加える。天井部には僅かに自然釉がかかる。245は皿で，口径13.5cmを測る。直線的に外上方に短くのびる口縁部を持つ。内面と口縁部外面は回転ナデ調整，外底面は回転ヘラ切りの後ナデ調整を施す。焼きは甘く灰褐色を呈する。246・247は椀である。246は口径が小さく，11.0cmを測る。外面と口縁部内面は回転ナデ調整，体部内面はナデ調整を施す。焼きは甘く褐色を呈し，口縁部外面には重ね焼き痕が残る。247は口径14.0cmを測る。ほぼ直線的に外上方へのび，端部は肥厚して丸く納める。焼きは甘く灰褐色を呈し，外面には僅かに炭素が吸着する。248は高杯である。平らな杯底部にほぼ直角に脚が付く。杯底部はナデ調整と回転ナデ調整，脚部は回転ナデ調整，脚内面はナデ調整を施す。

瓦器 (Fig.38 - 249 ~ 284)

249 ~ 277は椀である。成形技法はほぼ同じで，内面には部分的にヘラ磨きが施され，外面は口縁部にヨコナデ調整，体部外面はナデ調整で，指頭圧痕が残る。249は口径16.2cmを測る大型のものである。外面は口縁部にヨコナデ調整が2段行われ，体部はナデ調整で，指頭圧痕が残る。内面は幅3mmの太いヘラ磨きが部分的に見られる。焼きはやや甘く，炭素はほとんど残っていない。250は口径15.4cm，器高5.0cm，底径4.3cmを測る。器壁は厚く，やや腰が張る形態で，高台は接地面が外側に肥厚した扁平な形のものが付く。口縁部にはヨコナデ調整が3段行われ，内面は摩耗するが部分的にヘラ磨きが残る。炭素は全面に吸着していたと見られるが，内面は残りが悪く，見込にはほとんど残っていない。また，焼成が悪く炭素が残っていないところは黄褐色を呈する。251は口径16.4cmを測る大型のものである。口縁部のヨコナデ調整は1段で，体部には指押えが規則的に3段行われている。焼成が甘く，炭素や内面のヘラ磨きはほとんど残っておらず，橙色を呈する。252は口径15.6cmで，高台は欠損するが丸底に近い形態を呈する。口縁部のヨコナデ調整は2段行われており，2段目は指押えの後ヨコナデ調整を施す。焼成が甘く，炭素や内面のヘラ磨きはほとんど残っておらず，炭素が残っていない部分は褐色を呈する。253は口径15.6cmを測る。口縁部のヨコナデ調整は1段で，体部の残存部には指押えが規則的に2段行われている。内面のヘラ磨きは比較的密で残りも良い。焼きは良く，炭素がしっかり吸着する。254は口径15.6cmを測る。口縁部のヨコナデ調整は1段で，体部には強い指押えが規則的に3段行われる。強く指押えを行うため器面にはかなり凹凸があり，器形も角ばった形になる。焼成が甘く，炭素や内面のヘラ磨きはほとんど残っておらず，褐色を呈する。255は口径15.8cmを測る。器形は浅く丸底に近い形態を呈する。口縁部のヨコナデ調整は1段で，内面は部分的にヘラ磨きが見られる。炭素はほぼ残存しており，外面には重ね焼き痕も見られる。256は口径14.6cmを測る。口縁部のヨコナデ調整は2段で，体部には弱い指頭圧痕が残存部で2段見られる。やや焼成が甘く，炭素はほとんど残っていない。257は口縁部の破片で，口径13.7cmを測る。炭素の残りは良いが，摩耗するため内面のヘラ磨きは部分的に残存する。258は口径14.2cmを測る。口縁部のヨコナデ調整は2段で，体部には弱い指頭圧痕が残る。内面には部分的にヘラ磨きが残る。

焼きは良いが、重ね焼きを行ったとみられ、口縁部外面のみ炭素が吸着する。259は口径13.8cmを測る。丸底に近い形態を呈する。口縁部のヨコナデ調整は2段行われており、2段目は指押えの後ヨコナデ調整を施す。焼成が甘く、炭素や内面のヘラ磨きはほとんど残っておらず、炭素が残っていないところは黄褐色を呈する。260は口径13.8cmを測り、腰の張る形態を呈する。口縁部のヨコナデ調整は1段で、体部には弱い指頭圧痕が僅かに残る。焼成が甘く、炭素や内面のヘラ磨きはほとんど残っておらず、炭素が残っていないところは橙色を呈する。261は口径14.8cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整が2段行われており、体部には弱い指頭圧痕が残る。内面は部分的にヘラ磨きが見られる。炭素は内面の口縁部と、外面に吸着する。262は口径15.0cmを測る。口縁部のヨコナデ調整は2段行われており、2段目は指押えの後ヨコナデ調整を施す。焼成が甘く、炭素や内面のヘラ磨きはほとんど残っておらず、炭素が残っていないところは橙色を呈する。263は口径14.2cmを測る。口縁部のヨコナデ調整は1段で、かなり強く施されるため口縁部が外反する。摩耗しており外面の炭素はほとんど残っていない。264は、口径15.2cmを測る。体部は直線的にのび、口縁部は外上方に小さく屈曲させて丸く納めている。口縁部のヨコナデ調整は2段行われており、2段目は指押えの後ヨコナデ調整を施す。焼きは良く、炭素吸着はよい。265は口径13.7cmを測る。口縁部のヨコナデ調整は1段で、強く施されるため体部との境が段状を呈する。内面は炭素が残っており比較的密なヘラ磨きが観察できるが、外面はほとんど炭素が残っておらず、橙色を呈する。266は口径13.0cm、器高4.2cm、底径3.6cmを測る。焼成が良く、緻密な胎土である。外面は口縁部にヨコナデ調整を2段施し、体部は弱い指押えを行い、底部には断面三角形の高台が付く。内面には炭素が吸着していないが幅3mmの太いヘラ磨きが部分的に見られる。外面には重ね焼き痕が見られ、口縁部と底部のみ炭素が吸着する。267は口径13.6cmを測る。口縁部外面にはヨコナデ調整が1段、体部には指頭圧痕が3段見られる。内外面とも炭素が吸着するが、摩耗するためか内面にはヘラ磨きが見られない。268は口径12.6cmを測る。口縁部外面にはヨコナデ調整が1段、体部には指頭圧痕が見られる。外面に炭素は残っていないが、焼成が良く、内面のヘラ磨きは銀色に発色する。269は口径12.4cmを測る。口縁部は強いヨコナデ調整のため外反し、やや腰の張る器形である。口縁部外面にはヨコナデ調整が2段、体部には指頭圧痕、内面には部分的にヘラ磨きが見られる。炭素は内外面とも僅かに残る。270は底部の破片で底径4.5cmを測る。丸い底部に断面四角形の高台が付く。見込には幅1mmの平行暗文が施される。炭素は外面にのみ見られる。271は底径4.5cmを測る。高台は断面蒲鉾形で幅の太いしっかりしたものが付く。外面には指頭圧痕が残り、見込には幅1mmの沈線状の平行暗文が見られる。焼成が甘く、内外面とも部分的に炭素が残り、炭素が残っていないところは褐色を呈する。272は器壁が薄いもので、底径は4.6cmを測る。高台は断面三角形の細いものが付き、高台の内側はやや膨らむ。内面は摩耗するが僅かに平行暗文が残る。炭素は内外面ともしっかり吸着する。273は底径4.5cmを測る。高台は断面三角形の細いものが付く。炭素は内外面ともしっかり吸着するが、内面のヘラ磨きは少ない。274は底部の破片で底径は3.9cmを測る。器壁がやや厚く、高台は断面三角形で、部分的に扁平な形を呈する。見込には一部平行暗文が見られ、また、重ね焼き痕と見られる半円形状の粘土が付着する。275は口縁部の破片で、器壁が非常に薄い。外面は口縁部にヨコナデ調整が1段、体部に指頭圧痕が残る。炭素は内外面とも残っているが、摩耗するため内面にヘラ磨きは見られない。276は口縁部の破片

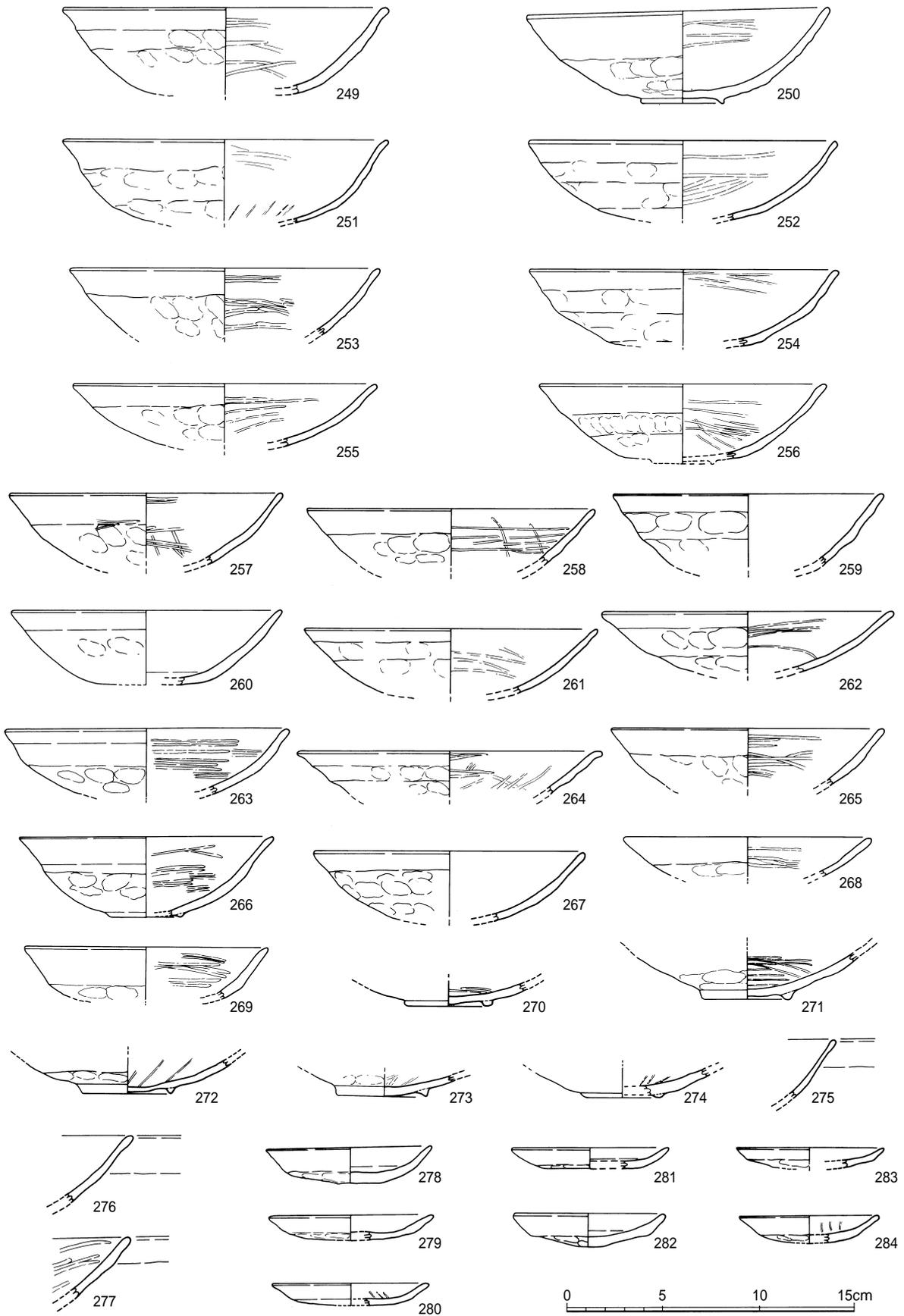


Fig.38 C区 第 層出土遺物実測図(瓦器)

である。口縁部外面には強いヨコナデ調整を1段行っており、体部との境が段状を呈する。摩耗するため炭素や内面のヘラ磨きは残っておらず黄褐色を呈する。277は口径8.4cmを測る。器壁が厚く、焼成も良好である。口縁部外面のヨコナデ調整は1段で、体部には指頭圧痕が残る。内面は幅3mmのヘラ磨きが比較的密に施される。278~284は小皿である。278はほぼ完形で、口径8.5cm、器高2.0cmを測る。口縁部はヨコナデ調整を行うがやや歪んでいる。底部は指押えを行っており丸い。内面は口縁部にヨコナデ調整、底部にナデ調整を施し、暗文は見られない。胎土は精良で、焼成も良好であるが、炭素は内外面とも一部染み状に吸着するだけで、炭素が吸着していないところは赤褐色を呈する。また、底部から口縁部にかけて接合痕が見られる。279は口縁部の破片である。口縁部は強いヨコナデ調整のためやや外反し、底部は僅かに指頭圧痕が残る。見込には幅1mmの平行暗文が見られる。焼成が不良で内外面とも炭素はほとんど残っていない。280は口径8.2cmを測る。口縁部は外反気味に立ち上がり、底部は平底に近い形態を呈する。内面には平行暗文が僅かに残る。焼成がやや不良で内外面とも炭素は吸着するが残りが悪く、褐色を呈する。281は口径8.1cmを測る。口縁部のヨコナデ調整は弱く、内湾気味に立ち上がる。底部は平底に近い形態を呈すると見られるが、指押えが加えられて凹凸がある。残存部では内面に暗文は見られない。焼きは甘いが内外面とも炭素が残る。282は口径7.6cm、器高1.8cmを測る。底部はほぼ丸底で屈曲して口縁部に至る。口縁部は強いヨコナデ調整、底部にはナデ調整を施し、器面には指頭圧痕が残る。炭素は内外面ともしっかり吸着する。283は口径7.6cmを測る。丸底の底部から屈曲して口縁部に至り、直線的で短い口縁部を持つ。口縁部はヨコナデ調整、外底面は指押えの後にナデ調整を加え、底部内面にはナデ調整を施す。炭素は全面に吸着する。284は口径7.0cmを測る。口縁部は強いヨコナデ調整が行われ、外反し器壁も薄い。内面には平行暗文が見られる。炭素は全面に吸着する。

東播系須恵器 (Fig.39 - 285 ~ 291)

285~290は片口鉢である。285は口径24.4cmを測る。体部はやや外反して口縁部に至り、口縁部はほぼ直角に屈曲してつまみ上げている。調整は内外面とも回転ナデ調整である。焼成は不良で摩耗しており、褐色を呈する。286は口径25.6cmを測る。体部は直線的で、口縁部はほぼ直角に屈曲してつまみ上げる。口縁部の内側はやや膨らみ、体部との境に浅い凹線が見られる。調整は内外面とも回転ナデ調整で体部には一部ナデ調整を施し、口縁部には重ね焼き痕が見られる。287は口径27.8cmを測る。体部は器壁が薄く、直線的にのび、口縁部は玉縁状になる。調整は内外面とも回転ナデ調整である。焼成が甘く褐色を呈するが、口縁部には重ね焼き痕が見られる。288はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さな玉縁で端部を丸く仕上げている。調整は内外面とも回転ナデ調整である。焼成が不良で褐色を呈するが、口縁部には重ね焼き痕、体部下半には黒斑が見られる。289は口縁部の破片である。口縁部は小さな玉縁で外面はやや鋭い稜をもち、内面はやや膨らむ。調整は回転ナデ調整である。290は底径10.6cmを測る。底部は平らで、回転系切りとなる。体部は器壁が薄く直線的にのびる。調整は回転ナデ調整で、内面はその後にナデ調整を加える。焼成がやや不良で褐色を呈する。291は甕で、口径25.6cmを測る。口縁部は大きく外反し、内側には凹線が巡る。調整は内面にヨコナデ調整、外面は斜め方向の粗いハケ調整の後ヨコナデ調整を加える。

土師質土器 (Fig.40・41 - 292~340)

292~322は杯である。292は口径13.0cm, 器高3.7cm, 底径5.4cmを測る。底部から内湾して立ち上がり, 口縁部が肥厚するものである。外底面は回転糸切り, その他は回転ナデ調整である。293は口径13.8cmを測る。底部より内湾して立ち上がり, 口縁部は稜を持ってほぼ直立する。器壁が薄く, やや腰の張った特異な器形のものである。調整は摩耗するため不明瞭であるが回転ナデ調整であると見られる。294~296はほぼ同形態で, 底部から内湾気味に立ち上がり, 口縁部が若干外反するものである。器面は回転ナデ調整で, 外底面は回転糸切りとなる。294は口径14.1cm, 器高4.0cm, 底径7.4cmを測る。口く口目が顕著でやや歪んでいる。295は口径14.5cm, 器高4.1cm, 底径6.3cmを測る。器壁が薄く口縁部は肥厚して外反する。外底面は回転糸切りと見られるが摩耗しており, 不明瞭である。296はほぼ完形で, 口径13.5cm, 器高4.7cm, 底径6.2cmを測る。口縁部は器壁が薄く, 大きく外反する。外底面は回転糸切りである。297~300は口縁部が外上方に直線的にのびるものである。297はほぼ完形で, 口径14.4cm, 器高3.9cm, 底径6.4cmを測る。器壁が非常に薄く, 若干歪んでいる。器面は回転ナデ調整で, 外底面は回転糸切りである。298は口径14.2cm, 器高3.9cm, 底径7.0cmを測る。口縁部は回転ナデ調整で, 底部は著しく摩耗しており切り離し方法は不明である。299はほぼ完形で, 口径13.9cm, 器高4.1cm, 底径6.5cmを測る。一部摩耗するが, 体部から口縁部にかけて回転ナデ調整を施す。外底面は回転糸切りで, 板状圧痕が残る。300は口径13.7cm, 器高4.3cm, 底径7.0cmを測る。底部

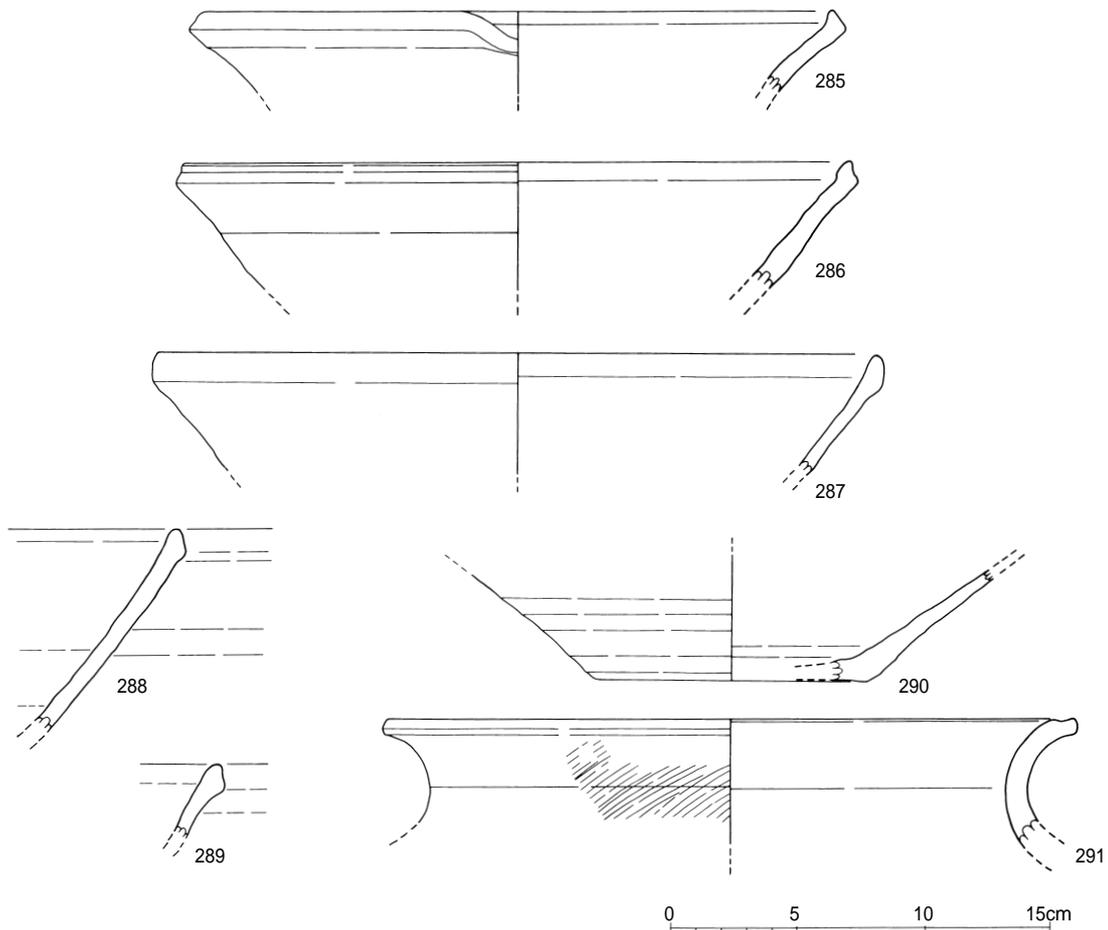


Fig.39 C区 第 層出土遺物実測図(東播系須恵器)

は回転系切りで、口縁部は直線的に外上方に開く。器面は著しく摩耗するため、調整は不明である。301は口径13.2cm、器高3.2cm、底径6.8cmを測る。若干内湾して立ち上がり、直線的な口縁部を持つ。体部外面にロクロ目が残るが、器面は摩耗しており調整は不明である。302～306は口縁部の破片である。302は口径15.0cmを測る。器壁が非常に薄いもので、体部は直線的にのび、口縁部は短く外反し、端部が肥厚する。調整は回転ナデ調整である。303は口径13.2cmを測る。口縁部が若干外反するもので、調整は回転ナデ調整である。304は口径14.8cmを測る。口縁部が僅かに内湾するもので、回転ナデ調整を行う。305は口径14.1cmを測る。口縁部が直線的にのびるもので、調整は回転ナデ調整である。306は口径13.6cmを測る。口縁部は器壁が厚く、直線的にのびる。調整は回転ナデ調整で、外面体部下半は黒斑がみられる。307～322は底部の破片で、307・308は丸底となる。307は底径8.0cmを測る。底部と体部の境は明瞭であるが、体部は内湾して立ち上がるものである。外底面は回転ヘラ切りとみられる。308は底径8.4cmを測る。底部と体部の境は明確な稜をもたず、大きく内湾して立ち上がる。内面は回転ナデ調整で、外底面は回転ヘラ切りである。309～313は直線的な体部を持つものである。309は底径8.4cmを測る。やや厚い底部に直線的な体部が付く。外底面は回転系切り、体部は回転ナデ調整、底部内面はナデ調整を施す。310は底径7.4cmを測る。底部から緩やかに立ち上がり、直線的な体部を持つものである。内面と体部外面は回転ナデ調整で、底部内面にはロクロ目が顕著に残る。外底面は回転系切りである。311は底径6.8cmを測る。体部は底部から屈曲して直線的にのびる。外底面は回転系切り、その他は回転ナデ調整である。312は底径5.9cmを測る。体部は底部から屈曲して直線的にのびる。底部は器壁が厚いが、体部は非常に薄い。体部は回転ナデ調整、底部内面はナデ調整、外底面は回転系切りである。313は底径6.3cmを測る。器壁が非常に薄いもので、底部から緩やかに立ち上がり、直線的な体部を持つものである。著しく摩耗するため調整は不明瞭である。314～317は体部が内湾して立ち上がるものである。314は底径6.3cmを測る。体部は回転ナデ調整、底部内面はナデ調整、外底面は回転ヘラ切りである。315は底径6.6cmを測る。内面と体部外面は回転ナデ調整で、外底面は回転系切りである。316は底径7.4cmを測る。底部から緩やかに内湾して立ち上がる。体部は回転ナデ調整、底部内面はナデ調整、外底面は回転系切りで、板状圧痕が付く。317は底径6.6cmを測る。器壁が厚く、底部から緩やかに内湾して立ち上がる。体部外面は回転ナデ調整、外底面は回転系切りとみられる。318～322は柱状高台の杯で、底部は中空で、体部は屈曲して外上方にのびるものである。318は底径7.0cmを測る。内面と体部外面は回転ナデ調整を行い、その後底部内面にはナデ調整を施す。外底面は回転系切りである。319は底径6.8cmを測る。底部の器壁は厚く、底部から体部にかけて緩やかに立ち上がる。調整は318と同じである。320は底径6.4cmを測る。やや高台が低く、内面は底部から体部にかけて緩やかに立ち上がる。外底面は回転系切り、高台の外側は回転ナデ調整である。321は底径が5.4cmと小さい。高台が高く、内面は底部からほぼ垂直方向に立ち上がる。調整は内面と高台の外側が回転ナデ調整、外底面は回転系切りである。322も底径が4.9cmと小さい。高台が高く、内面は底部からほぼ垂直方向に立ち上がる。調整は外底面が回転系切り、その他は回転ナデ調整である。323～332は小皿である。323・324は器高が高く、口縁部が外上方に大きく広がるものである。323は口径9.0cmを測る。底部を欠損するが、小さいものと見られる。口縁部は直線的にのびるもので、調整は回転ナデ調整である。324は口径8.7cm、器高

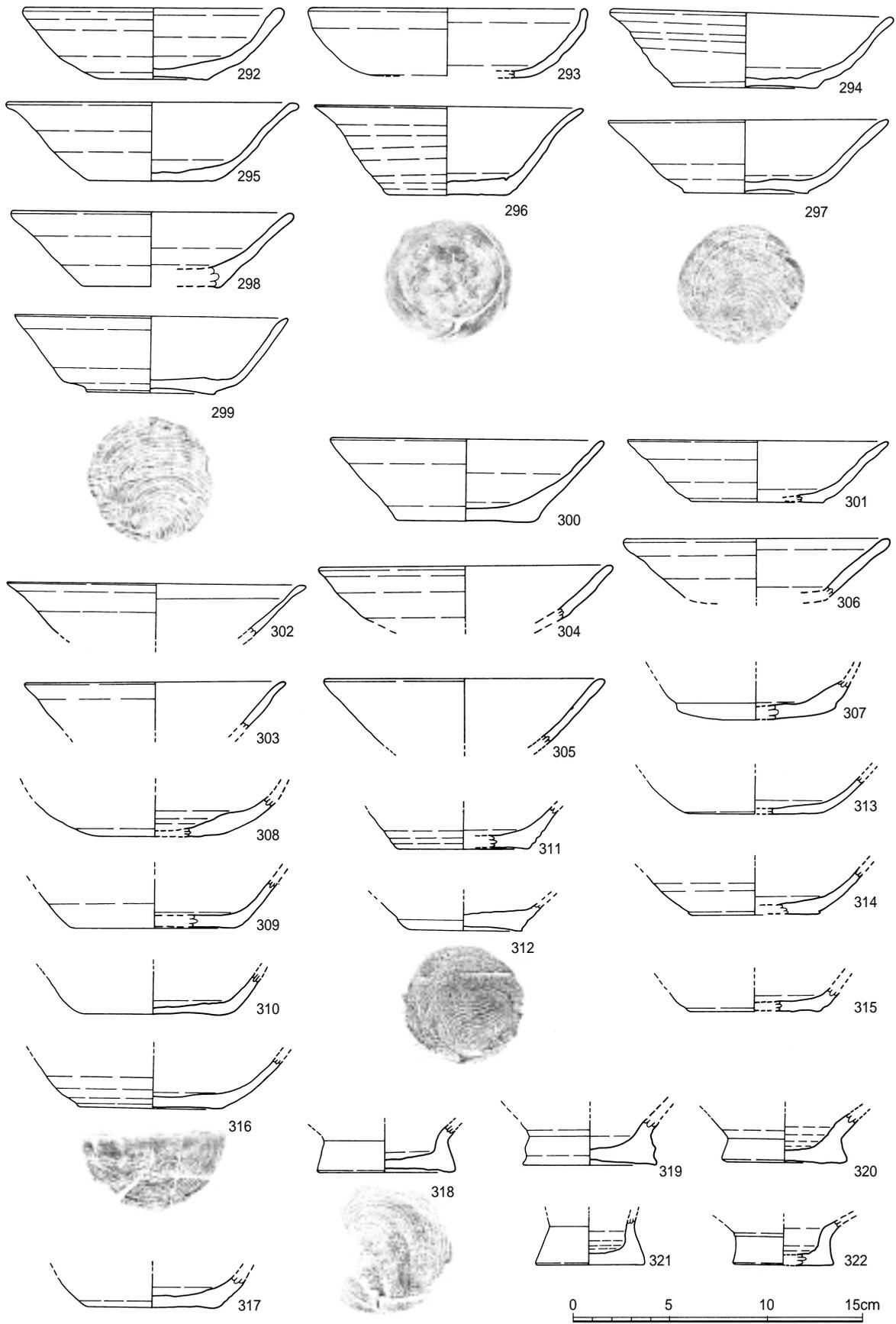


Fig.40 C区 第 層出土遺物実測図(土師質土器1)

2.1cm,底径4.7cmを測る。口縁部は底部から屈曲して外上方に直線的にのびる。器面は回転ナデ調整,底部内面はその後ナデ調整を加え,外底面は回転糸切りである。325~327は短く直線的な口縁部を持つものである。325は口径7.9cm,器高1.3cm,底径5.0cmを測る。器面は回転ナデ調整,底部内面はその後ナデ調整を加え,外底面は回転糸切りである。326はほぼ完形で,口径7.5cm,器高1.4cm,底径4.6cmを測る。底部中央は厚さ1mmと器壁が非常に薄い。調整は口縁部は回転ナデ調整,底部内面はナデ調整,外底面は回転糸切りである。327はほぼ完形で,口径7.3cm,器高1.7cm,底径4.4cmを測る。著しく摩耗しており調整は不明である。328は口径6.7cm,器高1.5cm,底径4.5cmを測る。底部から直線的にのびる口縁部がつき,端部は肥厚して外反させる。内面と体部外面は回転ナデ調整,外底面は回転糸切りである。329~331は内湾する口縁部を持つものである。329は口径8.4cm,器高1.4cm,底径5.2cmを測る。底部と口縁部の境が不明瞭で,緩やかに立ち上がるものである。口縁部はヨコナデ調整,外底面はナデ調整で,指頭圧痕が残る。成形技法は瓦器の小皿と酷似するが,色調が黄褐色を呈しておりここでは土師質土器として取り挙げた。330は口径8.0cm,器高1.4cm,底径5.2cmを測る。口縁部は底部との境は不明瞭で緩やかに立ち上がる。調整は回転ナデ調整で底部内面はその後ナデ調整を加える。331は口径7.6cm,器高1.3cm,底径4.4cmを測る。内湾して立ち上がり,端部を肥厚させて丸く仕上げる。口縁部は回転ナデ調整,底部内面はその後ナデ調整,外底面は回転糸切りである。332は底部の破片で底径4.9cmを測る。底部と体部の境に明確な稜をもたず,緩やかに内湾

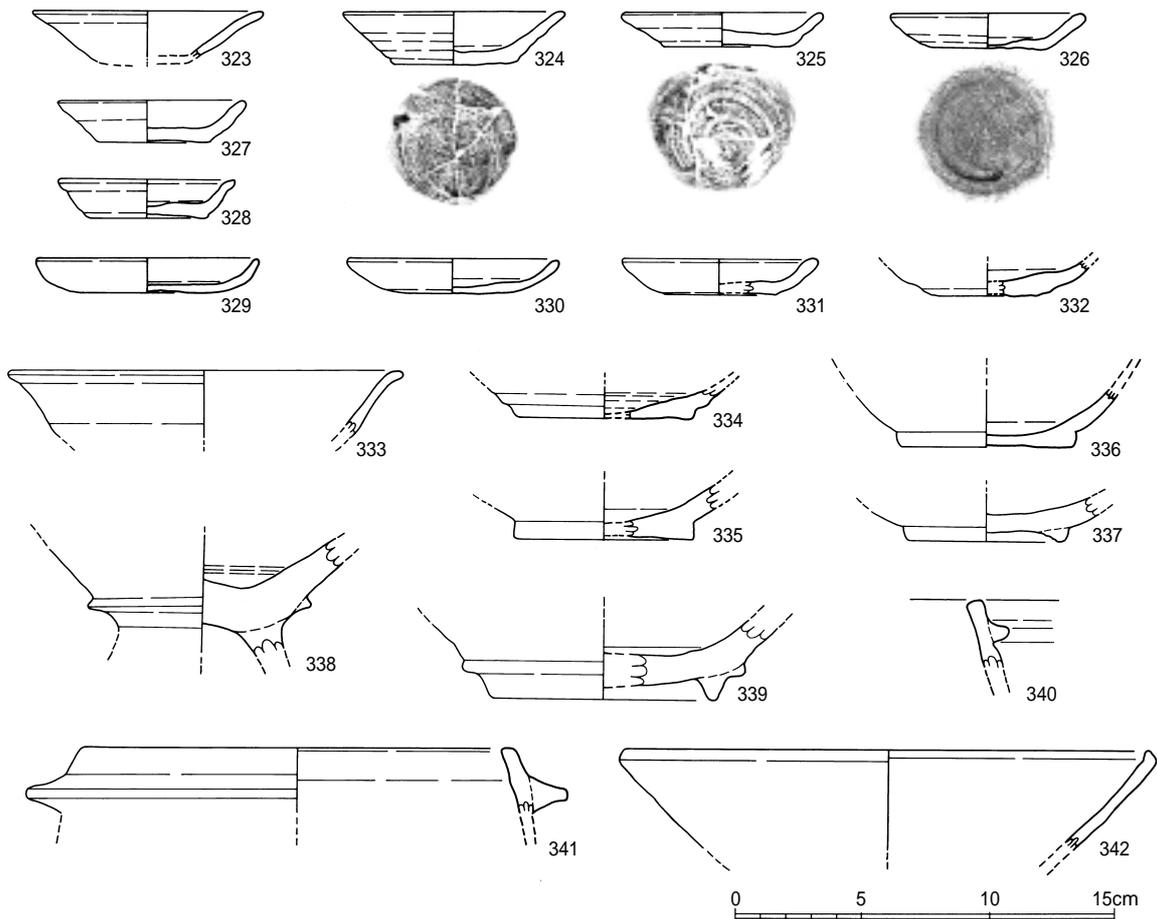


Fig.41 C区 第 層出土遺物実測図(土師質土器2・瓦質土器)

して立ち上がる。内面は回転ナデ調整, 体部外面は回転ナデ調整とナデ調整, 外底面は回転ヘラ切りである。333~339は椀である。333は口縁部の破片で, 口径15.0cmを測る。口縁部を外反させ端部を肥厚させるものである。調整は回転ナデ調整である。334~336は円盤状高台を持つものである。334は底径6.8cmを測る。底部の中央部の器壁が薄いもので, 体部は高台から短く水平にのびた後, 外上方を向く。調整は回転ナデ調整で, 内底面にはナデ調整を加える。外底面は回転糸切りである。335は底径6.8cmを測る。体部は底部からやや内湾して立ち上がる。内面は回転ナデ調整の後底部にナデ調整を加える。高台の外側は回転ナデ調整, 外底面は回転糸切りを行う。336は底径6.6cmを測る。体部は底部から内湾して立ち上がる。器面は摩耗しており調整は不明である。337は輪高台を持つものである。底径は6.0cmを測る。底部から内湾して緩やかに立ち上がる。高台は断面蒲鉾形の低く太いものが付く。調整は, 体部外面が回転ナデ調整, 高台の内側はナデ調整を施す。338・339は托状椀に似た形状のものである。338は「八」の字状に開く高台が付き, 体部は屈曲して外上方に直線的にのびる。体部の境には断面三角形の突帯が付く。器面は回転ナデ調整, 底部内面はその後ナデ調整を加える。339は直立する断面三角形の高台が付くものである。底径8.8cmを測る。体部はほぼ平らな底部から直線的に立ち上がる。底部と体部の境には断面半円形の小さな突帯が付く。器面は回転ナデ調整, 底部内面はその後ナデ調整を加える。340は羽釜である。口縁部は内傾し, 外面には幅7mmの断面三角形の小さな鏝が付く。調整は回転ナデ調整である。

瓦質土器 (Fig.41 - 341・342)

341は羽釜である。口径は16.8cmを測る。口縁部は内傾し, 外面には幅1.4cmの鏝がほぼ水平に付く。口縁部は回転ナデ調整, 体部内面はナデ調整を施す。体部外面には煤が付着する。342は鉢である。口径20.3cmを測る。若干内湾する体部に, 内側につまみ上げる口縁部が付く。調整は回転ナデ調整と見られるが, 摩耗しており不明瞭である。焼成が甘く褐色を呈するが, 外面には重ね焼き痕が見られる。

白磁 (Fig.42 - 343~366)

343~359は碗である。343は口径17.2cm, 器高6.9cm, 底径5.7cmを測る。底部は削り出し高台となり, 口縁部は外反する。外面は灰白色の釉を高台付近まで薄く施す。内面は見込の中央部のみ無釉で体部との境に1条の沈線状の浅い段が見られる。344は口径15.0cmを測る。直線的にのびる体部に, 端部を外反させる口縁が付く。器面には緑色を帯びた白色釉を薄く施す。345は口径16.2cmを測る。口縁部を大きな玉縁にするもので, 器面には乳白色の釉を薄く施す。焼成が甘く釉に透明感がない。346は口径15.4cmを測る。口縁部を大きな玉縁にするが, 断面三角形に近い, 歪な形のものである。釉は灰白色のものを薄く施す。347は口径15.8cmを測る。内湾して緩やかに立ち上がるもので, 端部を丸く納める。釉は灰白色のものを薄く施す。348・349は口縁部が外反するものである。釉は乳白色のものを薄く施す。350は口縁部が下方に屈曲するもので, 体部には浅い沈線も見られる。釉は灰白色のものを薄く施す。351は口縁部を玉縁にするものである。器面には灰白色の釉を約1mmの厚さに施す。352は器壁が非常に薄い体部に, 玉縁が付くものである。玉縁の下端には1条の沈線が巡る。釉は灰白色のものを薄く施す。353は底径6.3cmを測る。細く高い直立した削り出し高台をもち, 見込と体部の境には浅い11条の沈線が巡る。内面から体部外面には灰白色の釉を薄く施す。354は底径

6.0cmを測る。細く直立した削り出し高台を持つ。見込と体部の境には沈線が1条巡る。内面から体部外面には灰白色の釉を薄く施す。355は底部の破片で、削り出し高台となる。内面から体部外面には乳白色の釉を薄く施す。356は底部の破片であるが、高台の先端を欠損する。高台はやや幅の太い直立した削り出し高台で、見込と体部の境には1条の沈線が巡る。内面から体部外面には灰白色の釉を薄く施す。357は底径6.8cmを測る。太く低い削り出し高台をもち、見込と体部の境には浅い1条の沈線が巡る。内面から体部外面には灰白色の釉を薄く施す。358は底径5.8cmを測る。太く低い削り出し高台をもち、底部の器壁は厚い。見込と体部の境には段をもち、僅かに屈曲して体部に至る。釉は焼成が甘いため黄色味を帯びた白色を呈し、釉に透明感がない。内面から畳付まで薄く施す。359は底径7.0cmを測る。太く低い削り出し高台をもち、底部の器壁は厚い。見込と体部の境には僅かに段をもち、緩やかに立ち上がる。釉は灰白色のものを内面にのみ薄く施す。360～366は皿である。360は口径11.0cm、器高3.8cm、底径6.2cmを測る。平らな底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部を外反させる。外底面は回転糸切りで、器面には緑色を帯びた白色釉を約1mmの厚さに施釉し、口唇部は釉ハギを行う。361は口径9.5cm、器高1.7cm、底径3.7cmを測る。小さな底部より内湾して立ち上がり、直線的な口縁部を持つ。見込には劃花文が彫られている。全面に灰白色の釉を薄く施釉し、外底面は釉ハギを行う。362は口径9.6cm、器高2.2cm、底径4.5cmを測る。断面台形の低い高台が付く皿である。体部内面には沈線が1条巡る。釉は灰白色のものが内面と口縁部の外面にのみ施釉し、見込は輪状に釉ハギを行う。363は口径11.4cmを測る。若干内湾する口縁部で、端部は細くなっている。器面には乳白色の釉を施釉し、口縁端部は釉ハギを行う。364は口径10.6cmを測る。内湾して立ち上がり、口縁部を下方へ屈曲させる。釉は乳白色のものを約1mmの厚さに施す。365は口縁部を若干外反させるものである。器面には灰白色の釉を約1mmの厚さに施すが、焼成が甘く釉に透明感がない。366は底径4.8cmを測る。平底の底部から直線的に立ち上がる。器面には乳白色の釉を薄く施す。

青磁 (Fig.43 - 367～385)

367～372は同安窯系の碗である。367は口径16.0cmを測る。内湾する口縁部で端部を丸く納める。外面には細かい櫛目文、内面には沈線が2条施される。器面には黄色味を帯びた緑色釉を薄く施す。368は口縁部の破片である。外面には櫛目文、内面には沈線が1条と、櫛によるジグザグ文が施される。器面には黄色味を帯びた緑色釉を薄く施す。369は体部の破片である。外面には粗い櫛目文、内面には櫛とヘラによる文様が施される。内面から体部外面には黄色味を帯びた緑色釉を薄く施す。370は底部の破片で、底径5.0cmを測る。断面台形の太く直立する削り出し高台を有し、体部は底部から内湾して緩やかに立ち上がる。内面は体部に櫛とヘラによる文様、見込との境には沈線が巡る。内面から体部外面には黄色味を帯びた緑色釉を薄く施す。371は底径5.0cmを測る。断面台形の太く直立する削り出し高台を有するもので、見込と体部の境には浅い段が巡る。内面と高台付近まで黄色味を帯びた緑色釉を薄く施す。372は底径4.9cmを測る。底部は断面台形の直立する削り出し高台で、畳付の幅は不均等である。残存部では内面にのみ黄色味を帯びた緑色釉が見られる。373～383は龍泉窯系の碗である。373は底径6.0cmを測る。低く太い削り出し高台から内湾して立ち上がり、真直ぐ伸びる体部を持つ。内面には劃花文が施され、見込と体部の境には沈線が2条巡る。器面にはオリーブ灰色の釉を一部畳付まで0.5～1mmの厚さに施す。374は口径15.8cmを測る。内湾気味に立ち

上がり、口縁部を外反させる。内面には1条の沈線と劃花文が施される。器面には濃いオリーブ色の釉を施す。375は口径17.4cmを測る。直線的な口縁部を持つ。内面には1条の沈線と劃花文が施される。器面には灰オリーブ色の釉を薄く施す。376は口径15.0cmを測る。口縁部は直線的で、端部を丸く納めている。内面には劃花文が見られる。器面には黄色を帯びた緑色釉を薄く施す。377は口径16.0cmを測る。内面には浅い沈線を2条施す。器面にはオリーブ灰色の釉を薄く施すが、焼成が甘く、釉に透明感がない。378は口径17.0cmを測る。直線的にのびる口縁部をもち、外面には鎬蓮弁文が施される。器面には灰オリーブ色の釉を薄く施すが、焼成が甘く、釉に透明感がない。379は口縁部の破片で、外面には蓮弁文が見られる。器面には黄色を帯びた緑色釉を薄く施す。380は底径6.1cmを測る。太く低い削り出し高台をもち、見込には草花文が施される。内面から高台付近まで灰緑色の釉を薄く施す。381は底径5.6cmを測る。太く低い削り出し高台を持つ。見込には蓮華文が施され、体部との境には沈線が巡る。器面にはオリーブ色の釉を一部高台の内側まで施す。382は底径5.2cmを測る。見込には花文様をスタンプし、体部との境には浅い段を有する。外面には鎬蓮弁文が見られ

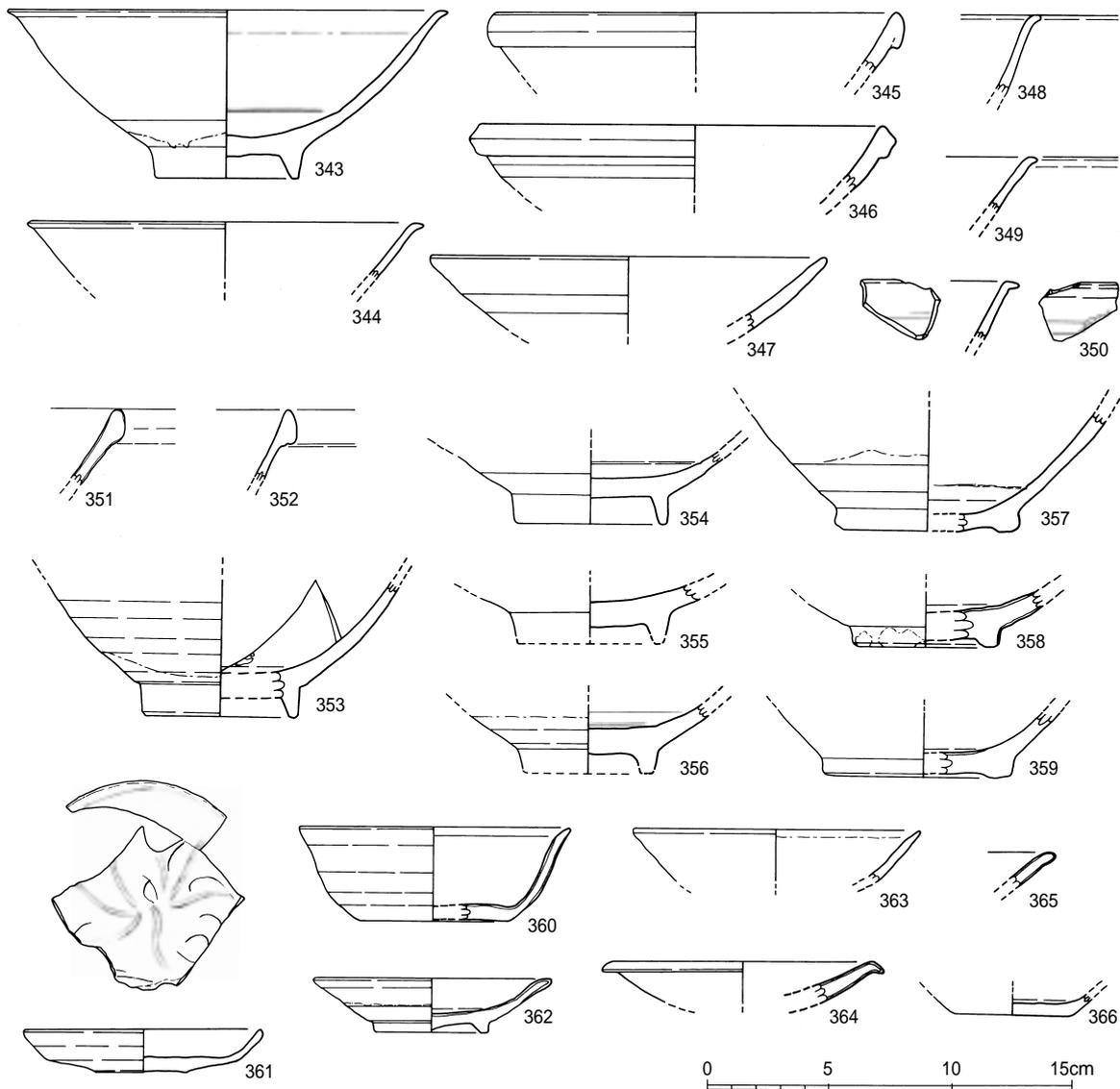


Fig.42 C区 第 層出土遺物実測図(白磁)

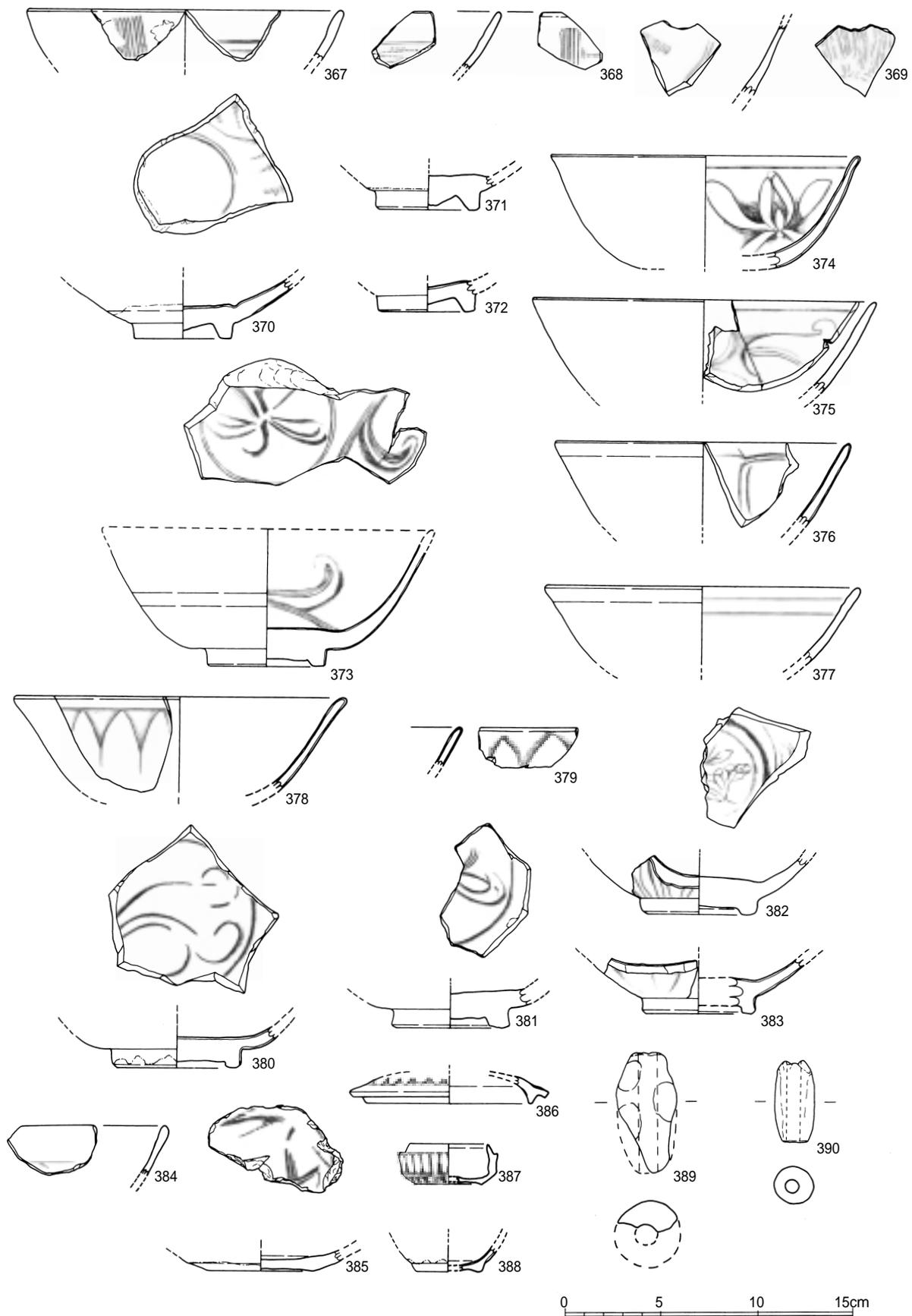


Fig.43 C区 第 層出土遺物実測図(青磁・青白磁・土製品)

る。器面には畳付まで黄色を帯びた緑色釉を薄く施す。383は底径5.4cmを測る。断面四角形の太く低い削り出し高台を持つ。外面には鎬蓮弁文が見られる。器面には灰オリーブ色の釉を高台まで施すが、焼成が甘く透明感がない。384・385は同安窯系の皿である。384は口縁部の破片で端部をやや肥厚させるものである。体部内面には1条の沈線と櫛による文様が施される。器面には黄色味を帯びた緑色釉を薄く施す。385は底径5.4cmを測る。平底の底部から体部は直線的にのびる。見込には櫛とヘラによる文様が施される。器面には黄色味を帯びた緑色釉を薄く施すが、体部下半と底部は釉ハギを行う。

青白磁 (Fig.43 - 386 ~ 388)

386~388は合子で、いずれも景德鎮窯系のものである。386は合子の蓋で、口径8.4cmを測る。型成形によるもので、天井部には菊花文が施される。器面には水色の釉を薄く施釉し、かえり部分は釉ハギを行う。387は合子の身で、口径4.0cm、器高2.1cm、底径3.4cmを測る。底部には小さな高台状の低い段を有し、体部は中位で屈曲して垂直方向に真直ぐ立ち上がり口縁部に至る。型成形によるもので、体部外面には菊花文が見られる。内面には乳白色の釉、外面には体部と底部の境まで水色の釉を薄く施釉し、口縁部は釉ハギを行う。388は合子の身で、底径3.2cmを測る。型成形によるもので、底部には断面半円形の高台が付く。内面と外面の体部には水色の釉を薄く施す。

土製品 (Fig.43 - 389・390)

389は紡錘形の管状土錘である。約1/3残存するもので、全長6.3cm、全幅3.1cmを測る。摩耗するが、全面ナデ調整を行うとみられる。390は円筒形の管状土錘で須恵質である。一部を欠損しており、全長4.3cm、全幅2.0cm、孔径0.7cmを測る。調整は全面ナデ調整である。

石製品 (Fig.44 - 391・392)

391は叩石で、全長10.9cm、全幅10.0cm、全厚4.1cm、重量586gを測る。両面の中央部に敲打痕が残る。石材は細粒の花崗岩である。392は砥石で一部を欠損する。全長12.9cm、全幅8.5cm、全厚3.4cm、重量593gを測る。残存部で片面と両側面の3面を使用する。石材は石英斑岩である。

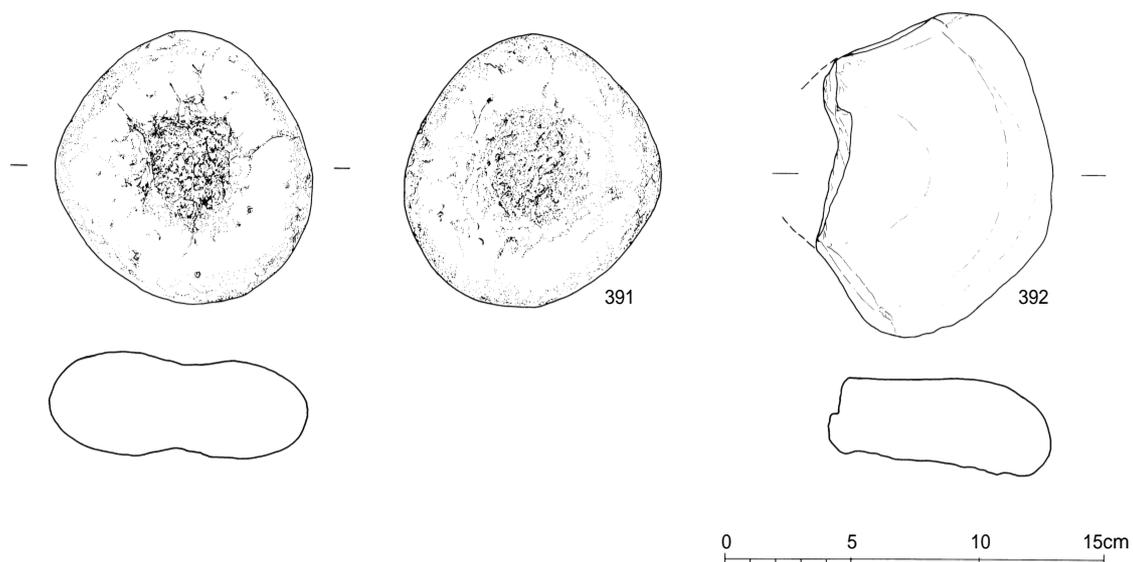


Fig.44 C区 第 層出土遺物実測図(石製品)

3. 遺構と遺物

(1) A区

A区では、古墳時代、古代及び中世の3時期の遺構を確認しており、時代別に報告する。

古墳時代

A区北東部において古式土師器が集中して出土しており、祭祀関連遺構の可能性が高い。古墳時代に属する遺構は、SF - 1のみである。

i 祭祀関連遺構

SF - 1 (Fig.45)

調査区の北東部、第 層上面で検出した祭祀関連遺構である。明確な掘り方はなかったが、古墳時代前期と考えられる土師器が、東西約1.40m、南北約1.60mの範囲に集中して出土した。遺存状況も良好で、廃棄されたとは考え難く何らかの祭祀的行為に使用され当地に置かれたものと考えられる。出土遺物には土師器片が70数点がみられ、そのうち6点(393~398)が図示できた。

出土遺物

土師器 (Fig.46 - 393 ~ 398)

393は壺で口縁部と胴部の一部が残存し、口径10.6cm、胴径13.4cmを測る。胴部は扁平な球形を呈し、口縁部は比較的長く外上方にのびる。摩耗が著しく調整は不明であるが、胴部内面には指頭圧痕が残る。394

は小形の壺で、口縁部の一部を欠損

する。口径6.6cm、器高8.3cm、胴径8.3cmを測る。胴部は扁平な球形を呈し、口縁部は比較的長く外上方にのびる。胴部外面にはナデ調整を施し、内面には指頭圧痕が残る。口縁部外面にはヘラ磨きを施す。395は甕でほぼ完存するが、底部はやや欠損する。口径15.8cm、器高30.7cm、胴径26.1cmを測る。球形の胴部を持ち、口縁部は「く」の字状に外反する。摩耗が著しく調整は不明瞭であるが、下胴部外面にはタタキ目が残り、上胴部外面は八ヶ調整、内面はヘラ削りを施す。396は小形の甕でほぼ完存する。口径13.5cm、器高16.0cm、胴径14.5cmを測る。丸底の底部を持ち、やや肩が張る。口縁部は胴部から外反して上がる。胴部外面にはナデ調整を施し、煤の吸着が確認できる。口縁部はヨコナデ調整により仕上げる。397は甕の底部である。丸底で胴部は球形を呈し、胴径19.6cmを測る。不明

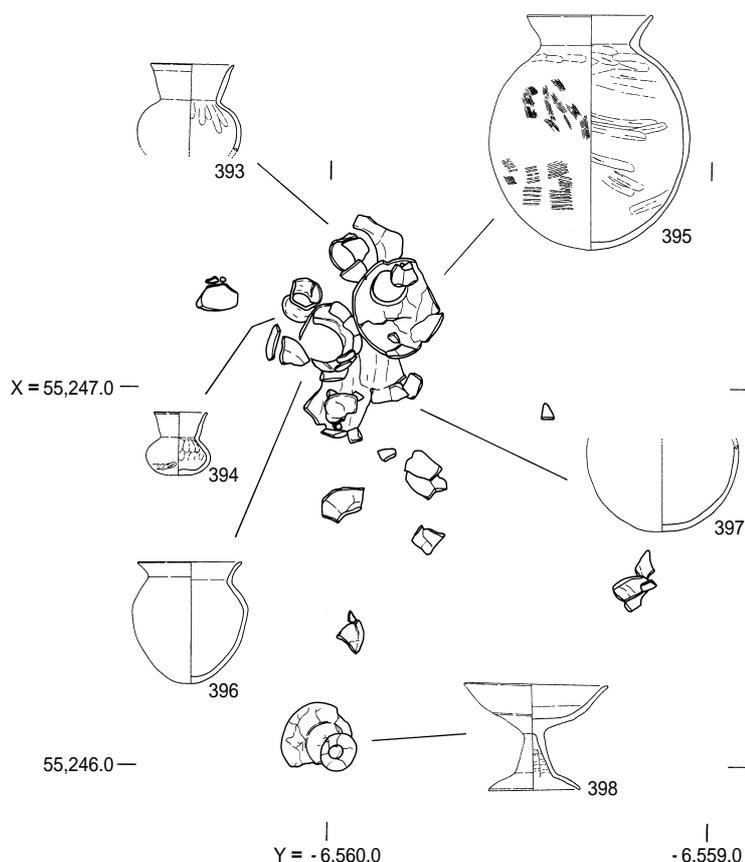


Fig.45 SF - 1 遺物出土状態

瞭ではあるが，胴部にはナデ調整が確認できる。398は高杯であり，杯部が1/4ほど欠損する。口径18.2cm，器高14.2cm，底径11.8cmを測り，杯部は稜を持って上がる。脚部は中空でやや開く柱脚に，さらに大きく開く裾部が付く。口縁部はヨコナデ調整によって仕上げられ，杯底部にはナデ調整を施す。脚部外面については摩耗しており，不明瞭であるがヘラ磨きを施すと考えられる。脚部内面にはヘラ削りを施す。

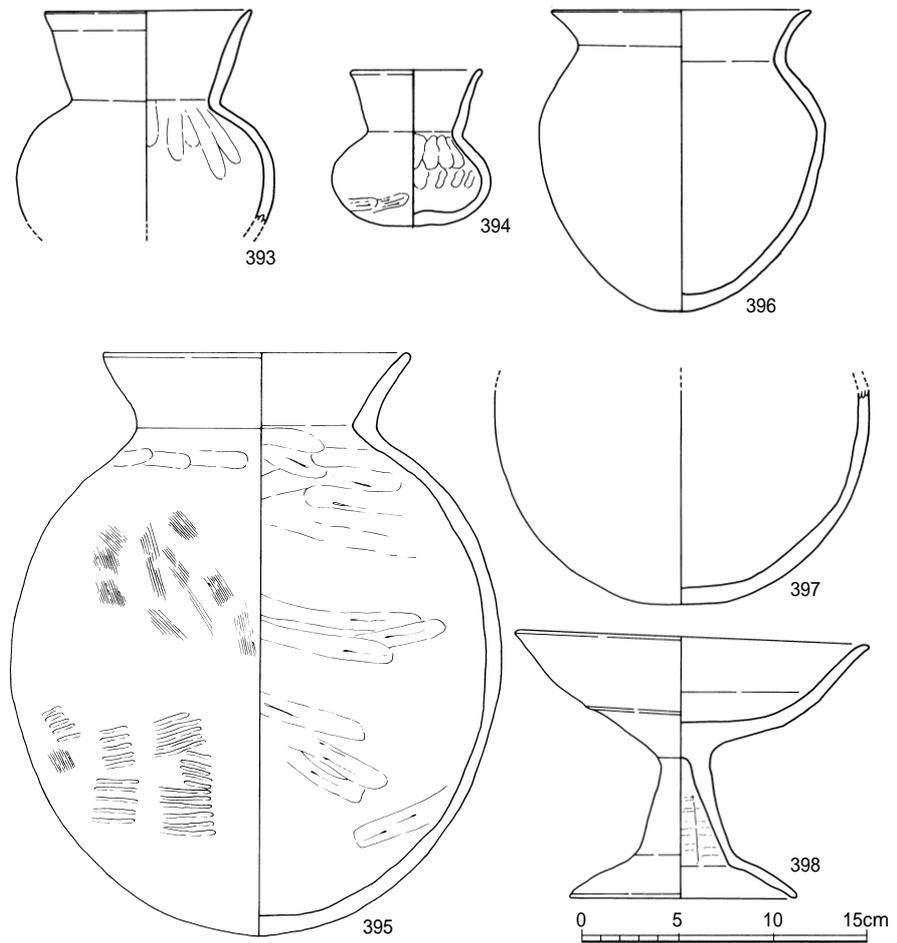


Fig.46 SF - 1 出土遺物実測図

古代

A区全体に遺構の拡がりを見せるが，その多くが中央部より検出された。確認された遺構は，土坑6基，溝跡3条，ピット2個，性格不明遺構5基，自然流路2条，集石遺構1基である。

i 土坑

SK - 1

調査区の北東部で検出した楕円形の土坑である。長径1.88m，短径1.50m，深さ13cmを測り，長軸方向はN - 68° - Eを示す。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトである。埋土中には炭化物微細片を含んでいた。出土遺物には土師器片60数点，須恵器片1点がみられるが，復元図示できるものはなかった。

SK - 2 (Fig.47)

調査区東部中央で検出した円形の土坑である。径1.08m，深さ89cmを測り，SD - 1を切っている。断面は逆台形状を

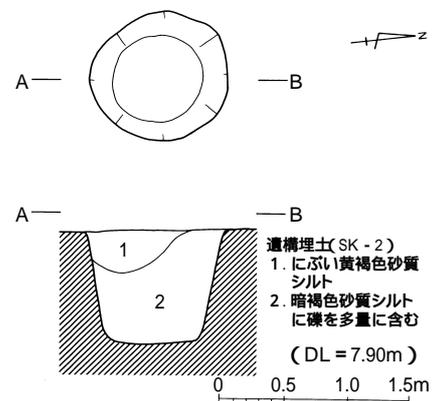


Fig.47 SK - 2

呈する。埋土は上下2層に分層でき、上層はにぶい黄褐色砂質シルト、下層は暗褐色砂質シルトで、1cm大の礫を多く含んでいた。遺物は埋土1より土師器片30数点、須恵器片5点、埋土2より土師器片60数点、須恵器片5点が出土するが、復元図示できるものはなかった。

SK - 3

調査区中央部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.10m、短辺1.08m、深さ13cmを測り、長軸方向は北を示す。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで、少量の炭化物を含んでいた。出土遺物には土師器片18点がみられるが、復元図示できるものはなかった。

SK - 4 (Fig.48)

調査区南部で検出した不整楕円形の土坑である。長径2.08m、短径1.89m、深さ26cmを測り、長軸方向はN - 52° - Wを示す。断面はU字形を呈し、埋土は黒褐色砂質シルトで、埋土中には大量の炭化物を含んでいた。出土遺物には土師器片240数点、須恵器片180数点がみられ、そのうち図示できるものは土師器(399・400)2点、須恵器(401~406)6点であった。

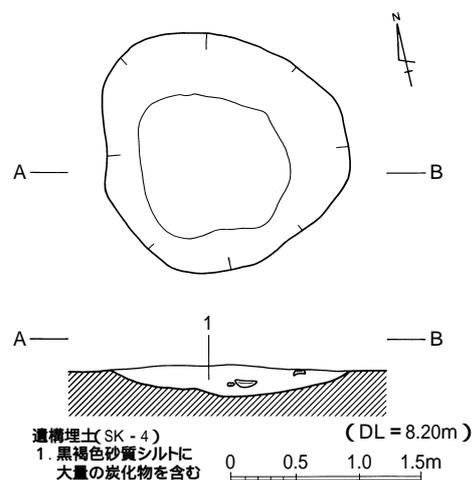


Fig.48 SK - 4

出土遺物

土師器 (Fig.49 - 399・400)

399は赤色塗彩の杯であり1/3ほど残存する。口径14.0cm、器高4.4cm、底径8.0cmを測り、口縁部内面には1条の沈線を巡らす。体部はやや内湾し、口縁部は外上方に真直ぐのびる。底部切り離しは回転ヘラ切りで、摩耗が著しく調整は不明である。400は甕であり、口径24.4cmを測る。口縁部はほぼ真直ぐな胴部から外反し、端部上面をヨコナデ調整により凹ませる。胴部外面には明瞭なタテ方向のハケ調整、口縁部にはヨコ方向のハケ調整が施される。

須恵器 (Fig.49 - 401 ~ 406)

401は杯で口縁部から底部にかけて1/5ほど残存する。口径15.0cm、器高4.5cm、底径9.8cmを測る。口縁部は体部からやや内湾して上がる。摩耗が著しく調整は不明である。402~404は高台の付く杯である。402はほぼ完形で、口径13.9cm、器高4.6cm、底径8.7cmを測る。口縁部は内湾する体部から外上方へ真直ぐ上がり端部をやや外反させる。底部は回転ヘラ切りの後、ナデ調整を施すが中央部にはヘラ切り痕が残る。底部には「八」の字状に開く高台が付く。体部と口縁部には回転ナデ調整、内底面には回転ナデ調整の後ナデ調整を施す。403は1/2ほど残存する。口径13.2cm、器高3.7cm、底径9.3cmを測り、口縁部は内湾する体部から外上方へ真直ぐ上がる。底部には高さ0.5cmの「八」の字状に開く高台が付く。体部は内外面とも回転ナデ調整、内底面にはナデ調整を施す。外底面は回転ヘラ切り未調整である。内外面の一部に自然釉が付着する。404は1/3ほど残存する。口径14.4cm、器高3.7cm、底径10.6cmを測り、口縁部はやや内湾する体部から外上方に真直ぐ上がる。底部には高さ0.4cmを測る小さな高台が付く。摩耗が著しく調整は不明である。405・406は鉢である。体部上位で強

く屈曲し、口縁部は内傾する。最大径を体部上位に持つ。405は口径21.4cmを測り、内外面に回転ナデ調整を施す。外面には若干の自然釉が付着する。406は口径20.0cmを測り、内面には回転ナデ調整、外面は回転ヘラ削りの後回転ナデ調整を施す。

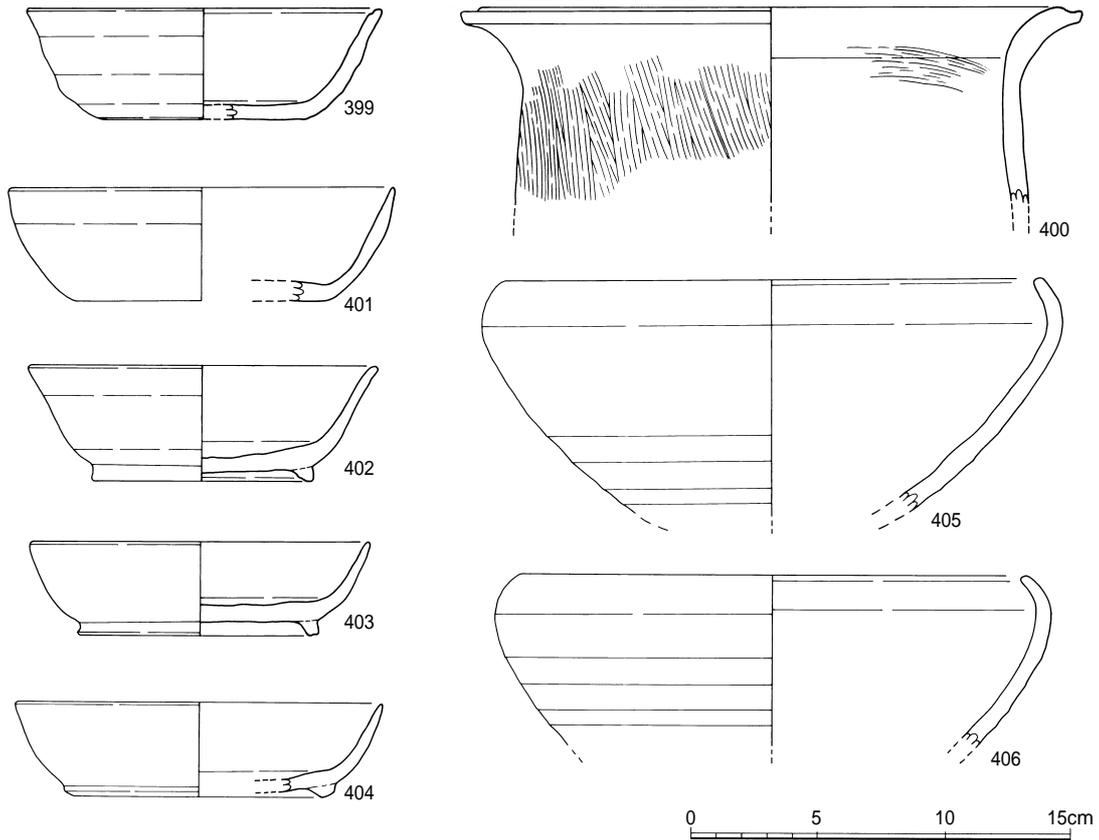


Fig.49 SK - 4 出土遺物実測図

SK - 5 (Fig.50)

調査区西部中央で検出した。舟形の土坑であり、ピットによって切られている。長径2.46m、短径0.40m、深さ6cmを測り、長軸方向はN - 72° - Wを示す。断面はU字形を呈し、埋土はにぶい黄褐色砂質シルトである。出土遺物には土師器片23点、須恵器片1点がみられ、そのうち須恵器(407)1点が図示できた。

出土遺物

須恵器 (Fig.52 - 407)

407は蓋の口縁部で、口径15.4cmを測る。口縁部は緩やかに下がり、端部を下方に屈曲さす。外面は回転ヘラ削りの後回転ナデ調整、内面は回転ナデ調整が施される。

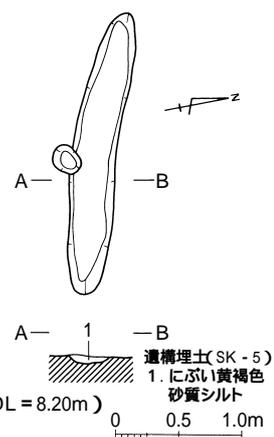


Fig.50 SK - 5

SK - 6 (Fig.51)

調査区西南部で検出した、隅丸方形の土坑である。長辺1.98m、短辺1.35m、深さ91cmを測り、長軸方向はN - 79° - Wを示す。断面は袋状を呈し、埋土は灰黄色シルトとにぶい黄褐色シルトが互層

をなし、8層に分層できる。出土遺物には土師器片113点、須恵器片13点がみられ、土師器片のうち暗文の入るものが6点、丁寧な磨きを施すものを13点数えた。図示できたものは土師器(408~411)4点、須恵器(412~416)5点であった。

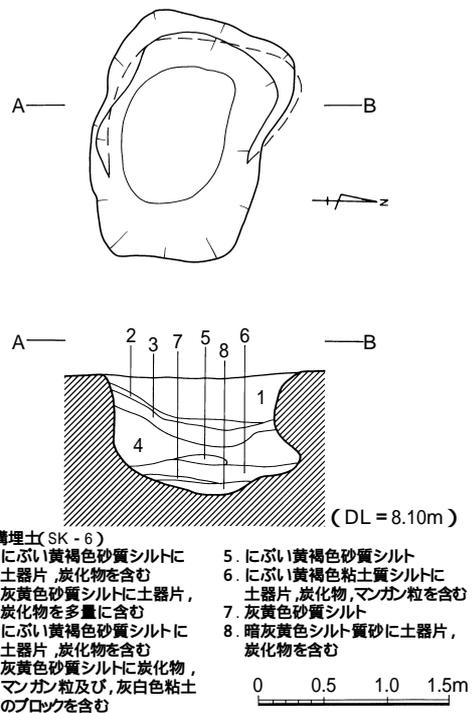
出土遺物

土師器 (Fig.52 - 408~411)

408~410は蓋の口縁部である。408は1/4ほど残存し、口径は19.6cmを測る。平らな天井部から斜め下方に緩やかに下がり、端部を下方に屈曲させる。内外面に丁寧なヘラ磨きを施す。409は1/8ほど残存し、口径16.2cmを測る。口縁部は平らな天井部から強く下方に屈曲しており、全体的に摩耗が著しく口縁部内面及び天井部外面に僅かにヘラ磨きを確認できるのみである。410は口径15.6cmを測り、口縁部は平らな天井部から強く下方に屈曲する。内外面ともにナデ調整の後丁寧なヘラ磨きを施す。411は皿の口縁部であり、口径17.2cm、器高2.2cm、底径12.9cmを測る。口縁部は外上方へ上がり、一旦外傾した後端部をつまみ上げ、口縁部内面は段をなす。回転ナデ調整の後丁寧なヘラ磨きを施す。畿内からの搬入品の可能性が考えられる。

須恵器 (Fig.52 - 412~416)

412は蓋の口縁部で、口径18.0cmを測る。ほぼ平らな天井部から緩やかに下がり、口縁部でやや湾曲し、端部を下方に小さく屈曲さす。内面には回転ナデ調整が確認できるが、摩耗しており他の調整は不明である。413は蓋の天井部で、扁平な擬宝珠形のつまみが付く。天井部は扁平で内面にはナ



遺構埋土(SK-6)
 1. にぶい黄褐色砂質シルトに土器片、炭化物を含む
 2. 灰黄色砂質シルトに土器片、炭化物を多量に含む
 3. にぶい黄褐色砂質シルトに土器片、炭化物を含む
 4. 灰黄色砂質シルトに炭化物、マンガン粒及び、灰白色粘土のブロックを含む
 5. にぶい黄褐色砂質シルト
 6. にぶい黄褐色粘土質シルトに土器片、炭化物、マンガン粒を含む
 7. 灰黄色砂質シルト
 8. 暗灰黄色シルト質砂に土器片、炭化物を含む
 0 0.5 1.0 1.5m

Fig.51 SK - 6

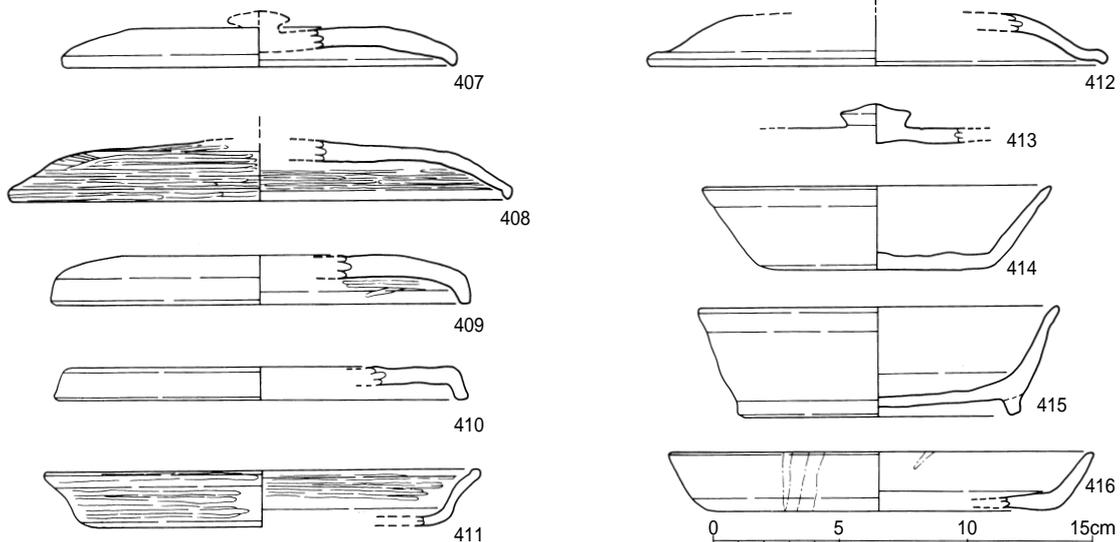


Fig.52 SK - 5・6 出土遺物実測図

デ調整, 外面には回転ナデ調整を施す。つまみの径は2.6cmを測る。414は杯で1/6ほど残存する。口径13.8cm, 器高3.3cm, 底径8.6cmを測り, 口縁部は体部から外上方へ真直ぐのびる。口縁部外面に回転ナデ調整が確認できるものの, 摩耗が著しく他の調整は不明である。焼成は不良である。415も杯で1/4ほど残存する。口径14.2cm, 器高4.3cm, 底径10.5cmを測り, 口縁部は外上方へ直線的にのびる。底部には0.7cmほどの, 真下につながる高台が付く。内面には回転ナデ調整が確認できるが, 外面は摩耗する。416は皿であり, 口径16.8cm, 器高2.3cm, 底径13.3cmを測る。口縁部は体部から外上方に真直ぐ上がり, 回転ナデ調整を施す。

ii 溝跡

SD - 1

調査区東部中央で南北4.69mに渡って検出した溝で, SK - 2に切られている。幅は8~43cm, 深さ3~11cmを測り, 断面はU字形を呈する。埋土は暗褐色砂質シルトで, 出土遺物には土師器片10数点, 須恵器片1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SD - 2 (Fig.53)

調査区北部で南北6.25mに渡って検出した溝である。幅は32~50cm, 深さ6~12cmを測り, 断面はU字形を呈する。埋土は褐灰色砂質シルトで, 埋土中には土器微細片及び炭化物を多く含む。出土遺物には土師器片73点, 須恵器片5点, 土師質土器1点, 土製品2点がみられ, そのうち土師器(417)1点, 土師質土器(418)1点, 土製品(419・420)2点が図示できた。

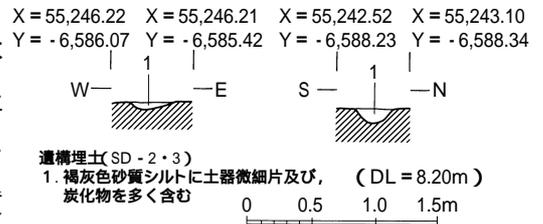


Fig.53 SD - 2・3 セクション図

出土遺物

土師器 (Fig.54 - 417)

417は甕で, 口縁部はやや膨らむ胴部から外反し, 端部を上下につまみ出し浅い凹面をなす。若干残る胴部外面にタテ方向の粗いハケ目, 内面にはヨコ方向の粗いハケ目が残る。口縁部にはヨコナデ調整を施す。

土師質土器 (Fig.54 - 418)

418は小皿であり, 完存する。口径8.7cm, 器高1.3cm, 底径4.8cmを測り, 口縁部は外上方に真直ぐ立ち上がる。底部切り離しは回転ヘラ切りである。摩耗が著しく調整は不明である。

土製品 (Fig.54 - 419・420)

419・420は管状土錘であり, ほぼ完存する。ともに紡錘形を呈し, 全長は3.9~4.0cm, 全幅は1.3~1.5cmを測る。

SD - 3 (Fig.53)

調査区北部で東西4.08mに渡って検出した溝で, SD - 2に対して直行しており, その関係が考慮される。幅は26~36cm, 深さ11~16cmを測り, 断面はU字形を呈する。埋土は褐灰色砂質シルトで, 埋土中には土器微細片及び炭化物を多く含む。出土遺物には土師器片59点, 須恵器片5点がみられ, そのうち土師器(421)1点, 須恵器(422)1点が図示できた。

出土遺物

土師器 (Fig.54 - 421)

421は杯の底部片で、底径7.5cmを測る。摩耗が著しく調整は不明である。

須恵器 (Fig.54 - 422)

422は皿で1/4ほど残存し、口径15.2cm、器高2.5cmを測る。口縁部は、平らな底部から外上方に上がり、やや外傾した後端部を若干つまみ上げ、口縁部内面は浅い段をなす。底部切り離しは回転ヘラ切りであり、口縁部には回転ナデ調整が施される。

iii ビット

P - 1

調査区南部で検出したビットである。不整楕円形を呈し、長径43cm、短径31cm、深さ31cmを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで、出土遺物には土師器片6点、須恵器片3点がみられ、そのうち須恵器(423)1点が図示できた。

出土遺物

須恵器 (Fig.54 - 423)

423は杯であり、1/3ほど残存する。口径12.0cm、器高3.6cm、底径7.3cmを測り、口縁部は真直ぐ外上方へ上がる。底部は回転ヘラ切り未調整で、体部と口縁部は回転ナデ調整で仕上げる。内底面には若干ロクロ目が残る。

P - 2

調査区西部で検出したビットで、SD - 8に切られる。不整楕円形を呈し、長径68cm、短径36cm、深さ13cmを測る。埋土は暗褐色砂質シルトで、マンガン粒及び灰色シルトのブロックを含む。出土遺物には土師器片2点、須恵器片2点がみられ、そのうち須恵器(424)1点が図示できた。

出土遺物

須恵器 (Fig.54 - 424)

424は蓋のつまみで、扁平な擬宝珠形を呈する。つまみの径は2.9cmを測る。

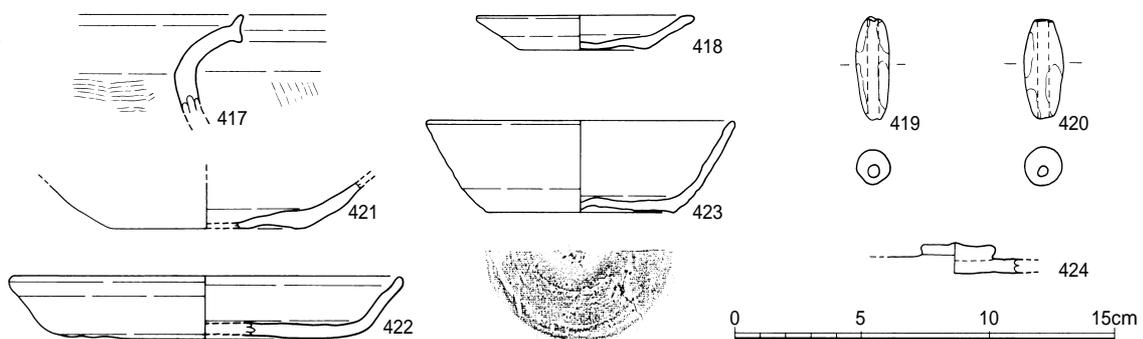


Fig.54 SD - 2・3, P - 1 出土遺物実測図

iv 性格不明遺構

SX - 1 (Fig.55)

調査区北東部で検出した不整形の遺構で、長辺3.04m、短辺2.10mを測り、深さは26cmを測る。長

軸方向はN - 38° - Eを示し、埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで、埋土中には土器微細片及び炭化物を含む。出土遺物には土師器片370数点、須恵器片24点がみられ、須恵器(425・426)2点が図示できた。

出土遺物

須恵器 (Fig.57 - 425・426)

425・426は皿で、口縁部は外上方に上がり、端部をつまみ上げ内面に浅い段をなす。425は1/4ほど残存し、口径15.8cm、器高2.2cm、底径8.6cmを測る。不明瞭であるが内外面に回転ナデ調整を施す。426は1/8ほど残存し、口径16.0cm、器高2.0cm、底径12.0cmを測る。口縁部には回転ナデ調整を施す。

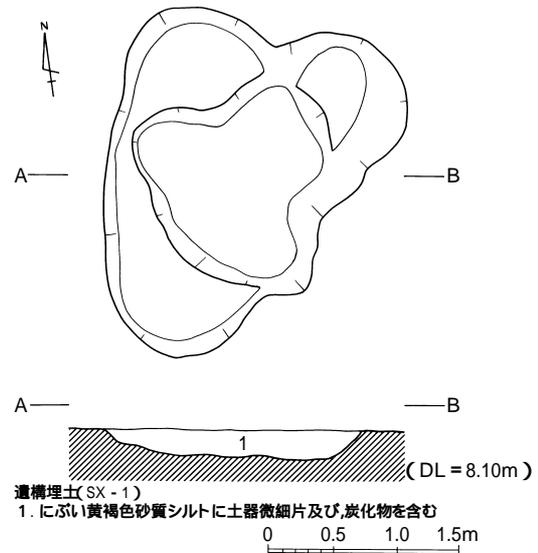


Fig.55 SX - 1

SX - 2

調査区中央部で検出した不整楕円形の遺構で、長径1.33m、短径1.00m、深さ9cmを測る。長軸方向はN - 27° - Wを示し、埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで、埋土中には土器微細片及び炭化物を多く含む。出土遺物には土師器片140数点、須恵器片8点、鉄釘1点がみられ、土師器(427~429)3点、須恵器(430~432)3点が図示できた。

出土遺物

土師器 (Fig.57 - 427 ~ 429)

427~429は甕の口縁部である。427は1/4ほど残存し、口径23.4cmを測り、口縁部はほぼ真直ぐな胴部から外傾し、端部は面をなす。胴部及び口縁部にヨコ方向のハケ調整を確認できるが、器面が摩耗しており不明瞭である。428は口径29.0cmを測り、口縁部はやや膨らむ胴部から外反する。胴部内面にはヨコ方向のハケ調整、口縁部はヨコ方向のハケ調整の後ナデ調整を施す。429は外反する口縁部を下方につまみ出し、端部は凹面をなす。外面にはタテ方向の粗いハケ調整、内面にはヨコ方向の粗いハケ調整を施す。

須恵器 (Fig.57 - 430 ~ 432)

430は杯でほぼ完形であり、口径14.2cm、器高4.2cm、底径8.4cmを測る。口縁部は体部からやや内湾して上がる。焼成が不良で摩耗しており、調整は不明である。底部には回転ヘラ切り痕が残る。431は蓋のつまみであり、扁平な擬宝珠形を呈する。つまみの径は2.5cmを測る。432は盤で、完存する。口径21.5cm、器高4.5cm、底径12.4cmを測る。口縁部は体部から緩やかに外上方へ上がり、端部をややつまみ上げる。底部には1.7cmを測る高い高台が付く。外底面には指頭圧痕、口縁部外面にはナデ調整が認められる。焼成が不良で灰白色を呈する。

SX - 3 (Fig.56)

調査区南部中央で検出した隅丸方形の遺構で、長辺3.01m、短辺1.70m、深さ32cmを測る。長軸方向はN - 6° - Eを示し、埋土は暗褐色砂質シルトである。出土遺物には土師器片80数点、須恵器片7点がみられ、須恵器(433・434)2点が図示できた。

出土遺物

土師器 (Fig.57 - 433)

433は蓋の破片で、口径18.2cmを測る。ほぼ平らな天井部と考えられ、口縁部を下方に屈曲させる。内面には丁寧なヘラ磨きを施す。外面は摩耗しており調整は不明である。

須恵器 (Fig.57 - 434)

434は杯であり、1/6ほど残存する。口径12.8cm、器高4.0cm、底径9.4cmを測り、腰の張る体部から、口縁部は若干外反し、端部をやや内側につまみ上げる。「ハ」の字状に開く小さな高台が、外面端部に付く。底部外面を除き、回転ナデ調整が施される。

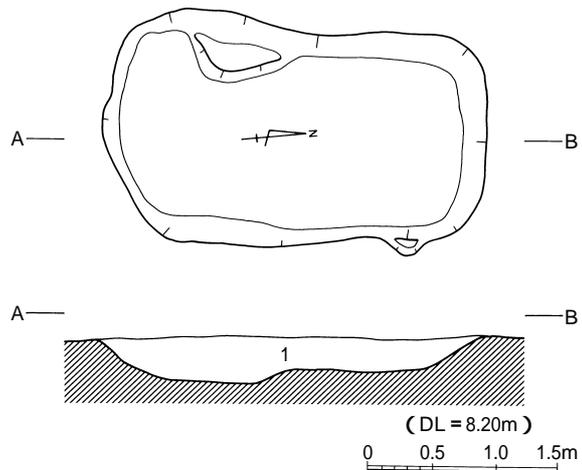


Fig.56 SX - 3

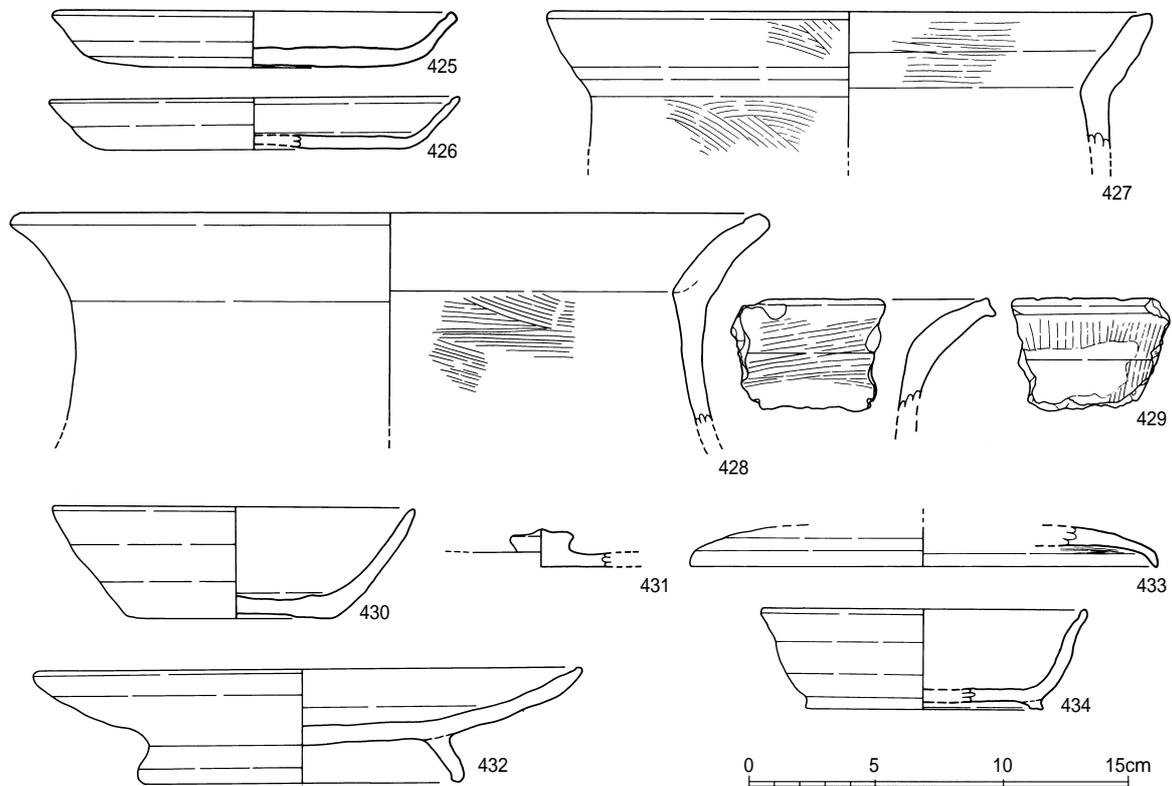


Fig.57 SX - 1 ~ 3 出土遺物実測図

SX - 4 (Fig.58)

調査区北部で検出した不整形の遺構で、長辺2.85m、短辺2.50m、深さは1.23mを測り、北は調査区外に続く。北に向けてやや傾斜しており、長軸方向は北を向く。埋土は暗褐色砂質シルトで黄灰色粘土質シルトのブロック、土器微細片、マンガング粒及び炭化物を多く含む。出土遺物には土師器片150数点、須恵器片9点、石製品1点、鉄刀子1点がみられ、土師器(435)1点、須恵器(436~439)4点、石製品(440)1点、鉄刀子(441)1点が図示できた。

出土遺物

土師器 (Fig.59 - 435)

435は甕である。外反する口縁部を下方につまみ出し, 端部は凹面をなす。外面にはタテ方向の粗いハケ調整, 内面にはヨコ方向の粗いハケ調整を施す。

須恵器 (Fig.59 - 436 ~ 439)

436は杯であり1/2ほど残存する。口径14.7 cm, 器高3.5cm, 底径9.2cmを測る。口縁部は体部から外上方へ真直ぐのびる。外面には回転ナデ調整を施し, 底部切り離しは回転ヘラ切りである。内面は摩耗が著しく調整は不明である。焼成は不良である。437は杯の口縁部であり, 口径16.0cmを測る。口縁部は体部から

内湾して上がり, 端部は小さな凹面をなす。器面は内外面とも回転ナデ調整を施す。438は蓋であり, 1/4ほど残存する。口径は15.0cmを測る。ほぼ平らな天井部から斜め下方に緩やかに下がり, 端部を下方に屈曲さす。焼成は不良で灰白色を呈する。内面には回転ナデ調整が確認できる。439は皿であり, 1/8ほど残存する。口径は14.9cm, 器高2.4cm, 底径11.9cmを測る。口縁部は体部から外上方に真直ぐ上がり, 内面には段を有するが摩耗が著しく不明瞭である。口縁部には回転ナデ調整を施す。

石製品 (Fig.59 - 440)

440は砥石であり, 4面を使用する。材質は細粒砂岩である。

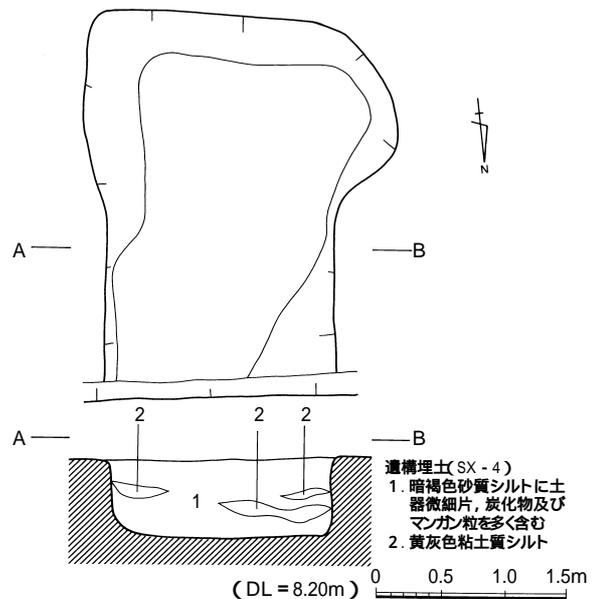


Fig.58 SX - 4

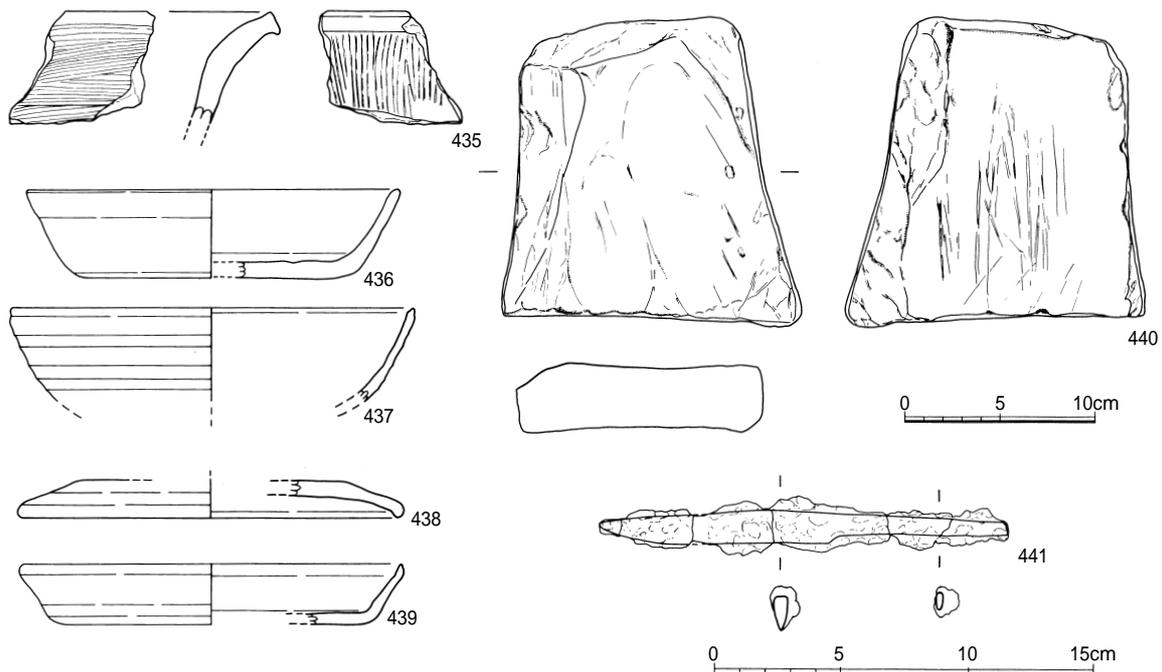


Fig.59 SX - 4 出土遺物実測図

鉄製品 (Fig.59 - 441)

441は刀子であり、全長16.1cm、刃部長9.1cmを測る。全体的に錆化が著しい。平造りで鋒はフクラ枯をなし、刃部には刃毀れがみられるもののほぼ直線的にのびて関に至る。

SX - 5

調査区南西部で検出した不整形の遺構で、長辺4.50m以上、短辺約4.20mを測り、深さは24cmを測る。明確な掘り方はなく、地形的に浅く落ち込んだ部分から土器片や炭化物が出土する状態であった。埋土は灰黄褐色砂質シルトでマンガン粒及び炭化物を含む。出土遺物には土師器片440数点、須恵器片60点、土製品1点がみられ、土師器(442~450)9点、須恵器(451~464)14点、土製品(465)1点が図示できた。

出土遺物

土師器 (Fig.60 - 442 ~ 450)

442は蓋の口縁部で、口径18.7cmを測る。天井部から斜め下方に緩やかに下がり、端部を下方に屈曲させる。摩耗が著しく調整は不明である。443は口径18.8cmを測り、大型の杯で1/3ほど残存する。器高4.7cm、底径9.6cmを測る。底部は平たく、体部は緩やかに内湾する。口縁部は真直ぐ上がり、内面に1条の浅い沈線を有す。内外面ともに回転ナデ調整の後ヘラ磨きを丁寧に施す。搬入品である可能性が高い。444~446は皿で、口縁部は強いヨコナデ調整により外反して立ち上がり、端部をつまみ上げ、内面に1条の沈線を巡らす。444は1/2ほど残存し、口径18.0cm、器高2.8cm、底径11.3cmを測る。外底面にはヘラ記号が認められる。内外面ともに丁寧なヘラ磨きが施される。445は口縁部から底部にかけて1/8ほど残存する。口径22.3cm、器高2.7cm、底径17.2cmを測る。体部には回転ナデ調整が、外底面には丁寧なヘラ磨きが施される。残部が少なく不明瞭であるが、内底面の暗文は放射線状及び螺旋状であると考えられる。446は口縁部片で、口径19.3cm、器高2.2cm、底径13.5cmを測る。底部にはヘラ削り、体部には回転ナデ調整が施される。447も皿で、外底面に退化した高台が付く。2/3ほど残存し、口径24.4cm、器高2.4cm、底径11.2cmを測る。口縁部は、ヨコナデ調整によりやや外反して立ち上がる。口縁部内面には1条の沈線が巡り、体部外面には部分的にヘラ磨きを施す。内底面には螺旋状の暗文、体部内面には1段の放射線状の暗文を施す。444~447は、ほぼ全体に丁寧なヘラ磨きが施され、胎土も類似しており、畿内からの搬入品の可能性が高い。448は皿で底部には貼り付け高台の痕跡が残る。1/3ほど残存し、口径25.2cmを測る。口縁部は底部から緩やかに上がり、端部でつまみ上げる。摩耗が著しく調整は不明である。449は皿の底部で、底径11.8cmを測る。外底面は回転ヘラ切りの後ナデ調整が施され、高さ0.9cmを測る「八」の字状に開く高台が付く。内底面にはナデ調整が施される。450は甕の口縁部で口径15.4cmを測る小型のものである。口縁部はやや膨らむ胴部から外反し、端部をややつまみ上げる。胴部外面にはタテ方向の粗いハケ調整、頸部には強いヨコナデ調整が施される。口縁部内面にはヨコ方向のハケ調整を施す。

須恵器 (Fig.60 - 451 ~ 464)

451は蓋で1/3ほど残存する。口径は18.4cmを測り、口縁部はほぼ平らな天井部から斜め下方に緩やかに下がり、端部を下方に小さく屈曲させる。調整については摩耗が著しく天井部に回転ヘラ削り調整が確認できるのみである。452は蓋の口縁部片で、口径は15.4cmを測る。回転ナデ調整が確認

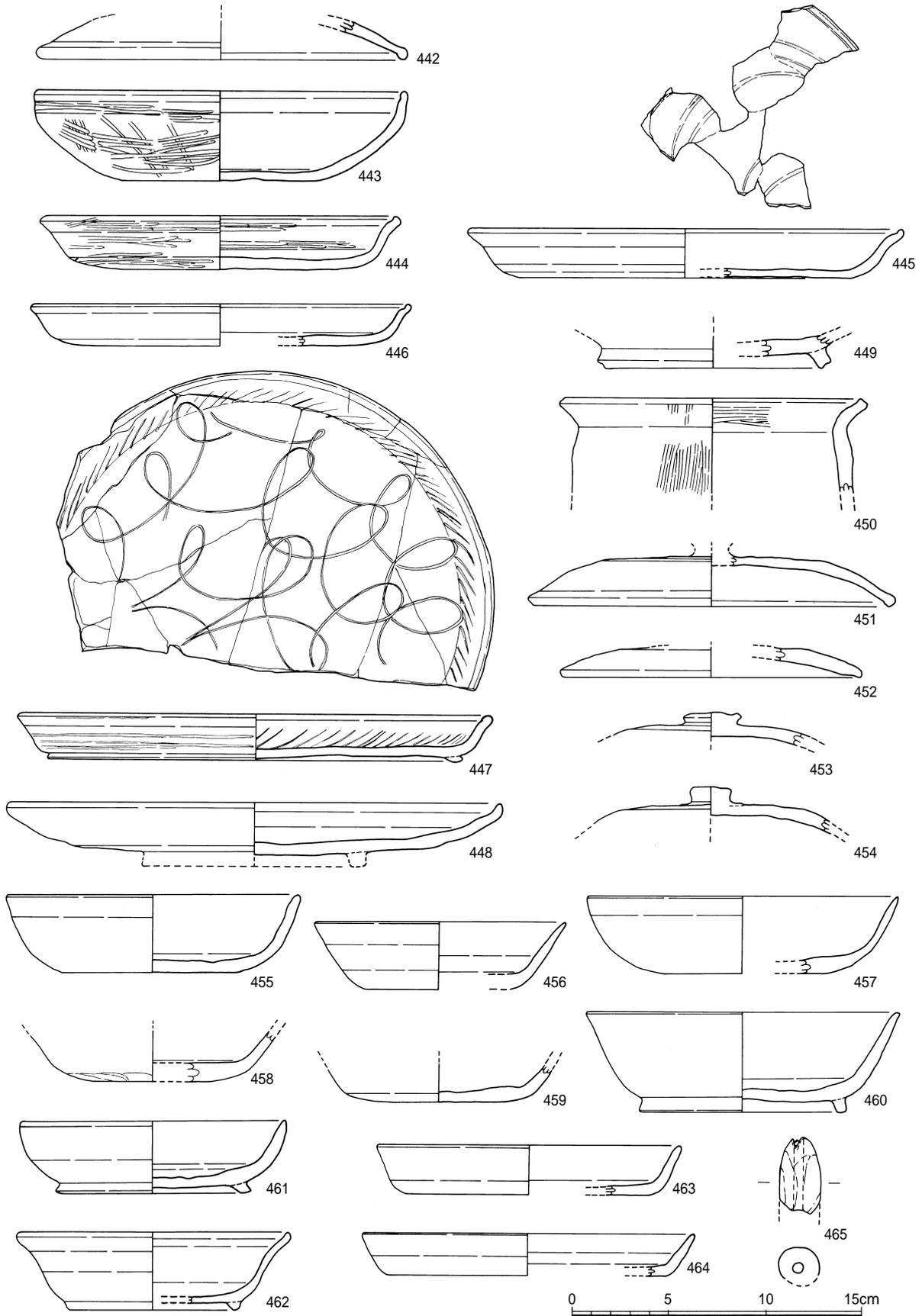


Fig.60 SX - 5 出土遺物実測図

できるが、全体的には摩耗が著しい。453・454は蓋の天井部であり、扁平な擬宝珠形のつまみが付く。つまみの径は461で3.0cm、462で2.2cmを測る。ともに摩耗が著しく、調整は不明である。455～457は杯である。455は1/2ほど残存し、口径15.2cm、器高4.0cm、底径9.4cmを測る。口縁部は内湾する体部から外上方へ真直ぐのびる。焼成が不良で、摩耗しており、調整は不明である。456は1/3ほど残存する。口径12.9cm、器高3.5cm、底径7.8cmを測り、口縁部は体部から外上方へ真直ぐのびる。内外面とも回転ナデ調整が確認できる。457は1/5ほど残存する。口径16.0cm、器高4.0cm、底径8.2cmを測り、口縁部はやや内湾する体部から外上方に真直ぐ上がる。摩耗が著しく調整は不明である。458・459は杯の底部で、458は底径5.8cmを測る。かなり厚めの底部を有し、内底面から体部にかけて回転ナデ調整が施される。外底面は回転ヘラ切りの後ナデ調整を施す。459は底径6.8cmを測る。内底面にはナデ調整、体部には回転ナデ調整が施される。外底面は回転ヘラ切り痕が残る。460～462は高台の付く杯である。460は1/2ほど残存する。口径16.0cm、器高5.2cm、底径10.6cmを測り、口縁部は体部から直線的にのびる。底部外端に高さ0.8cmの真下を向く高台が付く。体部には回転ナデ調整、内底面にはナデ調整が施される。外底面は回転ヘラ切り未調整である。461は2/3ほど残存する。口径13.5cm、器高3.8cm、底径10.1cmを測り、口縁部は体部から内湾して上がる。底部外端に高さ0.5cmの「八」の字状に開く高台が付く。内底面には若干のロクロ目が残り、体部内面には回転ナデ調整が確認できるが、外面は摩耗が著しく調整は不明である。462は1/4ほど残存し、口径13.9cm、器高4.0cm、底径8.6cmを測る。体部は平らな底部からやや内湾し、口縁部で若干外反する。底部外端には真下を向く小さな高台が付く。焼成は不良で全体に灰白色を呈する。調整も不明である。463・464は皿で、口縁部は体部から外上方に真直ぐ上がり、端部を丸く仕上げる。463は口径15.6cm、器高2.5cm、底径12.6cmを測り、焼成が悪く摩耗しており、調整は不明である。464は口径17.0cm、器高2.2cm、底径14.4cmを測り、口縁部に回転ナデ調整を施す。

土製品 (Fig.60 - 465)

465は管状土錘で1/2ほど残存する。紡錘形を呈し、端部には切り込みが2ヶ所確認できる。

▽ 自然流路

SR - 1

調査区南部中央で12.80mに渡って検出した自然流路で、北東から南西へ緩やかに傾斜しつつ、SR - 2と併行にのびる。また、南は調査区外に続き、幅は0.44～0.85m、深さ15cmを測り、断面は舟底形ないし逆三角形を呈する。埋土は灰オリーブ色砂質シルトでにぶい黄褐色シルトのブロックを含む。出土遺物には土師器片130数点、須恵器片70数点、緑釉陶器片1点、土製品2点がみられ、そのうち須恵器(466・467)2点、緑釉陶器(468)1点、土製品(469・470)2点が図示できた。

出土遺物

須恵器 (Fig.61 - 466・467)

466は蓋の天井部であり、扁平な擬宝珠形のつまみが付く。つまみの径は2.4cmを測る。467は高杯の脚台部である。調整は内面に回転ナデ調整の痕跡が残るのみである。

緑釉陶器 (Fig.61 - 468)

468は椀の口縁部片である。硬質であり、器壁はかなり薄い。口縁部は強く外反し、灰オリーブ色

の釉を施す。

土製品 (Fig.61 - 469・470)

469・470は管状土錘であり、どちらも紡錘形を呈する。469は2/3ほど残存する。須恵質であり、全幅1.2cmを測る。470は1/2ほど残存し、全幅2.5cmを測る。

SR - 2

調査区南部中央で15.80mに渡って検出した自然流路で、北東から南西へ緩やかに傾斜する。SR - 1に対して併行であり、南は調査区外に続き、幅0.46～1.36m、深さ15cmを測り、断面は舟底形又は、逆三角形状を呈する。埋土は灰オリーブ色砂質シルトで、埋土中にはにぶい黄褐色シルトのブロックを含む。出土遺物には土師器片130数点、須恵器片70数点、緑釉陶器片2点、土製品2点がみられ、そのうち須恵器(471・472)2点、緑釉陶器(473・474)2点、土製品(475)1点が図示できた。

出土遺物

須恵器 (Fig.61 - 471・472)

471は壺の頸部である。口縁部に向かってラッパ状に開くもので、内外面に回転ナデ調整を施す。体部の一部には自然釉が付着する。472は鉢で1/4ほど残存し、口径20.2cmを測る。体部上位で強く屈曲し、口縁部は内傾する。最大径を体部上位に持つ。内面には回転ナデ調整、外面は回転ヘラ削りの後回転ナデ調整を施す。

緑釉陶器 (Fig.61 - 473・474)

473は椀の口縁部である。硬質であり、口縁部は体部から真直ぐ外上方へ上がる。内外面には回転ナデ調整が施される。釉調は灰白色である。474は円盤状高台を有する椀の底部である。軟質であり、断面は浅黄橙色を呈する。摩耗が著しく調整及び底部切り離しは不明である。釉調はオリーブ黄色を呈し、高台下も含め全面施すが釉の剥落が著しい。

土製品 (Fig.61 - 475)

475は管状土錘で、紡錘形を呈する。一部欠損するが、全長5.1cm、全幅2.7cmを測る。

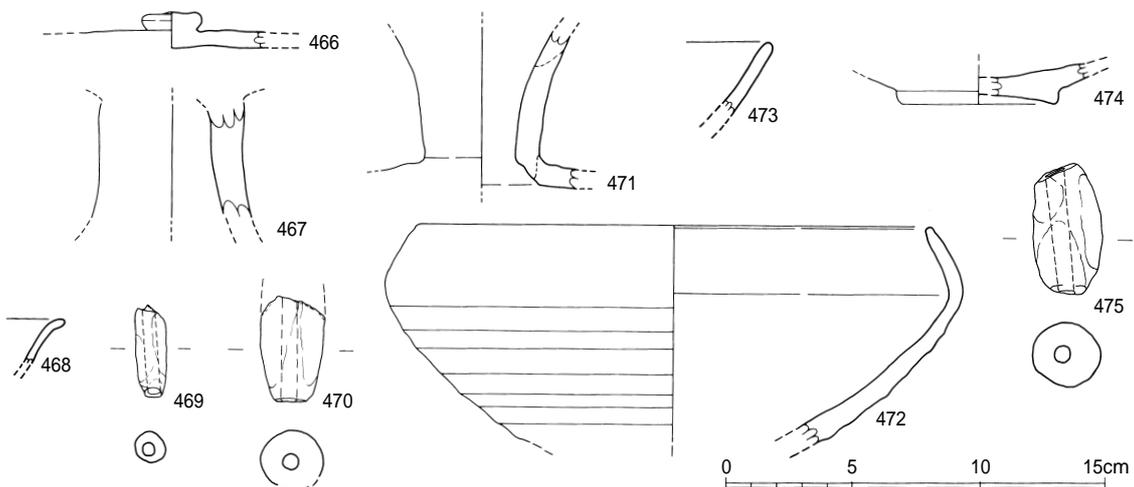


Fig.61 SR - 1・2 出土遺物実測図

vi 集石遺構

SC - 1

調査区北東部の集石遺構である。長径約1.30m,短径約1.00mの不整楕円形の範囲に1.0~5.0cm大の小礫が集中しており,ほぼ一定の高さにばらまかれたか,或は隙間なく敷き詰められたような状態で検出した。道や庭の敷石の可能性も考えられるが,検出範囲も狭いため明確なことは言えない。出土遺物には土師器片22点,須恵器片12点,緑釉陶器片2点がみられ,須恵器(476・477)2点が図示できた。

出土遺物

須恵器 (Fig.62 - 476・477)

476は蓋で1/4ほど残存し,口径18.8cmを測る。口縁部は厚めの天井部から斜め下方に緩やかに下がり,端部を下方に屈曲さす。外面は回転ナデ調整が施され,自然釉が若干付着する。内面は回転ナデ調整の後ナデ調整が施される。477は杯であり,1/4ほど残存する。口径13.4cm,器高3.2cm,底径8.7cmを測る。底部から体部へ強く屈曲し,口縁部は真直ぐ外上方へのびる。内面には回転ナデ調整を施すが,外面は摩耗が著しく調整は不明である。

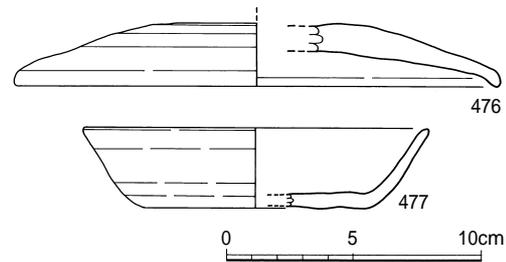


Fig.62 SC - 1 出土遺物実測図

中世

調査区西部にのみ遺構の拡がりを見せ,東部では後世に削平されたと考えられる。検出した遺構は,掘立柱建物跡3棟,柵列1列,土坑9基,溝跡5条,ピット3個であった。

i 掘立柱建物跡

SB - 1 (Fig.63)

調査区北西部で検出した梁間1間(1.65~1.75m),桁行3間(5.80m)の南北棟建物である。北西及び南西隅の柱穴が土坑に切られており確認できなかった。SB - 3の東隣に位置しており,棟方向はN - 4° - Eで,柱間寸法は梁(東西)が1.65mと1.75m,桁行(南北)が1.80~2.05mと様々である。柱穴は径18~26cmを測る円形で,柱穴の埋土は暗褐色砂質シルトで炭化物及び土器微細片を多く含む。出土遺物には土師質土器片6点がみられたが,復元図示できるものはなかった。

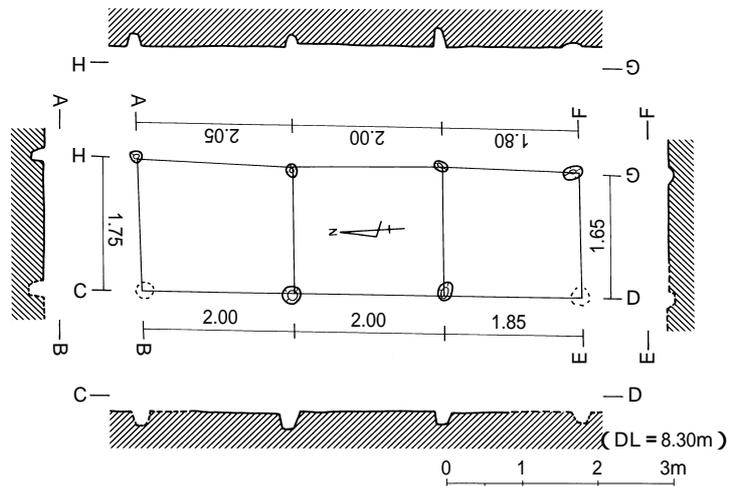


Fig.63 SB - 1

SB - 2 (Fig.64)

調査区南西部で検出した梁間2間(3.60~3.80m), 桁行2間(5.10~5.25m)の身舎に北庇付きの東西2間, 南北3間の東西棟建物である。西妻柱真中の柱穴が確認できなかった。棟方向はN - 88° - Wで, 柱間寸法は梁(南北)が1.75~1.95m, 桁行(東西)が2.50~2.85mと様々である。柱穴は径20~35cmを測る円形で, 柱穴の埋土は暗褐色砂質シルトで土器微細片を多く含む。出土遺物には須恵器細片4点, 瓦器片7点, 土師質土器片38点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

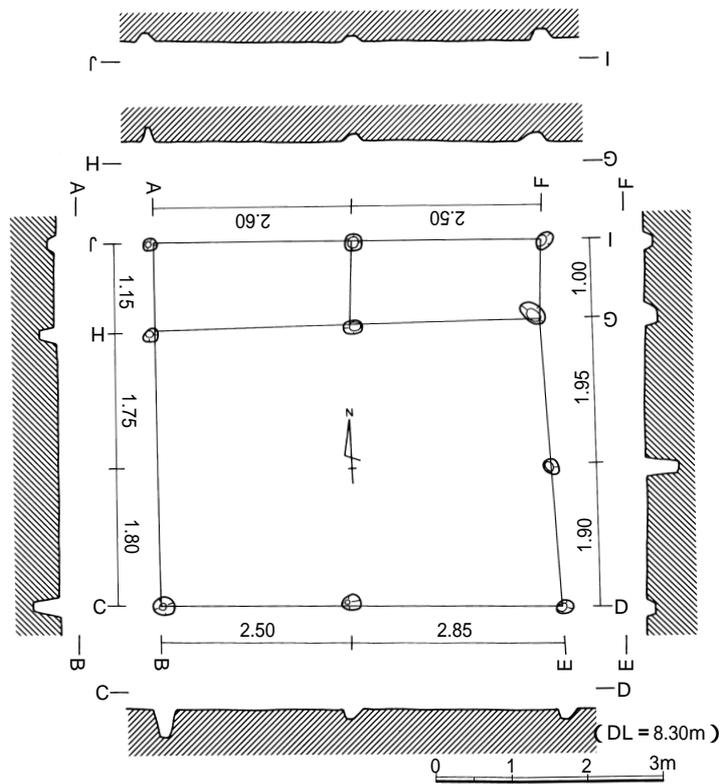


Fig.64 SB - 2

SB - 3 (Fig.65)

調査区北西部で検出した梁間2間(3.20~3.30m)以上, 桁行4間(6.00~6.10m)の南北棟建物である。西は調査区外にのびる。また, 北から2間目の柱通りに間仕切り柱が建つ。棟方向はN - 2° - Eで, 柱間寸法は梁(東西)が1.70m, 桁行(南北)が1.00~1.80mである。柱穴は径22~40cmを測る円形で, 柱穴の埋土は暗褐色砂質シルトで土器微細片及び炭化物を多く含む。出土遺物には須恵器片5点, 瓦器片6点, 土師質土器片64点, 瓦質土器片1点, 土製品1点, 鉄滓1点がみられたが, 復元図示できたものはなかった。

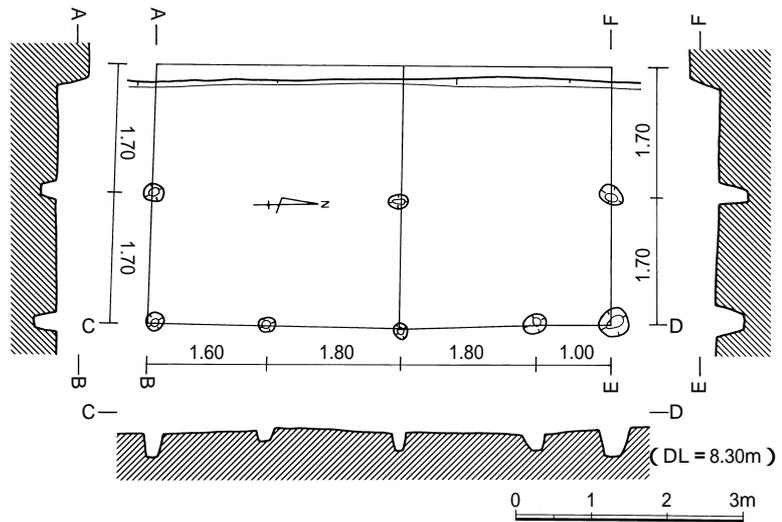


Fig.65 SB - 3

ii 塀・柵列跡

SA - 1 (Fig.66)

調査区西部で検出したL字形をなす塀跡である。SB - 2の北西に位置する。6間分(9.38m)を検出し, 柱間は1.20m, 1.60m, 1.70mである。柱穴は径30~45cmの円形であり, 埋土は暗褐色砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器片31点, 瓦器片2点を数えるが, 復元図示できるものはなかった。

iii 土坑

SK - 7 (Fig.67)

調査区南部で検出した楕円形の土坑で、土坑墓とみられる。規模は長径0.92m,短径0.66m,深さ28cmを測り,長軸方向はN - 33° - Eを示し,断面はU字形を呈する。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで,土壌分析の結果,遺構内のリン酸値は遺構周辺に比べ高い値を示しており,遺体が埋葬されていた可能性が高い。出土遺物は短刀(478)1点のみであった。

出土遺物

鉄製品 (Fig.71 - 478)

478は短刀で表面の錆化が進んでいる。全長32.0cm,刃部長23.1cmを測り,茎には柄の木質が若干残る。平造りで鋒はフクラ枯をなし,刃部はほぼ直線的にのびて関に至る。目釘穴は1つで茎尻から5.9cmの位置にある。

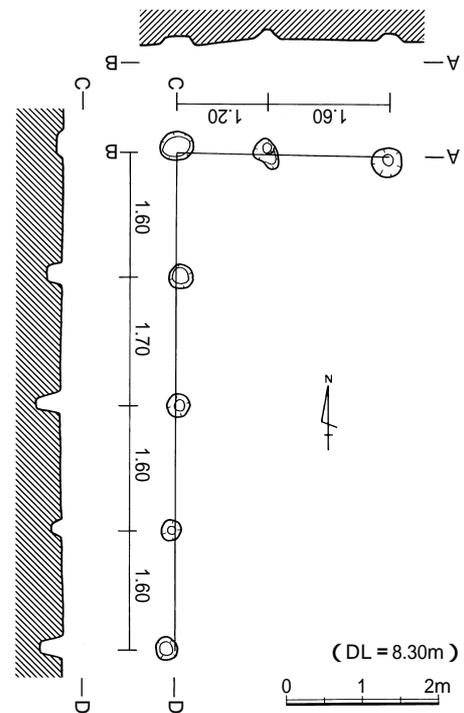


Fig.66 SA - 1

SK - 8

調査区西部中央で検出した舟形の土坑である。長径2.10m,短径0.59m,深さ15cmを測り,長軸方向はN - 76° - Wを示す。断面はU字形を呈し,埋土は暗褐色砂質シルトであった。出土遺物には須恵器片1点,土師質土器片40数点がみられたが,復元図示できるものはなかった。

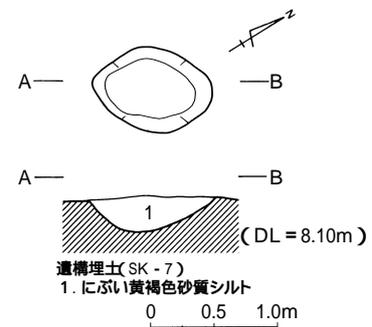


Fig.67 SK - 7

SK - 9 (Fig.68)

調査区西部で検出した不整楕円形の土坑で,北側をピットに切られていた。長径1.58m,短径1.30m,深さ1.01mを測り,長軸方向はN - 8° - Wを示す。断面は逆台形状を呈し,埋土は3層に分層でき,上層よりにぶい黄褐色砂質シルト,黄褐色粘土質シルト,褐色砂質シルトであった。遺物は最下層から須恵器片1点,瓦器片4点,土師質土器片55点,土製品1点が出土しており,土製品(479)1点が図示できた。

出土遺物

土製品 (Fig.71 - 479)

479は管状土錘であり,一部剥離する。紡錘形を呈し,全長4.8cm,全幅1.4cmを測る。

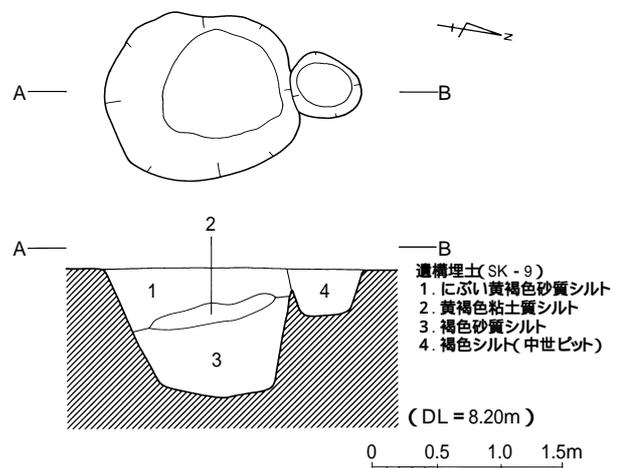


Fig.68 SK - 9

SK - 10

調査区西部で検出した不整円形の土坑であり,東側のピットを切っている。長径1.09m,

短径0.89m, 深さ8cmを測り, 長軸方向はN - 85° - Wを示す。埋土は暗褐色砂質シルトで, 炭化物及びマンガン粒, 土器微細片を含む。出土遺物には瓦器片7点, 土師質土器片17点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SK - 11 (Fig.69)

調査区西部で検出した楕円形の土坑で, 土坑墓とみられる。長径1.32m, 短径0.96m, 深さ20cmを測り, 長軸方向はN - 14° - Eを示す。断面は舟底形を呈し, 埋土は暗褐色砂質シルトで土器細片及び炭化物を多く含む。リン分析の結果, 遺構内のリン酸値が遺構周辺に比べ高く, 中でも中央部が特に高い値を示しており遺体が埋葬されていた可能性が高いものとみられる。出土遺物には瓦器片13点, 土師質土器片111点, 瓦質土器片1点, 短刀1点がみられ, 瓦質土器(480)1点, 短刀(481)1点が図示できた。

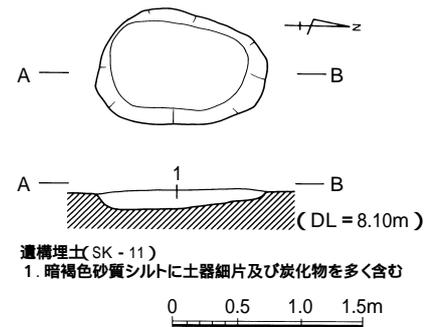


Fig.69 SK - 11

出土遺物

瓦質土器 (Fig.71 - 480)

480は羽釜の口縁部の破片である。口縁部は内傾し, 幅1.3cmを測る鍔が水平に付く。口縁部外面はヨコ方向のハケ調整, 内面はナデ調整で仕上げる。

鉄製品 (Fig.71 - 481)

481は短刀で, 表面の錆化はかなり進んでいる。全長26.7cm, 刃部長14.0cmを測る。平造りで鋒はフクラ枯をなし, 刃部はやや刃毀れがみられるものの, ほぼ直線的にのびて関に至る。目釘穴は2つで茎尻から5.5cm及び7.4cmの位置にある。

SK - 12

調査区西部で検出した楕円形の土坑であり, 土坑東側をピットに切られていた。長径1.01m, 短径0.64m, 深さ8cmを測り, 長軸方向はN - 89° - Wを示す。埋土は暗褐色砂質シルトである。出土遺物には須恵器片4点, 瓦器片11点, 土師質土器片69点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SK - 13

調査区西部で検出した円形の土坑で, 古代のピットを切っている。径0.96m, 深さ11cmを測り, 断面は舟底形を呈する。埋土は暗褐色砂質シルトである。出土遺物には須恵器細片1点, 瓦器片8点, 土師質土器片70点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SK - 14 (Fig.70)

調査区西端部で検出した土坑で, 西半分が調査区外にのびるが, 円形を呈するものと考えられる。径1.10m, 深さ28cmを測り, 断面は箱形を呈する。埋土は上下2層に分層でき, 上層は灰黄色粘土質シルトで, 下層は暗褐色粘土質シルトに黄橙色粘土質シルトのブロックを含むものであった。出土遺物には瓦器片37点,

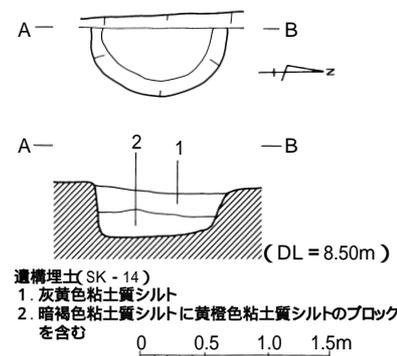


Fig.70 SK - 14

土師質土器片185点がみられ，瓦器(482)1点が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.71 - 482)

482は小皿で，1/4ほど残存する。口径8.0cm，器高1.8cm，底径4.0cmを測り，口縁部下にヨコナデ調整が施され，体部外面には指頭圧痕が残る。

SK - 15

調査区西端部で検出した土坑で，西半分が調査区外にのびるが，円形を呈するものと考えられる。径0.68m，深さ10cmを測り，断面は舟底形を呈する。埋土は暗褐色砂質シルトで土器細片及び炭化物

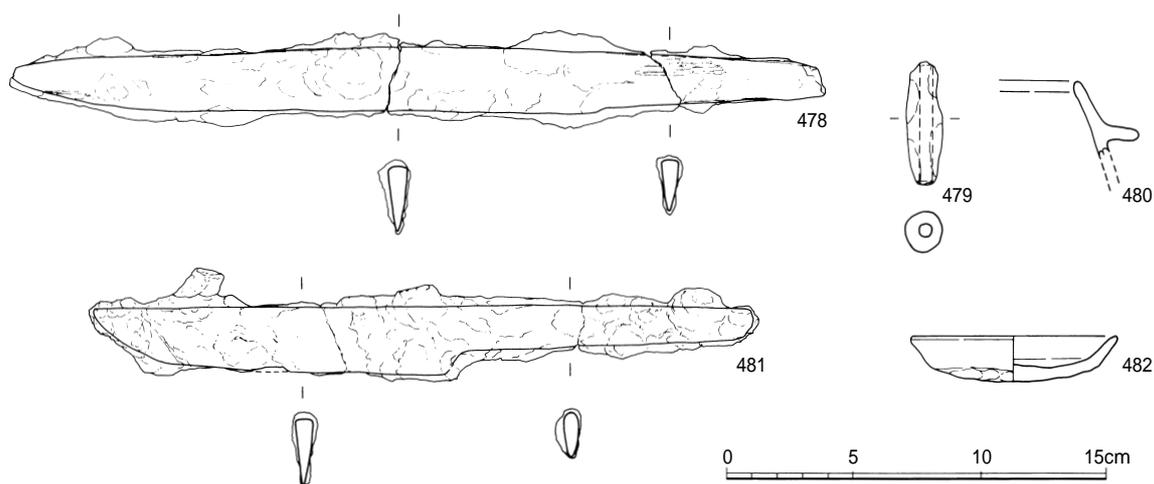


Fig.71 SK - 7・9・11・14 出土遺物実測図

Tab.3 A区土坑計測表

遺構番号	平面形態	規 模			長軸方向 (Nは真北)	時代	備考
		長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)			
SK - 1	楕円形	1.88	1.50	0.13	N - 68° - E	古代	
SK - 2	円形	1.08	—	0.89	—	古代	
SK - 3	隅丸方形	1.10	1.08	0.13	北	古代	
SK - 4	不整楕円形	2.08	1.89	0.26	N - 52° - W	古代	
SK - 5	舟形	2.46	0.40	0.06	N - 72° - W	古代	
SK - 6	隅丸方形	1.98	1.35	0.91	N - 79° - W	古代	
SK - 7	楕円形	0.92	0.66	0.28	N - 33° - E	中世	
SK - 8	舟形	2.10	0.59	0.15	N - 76° - W	中世	
SK - 9	不整楕円形	1.58	1.30	1.01	N - 8° - W	中世	
SK - 10	不整円形	1.09	0.89	0.08	N - 85° - W	中世	
SK - 11	楕円形	1.32	0.96	0.20	N - 14° - E	中世	
SK - 12	楕円形	1.01	0.64	0.08	N - 89° - W	中世	
SK - 13	円形	0.96	—	0.11	—	中世	
SK - 14	円形	1.10	—	0.28	—	中世	
SK - 15	円形	0.68	—	0.11	—	中世	

を含む。出土遺物には瓦器片8点,土師質土器片30数点,瓦質土器片1点がみられたが,復元図示できるものはなかった。

iv 溝跡

SD - 4 (Fig.72)

調査区南部で検出した溝で,東西2条に分かれるが,本来は1本の溝であったものと考えられる。19.10mに渡って検出したが,東は調査区外にのびる。幅は12~55cm,深さ6~11cmを測り,断面は舟底形を呈する。基底面は平坦で西から東へ緩やかに傾斜する。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで,出土遺物には須恵器片2点,土師質土器片27点,白磁片1点,砥石1点がみられ,そのうち土師質土器(483)1点,白磁(484)1点が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.73 - 483)

483は碗の底部である。底部はほぼ完存し,底径は9.0cmを測る。高台は「八」の字状に開き0.9cmの高さを有する。体部は内湾しつつ上がるが,口縁部は欠損する。

白磁 (Fig.73 - 484)

484は碗の口縁部で,1/8ほど残存し,強く外反する。器面には灰オリーブ色の釉を施す。

SD - 5 (Fig.72)

調査区南部で検出した溝で,SD - 4に併行に走る。東西2条に分かれるが,本来は1本の溝であったものと考えられ,9.20mに渡って検出した。SD - 5は,SD - 4とともに側溝であった可能性が考えられる。幅は15~37cm,深さ5~7cmを測り,基底面は平坦で,断面は舟底形を呈する。埋土は暗褐色砂質シルトで,出土遺物には須恵器片1点,瓦器片1点,土師質土器細片40数点,青磁片1点がみられ,そのうち青磁(485)1点が図示できた。

出土遺物

青磁 (Fig.73 - 485)

485は碗の体部であり,内外面には櫛描文を有する。外底面を除いて,灰オリーブ色の釉を施す。

SD - 6 (Fig.72)

調査区南西部で南北14.05mに渡って検出した溝で,南は調査区外にのびる。SD - 4及びSD - 5と直交しており,それらとの関係が考慮される。幅は45~60cm,深さ9~18cmを測り,断面は舟底形を呈する。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで土器微細片及び炭化物を含む。出土遺物には須恵器片18点,瓦器片19点,土師質土器片120数点,備前焼片1点,白磁片1点,鉄滓3点がみられ,そのうち備前焼(486)1点が図示できた。

出土遺物

備前焼 (Fig.73 - 486)

486は鉢の口縁部で,内外面にはヨコナデ調整を施す。口縁端部には1条の凹みを有する。

SD - 7 (Fig.72)

調査区南西部で東西8.30mに渡って検出した溝である。西は調査区外にのび,東はSK - 6を切る。幅は0.35~1.00m,深さ20~30cmを測り,断面は舟底形を呈する。埋土は灰黄褐色砂質シルトで,出

土遺物には土師器片10点,須恵器片15点,黒色土器片4点,瓦器片40数点,土師質土器片150数点,白磁片1点,青磁片1点,鉄滓3点がみられ,そのうち土師器(487)1点,黒色土器(488)1点が図示できた。

出土遺物

土師器 (Fig.73 - 487)

487は甕の口縁部である。やや開く口縁部で端部は面をなす。口縁部にはヨコ方向のハケ調整,体部外面にはタテ方向のハケ調整,内面にはナデ調整を施す。

黒色土器 (Fig.73 - 488)

488は内黒の椀で,口径14.3cm,器高5.4cm,底径7.6cmを測る。口縁部は外上方に真直ぐ上がり,外面にヨコナデ調整を施す。底部には断面三角形の小さな高台が付く。内面にはヘラ磨きを施すが,その他の調整は摩耗が著しく不明である。

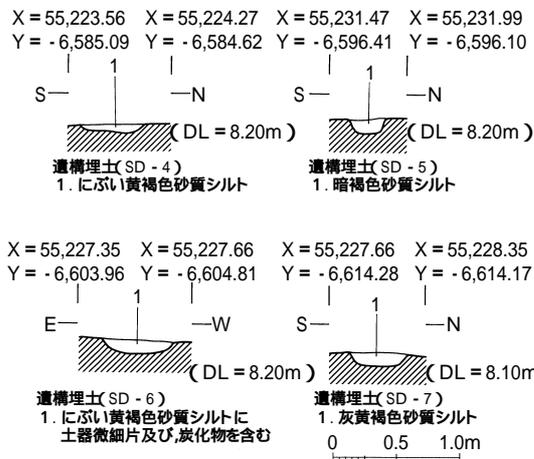


Fig.72 SD - 4~7 セクション図

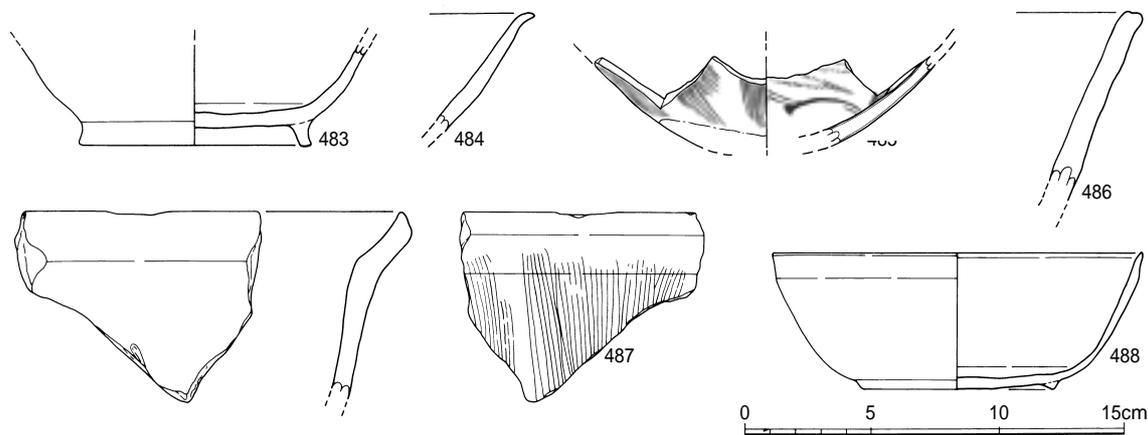


Fig.73 SD - 4~7 出土遺物実測図

SD - 8

調査区西部で南北4.60mに渡って検出した溝で,P-2を切っている。また,SB-1及びSB-2と併行に走っており,それらとの関係が考慮される。幅は25~40cm,深さ7~18cmを測り,断面はU字形を呈する。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトでマンガン粒を多く含む。出土遺物には瓦器片3点,土師質土器細片がみられたが,復元図示できるものはなかった。

▼ピット

P - 3

調査区北部で検出したピットである。円形を呈し,径23cm,深さ13cmを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで,出土遺物には瓦器(489)1点があり図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.74 - 489)

489は椀で,1/4ほど残存する。口径14.1cm,器高4.7cm,底径4.5cmを測り,底部には断面三角形の

しっかりした高台が付く。体部外面には指頭圧痕が残り、口縁部外面にはヨコナデ調整を弱く施す。内底面には併行線状及び連結輪状のヘラ磨きを施す。

P - 4

調査区西部で検出したピットである。円形を呈し、径22cm、深さ52cmを測る。埋土は暗褐色砂質シルトで土器微細片、炭化物及びマンガン粒を含む。出土遺物には土師質土器(490)1点があり図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.74 - 490)

490は杯の底部であり、内底面にはナデ調整、体部外面には回転ナデ調整を施す。底径は4.7cm、高台は1.7cmを測る高台で、回転糸切り痕を残す。

P - 5

調査区西部で検出したピットである。不整楕円形を呈し、長径32cm、短径24cm、深さ41cmを測る。埋土は暗褐色砂質シルトで灰色シルトのブロックを含む。出土遺物には白磁(491)1点があり図示できた。

出土遺物

白磁 (Fig.74 - 491)

491は碗の底部で、底径6.6cmを測る。底部のみがほぼ完存し、1.0cmを測る高めの高台を有す。内底面のみ明オリブ灰色の釉を施す。

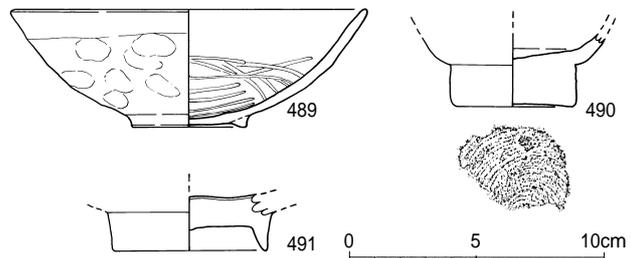


Fig.74 P - 3 ~ 5 出土遺物実測図

(2) B区

B区は立地的にみれば、光永・岡ノ下遺跡において最も標高の高い地点である。B区において検出した遺構はすべて中世に属するものであり、掘立柱建物跡5棟、柵列4列、土坑28基、溝跡13条、ピット5個であった。

中世

i 掘立柱建物跡

SB - 4 (Fig.75)

調査区北東部で検出した梁間1間(1.90m)、桁行2間(3.20m)の南北棟建物である。東側柱真中の柱穴が確認できなかった。棟方向はN - 1° - Eで、柱間寸法は梁(東西)が1.90m、桁行(南北)が1.60mである。柱穴は径25~38cmを測る円形で、柱穴の埋土は暗褐色砂質シルトである。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片16点がみ

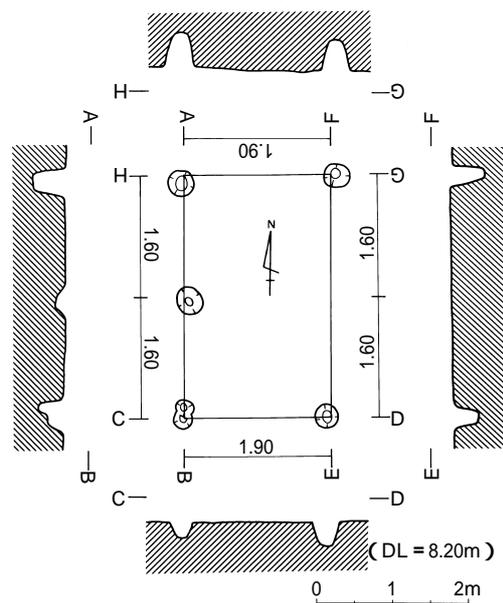


Fig.75 SB - 4

られ、土師質土器(492)1点が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.88 - 492)

492は小皿で、1/2ほど残存する。口径7.4cm、器高1.5cm、底径4.2cmを測り、口縁部は外上方へ真直ぐ上がる。底部切り離しは回転系切り、口縁部には回転ナデ調整を施す。

SB - 5 (Fig.76)

調査区東部で検出した梁間2間(4.20~4.30m)、桁行3間(5.20~5.50m)の身舎に北庇付きの東西3間、南北3間の東西棟建物で、東から1間目の南妻柱の柱穴が確認できなかった。棟方向はN - 84° - Wで、柱間寸法は梁(南北)が1.80~2.40m、桁行(東西)が1.25~2.15mである。柱穴は径25~46cmを測る円形で、柱穴の埋土は褐色から褐灰色の粘土質

シルトであった。出土遺物には須恵器細片2点、土師質土器片76点、瓦器片2点、鉄釘1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SB - 6 (Fig.77)

調査区南部で検出した梁間2間(3.60m)、桁行2間(3.90~4.00m)の南北棟建物である。南北の妻柱真中の柱穴が確認できなかった。棟方向はN - 10° - Eで、柱間寸法は梁(東西)が1.80m、桁行(南北)が1.90~2.10mである。柱穴は径26~35cmを測る円形で、柱穴の埋土は暗褐色粘土質シルトである。出土遺物には黒色土器細片1点、瓦器片2点、土師質土器片15点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

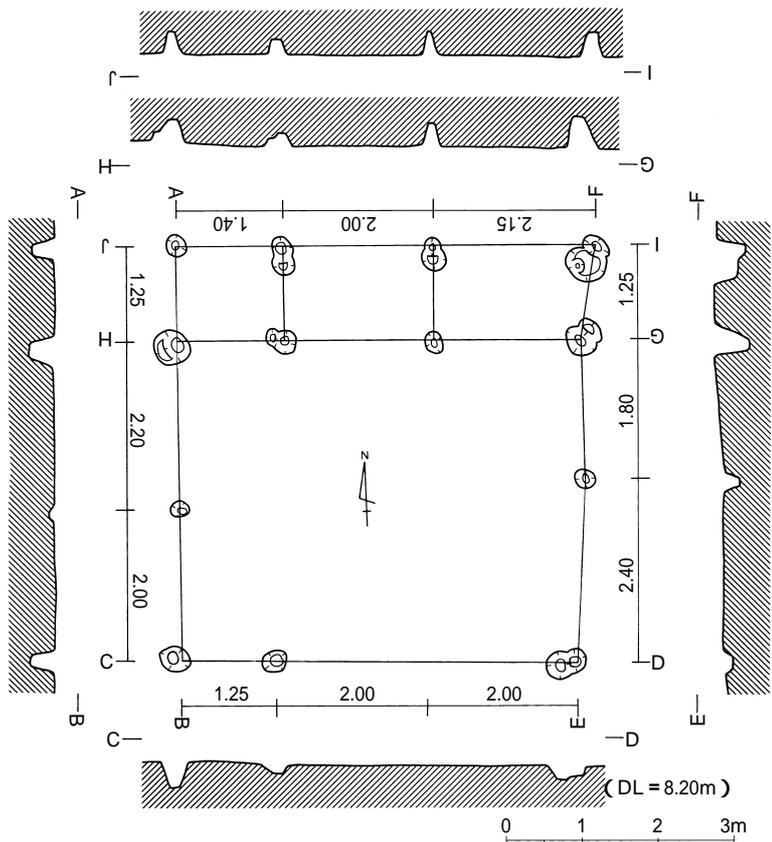


Fig.76 SB - 5

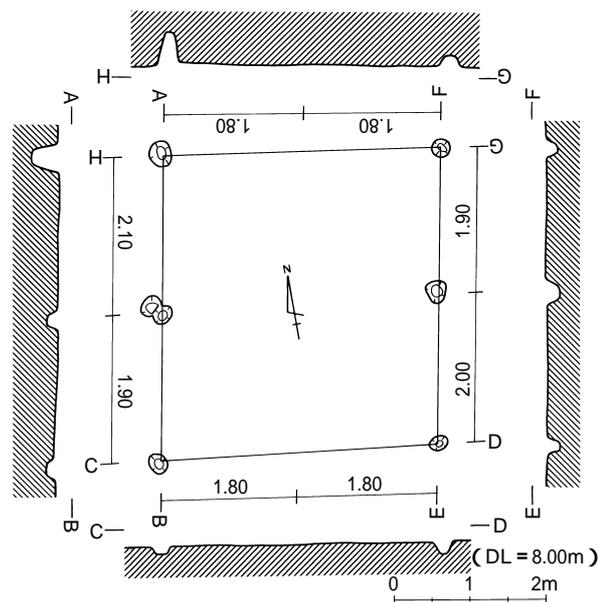


Fig.77 SB - 6

SB - 7 (Fig.78)

調査区南部で検出した梁間2間(4.50m) , 桁行2間(4.70m)の東西棟建物である。南北の側柱真中の柱穴が確認できなかった。棟方向はN - 82° - Wで、柱間寸法は梁(南北)が2.10mと2.40m、桁行(東西)が2.35mである。柱穴は径30 ~ 60cmを測る円形で、柱穴の埋土は暗褐色粘土質シルトである。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片3点、土師質土器片42点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

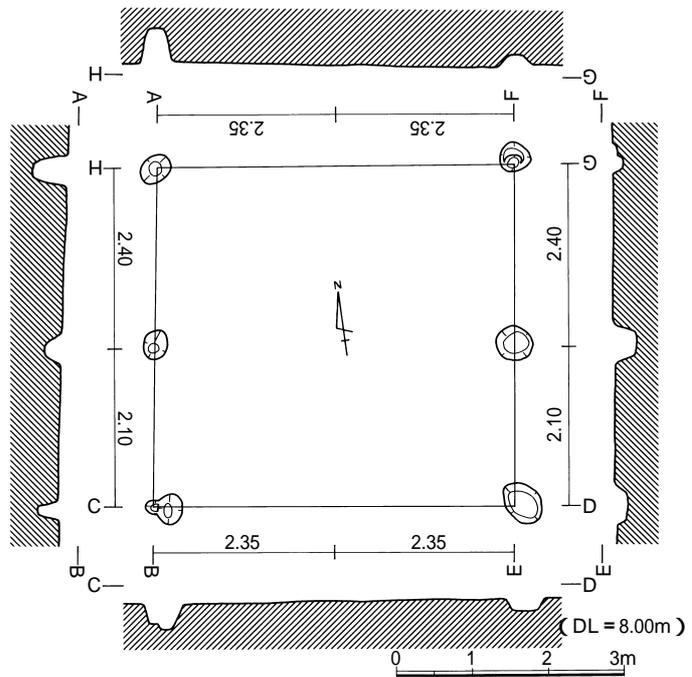


Fig.78 SB - 7

SB - 8 (Fig.79)

調査区北部で検出した梁間2間(3.60m) , 桁行2間(4.70m)の東西棟建物である。南西隅の柱穴が確認できなかった。棟方向はN - 84° - Wで、柱間寸法は梁(南北)が1.80m、桁行(東西)が2.30mと2.40mである。柱穴は径20 ~ 38cmを測る円形で、柱穴の埋土は褐色粘土質シルトである。出土遺物には瓦器片2点、土師質土器片15点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

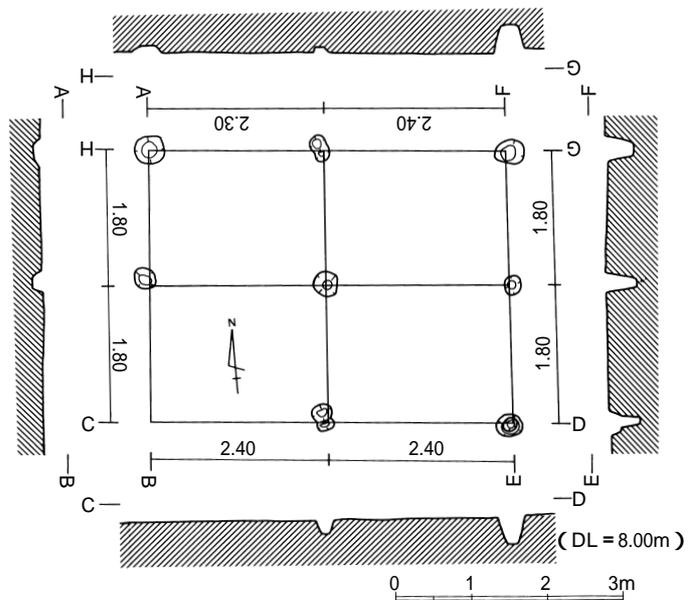


Fig.79 SB - 8

ii 塀・柵列跡

SA - 2 (Fig.80)

調査区北東部で検出した南北塀(N - 1° - E)である。SB - 4に伴うものと考えられ、建物の西に位置する。2間分を検出したが、北は調査区外にのび、全長4.00m以上を測る。柱間寸法は2.00mであった。柱穴は径37.0 ~ 40.0cmの円形で、埋土は暗褐色粘土質シルトであった。出土遺物には瓦器片4点、土師質土器片18

点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

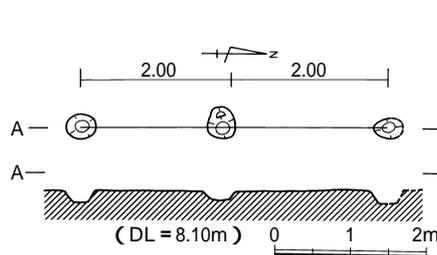


Fig.80 SA - 2

SA - 3 (Fig.81)

調査区北東部で検出した東西塀(N - 42° -

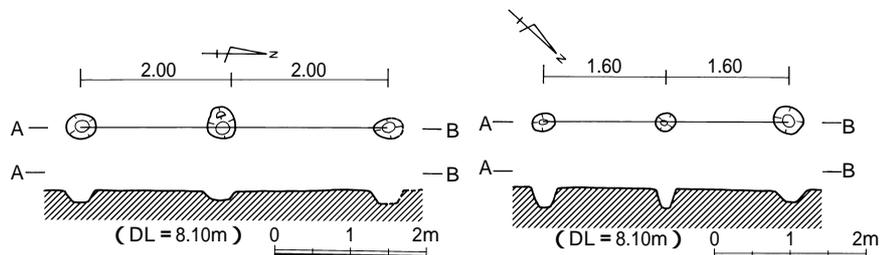


Fig.81 SA - 3

W)である。2間分(3.20m)検出され、柱間寸法は1.60mであった。柱穴は径30~38cmの円形で、埋土は暗褐色粘土質シルトであった。出土遺物には瓦器片5点、土師質土器片35点がみられ、土師質土器(493)1点が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.88 - 493)

493は小皿で、2/3ほど残存する。口径7.1cm、器高1.8cm、底径4.8cmを測り、口縁部は外上方へ真直ぐ上がる。底部切り離しは回転糸切り、口縁部には回転ナデ調整を施す。

SA - 4 (Fig.82)

調査区東部で検出したL字形をなす堀跡である。SB - 6の東南に位置する5間分(9.46m)を検出したが、北から2間目の柱穴が検出できなかった。柱間は、1.70~2.10mである。柱穴は25~50cmの円形で、埋土は褐色から褐灰色の粘土質シルトである。出土遺物には土師質土器片76点、瓦器細片1点、白磁片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

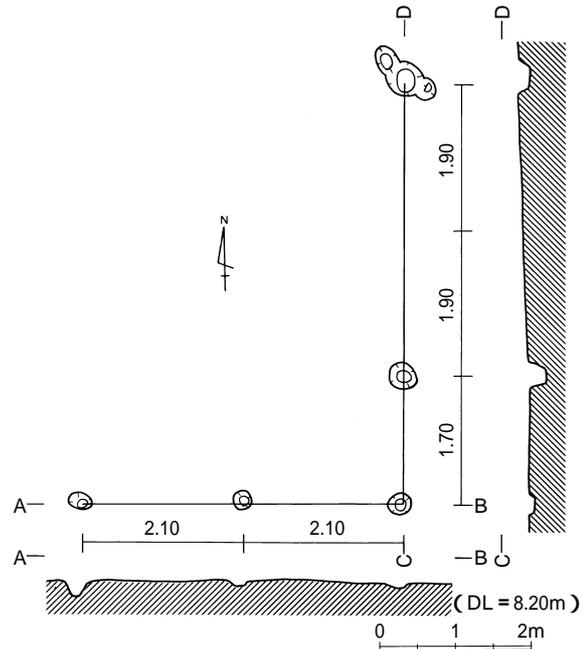


Fig.82 SA - 4

SA - 5 (Fig.83)

調査区南部で検出した東西堀(N - 5° - E)である。SB - 7に伴うものと考えられ、建物の西に位置する。3間分(4.80m)検出され、柱間寸法は1.30~1.90mと様々であった。柱穴は径32~38cmの円形で、埋土は暗褐色粘土質シルトであった。出土遺物には黒色土器細片1点、瓦器細片4点、土師質土器片19点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

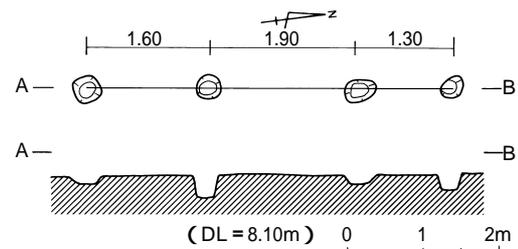


Fig.83 SA - 5

Tab.4 A区・B区堀・柵列跡計測表

遺構番号	規模			方向 (Nは真北)	備考
	柱穴数(個)	全長(m)	柱間距離(m)		
SA - 1	7	9.38	1.20~1.70		L字形
SA - 2	3以上	4.00以上	2.00	N - 1° - E	
SA - 3	3	3.20	1.60	N - 42° - W	
SA - 4	5	9.46	1.70~2.10		L字形
SA - 5	4	4.80	1.30~1.60	N - 5° - E	

iii 土坑

SK - 16

調査区北東部で検出した土坑で、東半分が調査区外に出ており、円形を呈するものと考えられる。径1.04m、深さ15cmを測り、断面は舟底形を呈する。埋土は褐色粘土質シルトで埋土下部に黄褐色粘土質シルトのブロックを含む。出土遺物には瓦器片9点、東播系須恵器片1点、土師質土器片21点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 17

調査区北東部で検出した方形の土坑で、調査区外の東へ続くものと考えられる。長辺1.20m以上、短辺1.13m、深さ16cmを測り、長軸方向はN - 87° - Wを示す。埋土は暗褐色粘土質シルトで土器細片、炭化物及び黄褐色粘土質シルトのブロックを含む。出土遺物には瓦器片4点、土師質土器片29点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 18

調査区北東部で検出した円形の土坑で、SK - 16の西に位置し、径1.09m、深さ25cmを測る。断面は舟底形を呈し、埋土は褐色粘土質シルトで埋土下部に黄褐色粘土質シルトのブロックを含む。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片20点、土師質土器片110数点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 19 (Fig.84)

調査区北東部で検出した円形の土坑で、SK - 20の東に位置し、径0.96m、深さ11cmを測る。断面は逆台形状を呈し、埋土は暗褐色粘土質シルトで黄褐色粘土質シルトのブロックを多く含む。出土遺物には須恵器片3点、瓦器片70数点、土師質土器片180数点がみられ、瓦器(494~496)3点が図示できた。

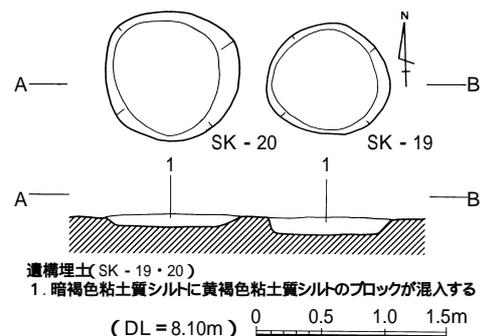


Fig.84 SK - 19・20

出土遺物

瓦器 (Fig.88 - 494 ~ 496)

3点とも小皿であり、すべて完存する。体部には指頭圧痕が明瞭に残り、口縁部にはヨコナデ調整を施す。部分的に炭素の吸着が悪い。494は口径9.1cm、器高1.7cm、底径4.8cmを測り、内面には併行線状及び連結輪状のヘラ磨きを施す。495は口径8.0cm、器高1.8cm、底径4.0cmを測り、摩耗しており不明瞭ながら内面のヘラ磨きが確認できる。496は口径8.2cm、器高1.7cm、底径4.2cmを測る。内面は摩耗が著しく、調整は不明である。

SK - 20 (Fig.84)

調査区北東部で検出した円形の土坑で、SK - 19の西に位置し、SD - 11の西端部を切る。径1.08m、深さ8cmを測り、断面は舟底形を呈する。埋土は暗褐色粘土質シルトで黄褐色粘土質シルトのブロックを含む。出土遺物には瓦器片4点、土師質土器片74点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 21

調査区北東部で検出した円形の土坑で、SD - 12を切る。径62cmと小さいが深さは41cmを測る。断面はU字状を呈し、埋土は褐色粘土質シルトである。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片21点、土師質土器片63点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 22

調査区北東部で検出した楕円形の土坑である。長径0.69m、短径0.60m、深さ19cmを測り、長軸方向はN - 61° - Eを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は暗褐色粘土質シルトである。出土遺物には瓦器片8点、土師質土器片51点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 23

調査区北東部で検出した楕円形の土坑で、長径0.81m、短径0.67m、深さ13cmを測り、長軸方向はN - 23° - Wを示す。埋土は暗褐色粘土質シルトで、出土遺物には瓦器片4点、東播系須恵器片1点、土師質土器片16点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 24 (Fig.85)

調査区北東部で検出した方形の土坑で、南西部をSD - 12に切られており、底面でピットを2個検出した。長径2.36m、短径1.28m、深さ7cmを測り、長軸方向はN - 6° - Eを示す。埋土は暗褐色粘土質シルトで、出土遺物には瓦器片21点、土師質土器片74点がみられ、土師質土器(497)1点が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.88 - 497)

497は小皿で、1/8ほど残存する。口径8.6cm、器高1.7cm、底径4.4cmを測る。口縁部は外上方へ真直ぐのび、端部を丸く仕上げる。底部は回転ヘラ切りである。摩耗が著しく調整は不明である。

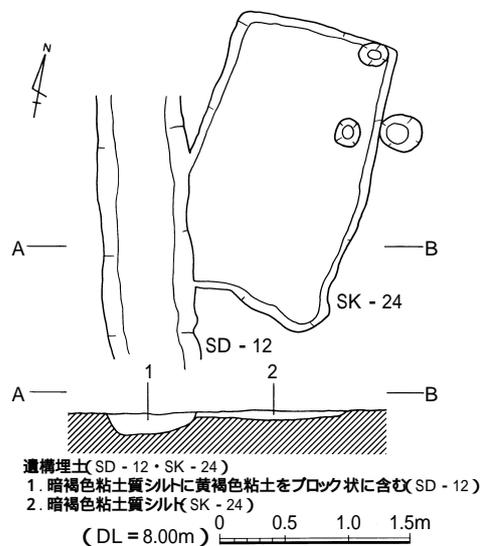


Fig.85 SK - 24・SD - 12

SK - 25

調査区北東部で検出した円形の土坑で、SK - 24の西に位置し、SD - 12を切っていた。径1.24m、深さ10cmを測り、断面はU字状を呈し、埋土は暗褐色粘土質シルトで、出土遺物には瓦器片14点、土師質土器片63点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 26

調査区北東部で検出した隅丸方形の土坑で、SK - 25の西に位置し、SK - 27、SD - 13に切られていた。長辺1.58m以上、短辺1.15m、深さ5cmを測り、長軸方向はN - 73° - Wを示す。底面でピット1個を検出した。埋土は暗褐色粘土質シルトで、出土遺物には瓦器片10点、土師質土器片50数点、白磁片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 27

調査区北東部で検出した楕円形の土坑で、SD - 13とピットに切られていた。長径1.00m以上、短

径0.80m以上、深さ6cmを測り、長軸方向はN - 37° - Eを示す。埋土は暗褐色粘土質シルトで、出土遺物は土師質土器片18点のみであり、復元図示できるものはなかった。

SK - 28・29

調査区北東部で検出した楕円形の土坑で、SD - 13の南西に位置し、SK - 28がSK - 29を切っていた。断面は舟底形を呈し、埋土は褐色粘土質シルトである。SK - 28は長径0.88m、短径0.76m、深さ14cmを測り、長軸方向はN - 34° - Wを示す。出土遺物には土師質土器片26点、瓦器片6点がみられた。SK - 29は長径1.24m、短径0.90m以上、深さ11cmを測り、長軸方向はN - 21° - Wを示す。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片4点、土師質土器片32点がみられた。ともに復元図示できるものはなかった。

SK - 30・31

調査区北東部で検出した楕円形の土坑で、SD - 13の南西に位置する。断面は舟底形を呈し、埋土は褐色粘土質シルトである。SK - 30は長径1.08m、短径0.90m、深さ11cmを測り、長軸方向はN - 58° - Wを示す。出土遺物には土師質土器片17点、瓦器片6点がみられた。SK - 31の規模は長径1.08m、短径0.87m、深さ9cmを測り、長軸方向はN - 62° - Wを示す。出土遺物には瓦器片3点、土師質土器片17点がみられた。ともに復元図示できるものはなかった。

SK - 32

調査区南部で検出した楕円形の土坑である。長径0.96m、短径0.86m、深さ26cmを測り、長軸方向はN - 36° - Eを示す。断面はU字状を呈し、埋土は暗褐色粘土質シルトである。出土遺物は土師質土器細片数点のみで復元図示できるものはなかった。

SK - 33～36

調査区南部で検出した円形の土坑である。SK - 33はSD - 15、SK - 35はSD - 20、SK - 36はSD - 21をそれぞれ切っている。規模は径0.80～0.96m、深さ8～14cmで、すべて断面は舟底形を呈し、埋土は暗褐色粘土質シルトであった。出土遺物は、SK - 33が土師質土器細片数点のみ、SK - 34が緑釉陶器片1点、白磁片1点、青磁片1点、SK - 35が土師質土器片5点のみ、SK - 36が瓦器片1点、土師質土器片3点であったが、復元図示できるものはなかった。

SK - 37～40

調査区西部で検出した円形の土坑で、SD - 17とSD - 20の間に位置し、SK - 38・40はSD - 20を、SK - 39はSD - 17をそれぞれ切っていた。規模は径0.90～1.00m、深さ13～24cmを測る。すべて断面は舟底形を呈し、埋土は暗褐色粘土質シルトであった。出土遺物は、SK - 37が須恵器片4点、黒色土器片1点、瓦器片6点、土師質土器片40点、SK - 38が瓦器片3点、土師質土器片43点、SK - 39が須恵器片1点、瓦器片1点、土師質土器片26点、SK - 40が瓦器片1点、土師質土器片21点、白磁片1点であったが、復元図示できるものはなかった。

SK - 41

調査区西部で検出した楕円形の土坑で、SD - 17を切っていた。長径1.15m、短径0.77m、深さ10cmを測り、長軸方向はN - 54° - Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は暗褐色粘土質シルトで、出土遺物には瓦器片2点、土師質土器片27点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 42

調査区西部で検出した楕円形の土坑で、SD - 14を切っていた。長径2.04m、短径0.70m、深さ38cmを測り、長軸方向はN - 23° - Wを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は暗褐色粘土質シルトで、出土遺物には須恵器片4点、瓦器片17点、土師質土器片120数点、備前焼片1点、青磁片1点、鉄滓1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 43 (Fig.86)

調査区北西部で検出した楕円形の土坑である。長径1.20m、短径0.84m、深さ14cmを測り、長軸方向はN - 9° - Eを示す。断面は箱形を呈する。埋土は2層に分層でき、上層が褐色粘土質シルト、下層が暗灰黄色粘土質シルトである。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片25点がみられ、上層から出土した土師質土器(498)1点が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.88 - 498)

498は杯の底部で、底径6.4cmを測り、外面には回転糸切り痕が残る。摩耗が著しく調整は不明である。

iv 溝跡

SD - 9 (Fig.87)

調査区北東部で東西3.00mに渡って検出した溝で、SB - 5との関連が考慮される。幅は15~34cm、深さ3~10cmを測り、断面は舟底形を呈する。埋土は暗褐色砂質シルトで、出土遺物には土師質土器片53点、須恵器片1点、瓦器片22点、白磁片1点がみられ、白磁(499)1点が図示できた。

出土遺物

白磁 (Fig.88 - 499)

499は玉縁状口縁を持つ碗の口縁部で、口径15.0cmを測る。内外面に灰オリーブ釉を施す。

SD - 10

調査区北東部で東西7.14mに渡って検出した溝で、西はSD - 12に切られており、東は調査区外にのびる。幅は27~46cm、深さ1~10cmを測る浅い溝で、西から東へ緩やかに傾斜する。埋土は褐黄色粘土質シルトで黄褐色シルトの小ブロックを含む。出土遺物には須恵器片2点、瓦器片10点、土師質土器片70数点、土製品1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD - 11

調査区北東部で南北7.63mに渡って検出した溝で、中央部をSD - 2・3が、東部をSK - 20が切っていた。幅は24~58cm、深さ7~14cmを測り、断面はU字形を呈する。埋土は褐色粘土質シルトで、出土遺物には瓦器片2点、土師質土器片10数点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD - 12 (Fig.85・87)

調査区北東部で南北21.90mに渡って検出した溝で、蛇行するようにのび、SK - 21・25に切られ、SD - 8・10・13を切っていた。幅は34~90cm、深さ13~20cmを測り、断面は舟底形を呈する。基底面は平坦で、南(7.800m)から北(7.450m)へ緩やかに傾斜する。埋土は暗褐色粘土質シルトで、出土遺物には須恵器片6点、緑釉陶器片1点、瓦器片140数点、土師質土器片490数点、白磁片4点、青磁片2点、

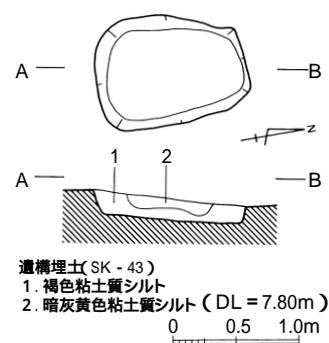


Fig.86 SK - 43

土製品3点,鉄製品1点がみられ,瓦器(500)1点,土製品(501)1点が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.88 - 500)

500は椀の口縁部で,口径15.0cmを測る。体部外面には指頭圧痕が残り,口縁部外面にはヨコナデ調整を施す。内面にはヘラ磨きが施されるが,摩耗しており不明瞭である。

土製品 (Fig.88 - 501)

501は管状土錘で,ほぼ完存する。円筒形を呈し,全長4.8cm,全幅1.4cmを測る。

Tab.5 B区土坑計測表

遺構番号	平面形態	規 模			長軸方向 (Nは真北)	時代	備考
		長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)			
SK - 16	円形	1.04	————	0.15	————	中世	
SK - 17	方形	(1.20)	1.13	0.16	N - 87° - W	中世	
SK - 18	円形	1.09	————	0.25	————	中世	
SK - 19	円形	0.96	————	0.11	————	中世	
SK - 20	円形	1.08	————	0.08	————	中世	
SK - 21	円形	0.62	————	0.41	————	中世	
SK - 22	楕円形	0.69	0.60	0.19	N - 61° - E	中世	
SK - 23	楕円形	0.81	0.67	0.13	N - 23° - W	中世	
SK - 24	方形	2.36	1.28	0.07	N - 6° - E	中世	
SK - 25	円形	1.24	————	0.10	————	中世	
SK - 26	隅丸方形	1.58	1.15	0.05	N - 73° - W	中世	
SK - 27	楕円形	(1.00)	(0.80)	0.06	N - 37° - E	中世	
SK - 28	楕円形	0.88	0.76	0.14	N - 34° - W	中世	
SK - 29	楕円形	1.24	(0.90)	0.11	N - 21° - W	中世	
SK - 30	楕円形	1.08	0.90	0.11	N - 58° - W	中世	
SK - 31	楕円形	1.08	0.87	0.09	N - 62° - W	中世	
SK - 32	楕円形	0.96	0.86	0.26	N - 36° - E	中世	
SK - 33	円形	0.96	————	0.12	————	中世	
SK - 34	円形	0.90	————	0.10	————	中世	
SK - 35	円形	0.84	————	0.14	————	中世	
SK - 36	円形	0.80	————	0.08	————	中世	
SK - 37	円形	0.90	————	0.24	————	中世	
SK - 38	円形	0.95	————	0.14	————	中世	
SK - 39	円形	0.92	————	0.19	————	中世	
SK - 40	円形	1.00	————	0.13	————	中世	
SK - 41	楕円形	1.15	0.77	0.10	N - 54° - W	中世	
SK - 42	楕円形	2.04	0.70	0.38	N - 23° - W	中世	
SK - 43	楕円形	1.20	0.84	0.14	N - 9° - E	中世	

SD - 13 (Fig.87)

調査区北東部で15.60mに渡って検出した溝で、湾曲しながら南北にのび、北は調査区外へ続く。SD - 12に切られ、SK - 26、SK - 27、SD - 11を切っており、幅は28～86cm、深さ9～20cmを測る。断面は逆三角形形状を呈し、埋土は暗褐色粘土質シルトである。出土遺物には須恵器片8点、瓦器片70数点、土師質土器片280数点、白磁片1点、鉄製品1点がみられ、瓦器(502)1点が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.88 - 502)

502は椀で、口縁部から体部にかけて1/6ほど残存する。口径15.8cmを測る。体部外面には明瞭な指頭圧痕が残り、口縁部にはヨコナデ調整を施す。体部内面には併行線状のヘラ磨きを施す。内外面とも炭素の吸着が悪く、灰白色を呈する。

SD - 14 (Fig.87)

調査区中央部で東西16.10mに渡って検出した溝である。SK - 42とSD - 17に切られ、西は調査区外にのびる。幅は0.34～1.20m、深さ5～38cmを測り、断面はU字形を呈する。埋土は褐色粘土質シルトで灰色粘土質シルトのブロックを含む。出土遺物には須恵器片2点、緑釉陶器片1点、瓦器片24点、土師質土器片190数点、白磁片1点がみられ、土師質土器(503)1点と白磁(504)1点が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.88 - 503)

503は杯の底部で、底径7.6cmを測り、外面には回転糸切り痕が残る。内面には回転ナデ調整が施される。

白磁 (Fig.88 - 504)

504は碗の口縁部で、口径14.7cmを測り、端部を外へ強くつまみ出す。内外面とも灰白色の釉を施す。

SD - 15

調査区南部で南北7.48mに渡って検出した溝で、SK - 33に切られており、南は調査区外にのびる。幅は48～57cm、深さ16～38cmを測り、断面は逆台形状を呈する。埋土は褐色粘土質シルトで、出土遺物には瓦器片4点、土師質土器片74点、鉄製品1点及び、須恵器細片、青磁細片がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD - 16

調査区北部で南北8.78mに渡って検出した溝で、いくつかのピットに切られ、西は調査区外にのびる。幅は39～57cm、深さ5～11cmを測り、断面は逆三角形形状を呈する。埋土は褐色粘土質シルトであった。出土遺物には瓦器片13点、土師質土器片21点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD - 17 (Fig.87)

調査区西部で16.73mに渡って検出した溝で、湾曲しながら南北にのび、北西部は調査区外へのびる。SD - 13とは約10m、SD - 18とは約0.2mの距離を置き、同様に湾曲しており、それらとの関係が考慮される。SD - 14・19を切っており、SK - 39・41に切られていた。幅は0.49～1.25m、深さ19

～35cmを測り、断面は逆台形状を呈する。埋土は褐色粘土質シルトで、出土遺物には瓦器片32点、東播系須恵器片2点、土師質土器片360数点、備前焼片1点、瓦質土器片1点、青磁片2点、白磁片1点、土製品1点がみられ、東播系須恵器(505)1点、土師質土器(506)1点、青磁(507)1点が図示できた。

出土遺物

東播系須恵器 (Fig.88 - 505)

505は片口鉢の口縁部片で、口径28.0cmを測る。口縁部は体部から真直ぐ外上方へ立ち上がり、端部は面をなす。内外面にヨコナデ調整を施す。

土師質土器 (Fig.88 - 506)

506は小皿で、3/4ほど残存する。口径7.4cm、器高1.9cm、底径5.5cmを測る。厚めの底部を持ち、口縁部は外上方へ真直ぐ上がる。底部切り離しは回転糸切りと考えられるが、摩耗が著しく不明瞭である。

青磁 (Fig.88 - 507)

507は皿であり、1/4ほど残存する。口径10.0cm、器高2.0cm、底径5.0cmを測り、見込に段を有する。外底面を除き灰色の釉を施す。

SD - 18 (Fig.87)

調査区西部で6.34mに渡って検出した溝で、SD - 17に沿って湾曲しながら南北にのび、北西部は調査区外へ続く。SD - 19を切っており、幅は32～62cm、深さ15～25cmを測り、断面はU字形を呈する。埋土は褐色粘土質シルトで、出土遺物には瓦器片1点、東播系須恵器片1点、土師質土器片37点がみられたが、復元図示できたものはなかった。

SD - 19 (Fig.87)

調査区西部で5.29mに渡って検出した溝で、やや湾曲しながら東西にのび、西は調査区外へ続く。SD - 12・13に切られていた。幅は31～44cm、深さ6～16cmを測り、断面はU字形を呈する。埋土は褐色粘土質シルトで、出土遺物には瓦器片6点、土師質土器細片100数点、青磁片1点がみられ、土師質土器(508)1点、青磁(509)1点が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.88 - 508)

508は杯で、3/4ほど残存する。口径11.2cm、器高4.0cm、底径6.4cmを測る。口縁部は体部から外上方へ真直ぐ上がる。摩耗が著しく、調整は不明である。

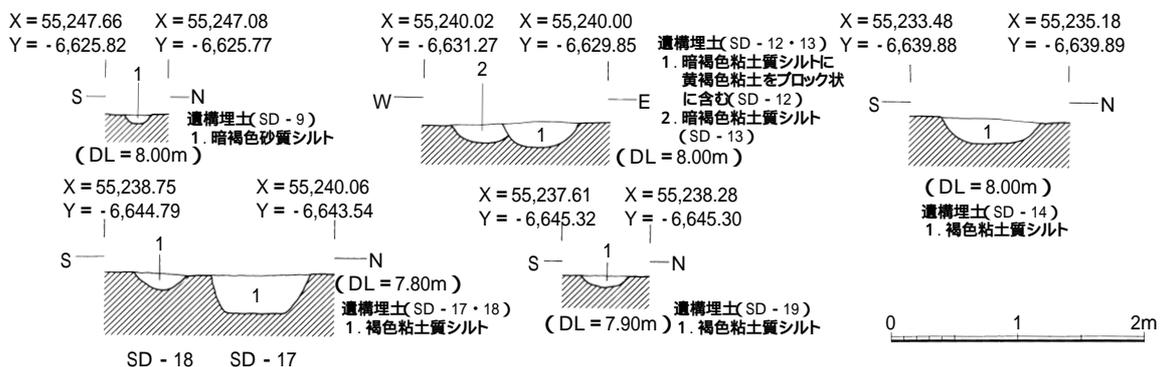


Fig.87 SD - 9・12～14・17～19 セクション図

青磁 (Fig.88 - 509)

509は碗の口縁部片で、体部から真直ぐ上がる。口径は14.7cmを測り、無文で内外面には灰オリーブ色の釉を施す。

SD - 20・21

調査区西部で検出した溝で、南北に併行にのびる。SD - 14との切り合い関係は不明瞭で、埋土も褐色粘土質シルトに灰色粘土質シルトのブロックを含むという同様のものであり、同時期に機能していた可能性も考えられる。SD - 20はSK - 35・38・40に切られており、長さ15.37mに渡って検出した。幅は28～78cm、深さは5～15cmを測り、出土遺物は瓦器片2点、土師質土器片17点、白磁片1点であった。SD - 21は12.55mに渡って検出した。幅は30～88cm、深さは4～11cmを測り、出土遺物は須恵器片1点、瓦器片2点、土師質土器片19点、青磁片1点であった。ともに復元図示できるものはなかった。

▽ピット

P - 6

調査区北東部で検出したピットである。不整円形を呈し、径28cm、深さ28cmを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトで、出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片5点がみられ、瓦器(510)1点が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.88 - 510)

510は碗の口縁部で、口径13.2cmを測る。体部外面には指頭圧痕が残り、口縁部外面にはヨコナデ調整を施す。内面には連結輪状のヘラ磨きを施す。内外面とも炭素が全く吸着せず灰白色を呈する。

P - 7

調査区北東部で検出したピットである。不整楕円形を呈し、長径26cm、短径24cm、深さ29cmを測る。埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、出土遺物には瓦器片2点、土師質土器片17点がみられ、土師質土器(511)1点が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.88 - 511)

511は小皿の底部である。底径は5.5cmを測り、口縁部は外上方に真直ぐ上がる。摩耗が著しく調整は不明である。

P - 8

調査区北部で検出したピットである。不整楕円形を呈し、長径27cm、短径24cm、深さ22cmを測る。埋土は褐色粘土質シルトで、出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片1点がみられ、土師質土器(512)1点が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.88 - 512)

512は碗の口縁部で、口径13.6cmを測る。内面にはナデ調整を施し、外面には回転ナデ調整を施す。

P - 9

調査区中央部で検出したピットである。不整円形を呈し、径21cm、深さ22cmを測る。埋土は黄褐

色シルト質粘土で、出土遺物には土師質土器片50数点がみられ、小皿(513)1点が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.88 - 513)

513は小皿で、1/3ほど残存する。口径7.8cm、器高1.8cm、底径5.0cmを測り、口縁部はやや内湾しながら外上方に上がる。底部は不明瞭ながら回転糸切りの後ナデ調整を施したとみられる。

P - 10

調査区南部で検出したピットである。不整形円形を呈し、径32cm、深さ15cmを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトで土器微細片及び炭化物を含む。出土遺物には土師質土器片19点、土製品1点がみられ、土錘(514)1点が図示できた。

出土遺物

土製品 (Fig.88 - 514)

514は管状土錘で、ほぼ完存する。円筒形を呈し、全長4.2cm、全幅0.9cmを測る。

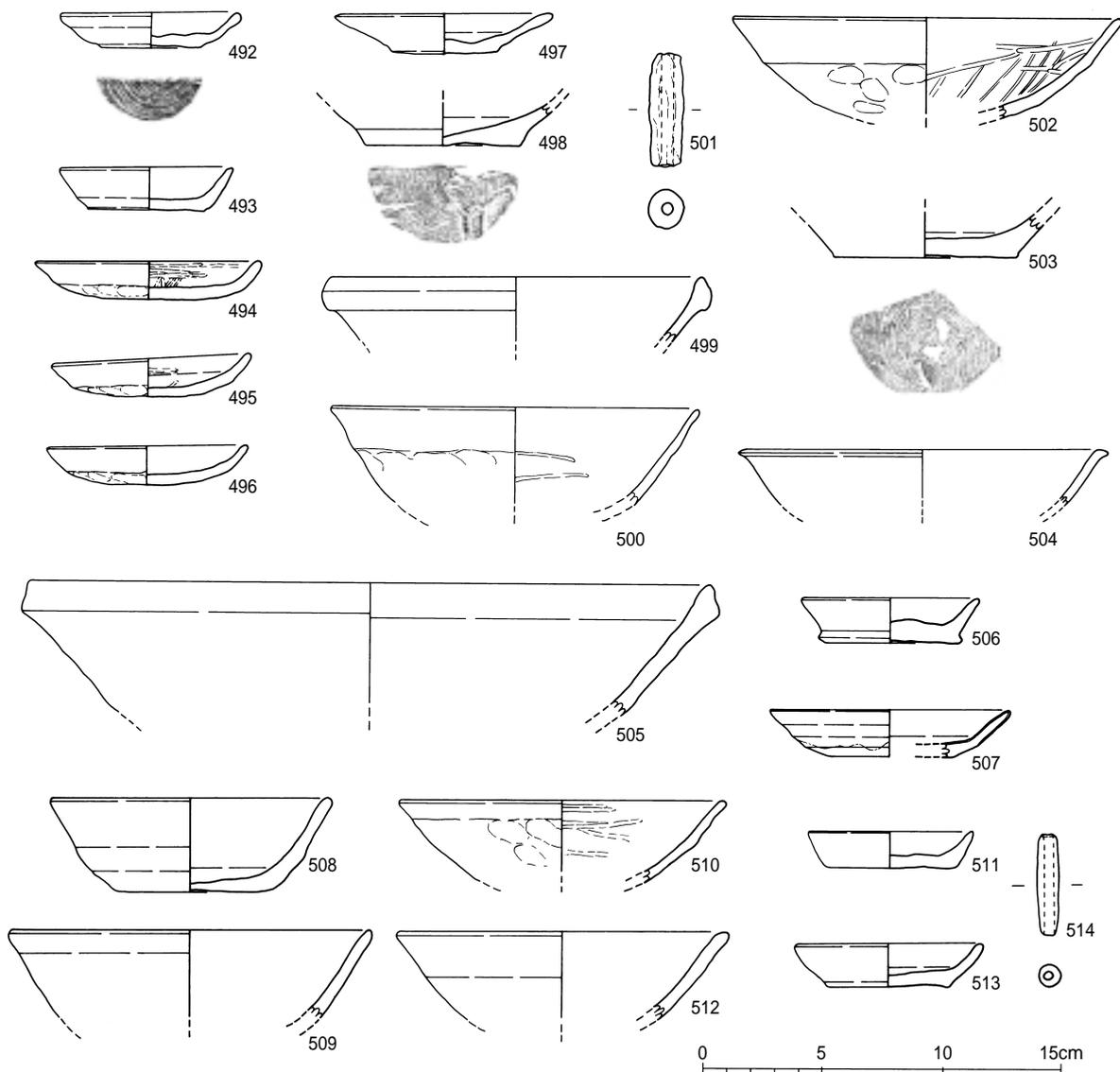


Fig.88 B区 遺構出土遺物実測図

(3) C区

中世

i 掘立柱建物跡

SB - 9 (Fig.89)

調査区の東端で検出した梁間1間(2.10m)、桁行2間(4.30~4.35m)の東西棟建物で、SB - 10の東隣に位置する。棟方向はN - 84° - Wである。柱間寸法は梁(南北)が2.10m、桁行(東西)が2.15~2.20mである。柱穴は径18~54cmの円形である。柱穴の埋土は褐色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片100点、瓦器片7点、瓦質土器片1点、石製品1点がみられ、北東隅の柱穴から出土した石製品(515)1点が図示できた。

出土遺物

石製品 (Fig.94 - 515)

515は楕円形を呈する叩石で、完存するものである。全長18.0cm、全幅13.6cm、全厚5.8cm、重量2,259gを測る。両面の中央部に敲打痕が残る。石材は細粒の花崗岩である。

SB - 10 (Fig.90)

調査区の東部で検出した建物で、SB - 9の西隣に位置する。梁間2間(4.00m)、桁行2間(6.00m)の身舎に南庇付きの南北3間(5.30m)、東西2間(6.00m)の東西棟建物で、西妻柱の柱穴2個は未確認である。棟方向はN - 11° - Wである。柱間寸法は梁(南北)が1.30~2.00m、桁行(東西)が3.00mで、庇の幅は1.30mである。柱穴は径40~77cmの円形である。柱穴の埋土は暗褐色粘土質シルトであった。出土

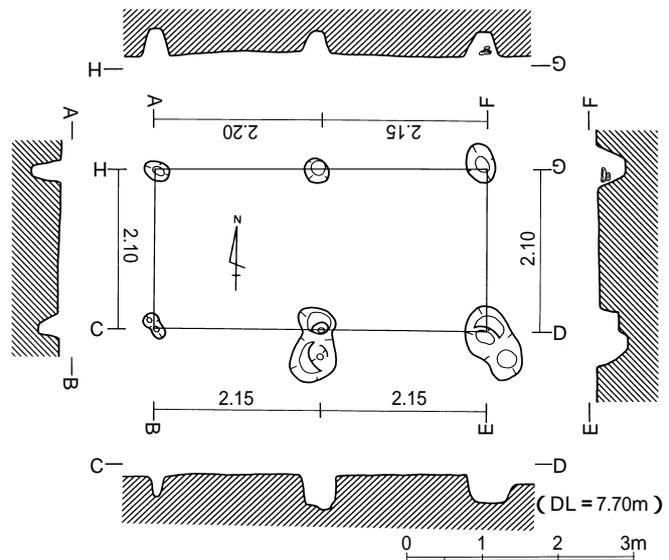


Fig.89 SB - 9

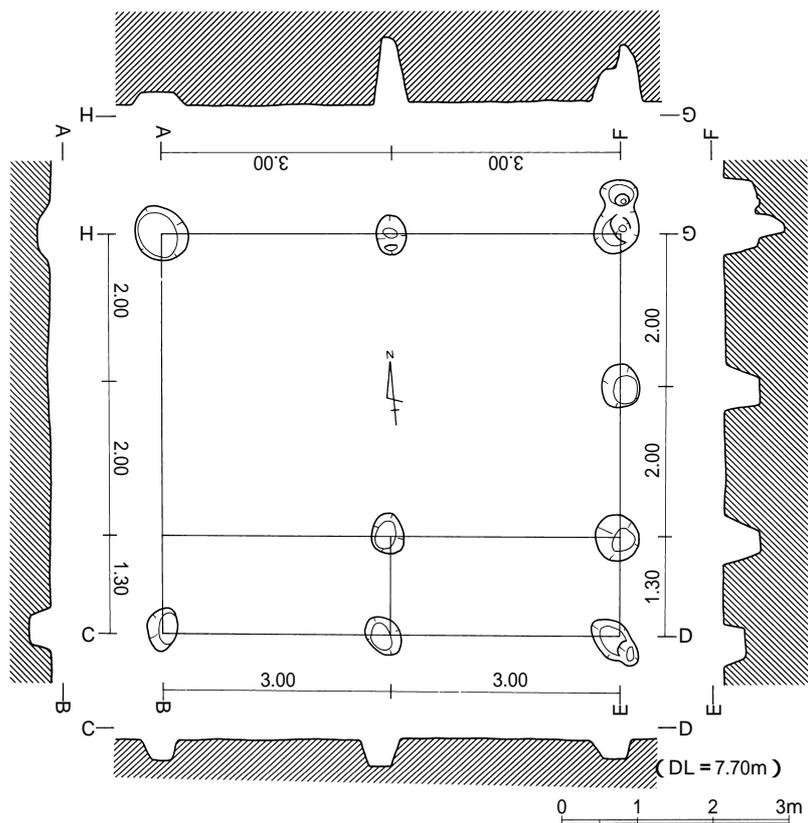


Fig.90 SB - 10

遺物には須恵器片3点,瓦器片25点,土師質土器片350点,土錘1点がみられ,北東隅の柱穴から出土した瓦器(516)1点と身舎の南側柱の真中の柱穴から出土した土師質土器(517)1点が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.94 - 516)

516は口径15.0cm,器高3.5cm,底径3.7cmを測る椀である。胎土は緻密で,焼成も良好である。外面は口縁部にヨコナデ調整を1段,体部に指頭圧痕が残り,底部には断面三角形の小さな高台が付く。内面は体部にヨコ方向のヘラ磨きが部分的に見られる。炭素は内外面とも残っている。

土師質土器 (Fig.94 - 517)

517は口径7.4cm 器高1.6cm 底径5.0cmを測る小皿である。体部は底部から直線的に外上方にのびる。調整は口縁部に回転ナデ調整,底部内面にナデ調整,外底面は回転糸切りの後,板状圧痕が残る。

SB - 11 (Fig.91)

調査区の東部で検出した建物で,SB - 10・12と重なる。梁間2間(3.20m),桁行2間(4.70 ~ 4.90m)の身舎に西庇付きの東西3間(4.00m),南北2間(4.70 ~ 5.00m)の南北棟建物で,身舎の南西隅の柱穴は未確認である。棟方向はN - 7° - Eである。柱間寸法は梁(東西)が0.80mと1.60m,桁行(南北)が2.35 ~ 2.50mである。柱穴は径13 ~ 60cmの円形である。柱穴の埋土は暗褐色粘土質シルトであった。出土遺物には須恵器片1点,瓦器片13点,土師質土器片33点がみられ,北東隅の柱穴から出土した瓦器(518)1点が図示できた。

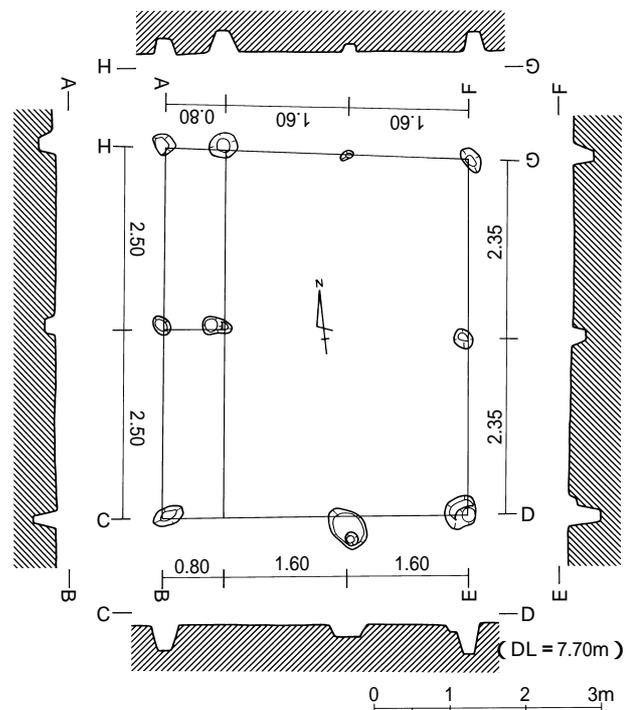


Fig.91 SB - 11

出土遺物

瓦器 (Fig.94 - 518)

518は椀の底部の破片で底径3.8cmを測る。体部外面はナデ調整,指頭圧痕が残り,底部には断面三角形の小さな高台が付く。内底面には僅かにヘラ磨きが残る。炭素は体部外面に僅かに残る。

SB - 12 (Fig.92)

調査区の東部で検出した建物で,SB - 11と重なる。梁間2間(4.15 ~ 4.55m),桁行3間(4.90 ~ 5.00m)の身舎に西庇付きの南北2間(4.15 ~ 4.60m),東西4間(6.05 ~ 6.10m)の東西棟建物である。北側柱の東から1間目と2間目の柱穴,庇の真中の柱穴は確認できなかった。棟方向はN - 84° - Wである。柱間寸法は梁(南北)が2.05 ~ 2.35m,桁行(東西)が1.10 ~ 1.85mで,庇の幅は1.10 ~ 1.15mである。柱穴は径13 ~ 60cmの円形である。柱穴の埋土は暗褐色粘土質シルトであった。出土遺物には須恵器片1点,土師質土器片33点,瓦器片13点,鉄釘1点がみられたが,復元図示できるものはなかった。

SB - 13 (Fig.93)

調査区の北部で検出した建物で、梁間2間(3.70~3.75m)、桁行2間5.90~6.00mの南北棟建物で、西側柱の真中の柱穴は確認できなかった。棟方向はN - 1° - Eである。柱間寸法は梁(東西)が1.80~1.90mで、桁行(南北)が2.95mと3.00mである。柱穴は径22~53cmの円形である。柱穴の埋土は暗褐色粘土質シルトであった。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片10点、土師質土器片40点がみられ、南東隅の柱穴から出土した瓦器(519)1点、南妻柱の真中の柱穴から出土した土師質土器(520・521)2点が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.94 - 519)

519は椀の底部の破片で、底径5.0cmを測る。体部外面には指頭圧痕が残り、底部には断面三角形の幅の広い高台が付く。内底面には幅3mmの細い平行線状の暗文が残る。炭素は内外面とも全く残っていない。

土師質土器 (Fig.94 - 520・521)

2点とも杯である。520は口径15.4cm、器高3.6cm、底径8.5cmを測る。体部は底部から屈曲して外上方に直線的にのび、端部を肥厚させる。外底面は回転系切り、その他は回転ナデ調整で、外面と底部内面には口ク口目が顕著に残る。521は底径7.0cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がる。外底面は回転系切り、その他は部分的に回転ナデ調整が施される。

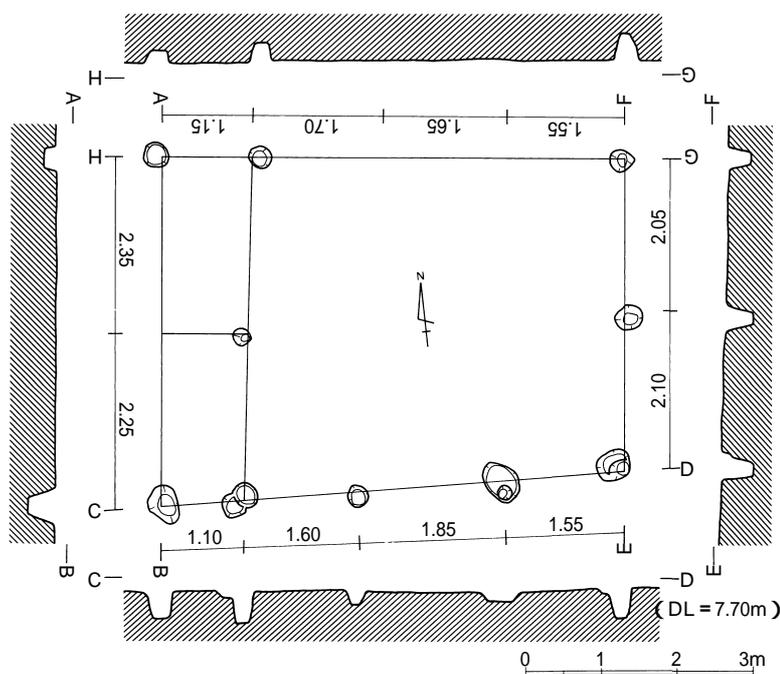


Fig.92 SB - 12

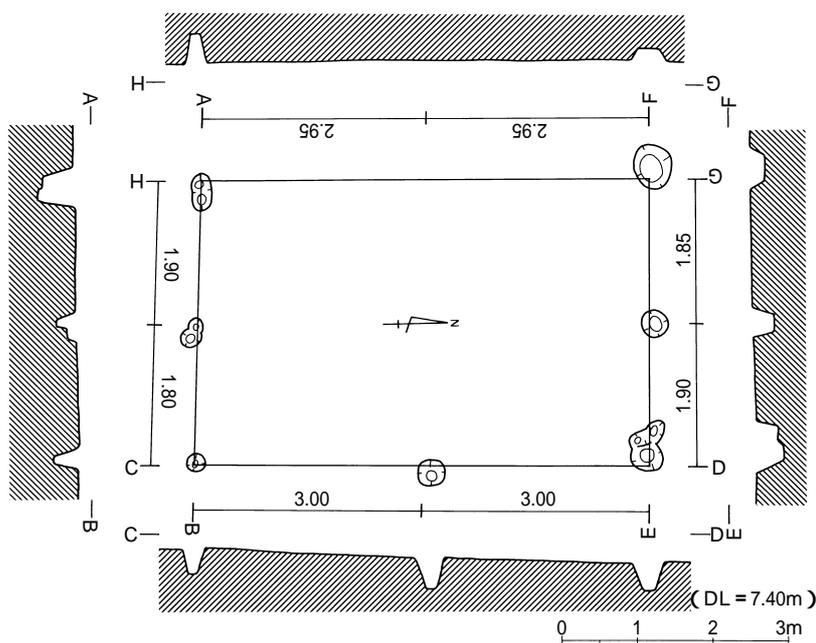


Fig.93 SB - 13

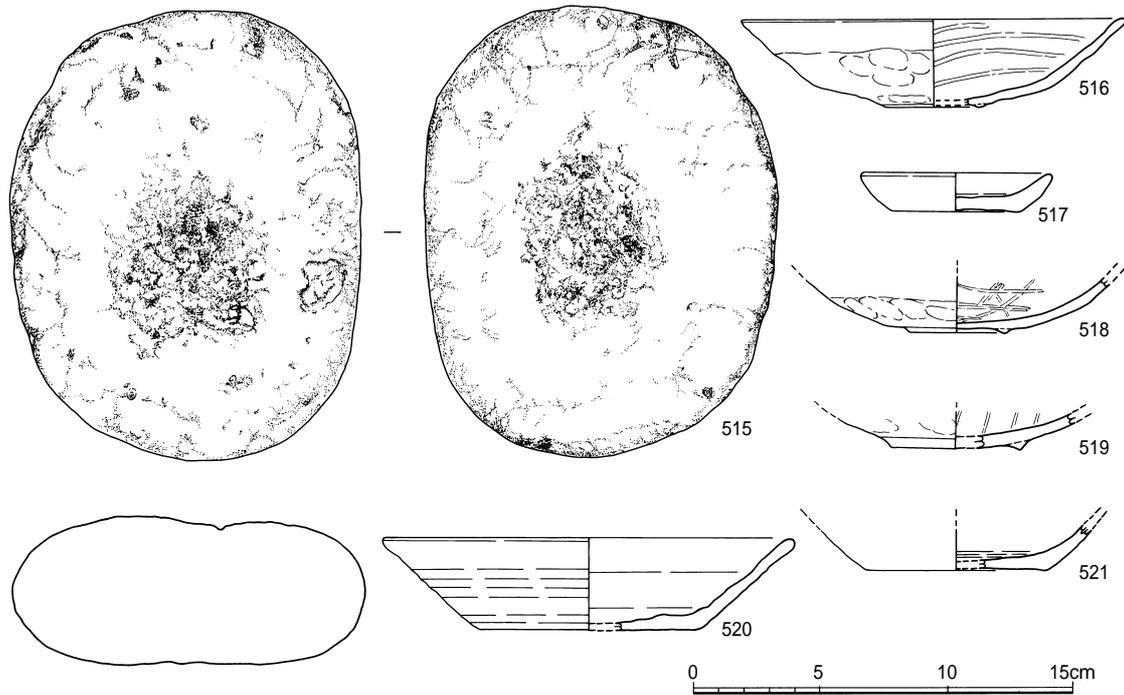


Fig.94 SB - 9 ~ 11・13 出土遺物実測図

SB - 14 (Fig.95)

調査区北側で検出した建物で、SD - 25の西側に位置する。梁間1間(2.30 ~ 2.45m)、桁行3間(5.55 ~ 5.65m)の身舎に南庇が付き、南北2間(3.30 ~ 3.45m)、東西3間(5.45 ~ 5.65m)の東西棟建物である。北側柱の東から1間目と2間目の柱穴と身舎南西隅の柱穴は確認できなかった。棟方向はN - 87° - Wである。柱間寸法は梁(南北)が1.00 ~ 2.45m、桁行(東西)が1.55 ~ 2.30mで、庇の幅は1.00mである。柱穴は径19 ~ 65cmの円形で、埋土は暗褐色粘土質シルトであった。出土遺物には瓦器片18点、土師質土器片40点、青磁片1点がみられ、身舎の南側柱の西から1間目の柱穴から出土した瓦器(522・523)2点と庇の東端の柱穴から出土した青磁(524)1点が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.101 - 522・523)

2点とも小皿である。522は口径9.0cmを測る。口縁部は強いヨコナデ調整で体部から屈曲する。体部外面はナデ調整、指頭圧痕が残る。炭素は内外面とも残っている。523は口径8.6cm、器高1.2cm、底径2.9cmを測る。底部から

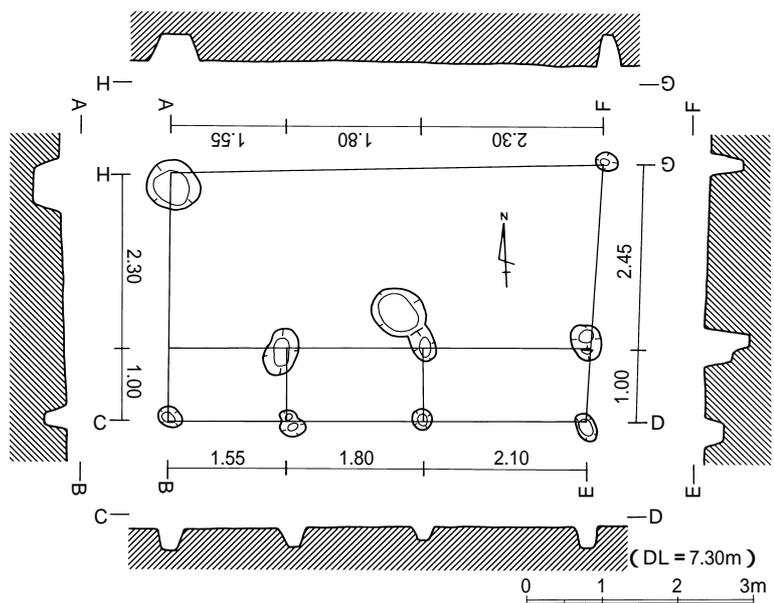


Fig.95 SB - 14

稜をもたず緩やかに立ち上がる。口縁部はヨコナデ調整, 外底面はナデ調整, 指頭圧痕が残る。焼成は良好だが, 外面は炭素が殆ど残っていない。

青磁 (Fig.101 - 524)

524は龍泉窯系の碗で, 口径16.4cmを測る。直線的な口縁部で端部を丸く納め, 内面には劃花文が見られる。器面には灰オリーブ色の釉を0.2~0.4mmの厚さに施す。

SB - 15 (Fig.96)

SB - 13の南側で検出した建物で, 梁間2間(4.00m), 桁行2間(4.30~4.45m)の南北棟建物で, 西側柱の真中の柱穴は確認できなかった。棟方向はN - 2° - Eである。柱間寸法は梁(東西)が2.00mで, 桁行(南北)が2.15mと2.30mである。柱穴は径19~38cmの円形である。埋土は暗褐色粘土質シルトで黄褐色粘土質シルトのブロックが含まれていた。出土遺物には瓦器片7点, 土師質土器片13点がみられ, 南西隅の柱穴から出土した瓦器(525)1点が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.101 - 525)

525は口径10.1cm, 器高1.4cm, 底径5.4cmを測る小皿である。平底の底部から緩やかに立ち上がる。口縁部はヨコナデ調整, 外底面はナデ調整で, 指頭圧痕が残る。内面は口縁部にヘラ磨きが見られる。

SB - 16 (Fig.97)

SB - 15の南側で検出した建物で, SB - 17と重なっている。梁間2間(3.75~3.80m), 桁行3間(6.20m)の身舎に西庇が付く東西3間(4.60m), 南北3間(6.15~6.20m)の南北棟建物で, 南から1間目の柱通りに間仕切り柱が建つ。東側柱の南から1間目の柱穴, 身舎南西隅の柱穴は確認できなかった。棟方向は北を向く。身舎の柱間寸法は梁(東西)が1.80~1.95m, 桁行(南北)が1.50~2.60mで,

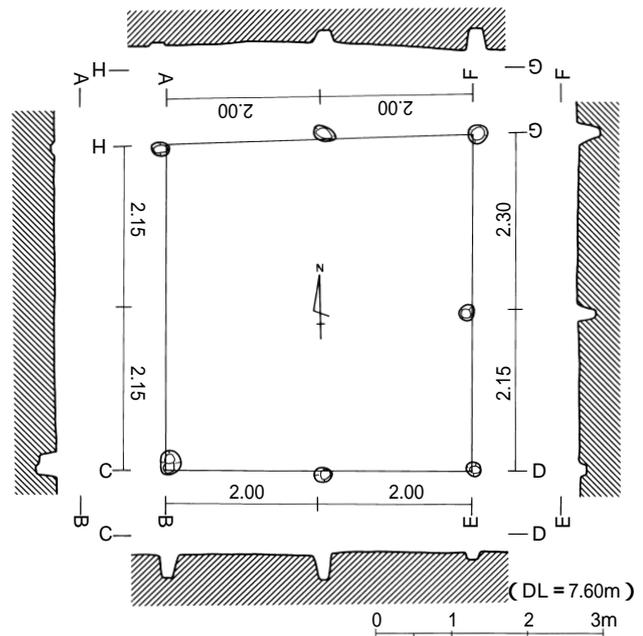


Fig.96 SB - 15

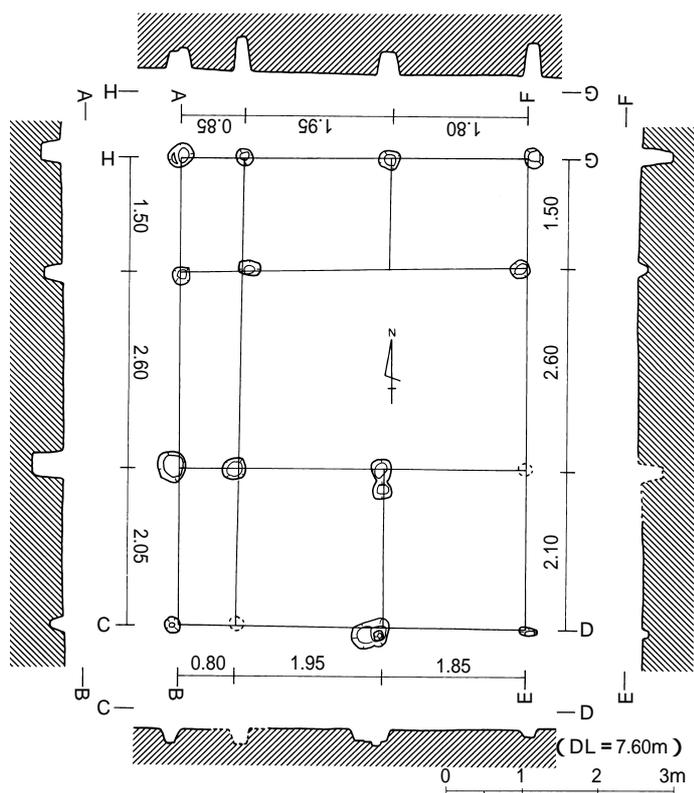


Fig.97 SB - 16

底の幅は0.80～0.85mである。柱穴は径18～43cmの円形である。柱穴の埋土は暗褐色粘土質シルトで黄褐色粘土質シルトのブロックが含まれていた。出土遺物には瓦器片9点,土師質土器片70点,白磁片1点がみられ,北妻柱の真中の柱穴から出土した土師質土器(526)1点が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.101 - 526)

526は椀で,口径13.6cmを測る。体部は直線的にのび,口縁部を短く外反させる。調整は回転ナデ調整である。

SB - 17 (Fig.98)

調査区の南側で検出した建物で, SB - 16と重なっている。梁間2間(4.30～4.50m),桁行2間(5.35m)の東西棟総柱建物である。柱間寸法は梁(南北)が2.00～2.40m,桁行(東西)が2.65mと2.70mである。棟方向はN - 87° - Wである。柱穴は径23～43cmの円形である。柱穴の埋土は暗褐色粘土質シルトで黄褐色粘土質シルトのブロックが含まれていた。出土遺物には瓦器片10点,土師質土器片20点がみられたが,復元図示できるものはなかった。

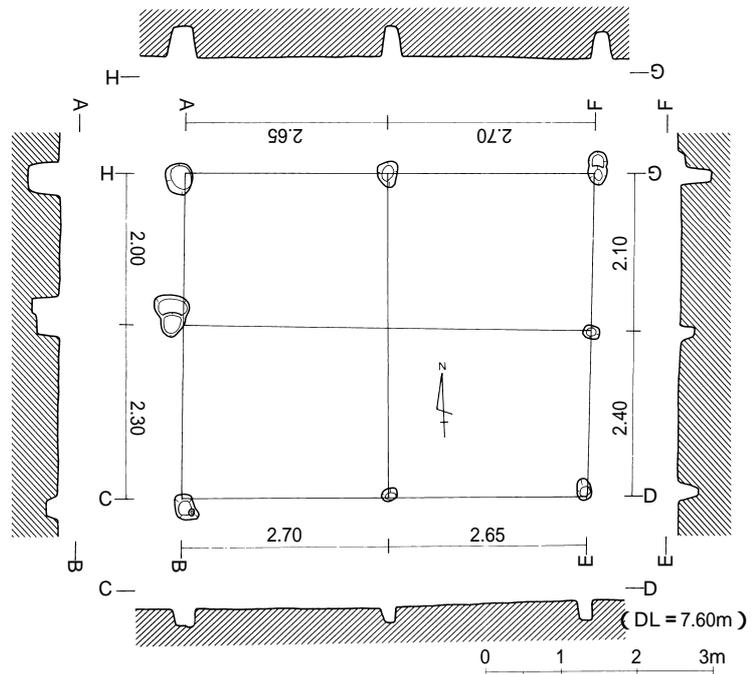


Fig.98 SB - 17

ii 塀・柵列跡

SA - 6 (Fig.99)

調査区の東部で検出した東西塀(N - 88° - W)である。SB - 10の北側に位置し,目隠し塀とみられる。3間分(3.46m)を検出し,柱間は1.13～1.17mを測る。柱穴は円形もしくは不整楕円形で,径26～64cmを測る。埋土は褐色粘土質シルトで黄褐色粘土質シルトのブロックを含んでいる箇所もあった。出土遺物には土師質土器片33点,瓦器片7点がみられたが,復元図示できるものはなかった。

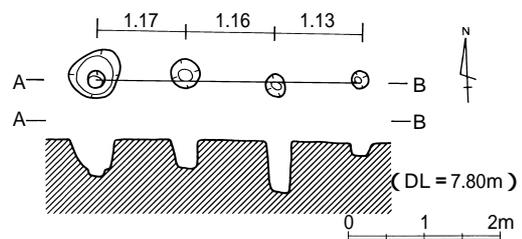


Fig.99 SA - 6

SA - 7 (Fig.100)

調査区の東部で検出した南北塀(N - 3° - W)である。SB - 13の西側に位置し,目隠し塀と考えられる。3間分(4.55m)を検出し,柱間は1.45～1.60mを測る。

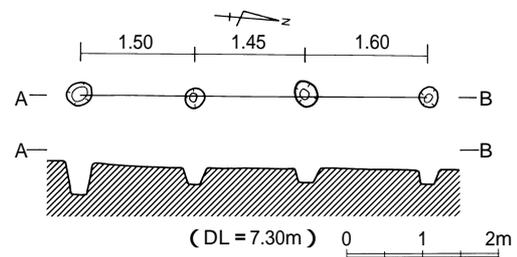


Fig.100 SA - 7

柱穴は径25～34cmの円形で、埋土は暗褐色粘土質シルトで土器の細片や炭を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片4点、土師質土器片15点、土製品1点がみられ、南端の柱穴から出土した土製品(527)1点が図示できた。

出土遺物

土製品 (Fig.101 - 527)

527は円筒形の管状土錘である。完形のもので、全長4.6cm、全幅1.5cm、孔径0.4cmを測る。調整は全面ナデ調整である。

Tab.6 C区堀・柵列計測表

遺構番号	規模			方向	備考
	柱穴数(個)	全長(m)	柱間距離(m)		
SA - 6	4	3.46	1.13～1.17	N 88° W	
SA - 7	4	4.55	1.45～1.60	N 3° W	

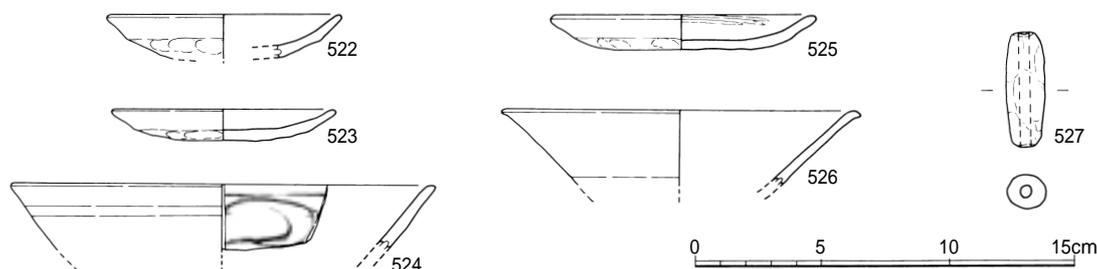


Fig.101 SB - 14～16・SA - 7 出土遺物実測図

iii 土坑

SK - 44 (Fig.102)

調査区の東部で検出した楕円形の土坑である。長径1.34m、短径1.20m、深さ22cmを測る。断面は逆台形で、基底面はほぼ平らである。埋土は暗灰黄色シルトで炭化物和マンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片115点、須恵器片1点、東播系須恵器片1点、瓦器片3点、青磁片1点、土製品1点がみられ、土製品(528)1点が図示できた。

出土遺物

土製品 (Fig.105 - 528)

528は円筒形の管状土錘である。ほぼ完形で、残存長3.8cm、全幅0.8cm、孔径0.4cmを測る。調整は全面ナデ調整である。

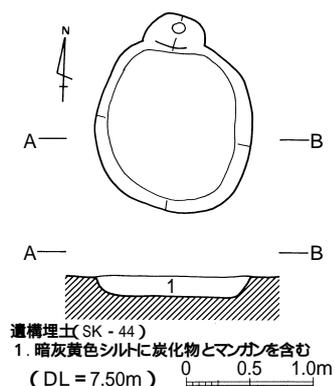


Fig.102 SK - 44

SK - 45

調査区の東部で検出した舟形の土坑である。SB - 13の東隣に位置し、ほぼ平行しており、長軸方向は北を向く。一部他の土坑に切られていたが、長径4.42m、短径0.43m、深さ17cmを測り、断面はV字形である。埋土は褐色粘土質シルトで、出土遺物には土師質土器片5点と須恵器1点がみられ、須恵器(529)1点が図示できた。

出土遺物

須恵器 (Fig.105 - 529)

529は椀で、口径17.0cmを測る。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は肥厚する。調整は回転ナデ調整で、口ク口目が顕著に残る。焼成が甘く褐色を呈する。

SK - 46

調査区の東部で検出した円形の土坑で、SB - 16の東に位置する。径0.98m、深さ33cmを測り、断面は逆台形である。埋土は褐色粘土質シルトで、出土遺物には瓦器片8点、土師質土器片32点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK - 47 (Fig.103)

調査区の東部で検出した隅丸方形の土坑で、SB - 16・17内に位置する。長辺1.83m、短辺0.78m、深さ24cmを測り、長軸方向は北を向く。断面は逆台形である。埋土は暗褐色粘土質シルトで、土器の細片や炭を多く含んでいた。出土遺物には瓦器片17点、土師質土器片80点、鉄滓1点、桃の種1点がみられ、瓦器(530)1点が図示できた。また、底面で径18cm、深さ4cmを測る円形のピットを検出したが、埋土は同じで、遺物は皆無であった。

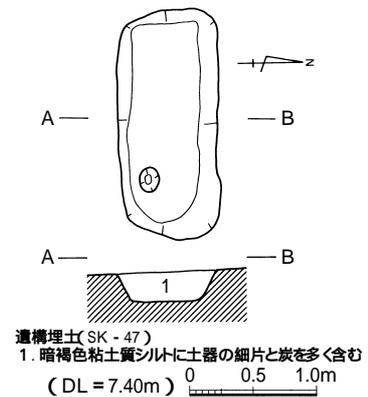


Fig.103 SK - 47

出土遺物

瓦器 (Fig.105 - 530)

530は椀の底部で、底径4.6cmを測る。外面は体部に指頭圧痕が残り、底部には断面三角形の小さな高台が付く。内面は底部に平行線状の暗文、体部にはヨコ方向のヘラ磨きが見られる。外面は炭素の残りが悪い。

SK - 48 (Fig.104)

調査区の東部で検出した不整楕円形の土坑で、SB - 17の南端に位置する。長径1.04m、短径0.80m、深さ37cmを測り、長軸方向はN - 34° - Wを示す。断面は逆台形である。埋土は暗褐色粘土質シルトににぶい黄褐色粘土質シルトのブロックを含んでいた。出土遺物には瓦器片9点、土師質土器片40点、白磁片1点がみられ、瓦器(531)1点と土師質土器(532)1点が図示できた。

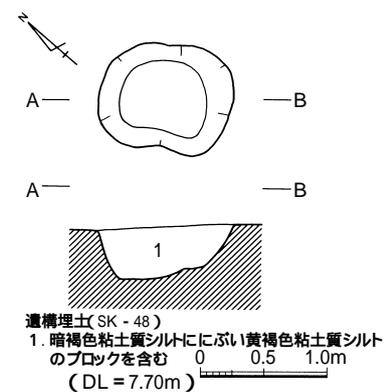


Fig.104 SK - 48

出土遺物

瓦器 (Fig.105 - 531)

531は椀で、口径14.6cmを測る。外面は口縁部にヨコナデ調整を1段、体部に指頭圧痕が残り、内面は体部に比較的密なヨコ方向のヘラ磨き、底部に平行線状の暗文が見られる。炭素は内外面とも残っている。

土師質土器 (Fig.105 - 532)

532は底径6.0cmを測る小さな杯である。体部は大きく内湾して立ち上がる。調整は摩耗するため不明瞭であるが、体部は回転ナデ調整、外底面は回転糸切りと見られる。

SK - 49

調査区の東部で検出した不整楕円形の土坑で、SD - 25の西側に位置する。長径2.17m、短径1.14m、深さ10cmを測る浅いもので、長軸方向はN - 8° - Eを示す。断面は逆台形で、埋土は褐色粘土質シルトである。出土遺物には土師器1点、瓦器片1点、土師質土器片15点がみられ、土師器(533)1点が図示できた。また、底面で径0.28m、深さ15cmを測る円形のピットを検出したが、埋土が同じで、遺物は皆無であった。

出土遺物

土師器 (Fig.105 - 533)

533は杯で、口径13.0cmを測る。体部は外上方に直線的にのび、口縁端部をつまんで直立さす。調整は口縁部にヨコナデ調整、体部にナデ調整と指頭圧痕がみられる。

SK - 50

調査区の東部で検出した溝状土坑で、SD - 27の南に位置する。長径4.03m、短径0.36m、深さ16cmを測り、長軸方向はN - 57° - Eを示す。断面は舟底形である。埋土は暗褐色粘土質シルトで土器の細片と炭を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片60点、土師質土器片145点、土錘1点があるが、復元図示できるものはなかった。

SK - 51

調査区の中央部の落ち込み内で検出された舟形の土坑で、SD - 33とSD - 35の間に位置する。一部他の土坑に切られ、また、SD - 38を切って掘り込まれていた。全長6.40m、幅0.64m、深さ11cmを測り、長軸方向は、N - 79° - Wを示す。断面は舟底形を呈する。埋土は褐色粘土質シルトであった。出土遺物には須恵器1点、土師質土器片2点がみられ、須恵器(534)1点が図示できた。

出土遺物

須恵器 (Fig.105 - 534)

534は杯で、底径8.3cmを測る。底部はほぼ平らで、底部外端には直立する高さ0.4cmの高台が付く。外底面は回転ヘラ切り、その他は回転ナデ調整である。

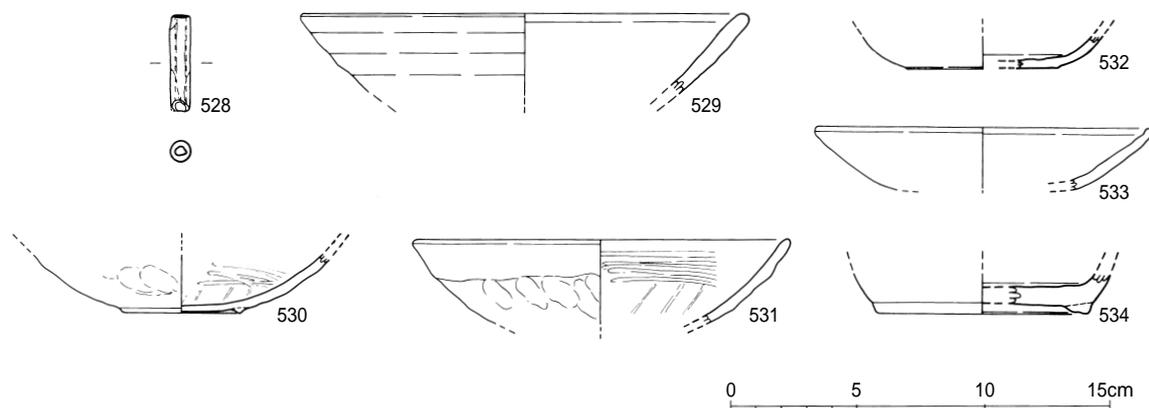


Fig.105 SK - 44 ~ 49・51 出土遺物実測図

SK - 52 (Fig.106)

中央部の落ち込み内で検出された土坑である。遺構が検出されたところは、地形が落ち込み、遺

物包含層が厚くなっていたため、明確な遺構の肩を検出することはできなかったが、1辺約0.5mの方形の範囲に遺物が集中していた。出土遺物には湖州方鏡(538)1面、宋銭(539)1枚、土師質土器(535・536)2点、白磁(537)1点、刀子(540)1点が見られた。湖州鏡は鏡面を上にした状態で、その上に刀子の一部が重なっており、土師質土器が鏡から20cm離れたところから2枚重なった状態で、古銭は30cm離れたところからそれぞれ出土した。

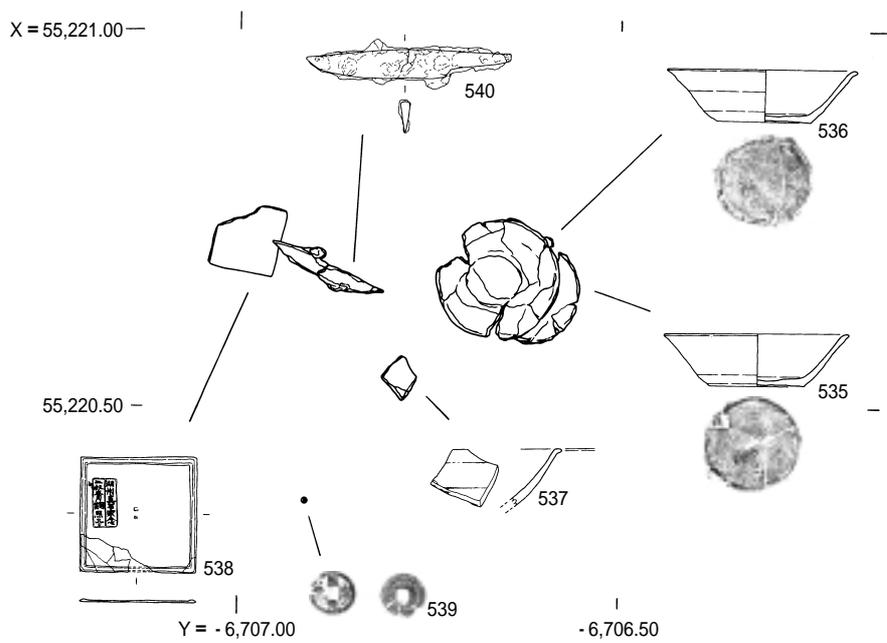


Fig.106 SK - 52 遺物出土状態

るから2枚重なった状態で、古銭は30cm離れたところからそれぞれ出土した。

出土遺物

土師質土器 (Fig.107 - 535・536)

2点とも杯で、完形である。535は口径14.6cm、器高4.2cm、底径7.5cm、536は口径14.4cm、器高4.1cm、底径7.3cmを測る。2点ともほぼ同じ形態で、同じ調整を施す。体部は直線的に外上方へのび、口縁部を若干外反させる。外底面は回転糸切り、その他は回転ナデ調整で、ロクロ目が顕著に残っている。

白磁 (Fig.107 - 537)

537は碗の口縁部の破片である。体部は内湾して立ち上がり、口縁部を外反させ、端部は水平を向く。内面には沈線状の浅い段が巡る。器面には緑色を帯びた白色釉を薄く施す。

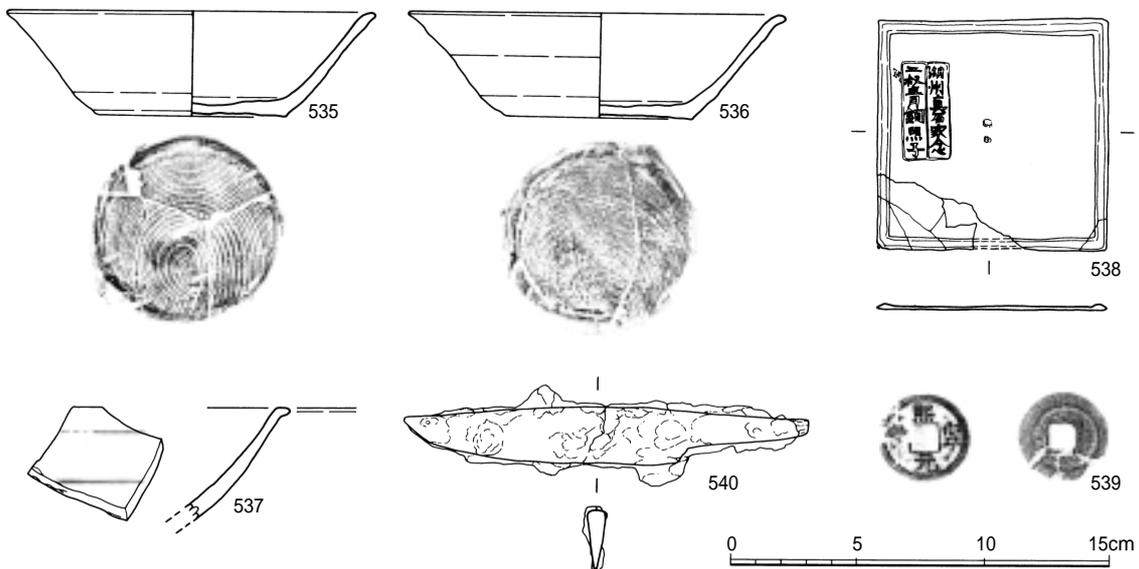


Fig.107 SK - 52 出土遺物実測図(539はS=1/2)

湖州方鏡 (Fig.107 - 538)

538は一辺9.1cmを測るほぼ正方形の湖州方鏡である。縁は断面蒲鋒形で、厚さ0.2cmを測る。鏡の厚さは0.1cmで、鏡背の中央部には一部欠損するが、幅0.9cmの半円形の鈕が付く。また鈕の左側には、縦3.9cm、横2.0cmの枠組みの中に2行にわたって、「湖州真石家念 二叔青銅照子」の陽鑄銘がある。

古銭 (Fig.107 - 539)

539は熙寧元寶で、一部欠損する。外径2.38～2.40cm、内径1.95cm、穿径0.69cm、銭厚1.60～1.80cm、重量2.0gを測る。銅銭で、初鑄造年は1068年である。

鉄製品 (Fig.107 - 540)

540は刀子で、全長16.0cm、全幅3.4cmを測る。刃部は11.5cm、幅2.3cmを測り、平造りで、ほぼ直線的にのび、関に至る。茎は4.5cmを測り、断面は方形を呈し、柄の木質が若干残存する。

Tab.7 C区土坑計測表

遺構番号	平面形	規 模			長軸方向	時代	備考
		長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)			
SK - 44	楕円形	1.34	1.20	0.22	北	中世	
SK - 45	溝状	4.42	0.43	0.17	北	"	
SK - 46	円形	0.98	——	0.33	——	"	
SK - 47	隅丸方形	1.83	0.78	0.24	東	"	
SK - 48	不整楕円形	1.04	0.80	0.37	N - 34 ° - W	"	
SK - 49	不整楕円形	2.17	1.14	0.10	N - 8 ° - E	"	
SK - 50	溝状	4.03	0.36	0.16	N - 57 ° - E	"	
SK - 51	溝状	6.40	0.64	0.11	N - 79 ° - W	"	
SK - 52	(方形)	(0.50)	(0.45)	——	——	"	

iv 溝跡

SD - 22 (Fig.108)

調査区の東端で検出した南北溝で、SD - 23を切っている。区画をなす溝と考えられ、長軸方向は北を向く。29.50mを検出し、幅0.50～0.73m、深さ10～24cmを測る。断面は舟底形ないし逆台形を呈し、基底面はほぼ平らである。基底面は南(7.440m)から北(7.140m)に向かって傾斜する。埋土は暗褐色粘土質シルトで土器細片と炭を多く含んでいた。出土遺物には須恵器片2点、瓦器片40点、東播系須恵器片1点、土師質土器片210点、白磁片1点、青磁片3点が見られ、土師質土器(541)1点が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.113 - 541)

541は杯の底部で、底径4.3cmを測る。底部は柱状高台となり、体部は直線的に上がる。外底面は回転系切り、体部外面は回転ナデ調整、内面はナデ調整である。

SD - 23

北東部で検出した溝で、SD - 22に切られていた。両端は調査区外にのびており、検出部分は半円

形を呈する。幅0.60m, 深さ9~13cmで, 標高は西(7.160m)から東(7.130m)に向かって傾斜し, 約5.50mを検出した。断面は舟底形を呈する。埋土は褐色粘土質シルトであった。出土遺物には瓦器片4点, 土師質土器片3点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SD - 24

調査区の中央部で検出したL字状の溝である。幅0.40~1.25m, 深さは9~13cmで, 南は標高7.120m, 西は7.050mで東西にのびている部分は幅が狭く, 標高が低い。断面は舟底形である。埋土は暗褐色粘土質シルトで, 下層には黄褐色粘土質シルトのブロックが見られ, 土器細片と炭を多く含んでいた。出土遺物には須恵器片1点, 瓦器片60点, 土師質土器片160点, 青磁片1点がみられるが, 復元図示できるものはなかった。

SD - 25 (Fig.108)

調査区の東部で検出した南北にのびる溝で, 区画溝と考えられ, N - 7° - Eを示す。28.20mを検出し, 幅0.51~0.96m, 深さ27~48cmを測る。断面は逆台形で, 基底面はほぼ平らであった。基底面は南(6.980m)から北(6.750m)に向かって傾斜する。埋土は暗褐色粘土質シルトで黄褐色粘土質シルトのブロックが含まれていた。出土遺物には土師器片1点, 須恵器片9点, 瓦器片280点, 東播系須恵器片3点, 土師質土器片520点, 白磁片9点がみられ, 土師器(542)1点, 瓦器(543)1点, 白磁(544・545)2点が図示できた。

出土遺物

土師器 (Fig.113 - 542)

542は椀で, 口径13.6cmを測る。体部は内湾して立ち上がり, 口縁部は若干器壁が厚く, 端部を丸く納める。口縁部の調整は回転ナデ調整で, 体部はナデ調整である。

瓦器 (Fig.113 - 543)

543は小皿で, 口径9.4cmを測る。丸い底部から屈曲して, 直線的な口縁部に至る。口縁部は強いヨコナデ調整, 底部はナデ調整で, 外面には指頭圧痕が残り, 炭素が吸着する。

白磁 (Fig.113 - 544・545)

2点とも碗である。544は口径16.0cmを測る。器壁が薄く, 直線的な体部をもち, 口縁部は玉縁となる。器面には乳白色の釉を薄く施す。545は口縁部の破片である。口縁部は下膨れする大きな玉縁となる。内面から体部外面にかけて乳白色の釉を薄く施すが, 焼成が甘く釉に透明感がない。

SD - 26 (Fig.108)

調査区の中央部で検出した東西にのびる溝で, SD - 27・28に切られ, 西端はSD - 31に繋がる。17.00mを検出し, 幅0.18~0.58m, 深さ2~7cmを測る。断面は舟底形で, 基底面は東(7.150m)から西(6.940m)に傾斜する。埋土はにぶい褐色粘土質シルトに, 褐色粘土質シ

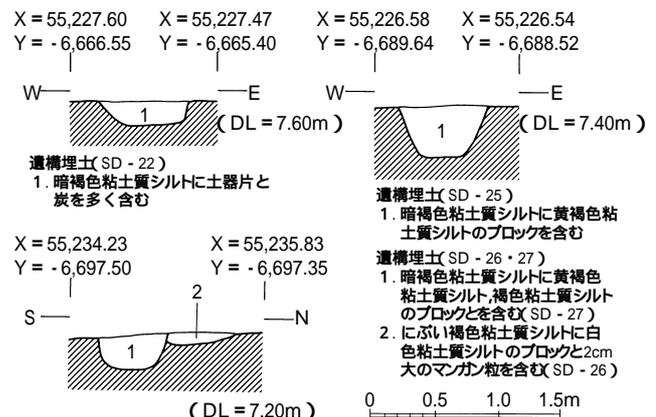


Fig.108 SD - 22・25~27 セクション図

ルトのブロックと2cm大のマンガン粒が含まれていた。出土遺物には土師質土器片20点,瓦器片5点,鉄滓1点が見られるが,図示できるものはなかった。

SD - 27 (Fig.108)

SD - 25とSD - 33を繋ぐ溝で,落ち込みの肩部で検出した。SD - 25から北西にのび,屈曲してSD - 26・28を切り,SD - 26と平行にのびた後,南下して落ち込み内のSD - 33に繋がる。全長は23.20m,幅0.22~0.65m,深さ17~42cmを測る。断面は逆台形ないし舟底形を呈し,基底面は東(7.100m)から西(6.800m)に傾斜する。埋土は暗褐色粘土質シルトに地山ブロックと褐色粘土質シルトが含まれていた。出土遺物には瓦器片60点,土師質土器片190点,白磁片4点,青磁片4点,鉄滓2点がみられ,瓦器(546)1点,土師質土器(547~549)3点,白磁(550)1点,青磁(551・552)2点が図示でき,547・549・551・552は1ヵ所からまとめて出土した。

出土遺物

瓦器 (Fig.113 - 546)

546は口径16.2cm,器高6.1cm,底径4.6cmを測る椀である。器壁が薄く,丁寧な作りであるが,焼成が甘く,炭素が吸着していない部分は褐色を呈する。外面は口縁部にヨコナデ調整を1段,体部に指頭圧痕が残り,底部には断面蒲鉾形の小さな高台が付く。内面は体部にヨコ方向のヘラ磨きが部分的に見られる。炭素は内面と口縁部外面に残る。

土師質土器 (Fig.113 - 547~549)

547は杯である。口径15.0cm,器高4.1cm,底径7.4cmを測る。直線的な体部で,口縁部は肥厚して外反させる。外底面は回転糸切りで,その他は回転ナデ調整で,ロクロ目が顕著に残る。548・549は小皿である。548は口径9.4cm,器高1.8cm,底径5.1cmを測る。胎土は密で,丁寧な作りである。底部と口縁部の境

は明瞭ではなく,底部から緩やかに立ち上がる。調整は口縁部をヨコナデ調整,底部にナデ調整を行い,外底面には指頭圧痕も見られる。成形技法は瓦器の小皿に酷似するが,焼成が土師質土器そのもので色調が黄褐色を呈しており,ここでは土師質土器として取り挙げた。549は口径8.5cm,器高1.6cm,底径5.2cmを測る。口縁部は底部から外上方へ直線的にのびる。外底面は回転糸切り,その他は回転ナデ調整を施す。

白磁 (Fig.113 - 550)

550は碗で,口径15.6cmを測る。体部は直線的にのび,口縁部を短く外反させ,端部を丸く納める。器面には黄色を帯びた白色釉を薄く施すが,焼成が甘く釉に透明感がない。

青磁 (Fig.113 - 551・552)

2点とも同安窯系の碗である。551は口径17.8cmを測る。体部は僅かに稜をもって内湾する。外面

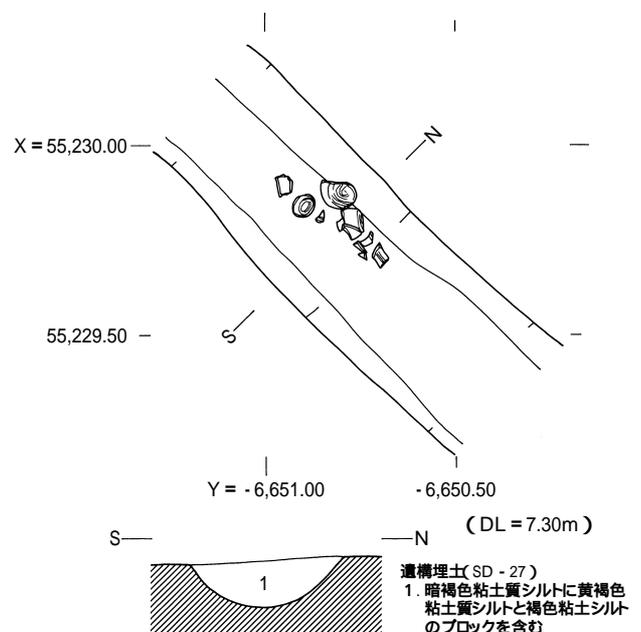


Fig.109 SD - 27 遺物出土状態

には4条単位の櫛目文,内面には1条の沈線と,ヘラによる文様が見られる。器面には黄色を帯びた緑色釉を薄く施す。552は底径4.8cmを測る。太く短い直立する高台が付き,内面は底部と見込の境に沈線状の浅い段を有する。内面には黄色を帯びた緑色釉が薄く施釉される。

SD - 28 (Fig.110)

落ち込みの北側で検出したL字状の溝で,一部調査区外にのびる。西端はSD - 38に切られ,南端はSD - 26を切り,SD - 27に切られていた。全長は17.70mを測り,幅0.92 ~ 2.10m,深さ5 ~ 7cmと非常に浅く,基底面はほぼ平らで,西(6.970m)と南(6.870m)から北(6.840m)の角に向かって傾斜する。断面は逆台形ないし舟底形である。埋土は褐色粘土質シルトに青灰色粘土質シルトが含まれていた。出土遺物には須恵器片1点,瓦器片8点,土師質土器片60点がみられ,瓦器(553・554)2点が図示できた。

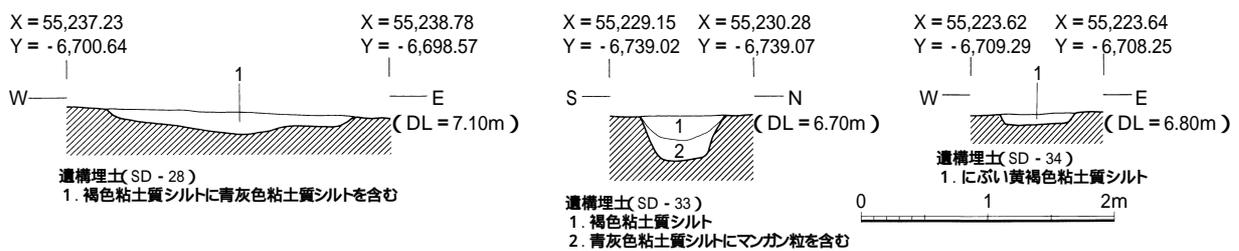


Fig.110 SB - 28・33・34 セクション図

出土遺物

瓦器 (Fig.113 - 553・554)

2点とも椀である。553は口径14.8cmを測る。外面は口縁部にヨコナデ調整を1段,体部に指頭圧痕が残りに,内面は体部に部分的にヨコ方向のヘラ磨きが見られる。焼成が甘く著しく摩耗するが,炭素は内外面とも吸着する。554は底径4.4cmを測る。外面は底部に幅が広く扁平な断面蒲鉾形の高台が付き,体部にはナデ調整,指頭圧痕が見られる。内面は底部に幅3mmの太い平行線状の暗文が見られる。外面には炭素は全く吸着していない。

SD - 29 (Fig.111)

SD - 28内で検出した半円形を呈する溝で,両端は調査区外にのびる。4.10mを検出し,幅0.27 ~ 0.57m,深さ15cmを測る。断面は逆台形ないしU字形を呈し,基底面は西(6.800m)から東(6.700m)に傾斜している。埋土は暗褐色粘土質シルトで土器の細片と炭を多く含んでいた。出土遺物には瓦器片18点,土師質土器片55点がみられ,瓦器(555・556)2点,土師質土器(557・558)2点が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.113 - 555・556)

2点とも椀である。555は口径15.5cm,器高4.8cm,底径4.4cmを測るほぼ完形のものである。外面は口縁部にヨコナデ調整を1段,体部には規則正しく指押えが2段行われており,底部には幅が広く扁平な断面蒲鉾形の高台が付く。内面は体部にヨコ方向のヘラ磨き,底部に平行線状の暗文が見られる。炭素は内外面とも吸着するが,焼成が甘く炭素が残っていないところは赤褐色を呈する。556は底径4.6cmを測る。外面は幅が広く扁平な断面蒲鉾形の高台が付き,内面には幅1mmの細い平行線状の暗文が見られる。炭素は内面にのみ吸着し,外面は赤褐色を呈する。

土師質土器 (Fig.113 - 557・558)

557は杯で、口径14.6cmを測る。内湾気味にのびる体部に、若干外反する口縁部が付く。調整は回転ナデ調整であるが、体部外面にはナデ調整も見られる。558はほぼ完形の小皿で、口径7.9cm、器高1.4cm、底径3.9cmを測る。口縁部は底部から緩やかにほぼ真直ぐ立ち上がる。外底面は回転ヘラ切り、その他は回転ナデ調整を行い、内底面にはナデ調整を加える。内面はロク口調整時の凹凸が著しい。

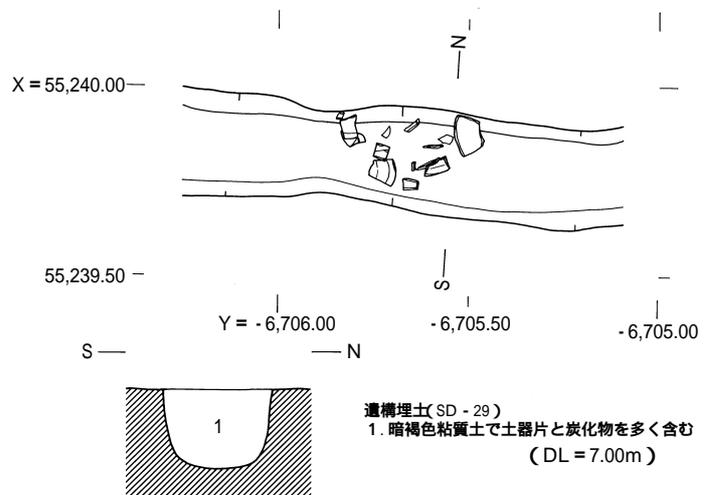


Fig.111 SD - 29 遺物出土状態

SD - 30

落ち込みの北側で検出した東西溝で、西端は調査区外にのびる。一部南北に分かれている部分や途切れている部分があるが、本来は一本の溝であったものと見られる。長軸方向はN - 85° - Eを示す。45.00mを検出し、幅0.15~0.63m、深さ9~13cmを測る。断面は舟底形を呈し、基底面は東(6.960m)から西(6.690m)に傾斜する。埋土はにぶい褐色粘土質シルトに褐白色粘土質シルトが含まれている。出土遺物は須恵器片が1点のみで、図示できなかった。

SD - 31

落ち込みの北側で検出した南北溝で、北端はSD - 28に切られ、南端はSD - 33に繋がる。長軸方向はN - 2° - Eを示す。6.20mを検出し、幅0.15~0.29m、深さ3~10cmを測る。断面は舟底形を呈し、基底面はほぼ平らで標高は約6.860mである。埋土は暗褐色粘土質シルトに黄褐色粘土質シルトのブロックが含まれていた。出土遺物は皆無であった。

SD - 32

落ち込み内で検出した南北溝で、南端は調査区外にのびる。長軸方向はN - 5° - Eを示す。15.30mを検出し、幅0.29~0.84m、深さ5~27cmを測る。断面は舟底形を呈し、基底面は平らで標高約6.500mである。埋土は褐色粘土質シルトに黄褐色粘土質シルトのブロックが含まれている層と、にぶい黄褐色粘土質シルトに黄褐色粘土質シルトのブロックが含まれている層に分層される。出土遺物は皆無であった。

SD - 33 (Fig.110)

落ち込み内で検出したL字状の溝で、東西48.50m、南北15.70mを検出した。東西にのびる部分はSD - 30、南北にのびる部分はSD - 32に平行しており、長軸方向は東西N - 85° - E、南北N - 5° - Eを示す。コーナー部分はほぼ直角に屈曲し、一部土坑に切られていた。幅0.15~0.98m、深さ3~39cmを測り、断面は逆台形または舟底形を呈する。基底面はほぼ平らで、標高はコーナー部分(6.360m)が最も高く、西(6.200m)と南(6.220m)に傾斜する。埋土は褐色粘土質シルトでコーナーの西側では一部分層され、下層は青灰色粘土質シルトにマンガン粒を含んでいた。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片25点がみられ、土師質土器(559)1点が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.113 - 559)

559は椀で、口径15.2cmを測る。体部は内湾して立ち上がり、口縁部を大きく外反させ、端部を肥厚させる。調整は回転ナデ調整で、体部には一部ナデ調整を施す。

SD - 34 (Fig.110)

落ち込み内で検出した南北溝で、南端は調査区外にのび、18.90mを検出した。SD - 32にほぼ平行しており、長軸方向はN - 5 ° - Eを示す。幅0.34 ~ 0.60m、深さ6 ~ 33cmを測る。断面は舟底形を呈し、基底面は平らで標高約6.430mである。埋土にはぶい黄褐色粘土質シルトであった。出土遺物には瓦器片10点、土師質土器片75点、白磁2点がみられ、土師質土器(560)1点、白磁(561・562)2点が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.113 - 560)

560は椀で、底径7.6cmを測る。厚さ1.8cmの非常に厚い底部から緩やかに立ち上がる直線的な体部を持つ。底部には断面台形の幅の太い高台が付き、体部下端には断面三角形の小さな突帯が巡る。内面は回転ナデ調整を行い、外面は摩耗するため不明瞭であるが、部分的に回転ナデ調整が見られる。

白磁 (Fig.113 - 561・562)

561は碗で、底径5.8cmを測る。底部は細く高い直立する削り出し高台となる。内面には底部と体部の境に1条の沈線が巡る。器面には灰白色の釉を約0.1mmの厚さに施すが、体部下半には見られない。562は皿の破片である。体部は内湾し、口縁部は緩い稜をもって外反する。内面から体部外面には灰オリーブ色の釉を施す。

SD - 35 (Fig.112)

落ち込み内で検出したL字状の溝で、西端は調査区の西端で検出したSR - 3に繋がり、南端は調査区外にのび、東西50.50m、南北18.10mを検出した。SD - 33にほぼ平行しており、長軸方向は東西N - 87 ° - E、南北N - 4 ° - Eを示す。幅0.41 ~ 0.90m、深さ6 ~ 52cmを測り断面は逆台形ないし舟底形を呈する。標高はコーナー(6.300m)から南(6.330m)と西(5.950m)に傾斜する。埋土はコーナーから西側では分層され上層が暗褐色粘土質シルトと下層は青灰色粘土で、コーナーから南は暗褐色粘土質シルトの単一層であった。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片17点、土師質土器片65点、白磁片1点、青磁2点がみられ、瓦器(563・564)2点、土師質土器(565・566)2点、青磁(567・568)2点が図示できた。

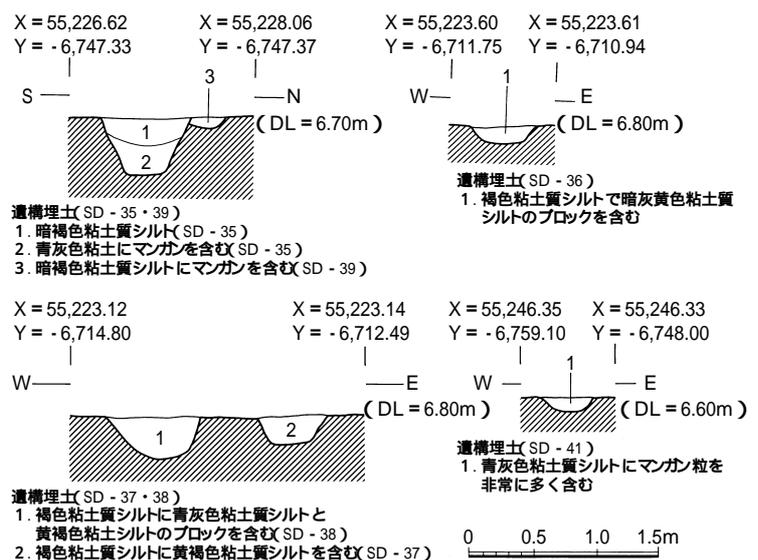


Fig.112 SD - 35 ~ 39・41 セクション図

出土遺物には須恵器片1点、瓦器片17点、土師質土器片65点、白磁片1点、青磁2点がみられ、瓦器(563・564)2点、土師質土器(565・566)2点、青磁(567・568)2点が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.113 - 563・564)

2点とも椀である。563は口径13.6cmを測る。体部が直線的にのびる特異な形態で、口縁部も歪んでいる。外面は口縁部にヨコナデ調整を1段、体部に指頭圧痕が残る。内面は比較的密にヘラ磨きが施される。炭素は内外面とも吸着する。564は口径13.8cmを測る。外面は口縁部に強いヨコナデ調整を1段、体部に指頭圧痕が残る。内面は部分的にヘラ磨きが施される。炭素は内外面とも吸着するが、体部外面下半には吸着していない。

土師質土器 (Fig.113 - 565・566)

565は杯で、底径7.4cmを測る。体部は底部から緩やかに立ち上がり、直線的にのびる。外底面は回転系切り、その他は回転ナデ調整である。566は椀で、底径6.2cmを測る。体部は低い円盤状高台の底部から緩やかに立ち上がる。外底面は回転系切り、その他は回転ナデ調整と見られる。

青磁 (Fig.113 - 567・568)

567は同安窯系の碗で、底径4.8cmを測る。底部は太く直立する削り出し高台となる。内面には底部と体部の境に浅い段を有する。内面と外面の高台付近まで黄色を帯びた緑色釉を薄く施す。568は龍泉窯系の碗で、口径16.6cmを測る。体部は内湾気味にのび、口縁部を若干外反させる。内面には劃花文を施す。器面には濃いオリーブ色の釉を約0.2mmの厚さに施す。

SD - 36 (Fig.112)

落ち込み内で検出した南北溝で、北端はSD - 35に繋がり、南端は調査区外にのびる。長軸方向はN - 4° - Eを示す。14.20mを検出し、幅0.38 - 0.64m、深さ15 - 22cmを測る。断面は舟底形を呈し、基底面はほぼ平らで標高は約6.400mを測る。埋土は褐色粘土質シルトに暗灰黄色粘土質シルトのブロックが含まれていた。出土遺物には土師質土器片1点、白磁1点がみられ、白磁(569)1点が図示できた。

出土遺物

白磁 (Fig.113 - 569)

569は碗で、底径6.4cmを測る。底部は断面三角形で幅が太く高い削り出し高台となり、内面には底部と体部の境に浅い段を有する。内面と外面の高台付近まで灰白色の釉を薄く施す。

SD - 37 (Fig.112)

落ち込み内で検出した南北溝で、SD - 38を切っていた。長軸方向はN - 4° - Eを示す。12.00mを検出し、幅0.23 - 1.28m、深さ7 - 14cmで、基底面は北(6.280m)から南(6.220m)に傾斜する。断面は逆台形である。埋土は褐色粘土質シルトに黄褐色粘土質シルトのブロックを含んでいた。出土遺物には瓦器片10点がみられ、瓦器(570)1点が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.113 - 570)

570は椀で、口径15.2cmを測る。外面は口縁部にヨコナデ調整を1段、体部に指頭圧痕が残る。内面は比較的密にヘラ磨きが施される。炭素は内外面とも吸着する。

SD - 38 (Fig.112)

T字状の溝で、南北端は調査区外にのび、西端はSR - 3に繋がる。北端から交差点までは落ち込み

内に入るため傾斜がきつく、SD - 35を切っていた。南北27.50m、東西45.60mを検出し、長軸方向は南北がN - 1° - E、東西がN - 87° - Eを示す。幅0.30~2.30m、深さ7~45cmで、断面は舟底形を呈する。東西方向の基底面はほぼ平らで、標高は6.400m前後を測るが、SD - 33・35は東から西に傾斜するため、SD - 38も東から西に傾斜する可能性もある。埋土は褐色粘土質シルトに青灰色粘土質シルトのブロックと黄褐色粘土質シルトのブロックが含まれていた。出土遺物には瓦器片6点、土師質土器片25点、白磁片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

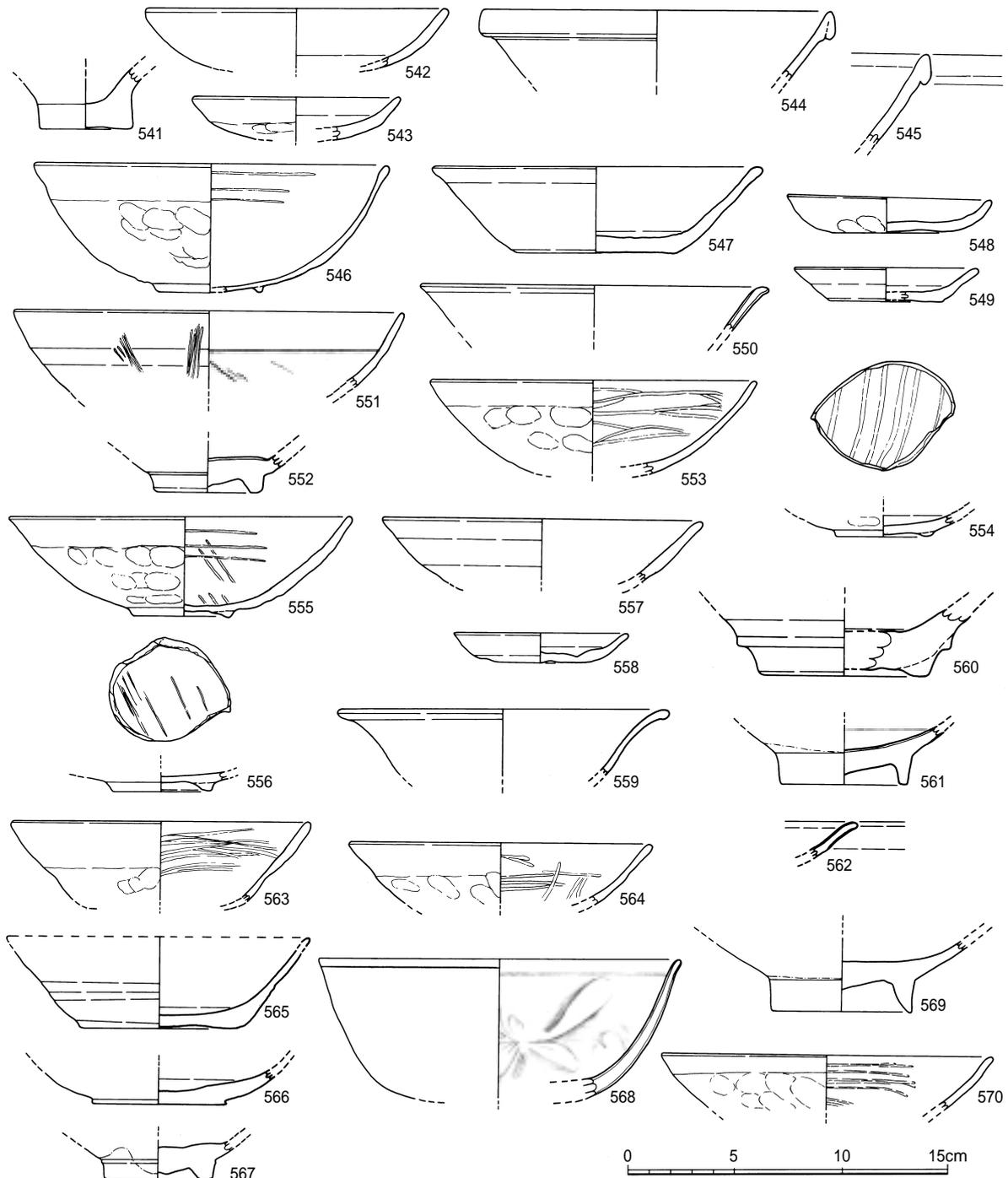


Fig.113 SD - 22・25・27~29・33~37 出土遺物実測図

SD - 39 (Fig.112)

調査区の北側で検出した溝で、SD - 35にほぼ平行する。一部SD - 35に切られ、西端はSR - 3に繋がる。長軸方向はN - 87° - Eを示す。29.70mを検出し、幅0.16～0.44m、深さ2～10cmを測る。断面は舟底形を呈し、基底面は東(6.610m)から西(6.410m)に傾斜する。埋土は暗褐色粘土質シルトでマンガンを含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SD - 40

調査区の北部で検出した溝で、SD - 35にほぼ平行する。長軸方向はN - 83～88° - Eを示す。21.10mを検出し、幅0.10～0.45m、深さ5～10cmを測る。断面は舟底形で、基底面は東(6.560m)から西(6.350m)へ傾斜する。埋土は褐色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片6点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD - 41 (Fig.112)

調査区の西部で検出した南北溝で、北端はSD - 38に繋がり、南端は調査区外にのびる。長軸方向はN - 1° - Eを示す。24.30mを検出し、幅0.31～0.41m、深さ10cmを測る。断面は舟底形で、基底面は南(6.590m)から北(6.200m)に傾斜する。埋土は青灰色粘土質シルトで、マンガン粒を非常に多く含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SD - 42

調査区の西部で検出した南北溝である。SD - 41にほぼ平行しており、長軸方向は北を向く。北端はSD - 38に繋がり、南端は調査区外にのびる。21.50mを検出し、幅0.42～0.76m、深さ8～15cmを測る。断面は舟底形で、基底面は南(6.390m)から北(6.080m)に傾斜する。埋土は青灰色粘土質シルトで、マンガン粒を非常に多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

▼ ピット

P - 11

調査区東端で検出したピットで、SB - 10内に位置する。径46～56cmの不整円形で、深さ71cmを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトである。出土遺物には瓦器片13点、土師質土器片45点、土錘1点、短刀1点、鉄釘1点、鉄滓1点がみられ、瓦器(571)1点が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.114 - 571)

571は椀で、口径14.4cmを測る。外面は口縁部に強いヨコナデ調整を1段、体部に指頭圧痕が残る。内面は比較的密にヘラ磨きが施される。炭素は内外面とも吸着するが、内面には殆ど残っていない。

P - 12

調査区東端で検出したピットで、SB - 12内に位置する。径40～47cmの不整円形で、深さ42cmを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトである。出土遺物には瓦器1点、土師質土器片13点がみられ、瓦器(572)が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.114 - 572)

572は小皿で、口径8.2cm、器高1.4cm、底径4.2cmを測る。底部から緩やかに立ち上がり、口縁端部を細く仕上げている。口縁部はヨコナデ調整、体部と底部に指頭圧痕が残る。炭素は内外面とも一部に吸着する。

P - 13

調査区の東部で検出したピットで、SB - 13の西側に位置する。径54cmの円形で、深さ23cmを測り、径20cmの柱痕が残存する。埋土は暗褐色粘土質シルトであった。出土遺物には瓦器片2点、土師質土器片11点がみられ、瓦器(573)1点、土師質土器(574・575)2点が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.114 - 573)

573は椀で、口径15.7cm、器高3.9cm、底径3.4cmを測る。外面は口縁部にヨコナデ調整を1段、体部には規則正しく指押えが3段行われており、底部には断面蒲鉾形の小さな高台が付く。内面は著しく摩耗しており、調整は不明瞭である。炭素は内外面とも全く吸着しておらず、赤褐色を呈する。

土師質土器 (Fig.114 - 574・575)

2点とも小皿である。574は口径7.5cm、器高1.5cm、底径5.0cmを測る。口縁部は直線的で、端部を肥厚させて丸く納める。外底面は回転系切り、その他は回転ナデ調整を施す。575は口径7.7cm、器高1.9cm、底径4.2cmを測る。内外面とも底部と口縁部の境に段を有する歪なものである。外底面は回転系切り、その他は回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加える。

P - 14

調査区の東部で検出したピットで、SD - 25を切っている。径34cmの円形で、深さ42cmを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトであった。出土遺物には瓦器片2点、土師質土器片6点がみられ、瓦器(576)1点が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.114 - 576)

576は椀で、底径4.0cmを測る。外底面には断面三角形の高台が付き、体部には指頭圧痕が残る。底部内面には部分的に幅1mmの細い平行線状の暗文が見られる。焼成が良く、内外面とも炭素が吸着する。

P - 15

調査区の東部で検出したピットで、SB - 15の東側に位置する。径22cmの円形で、深さ43cmを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトであった。出土遺物は土師質土器(577)1点である。

土師質土器 (Fig.114 - 577)

577は足高台の杯である。底部内面はロクロ目が顕著で著しく歪み、中央が盛り上がっている。底部外端には八の字に開く高い高台が付く。調整は回転ナデ調整で、外底面は回転ヘラ切りである。

P - 16

調査区の東部で検出したピットで、SB - 16内に位置する。径29～38cmの楕円形で、深さ41cmを測

る。埋土は暗褐色粘土質シルトである。出土遺物には瓦器片4点,土師質土器片50点がみられ,土師器(578)1点と土師質土器(579)1点が図示できた。

出土遺物

土師器 (Fig.114 - 578)

578は杯で,口径14.4cmを測る。胎土が密で,器壁が薄く,焼成も良いものである。体部は底部から稜をもたず緩やかに立ち上がり,口縁部は短く内傾する。調整は口縁部がヨコナデ調整,その他はナデ調整を行い,外面体部と底部に指頭圧痕が残る。

土師質土器 (Fig.114 - 579)

579は小皿で,口径7.8cm,器高1.3cm,底径4.8cmを測る。底部と体部の境に明瞭な稜をもたず緩やかに立ち上がる。外底面は回転糸切り,その他は回転ナデ調整で,内底面にはナデ調整を加える。

P - 17

調査区の東部で検出したピットで,SD - 27の南側に位置する。一辺20~35cmの方形で,深さ8cmを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトであった。出土遺物には瓦器片3点,土師質土器片6点がみられ,瓦器(580)1点が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.114 - 580)

580は椀で,底径4.7cmを測る。外面は底部に断面三角形の幅の広い高台が付き,体部には指頭圧痕が残る。内底面には斜格子状の暗文が見られる。炭素は内外面とも吸着していたと見られるが,外面には殆ど残っていない。

P - 18

調査区の東部で検出したピットで,SB - 18内に位置する。径20~30cmの円形で,深さ37cmを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトであった。出土遺物には瓦器片4点,土師質土器片4点がみられ,瓦器(581~583)3点,土師質土器(584)1点が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.114 - 581 ~ 583)

3点とも椀である。581は口径15.4cm,器高4.7cm,底径4.4cmを測る。外面は口縁部にヨコナデ調整を1段,体部に指頭圧痕が残り,底部には断面台形の高台が付く。内面は比較的密にヘラ磨きが施される。炭素は内外面とも吸着する。582は口径14.3cmを測る。外面は口縁部にヨコナデ調整を1段,体部に指頭圧痕が残る。内面は体部に比較的密にヘラ磨きが施され,底部には平行線状の暗文が見られる。583は口径16.5cmを測る。外面は口縁部にヨコナデ調整を1段,体部に強い指頭圧痕が残る。内面は摩耗するが,部分的にヘラ磨きが残る。

土師質土器 (Fig.114 - 584)

584は杯で,口径15.2cm,器高4.1cm,底径7.2cmを測る。体部は直線的にのびる。調整は外底面を回転糸切り,その他は回転ナデ調整を施し,内面には丁寧なナデ調整を加える。

P - 19

調査区の東部で検出したピットで,P - 17の南側に位置する。径50cmの円形で,深さ45cmを測る。

埋土は暗褐色粘土質シルトに黄褐色粘土質シルトのブロックが含まれていた。出土遺物には瓦器片3点,土師質土器片4点,鉄釘1点がみられ,瓦器(585)1点が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.114 - 585)

585は小皿で,口径8.8cm,器高1.9cm,底径2.6cmを測る。丸底で,器高の高いものである。外面は口縁部にヨコナデ調整,底部に指頭圧痕が残る。内底面に平行線状の暗文が見られる。器面は摩耗するが,炭素は内外面とも吸着する。

P - 20

調査区の東部で検出したピットで,SD - 25の西側に位置する。径25cmの円形で,深さ25cmを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトに黄褐色粘土質シルトのブロックを含むものであった。出土遺物には瓦器片3点,土師質土器片2点がみられ,瓦器(586)1点が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.114 - 586)

586は椀で,口径15.4cmを測る。外面は口縁部にヨコナデ調整を1段,体部に指頭圧痕が残る。内面は比較的密なヘラ磨きが施される。

P - 21

調査区中央部の落ち込み内で検出したピットで,SK - 50の東に位置する。径25cmの円形で,深さ22cmを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトに黄褐色粘土質シルトのブロックを含むものであった。出土遺物には瓦器片3点,土師質土器片8点がみられ,土師質土器(587)1点が図示できた。

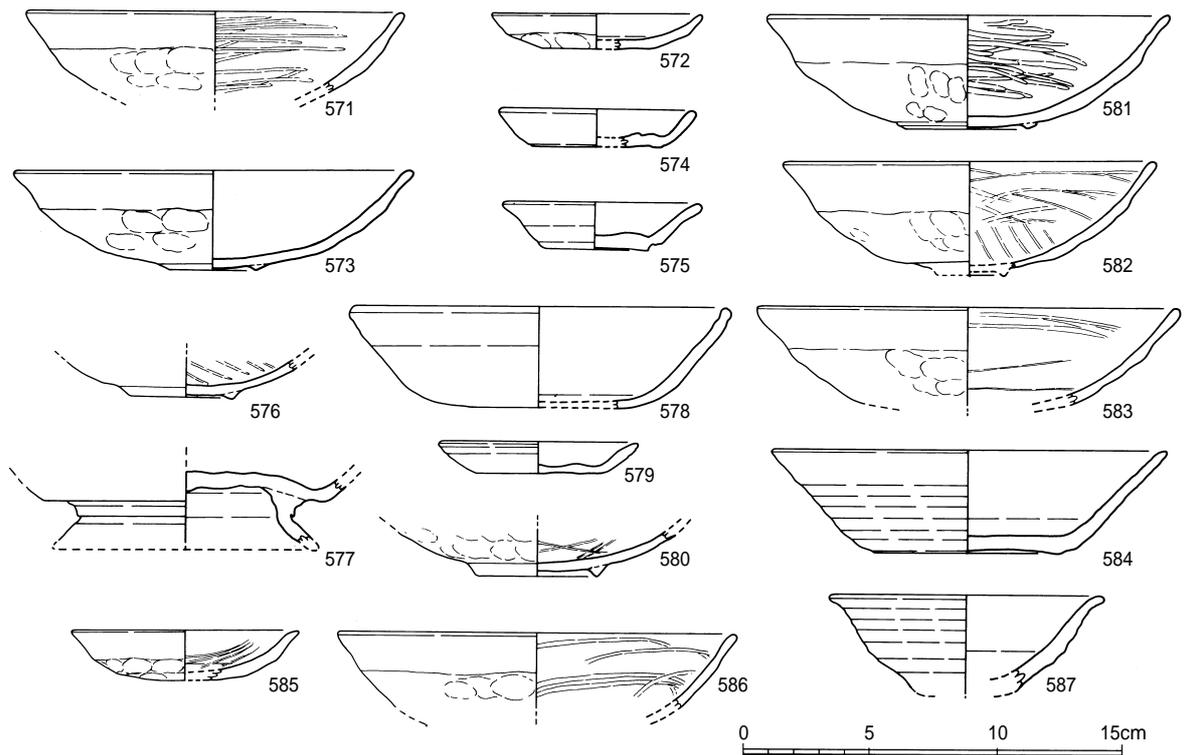


Fig.114 C区 ピット 出土遺物実測図

出土遺物

土師質土器 (Fig.114 - 587)

587は椀で、口径10.6cmを測る。体部は内湾して立ち上がり、口縁部を外反させる。調整は回転ナデ調整で、外面はロクロ目が顕著に残る。

vi 性格不明遺構

SX - 6

落ち込み内で検出したL字状を呈するSD - 33のコーナー部分で検出した遺構で、SD - 33を切っている。隅丸方形を呈し、長径3.80m、短径1.12m、深さ40～54cmを測る。断面は逆台形形で、基底面はほぼ平らである。埋土は灰黄色粘土質シルトで、黄褐色粘土質シルトのブロックを含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SX - 7

調査区の北側で検出した落ち込み状の遺構で、SD - 30を切っていた。長辺は10.80mを検出し、短辺1.20～2.30m、深さ5～15cmを測る。基底面は平らで、断面は舟底形である。埋土は褐色粘土質シルトであった。出土遺物には須恵器片2点、土師質土器片6点、白磁片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

vii 自然流路

SR - 3 (Fig.115)

調査区の北西隅で検出した自然流路である。調査区外へのびており、西側の掘方は一部で確認できたのみであった。長さ4.31mを検出し、幅0.79～1.57m、深さ約80cmを測る。基底面は著しく凹凸しており、標高は5.690～5.890mである。断面はU字形を呈し、埋土は4層に分層され、1層が茶褐色粘土質シルト、2層が灰茶褐色粘土質シルト、3層が灰褐色粘土質シルト、4層が青灰色粘土であり、すべてマンガン粒を含むと共に1層中には植物遺体の混入が認められた。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片3点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

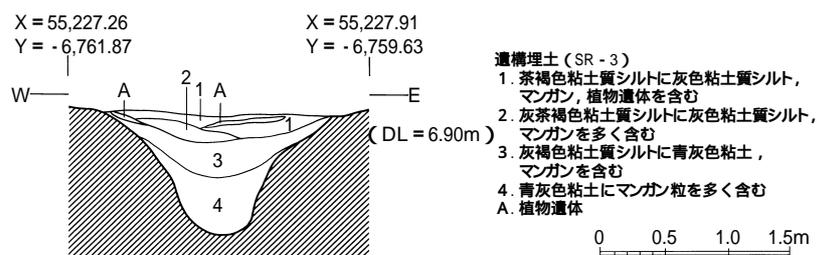


Fig.115 SR - 3 セクション図

第 章 考察

1. 古墳時代

古墳時代の遺構はSF - 1のみであった。SF - 1では東西約1.40m ,南北約1.60mの範囲に4世紀末から5世紀初頭と考えられる土師器の壺,甕,高杯等がまとまって出土しており一括性が高い。出土点数は70数点と決して多くはないが,遺存状況は良好で完形に近いものも残存し廃棄されたとは言いがたい。しかし明確な掘り方はなく,祭祀的な行為に使用されて当地に置かれたものと推察される。

当該期の県中央部では,低湿地の小河川近辺で高杯や小型丸底壺を供する祭祀形態が盛行している。この場合土師器と手づくね土器がセットで出土することが多く,弥生時代から連続と続く土器群を使用した伝統的な祭祀形態であると考えられている⁹⁾。本遺跡では古墳時代の遺物包含層は確認できなかったが,古代の遺物包含層から出土した古式土師器は実測遺物中40点を数える。そのうち28点がSF - 1周辺から出土したものであり,手づくね土器は確認できなかったものの,3点の小型壺,15点の高杯が含まれており,器種構成からみても祭祀的行為に使用された可能性が窺えよう。

さて,本遺跡が立地する沖積低地については,土壌分析の結果においても古墳時代頃まで氾濫の影響を受ける不安定な状況下にあり,湿地や草草が広がっていたものと推定されている。A区の地形としては北西が若干高く,中央がほぼ平坦であり南東に向かって下がる。SF - 1は標高の低い東の低地から北西の微高地へ向う緩斜面を上った場所に位置する。出土遺物も少量であり,当時の本遺跡周辺の状況を明らかにするには資料不足と言わざるを得ないが,あえて推論するならば,東に位置する県下第2位の河川,仁淀川の周囲は氾濫を繰り返す低湿地であり,人々は点在する自然堤防上に生活の拠点を構え,その周辺で祭祀を行ったのではなかろうか。当地に置かれた古式土師器の多くが古代の遺物包含層から出土するのは,古代になると低地も離水し居住可能区域の拡大に伴って人口も増え,整地等が行われたことが考えられる。(伊藤)

2. 古代

古代の遺構として確認したものは土坑6基,溝跡3条,自然流路2条,集石遺構1基,性格不明遺構5基と数少なく,しかもA区全域に分散しており,当時の様相を把握する上で十分とは言いがたい。遺物包含層は調査区全体に広がりを見せるものの,南東方向へ標高が下がるに伴い,検出遺構も出土遺物も少なくなる。西端部では遺物包含層の広がりはなく,中世の遺構面で古代の遺構も確認しており,古代の遺物包含層は中世段階に削平されたものと推察される。出土遺物は8世紀後半から11世紀までの土師器,須恵器が主であり,土師器がほぼ28%,須恵器が68%を占める。搬入品や緑釉陶器など貴重な遺物も多く,中心となる時期は8世紀後半から10世紀,10世紀後半から11世紀の2時期と考えられる。

10世紀後半から11世紀の遺構としてはSD - 2・3及びその周辺のピット群が挙げられる。これら

は他の遺構よりやや標高の高い地点で検出しており一群のものと捉えることができる。ピット群は北に向かい調査区外にも広がる可能性が高く、建物跡などの存在も想定されるが、今回調査した部分からは確認できなかった。SD - 2・3は互いに直行する溝跡で、南北を意識して配されており、これらの区域の排水溝あるいは区画溝として機能していた可能性も考えられる。SD - 2から出土した土師質土器の小皿(418)は底部切り離しが回転ヘラ切りであり、10世紀末から11世紀の時期が想定される。

8世紀後半から10世紀までの様相を述べる上では、調査区南西部を中心に出土している搬入品と考えられる土師器が有効な遺物である。SX - 5から出土した杯・皿類(443・444～447)は、ほぼ全体に丁寧なヘラ磨きが施されており、胎土も類似している。焼成も良好で、暗文を施すものもある。特に、447は内面に放射線状とラセン状の暗文や丁寧なヘラ磨きを施しており、平城京周辺部から搬入された可能性が高く、時期的には平城 頃ではないかと考えられる。SK - 6出土の皿(411)や、中世の遺物包含層からではあるが、SK - 6周辺部より出土した皿(6)なども搬入品の可能性が高い。SX - 5, SK - 6などから出土した一群の遺物は平城 を中心に、平城 や平城 の時期のものが散見され、ほぼ8世紀後半代の時期でおさえられる。これらに加え、SK - 4からは朱塗りの土師器の杯(399)が出土している。特別な饗宴に使用されるべき容器であり、一般集落の遺物とは考え難い。また転用硯とみられる須恵器の杯が2点(127・128)遺物包含層より出土しており、官衙や寺院との関わりを示唆する遺物として重要である。その他にも特筆すべきものとして、34点出土した緑釉陶器が挙げられる。緑釉陶器については、別項に譲る。

これらの出土遺物は、8世紀後半から10世紀代にかけて本遺跡及びその周辺地域の中央との密接な繋がりを想定させるものである。吾川郡8郷から4郷を分離し高岡郡を置いた時期でもあり、高岡郡の地名が高岡郷から来ているという説²⁾をとるなら、この高岡地区に郡衙あるいは、何らかの官衙関係施設が存在した可能性は否定できないのではなかろうか。庶民の生活用品とは考え難くこれらの遺物は、官衙あるいは寺院等のものである可能性が高い。しかしながら遺構の検出状況からみると本遺跡は官衙、寺院等の施設の縁辺部と言わざるを得なく、施設本体は周辺のどこかに所在するのではなかろうか。

また、施設との関連を考えるうえで、本遺跡の南約300mに所在する犬ノ場窯跡の存在を挙げるることができる。犬ノ場窯跡は高岡郡下では数少ない須恵器窯跡³⁾の一つであり、須恵器工人の管轄にあたった役所等が周辺に存在した可能性も考えられる。付け加えれば、古代に関わる出土遺物の中で須恵器の占める割合が高いのは、犬ノ場窯跡からの供給によるものであるという推論も成り立つのではないだろうか。(伊藤)

3. 中世

中世の遺物包含層はA区の西半, B区, C区で認められ, A区の東半は遺物包含層が削平されて残っておらず, 遺構も削平されたものと見られ, 確認できなかった。特に, 遺構が多く検出されたのはA区の西部, B区, C区の東部で, 現在, 道路と用水路がある微高地を中心に遺構が検出された。掘立柱建物跡17棟, 塀または柵列7列, 土坑46基が確認されており, それらを区画するように溝が

設置されている。中世の遺物としては、12世紀中葉から13世紀中葉にかけての和泉型瓦器椀、12世紀末から13世紀前半の東播系須恵器、12世紀後半から13世紀の白磁・青磁などが出土しており、12世紀後半から13世紀前半にかけての遺物が主体を占める。中でも瓦器が比較的多く出土していることや湖州方鏡の出土は注目される。

遺構もこれらの遺物とほぼ同時期と捉えることができる。A区で検出されたSB - 1とSB - 3は長軸方向がほぼ同じで平行しており、出土遺物も時期差がないことから同時に存在していたと捉えられる。SD - 4とSD - 5はほぼ平行しており、道路の側溝の可能性も考えられる。また、出土遺物はSB - 1とSB - 3では時期差がなく、長軸方向は全く異なっており、埋没時期は同時期だが、掘削された時期は異なるとみられる。SD - 6・7も同様で、SB - 2と出土遺物の時期は同じだが長軸方向は平行しておらず、埋没時期は同時期だが、掘削された時期は異なると考えられる。

B区はSB - 4とSB - 5が重なっており、長軸方向も異なることから建て替えが行われたと見られるが、出土遺物には大きな時期差はなく、大きく12世紀後半から13世紀前半のものとみられ、SB - 4とSA - 5、SB - 5とSA - 2、SD - 1はそれぞれ平行しており、建物に付属するものと捉えることができる。SB - 7とSB - 8についても同様で、建て替えを行っているが大きな時期差はなく、他の建物と同じ時期と捉えることができる。B区で検出された溝はA・C区とは異なり、大きく湾曲しながら南北に延びている。SD - 12・13・17・18は湾曲している溝で、一部切り合っている部分もあるが、湾曲しながらもほぼ平行に延びている。いずれの溝も南端は他の溝に繋がらず途中で止まっている。中でもSD - 12・17は出土遺物が非常に多く、様相が似ていることから時期差もほとんどないものとみられる。これらの溝の用途は不明であるが、掘立柱建物跡とは平行せず、避けるように延びていることから、掘立柱建物跡よりは後に掘削されたものと見られる。

C区では掘立柱建物跡9棟を検出している。棟方向はすべて北を意識しており、長軸方向は北あるいはそれに直行する方向で、区画溝と見られるSD - 22あるいはSD - 25に平行している。出土遺物や遺構の埋土を見る限り大きな時期差はなく、A区、B区の建物跡と同じ時期と捉えられる。掘立柱建物跡が重なっていること、溝に切られている建物跡があることから、1~2回の建て替えが行われたとみられるものの、集落の存続期間は比較的短いものと考えられる。

Tab.8 A区・B区掘立柱建物跡計測表

遺構番号	規 模				面積 (m^2)	棟方向 (Nは真北)	備考
	梁間×桁行	梁間(m)×桁行(m)	柱間寸法				
			梁(m)	桁(m)			
SB - 1	1×3	1.65~1.75× 5.80	1.65・1.75	1.80~2.05	9.86	N - 4° - E	
SB - 2	3×2	4.50~4.85×5.10~5.25	1.75~1.95	2.50~2.85	24.44	N - 88° - W	北庇
SB - 3	2以上×4	3.20~3.30以上×6.00~6.10	1.70	1.00~1.80	19.06	N - 2° - E	
SB - 4	1×2	1.90 × 3.20	1.90	1.60	6.08	N - 1° - E	
SB - 5	3×3	5.40~5.45×5.20~5.50	1.80~2.40	1.25~2.15	29.02	N - 84° - W	北庇
SB - 6	2×2	3.60 × 3.90~4.00	1.80	1.90~2.10	14.22	N - 10° - E	
SB - 7	2×2	4.50 × 4.70	2.10	2.10, 2.40	21.15	N - 82° - W	
SB - 8	2×2	3.60 × 4.70	1.80	2.30, 2.40	16.92	N - 84° - W	総柱

C区の西半分は急に地形が落ち込んでおり、調査区の東半分は検出面の標高が7.600m前後であるのに対して、調査区の西端の最も低いところは標高6.000mであった。落ち込み内では掘立柱建物跡やピットは検出されず、多数の溝が検出された。C区の東半分は微高地になっているため水捌けが良く、生活に適していると言えるが、落ち込み内は水捌けが悪く、溝を配し排水を行っていたと考えられる。これらの溝には企画性がみられ、南北方向あるいは東西方向に配されていた。SD - 33・35・38はL字状あるいはT字状を呈する溝で、コーナー部分はほぼ直角に屈曲し、それぞれ平行している。その他の溝の大半はこれらの溝にほぼ平行している。やや標高の高い北側に東西方向に延びる溝を配し、その内SD - 35・38の西端はSR - 3に繋がり、基底面の標高は、SR - 3に向かって低くなっている。SD - 33の西端は調査区外に続くもののSR - 3に繋がる可能性があり、基底面はほぼ平らであるがSD - 33・35に平行していることもあり東から西に傾斜していた可能性もある。南北方向に延びる溝の大半は基底面の標高が北から南に傾斜しているが、SD - 41・42は逆で、南から北に傾斜し、北端はSD - 38に繋がっている。SD - 33・35・38の切り合いを見ると、SD - 33、SD - 38、SD - 35の順に掘削されているが、出土遺物を見る限り時期差はほとんどなく、埋土も同じであるため、同時に存在し、埋没時期も同時期という可能性も考えられる。落ち込みの肩部では一部遺物包含層が厚く湖州鏡などが出土しているが、L字状の溝で囲まれた範囲は遺物包含層が非常に薄く、出土遺物も少なかった。また、水捌けが悪いこと、溝の配置の仕方などを考えると、湿地を利用した水田耕作の可能性も考慮される。残念ながら土壌分析では水田であるとは断定できなかったものの、掘立柱建物跡が検出されている微高地とは明らかに異なった様相を呈していた。調査区北西隅で検出した自然流路に排水を流していた可能性も考えられ、集落内の構造を知る手掛かりとなっている。

出土遺物では、瓦器、東播系須恵器、白磁、青磁などの搬入品が出土している。中でもSD - 27とSD - 29からは土師質土器と伴出しており在地土器の編年資料となっている。SD - 27からは和泉型の瓦器編年の - 1類⁽⁴⁾、白磁の 類⁽⁵⁾、同安窯系の青磁と土師質土器が出土している。SD - 14では和泉型の瓦器編年の - 3類、 - 1類と土師質土器の小皿が出土している。土師質土器の小皿は底

Tab.9 C区掘立柱建物跡計測表

遺構番号	規模				面積 (m ²)	棟方向	備考
	梁間×桁行	梁(m)×桁(m)	柱間寸法				
			梁(m)	桁行(m)			
SB 9	1×2	2.10 × 4.30~4.35	2.10	2.15~2.20	9.14	N 84° W	
SB 10	3×2	5.30 × 6.00	1.30~2.00	3.00	31.80	N 11° W	南庇
SB 11	3×2	4.00 × 4.70~5.00	0.80・1.60	2.35~2.50	20.00	N 7° E	西庇
SB 12	2×4	4.15~4.60×6.05~6.10	2.05~2.35	1.10~1.85	28.06	N 84° W	西庇
SB 13	2×2	3.70~3.75×5.90~6.00	1.80~1.90	2.95・3.00	22.50	N 1° E	
SB 14	2×3	3.30~3.45×5.45~5.65	1.00~2.45	1.55~2.30	19.49	N 87° W	南庇
SB 15	2×2	4.00 × 4.30~4.45	2.00	2.15~2.30	17.80	N 2° E	
SB 16	3×3	4.60 × 6.15~6.20	0.80~1.95	1.50~2.60	28.52	北	西庇
SB 17	2×2	4.30~4.50 × 5.35	2.00~2.40	2.65・2.70	24.08	N 87° W	総柱

部外面が回転ヘラ切りとなっており、今回の調査で出土した12・13世紀の土師質土器にもヘラ切りのものが数点みられることから13世紀中葉頃まで底部切り離しに糸と共にヘラが併用されていたものとみられる。また、出土した中世の遺物の中では、瓦器が比較的多く、椀75点、小皿15点が図示できた。楠葉型は出土しておらず、すべて和泉型のもので、1期から2期の範疇で捉えることができ、特に3期から1期のもので多く出土している。高知県ではこの時期には土師質土器の椀が消滅し、瓦器、白磁、青磁の搬入が増加してくるとみられ、本遺跡で出土した瓦器もその頃のものと思われる。しかし、形態や製作技法は大きく和泉型の範疇で捉えられるものの、形態等やや異なるものが含まれていた。それらはやや腰が張る形態を呈するもの(31・260)、体部が直線的に伸びるもの(563)、口径が大きいもの(251・546・583)、高台の幅が広く粗雑に貼り付けたもの、器壁が厚いもの、焼きが甘く炭素の吸着が悪く橙色あるいは赤褐色を呈するもの(186・250・251・259・260・262・573)などである。黄褐色を呈するものは畿内で出土している和泉型にも見られるが、本遺跡で出土した瓦器ほど多くは含まれていない。これらの遺物は搬入品とは考え難いものであり、在地産の可能性を考える必要があるのではなかろうか。土師質土器に炭素が吸着しているものがあることや、愛媛県⁶⁾、徳島県⁷⁾でも在地産の瓦器が出土していることをみると、高知県でも生産されていた可能性も考えられる。ただ、愛媛県、徳島県で出土している在地産の瓦器は半径数キロ以内のごく限られた地域で一時的に生産された地域色の強いものである。本遺跡から数キロ南東に位置する春野町西畑遺跡で出土している瓦器に杯形を呈するものがあり、搬入されたとは考え難く、また、本遺跡から北に1kmに位置する天崎遺跡⁸⁾でも瓦器が多量に出土している。これらの遺跡はいずれも仁淀川流域に存在しており、何らかの関係があると見られる。これらのことを考え合わせると本遺跡の周辺で瓦器が生産されていた可能性が高いのではなかろうか。近年高知県でも在地産瓦器の存在が指摘されつつあり⁹⁾、今回の調査でその可能性がより高まったと言えよう。(田中)

4. 緑釉陶器について

緑釉陶器は古代の出土遺物の中でも、特に官衛的要素を反映するものとして知られている。生産の中心は畿内であり、山城では遺跡からの出土量も多い。近江、東海、防長にも拡散をみせるが、それら限定された地域のみで生産が続けられる。生産量の少ない9世紀前半までは儀式や特殊な饗宴の容器という側面が重視される。9世紀後半から10世紀前半には盛行期を迎え、一般集落からの出土量が増加傾向を辿り、儀式などに限定されない多様な用途を担うようになる¹⁰⁾という指摘もある。もちろんこれは山城や、尾張など生産地付近の傾向であり、土佐のような遠国においては、やはり官衛関連遺跡や寺院、祭祀に関係する出土例が多く、一般的な集落遺跡で出土することは希である。

本県における緑釉陶器の出土例について触れると、最も出土量が多いのは野市町の曾我遺跡で、45点を数える。猿投窯の1点を除き、他はすべて京都産で9世紀中頃から後半にかけてのものがほとんどである。円面硯や転用硯、付札状木製品等も出土しており、官衛跡であることは疑いないと報告されている¹¹⁾。同じく野市町の深淵遺跡は中央官衛、ないしは地方官衛と密接な関係を持った遺

跡と考えられており、9世紀中頃から後半の洛北産が6点と8世紀代の三彩陶器系が1点出土している¹²。中村市の風指遺跡では河川祭祀が営まれており、それは律令的な官制の祭祀と位置付けられている。出土した緑釉陶器で産地及び時期の限定できるものとして、9世紀中頃から10世紀初頭の京都産が数点挙げられている¹³。その他にも南国市の土佐国衙跡、大方町の宮崎遺跡、野市町の下ノ坪遺跡などの官衙関連遺跡、南国市の奥谷南遺跡などの寺院関連遺跡からも出土例が報告されている。

本遺跡において出土した緑釉陶器は、破片を含め34点(うち実測遺物20点)を数える。器形が確認できるのは23点で、159については皿の可能性を残すが、他はすべて椀である。素地の硬軟の割合は、硬質が79.4%を占める。全体的にハケぬりにより、薄く施釉されているものが多く、色調は灰オリーブ色と浅黄色を呈するものが主である。底部破片は7点を数え、底径は5.8~8.4cmを測る。高台の形態は削り出し高台が4点、平高台が3点であり、貼り付け高台は見られない。削り出し高台の4点すべてについては部分施釉であり、底部外面に釉を施していないことが確認できた。また、平高台の3点は全面施釉であった。口縁部破片では口径の測定できるものは5点で、11.7~17.0cmを測る。外上方に真直ぐ上がるものと、外反するものに分けられる。器高が測定できるものが一点もなく、生産地、時期を個々に明確にすることは困難であるが、全体的にみると、京都産の量産型の緑釉陶器であり、時期的には9世紀後半から10世紀前半代のもものがほとんどであると考えられる。

県内でも発掘調査の増加に伴って、緑釉陶器の出土例も徐々に増えつつあるが、まとめて出土しているのは曾我遺跡、土佐国衙跡など少数の遺跡にとどまる。本遺跡においては34点と曾我遺跡に次ぐ出土量を数えており、官衙ないしは寺院等との関連を示唆するものであると考える。なお付け加えると、本遺跡の東に隣接する野田遺跡でも緑釉陶器が発見されており¹⁴、周辺部からも出土する可能性は高い。(伊藤)

5. 湖州方鏡について

今回、発掘調査で「湖州真石家念 二叔青銅照子」と陽鑄された湖州鏡が出土した。これは県内で唯一出土状況が判明しているもので、それも県内初の方鏡でありこれまで言われていた分布圏とはやや異なる地域からの出土ということになり、流通圏を考えるうえで一石を投じる資料となっている。

まず、その出土状況について再度みてみることにする。前述のとおり掘方は確認できなかったものの土師質土器(杯)2点、白磁1点、古銭(熙寧元寶)1点が隣接し、刀子1点の切先が湖州方鏡と重なった状態で出土していることから伴出遺物と捉え、かつ同時に埋納された副葬品と考えられることから土坑墓と判断した。周辺にも短刀などを副葬した土坑墓(SK-11)が検出されており、一連のものともみることができ、屋敷墓の一つと考えることができよう。埋納された時期は、熙寧元寶の初鑄造年の1068年を上限とし、白磁の碗がⅡ-3類とみられることから12世紀前半が考えられる。土師質土器は粘土紐巻き上げロク口成形で底部の切り離しは回転糸切りであり、形態的には12世紀頃のものともみられる。このことからこの土坑墓は12世紀前半頃と考えられ、湖州方鏡もそれまでに入手されたものということになる。これは湖州鏡の一般的な出土時期¹⁵の範疇に入る。

次に、これまでに四国で確認されている湖州鏡について試みることにする。なお、ここで言う湖州鏡とは、鏡背に「湖州・・・・云々」銘を方形枠内に陽鑄するものをいい、銘の見えないものを素文鏡として区別する¹⁶。四国では香川県に最も多く残っており8面^{17,18}を数え、高知県の4面¹⁹、愛媛県の2面^{20,21}の順となり、徳島県では素文鏡²²のみみられるものの湖州鏡は確認されていない。香川県の8面は六花鏡3面、柄鏡と方鏡各2面、円鏡1面で、丸亀市本島の寺山経塚から「湖州真正石

鏡子」の陽鑄銘²³のある六花鏡1面と「湖州石六十郎鋪」の陽鑄銘のある円鏡1面及び柄鏡残欠1面、大野原町の先手院経塚から「湖州真正石 家青銅照子」の陽鑄銘のある方鏡1面、詫間町の船積寺経塚から「湖州儀鳳橋石家 真正一色青銅鏡」²⁴の陽鑄銘のある方鏡1面と素文六花鏡2面が出土しており、金刀比羅宮に「湖州石十五郎 真煉 照子」²⁵の陽鑄銘のある柄鏡1面、仁尾町の賀茂神社に「湖州真石家 上等照子記」の陽鑄銘のある六花鏡1面、多和文庫に「湖州真石家 余二叔照子」の陽鑄銘のある六花鏡1面がそれぞれ伝来している。高知県の4面は円鏡1面、六花鏡4面で、土佐神社に「湖州石十五郎無比照子」と陽鑄された六花鏡1面、素文円鏡1面、大川村高野の新田神社に土佐神社と同じ陽鑄銘のある六花鏡1面、室戸市入来の新田神社にも同じ陽鑄銘の円鏡1面がそれぞれ伝来し、越知町大平の志由路滝(横倉山南斜面)から出土したと言われる「湖州石十二郎煉同無比照子」の陽鑄銘のある六花鏡1面の記録がある。愛媛県の2面は、松山市の興居島経塚から「湖州」の陽鑄銘のある六花鏡1面と素文円鏡1面、古照遺跡の土坑墓から土師質土器椀と共に「湖州石十五郎鍊銅照子」の陽鑄銘のある六花鏡1面が伴出している。

以上が四国で確認されている湖州鏡で、今回のものを含めるとその内訳は六花鏡8面、円鏡2面、柄鏡2面、方鏡3面となり、出土地が判明しているものでは六花鏡4面、円鏡1面、柄鏡1面、方鏡3面である。前者はいわゆる奉納鏡で、金刀比羅宮の湖州柄鏡のように昭和10年6月4日に京都の水島芳太郎氏より購入した記録が残るものもあり、その出土地については定かではなく、後者の傾向から以下試みることにする。

六花鏡の出土が多いのはそれが西日本に多く出土している傾向²⁶と合致する。円鏡は畿内周辺に出土例が多く²⁷、寺山経塚出土のそれもその周辺部と捉えることができる。柄鏡についてはその分布が不明瞭であるが、円鏡と似た傾向なのかもしれない。問題となるのは方鏡で畿内以東、それも日本海側に出土例が多く、「湖州真石家・・・」の陽鑄銘がある²⁸とされる。四国出土のものは前述のように「湖州儀鳳橋石家・・・」²⁹、「湖州真正石家・・・」³⁰、「湖州真石家・・・」³¹があり、今回出土のものはそれと同じ陽鑄銘であり、船積寺経塚のものも「正」の文字が陽鑄される以外同じである。また、今回のものと全く同じ陽鑄銘を持つ湖州方鏡が京都府神崎村³²から出土している。このようにみると、方鏡も四国を含めた比較的広い流通圏が指摘することも可能であるが、今回出土の湖州方鏡の所有者が先の流通圏と何らかの関係があったとも考えられ、単に流通圏の拡大と即断できないものの、その流通圏考察に一石を投じることにはなろう。絶対数が少ない四国にあっては今後の資料の蓄積を待って再検討を加える必要があろう。

最後に、科学分析の結果に触れてみたい。まず、その主成分は銅、すず、鉛で、全体の約96%を占め、微成分としてリン、ヒ素、アンチモン、鉄がみられる。このことから銅、すず、鉛を主成分とする青銅製品であることが判明した。しかし、800年以上も地中に埋蔵されていたことと出土地点が

自然堤防に近く比較的乾燥した土質であったことにより腐食が進行し、鏡面、鏡背、地金部分によって主成分の比率が異なる結果となった。鏡面では鉛(約35%)、すず(約31%)、銅(約28%)、鏡背では銅(約37%)、鉛(約31%)、すず(約28%)、地金(破片断面)ではすず(約44%)、鉛(約33%)、銅(約18%)の順となり、特に地金部分では銅の比率が低く、銅が溶出したことが考えられる。一般に、中国鏡の配合比率は銅、すず、鉛が60~80、25、5~10で、宋代以降すずが減り、鉛が増える傾向にあるとされる。この湖州鏡は全体に銅の比率が低く、鉛の比率がすずに比べ概して高い結果となった。この結果は、先の状況下で長年埋蔵されていたことが要因と考えるが、久保氏が指摘しているように⁸⁰即断できない面もある。保存状態が比較的良好的なまま伝来等で遺存しているものは科学分析の好試料となる可能性が高いものの考古学資料としては2次資料の側面を払拭できず、反面、考古学の手法で出土したものは1次資料であるが埋蔵されていた土層の状況によっては鑄造当時の成分比率が変容している可能性が高い面もあり、一概に科学分析が鑄造当時の成分を反映しているとは言えず、その結果に対する検証も当然必要であろう。このことは土壌分析等にも言えることで、試料に対する分析者と調査担当とのタイアップが不可欠であると思われる。(廣田)

6. まとめ

最後に今回の調査の成果を概略する。まず、最も古い遺物としては古墳時代前期の土師器を挙げることができる。出土した遺物は明確な掘方を持つ遺構からは出土していないものの、ほとんどが重なるようにまとまって出土しており、かつ、祭祀的要素の強い器形であることから祭祀遺構と捉えた。仁淀川に近いことや自然堤防の斜面部で検出されたことから水に何らかの関係のある祭祀が行われたものと考えられる。今回の調査ではこの時期の遺物包含層は確認できなかったものの、この周辺で人が生活していたことは確実であろう。その後、長い空白の時期が見られ、古代になると官衙を示唆する多くの遺物が出土するようになる。中でも緑釉陶器や暗文の入った土師器の皿は搬入品と見られ、当地が高岡郡内の古代における重要な拠点であった可能性を示唆するものである。残念ながら建物跡は検出されなかったが、調査区の南には高岡郡では数少ない古代の須恵器の窯跡である犬ノ場窯跡が確認されており、須恵器生産に関わった役所が付近に存在していた可能性が考えられる。古代における本遺跡の中心は、調査区の南側とみることができる。そして、中世になると遺跡の中心がやや西に移り、微高地を中心に集落が形成される。12世紀から13世紀にかけての遺物が最も多く、遺構も広範囲に広がる。青磁、白磁、東播系須恵器、瓦器など多くの搬入品が出土していることもその盛行を窺わせる。多くの搬入品が出土する理由として、この遺跡が仁淀川流域にあることが重要な点であろう。特に、湖州方鏡の出土は流通を考える上で非常に貴重な資料となっており、湖州方鏡を入手可能な領主層の屋敷が存在していたものと考えられる。微高地の更に西側では地形が下がり後背湿地となっており、溝の配置から水田耕作が行われていた可能性も考えられる。その西側にはほぼ同時期に盛行した天神遺跡があり微高地上に同時期の遺構、遺物が検出されている。後背湿地を挟んで二つの集落が同時期に存在していたことになり、中世、中でも12世紀から13世紀の集落の様相を解明する上で貴重な資料となっている。(田中)

註

- (1) 井本葉子「 - 高知県の祭祀遺跡について - 」『高知の研究1 地質・考古編』 清文堂 1983年
- (2) 岡本健児『考古古代編』『土佐市史』 土佐市 1978年
- (3) 高岡郡内では、現在のところ土佐市犬ノ場窯跡以外に佐川町から花ノ木・襟野々・円能ケタキ・堂ヶ鼻窯跡の4箇所の須恵器窯跡が確認されている。すべて8世紀後半から9世紀初めの遺物が発見されているが、発掘調査されたものはなく、詳細は不明である。
- (4) 尾上実「大阪南部の中世土器 和泉型瓦器碗」『中近世土器の基礎研究』 日本中世土器研究会 1985年
- (5) 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』 九州歴史資料館 1978年
- (6) 財松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター「古照遺跡第7次調査」『松山市文化財調査報告司書38』1994年
- (7) 『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告2 前田遺跡』 徳島県埋蔵文化財センター 1993年
第9回四国中世土器研究会発表資料 1998年
- (8) 『天崎遺跡』(財)高知県埋蔵文化財センター 1999年
- (9) 『上美都岐遺跡』佐川町埋蔵文化財発掘調査報告書第3集 佐川町教育委員会 1996年
- (10) 高橋照彦「平安期緑釉陶器生産の展開と終焉」『国立歴史民俗博物館研究報告第60集』1995年
- (11) 『曾我遺跡発掘調査報告書』 野市町埋蔵文化財調査報告書2 野市町教育委員会 1989年
- (12) 『高知県深淵遺跡発掘調査報告書』 野市町教育委員会 1989年
- (13) 『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書 風指遺跡』 高知県埋蔵文化財発掘調査報告書第27集 高知県教育委員会 1989年
- (14) 岡本健児『考古古代編』『土佐市史』 土佐市 1978年
- (15) 久保智康「平安後期出土鏡の研究序説」『東アジアの考古と歴史』下 岡崎敬先生退官記念論集 1987年には12世紀前後、矢島恭介「湖州並浙江諸州の銘のある南宋時代の鏡に就いて」『考古学雑誌』第34巻第12号 1947年には11世紀～13世紀とある。
- (16) 久保智康「平安後期出土鏡の研究序説」『東アジアの考古と歴史』下 岡崎敬先生退官記念論集 1987年に沿った。
- (17) 川畑聰「讃岐における和鏡の点描」『香川考古』第4号 香川考古刊行会 1995年
- (18) 『鏡の美 - 讃岐出土・伝来の和鏡を中心として - 』高松市歴史資料館 1995年
- (19) 岡本健児『土佐神道考古学』高知県神社庁 1987年
- (20) 野口光比呂「興居島経塚」『愛媛県史』 資料編考古 1986年
- (21) 『松山市埋蔵文化財調査年報』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1993年
- (22) 『古鏡の美 - 出土鏡を中心に - 』福井県立博物館 1986年
- (23) (3) の図録には「湖州真正家 鏡子」とあるが写真では石に見え、 は念二叔または賣青銅ではないかとみられる。

- (24) 矢島恭介「湖州並浙江諸州の銘のある南宋時代の鏡に就いて」『考古学雑誌』第34巻第12号 1947年には香川県三豊郡荘内村出土とある。
- (25) は銅とみられる。
- (26) (2)に同じ
- (27) (2)に同じ
- (28) (2)に同じ
- (29) (2)の中で久保氏は陽鑄銘の違いを指摘されている。
- (30) (9)の中にみられる。出土地は当時の地名である。
- (31) (3)の中で、「湖州鏡と素文鏡の中には、高麗や日本で踏み返し鑄造されたものも含まれると考えているが、肉眼による客観的判断が、現段階ではつきかねている。」と記され、中国以外での鑄造並びに科学分析からのアプローチを指摘している。

参考文献

- 『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 1995年
- 松田直則「土佐における古代末から中世の土器様相」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会 1989年
- 森島康雄「畿内産瓦器椀の併行関係と暦年代」『大和の中世土器』1992年

第 章 自然科学分析

土佐市バイパス調査出土遺物，湖州鏡の科学的調査

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターの依頼により，下記の調査を実施したのでここに報告いたします。

調査対象遺物	土佐市バイパス調査出土遺物，湖州鏡
調査内容	現状観察，及び組成分析
調査方法	調査は主として以下の方法によった。 A．X線透過写真撮影 B．顕微鏡観察，及び写真撮影 C．蛍光X線分析

A．X線透過画像

X線透過によって得られる画像は，試料の材質や構造を反映する。本調査では腐食の進行による地金の残存状況や，目視で把握できない文様などを確認する手がかりとした。

使用したX線照射装置は，ベリリウム窓マイクロ焦点のX線管球を有し，本調査での使用電圧は90kVである。

今回の調査ではX線フィルム(軟X線用微粒子フィルム)への直接撮影を行った。

使用機種：SOFTEX M-100特 使用FILM：フジフィルム社製tipe N / GN-100

B．顕微鏡観察

実体顕微鏡を用い，資料の細部観察及び写真撮影を行った。

使用機種：Nikon社製tipel04

C．蛍光X線分析

本体を構成する材料及び付着物の材質に関して，存在元素の分析を行った。

今回の蛍光X線分析に関しては，遺物の非破壊調査を前提とし，表面分析が主体であるため，得られた結果は資料内部の状況が必ずしも忠実に反映されているとは限らないことを，承知しておく必要がある。

分析にはエネルギー分散型蛍光X線分析装置(HORIBA MESA 500)を用い，Na(ナトリウム)以上

の元素分析を行った。X線管ターゲットはRh(ロジウム),X線管出力は15kVと50kV,分析対象部位のX線照射面積は 5mmである。

分析部位は,X線透過画像,目視及び顕微鏡下での観察によって,表面状況が特徴的な部位と遺物本体を代表するような均質な部分を選択し分析を行った。

また今回の調査においては,搬入時になされていた樹脂補填部分より,接合関係が明確でない微小片が取り除かれたため,これを断面観察,及び粉碎試料として用いた。この結果は,蛍光X線分析結果,顕微鏡写真(Fig.3-5)として添付する。分析箇所についての記録は, Fig.1・2に明記する。

平成10年9月7日

(株)東都文化財保存研究所

真珠久美

大野清奈

追記

湖州鏡の処理に伴って行った,調査分析結果の概略と考察を,私見ながら述べさせていただきます。添付の資料をご覧になるさい参考にしていただければ幸いです。

蛍光X線分析で得られた結果より,本資料は銅,すず,鉛を主成分とする青銅製品であることが明らかとなりました。鉄,アンチモン,ひ素等の微量成分は,当時の鑄銅製品に認められるものです。

今回の分析結果で特徴的なのは,銅,すず,鉛の配合比率です。通常,青銅鏡に含まれるすずと鉛は,加工性を高める目的や,仕上がりの色調調整のために配合されたと考えられています。中国鏡の配合比率は,おおよその例をあげると

銅:すず:鉛=60~80:25:5~10

などとされ,時代や生産地等の特色を示す要素とされています。

中国鏡に関する体系的な組成分析は小松茂博士らと梅原末治博士の研究があります。それによると,湖州鏡の製作年代とされる宋代以降は,

銅:すず=80~90:10~20

となり,徐々にすずが減り,鉛が増える傾向にあるとされています。

今回の分析結果で得られた主要成分の定量値は,表面分析では

銅:すず:鉛=30~35:30:30~35

となり,ほぼ同量含有されていることがわかります。さらに鏡内部も含んだ粉体試料では,銅の含有量は20%を切るまで減少します。主要成分である銅の含有量が非常に少ないことに注目されま

す。

そこで徴少片の断面観察を行ったところ、鏡の表面を除き、中層が緑青の粉末となっていることが確認されました。

またX線写真でも、鏡全体が地金が残っていない状態であることが確認できます。

以上の調査結果より、この湖州鏡は埋蔵状況下で、主成分である銅が溶出し、内部の腐食が進行していたものと推測されます。このため、残存している表面の合金部分に守られて形を保っている状況で、遺物全体としては非常に脆弱な状態であることがわかります。今回の分析結果からは、鑄造当初の組成成分を正確に把握することはできませんが、現在の状態を理解する上での資料となると考えております。

略式ながら、科学的調査に関する見解とさせていただきます。

湖州鏡(鏡面)データ

Tab.10 湖州鏡(鏡面)測定条件

	#1	#2
日付	'98/01/28	'98/01/28
時刻	15:33:56	15:33:56
電圧	15kV	50kV
電流	200 μ A	10 μ A
時間	50秒	50秒
D T %	23%	22%
試料セル	なし	なし
試料室	真空	真空

Tab.11 湖州鏡(鏡面)定性結果

記号	元素名	判定
13 Al	アルミニウム	
15 P	りん	
20 Ca	カルシウム	?
26 Fe	鉄	?
29 Cu	銅	
33 As	ヒ素	
50 Sn	すず	
51 Sb	アンチモン	?
82 Pb	鉛	

Tab.12 湖州鏡(鏡面)定量結果

'98/09/04 10:26:05

成分	元素名	濃度(wt%)	標準偏差	強度(cps/ μ A)
82 Pb	鉛	34.76	0.33	57.391
50 Sn	すず	30.76	0.37	38.911
29 Cu	銅	27.62	0.26	114.573
15 P	りん	2.62	0.14	0.446
33 As	ヒ素	2.09	0.11	10.316
13 Al	アルミニウム	1.13	0.16	0.052
51 Sb	アンチモン	0.56	0.08	0.624
26 Fe	鉄	0.44	0.06	1.115
20 Ca	カルシウム	0.03	0.06	0.005

湖州鏡(背面)データ

Tab.13 湖州鏡(背面)測定条件

	#1	#2
日付	'98/01/28	'98/01/28
時刻	13:53:04	13:53:04
電圧	15kV	50kV
電流	500 μ A	36 μ A
時間	50秒	50秒
D T %	19%	24%
試料セル	なし	なし
試料室	真空	真空

Tab.14 湖州鏡(背面)定性結果

記号	元素名	判定
13 Al	アルミニウム	
15 P	りん	
20 Ca	カルシウム	?
26 Fe	鉄	?
29 Cu	銅	
33 As	ひ素	
50 Sn	すず	
51 Sb	アンチモン	?
82 Pb	鉛	

Tab.15 湖州鏡(背面)定量結果

'98/09/04 10:20:49

成分	元素名	濃度(wt%)	標準偏差	強度(cps/ μ A)
29 Cu	銅	36.43	0.38	47.073
82 Pb	鉛	31.11	0.55	15.421
50 Sn	すず	28.20	0.40	11.567
15 P	りん	1.64	0.10	0.087
13 Al	アルミニウム	1.20	0.18	0.017
51 Sb	アンチモン	0.75	0.06	0.270
20 Ca	カルシウム	0.38	0.07	0.026
26 Fe	鉄	0.23	0.05	0.191
33 As	ひ素	0.05	0.09	0.081

湖州鏡(破片断面)データ

Tab.16 湖州鏡(破片断面)測定条件

	#1	#2
日時	'98/02/03	'98/02/03
時刻	18:26:16	18:26:16
電圧	15kV	50kV
電流	500 μ A	74 μ A
時間	50秒	50秒
D T %	8%	23%
試料セル	なし	なし
試料室	真空	真空

Tab.17 湖州鏡(破片断面)定性結果

記号	元素名	判定
15 P	りん	
20 Ca	カルシウム	?
26 Fe	鉄	
29 Cu	銅	
33 As	ひ素	
50 Sn	すず	
51 Sb	アンチモン	?
82 Pb	鉛	

Tab.18 湖州鏡(破片断面)定量結果

'98/09/04 10:34:52

成分	元素名	濃度(wt%)	標準偏差	強度(cps/ μ A)
50 Sn	すず	44.33	0.37	8.033
82 Pb	鉛	33.12	0.31	8.702
29 Cu	銅	18.00	0.21	10.713
15 P	りん	1.39	0.10	0.037
33 As	ひ素	1.39	0.09	1.091
51 Sb	アンチモン	1.06	0.08	0.168
26 Fe	鉄	0.67	0.07	0.227
20 Ca	カルシウム	0.04	0.10	0.001

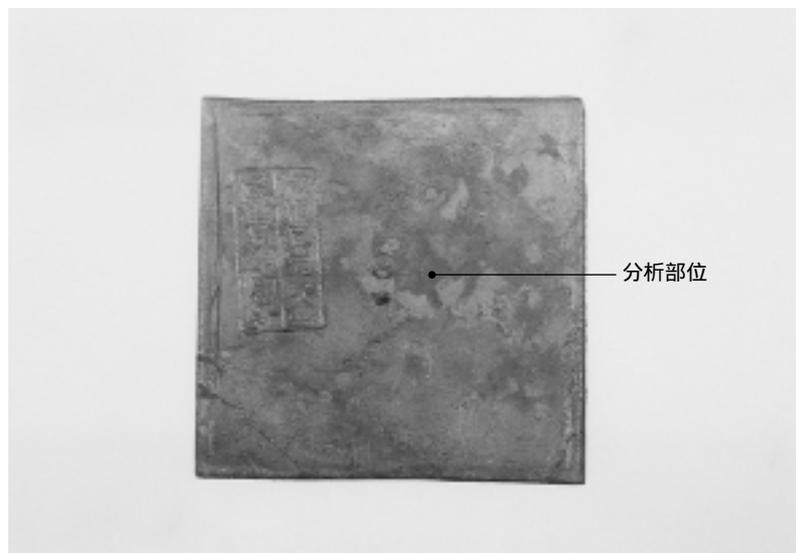


Fig.116 湖州鏡背面(分析部位表記)

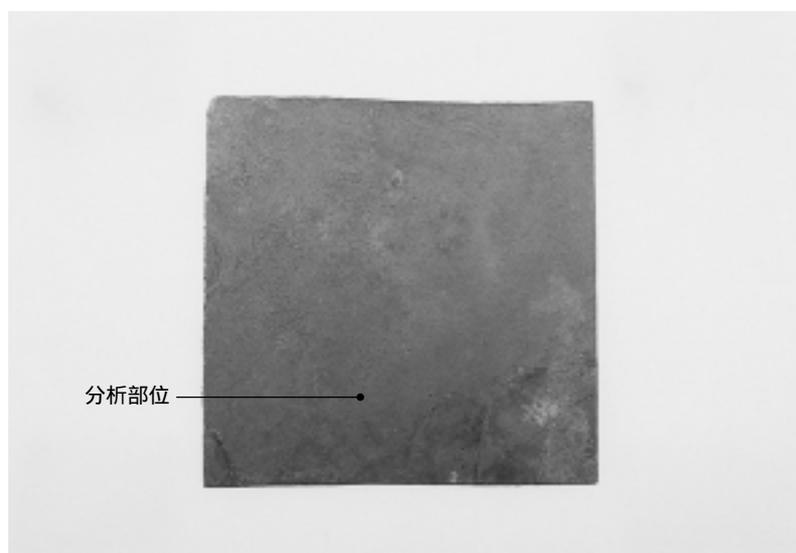


Fig.117 湖州鏡鏡面(分析部位表記)

顯微鏡写真

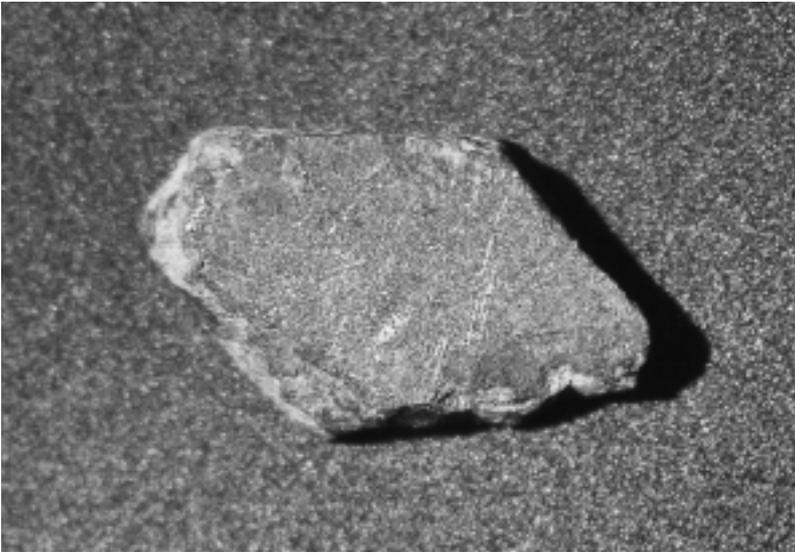


Fig.118 微量片(×15)

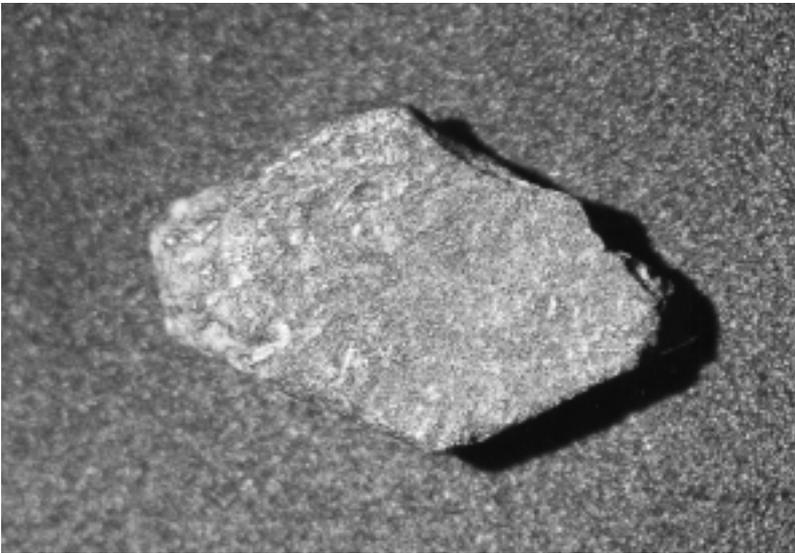


Fig.119 微量片,裏(×15)

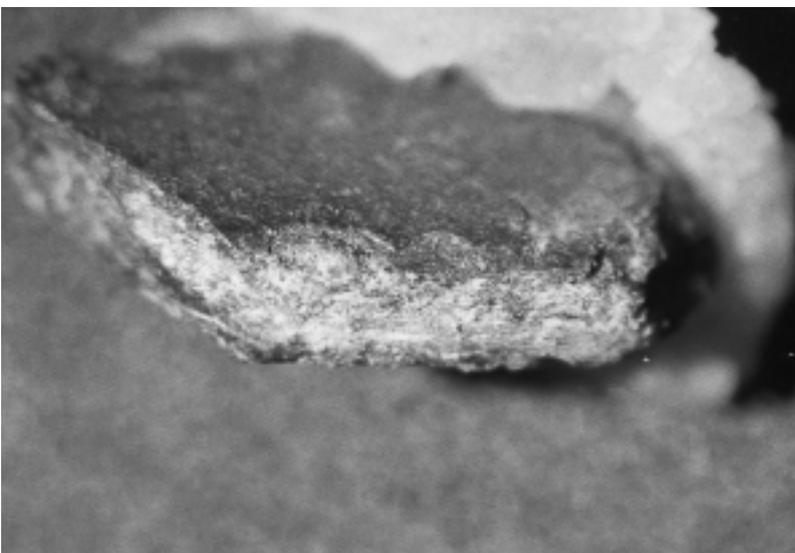


Fig.120 微量片,断面俯瞰(×20)

圖 版



A区調査前全景(東より)



A区調査前全景(西より)

PL.2



A区遺構検出状態(西より)



A区遺構完掘状態(北より)



A区北部古代遺構検出状態(西より)



A区北部古代遺構完掘状態(西より)

PL.4



A区遺構検出状態(東より)



A区遺構検出状態(西より)



A区遺構完掘状態(東より)



A区遺構完掘状態(西より)



A区南壁セクション



A区東壁セクション



SF - 1遺物出土状態1



SF - 1遺物出土状態2



SF - 1古式土師器(395)出土状態



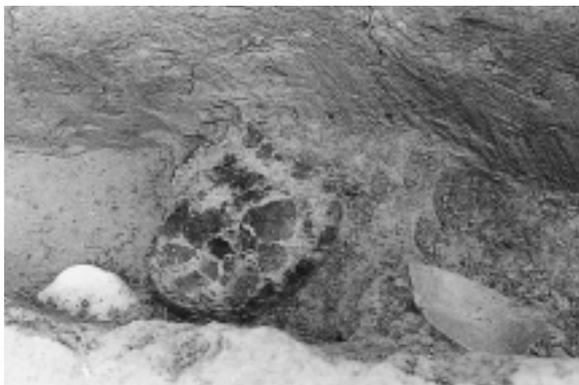
SF - 1古式土師器(394)出土状態



SX - 5土師器(447)出土状態



SK - 4須恵器(402)出土状態



古式土師器出土状態



SF - 1古式土師器(398)出土状態



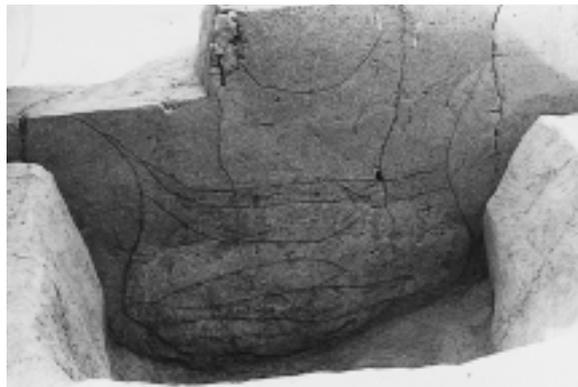
須恵器出土状態



SK - 1(東より)



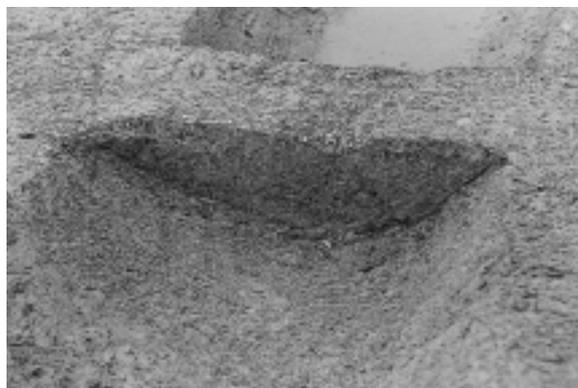
SK - 2(南より)



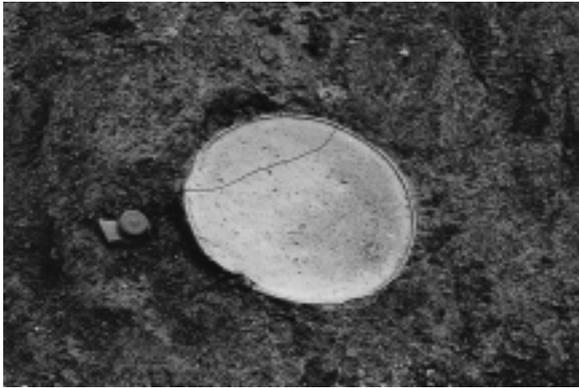
SK - 6バンクセクション



SD - 2土師質土器(418)出土状態



SD - 4(東より)



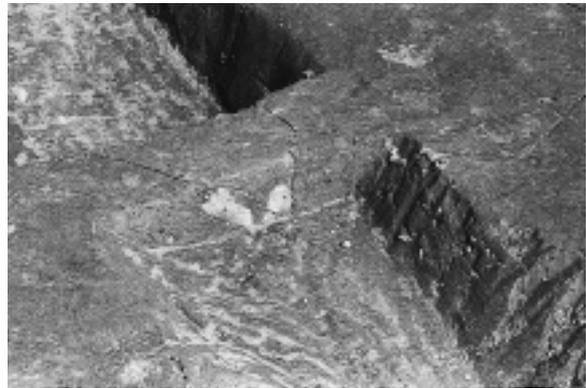
SX - 2須恵器(432)出土状態



SX - 3(南より)



SX - 5遺物出土状態



SR - 2(西より)



SR - 2・3完掘状態



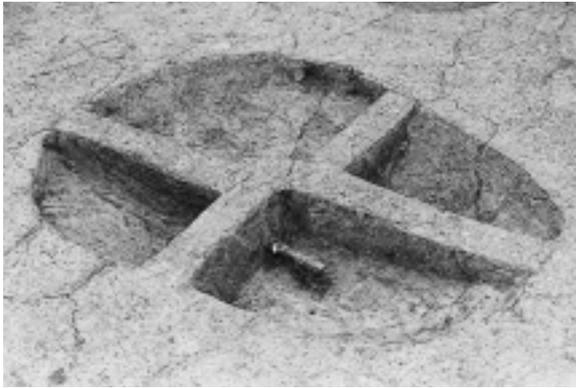
SC - 1検出状態



SK - 7(東より)



SK - 9(南より)



SK - 11短刀(481)出土状態



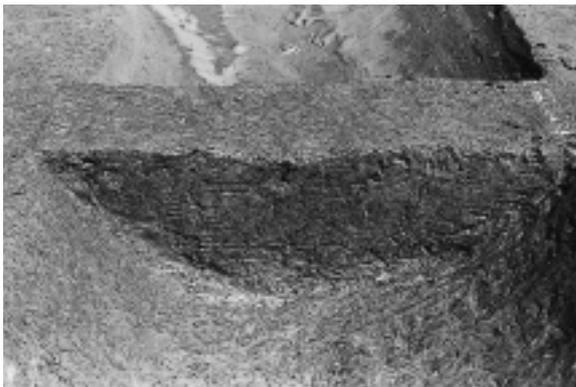
SK - 11短刀(481)出土状態



SD - 4(南より)



SD - 5(西より)



SD - 6(南より)



SD - 8(南より)



A区南壁セクション



A区水没状態



B区遺構検出状態(西より)



B区遺構完掘状態(西より)



B区遺構検出状態(西より)



B区遺構完掘状態(西より)



B区遺構検出状態(南より)



B区遺構完掘状態(南より)



B区南壁セクション



B区北壁セクション



SK - 12(西より)



SK - 16(西より)



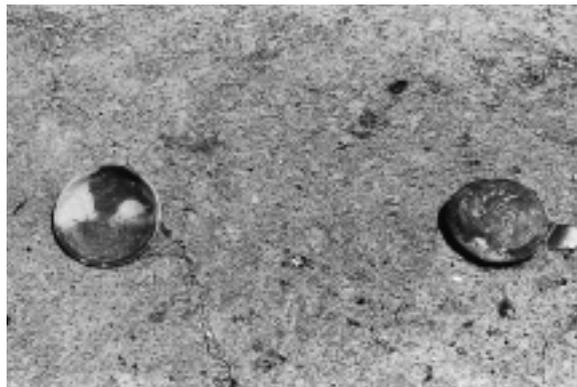
SK - 18(南より)



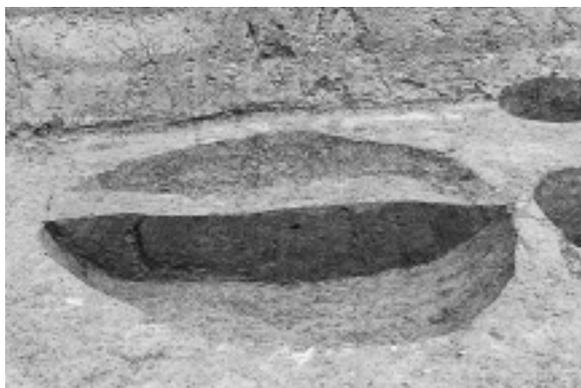
SK - 19・20(南より)



SK - 19瓦器小皿出土状態



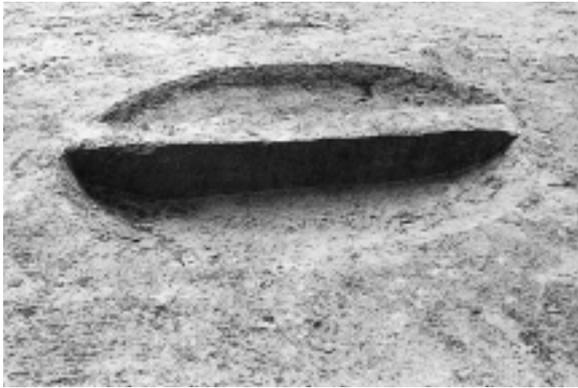
SK - 19瓦器小皿出土状態



SK - 23(南より)



SK - 32(北より)



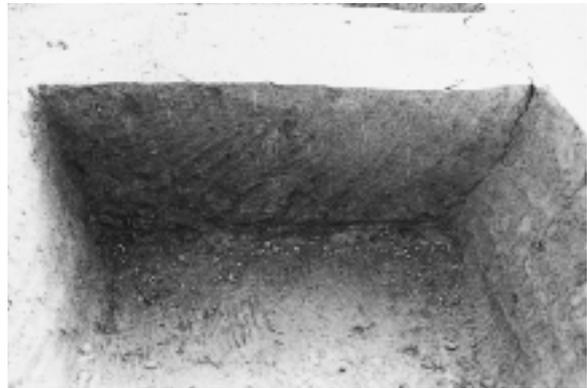
SK - 34(北より)



SD - 9(西より)



SD - 10(東より)



SD - 12(西より)



SD - 12・13(南より)



SD - 13 , SK - 27(南東より)



SD - 17(南より)



SD - 20 , SK - 38(北より)



C区調査前全景(西より)



C区北東部調査前全景(南東より)



C区遺構検出状態(東上空より)



C区遺構完掘状態(東上空より)



C区遺構検出状態(西より)



C区遺構完掘状態(西より)



C区南壁セクション東部



C区南壁セクション中央部1



C区南壁セクション中央部2



C区南壁セクション西部



C区北東部検出状態(東より)



C区北東部完掘状態(東より)



C区南東部遺構検出状態(南より)



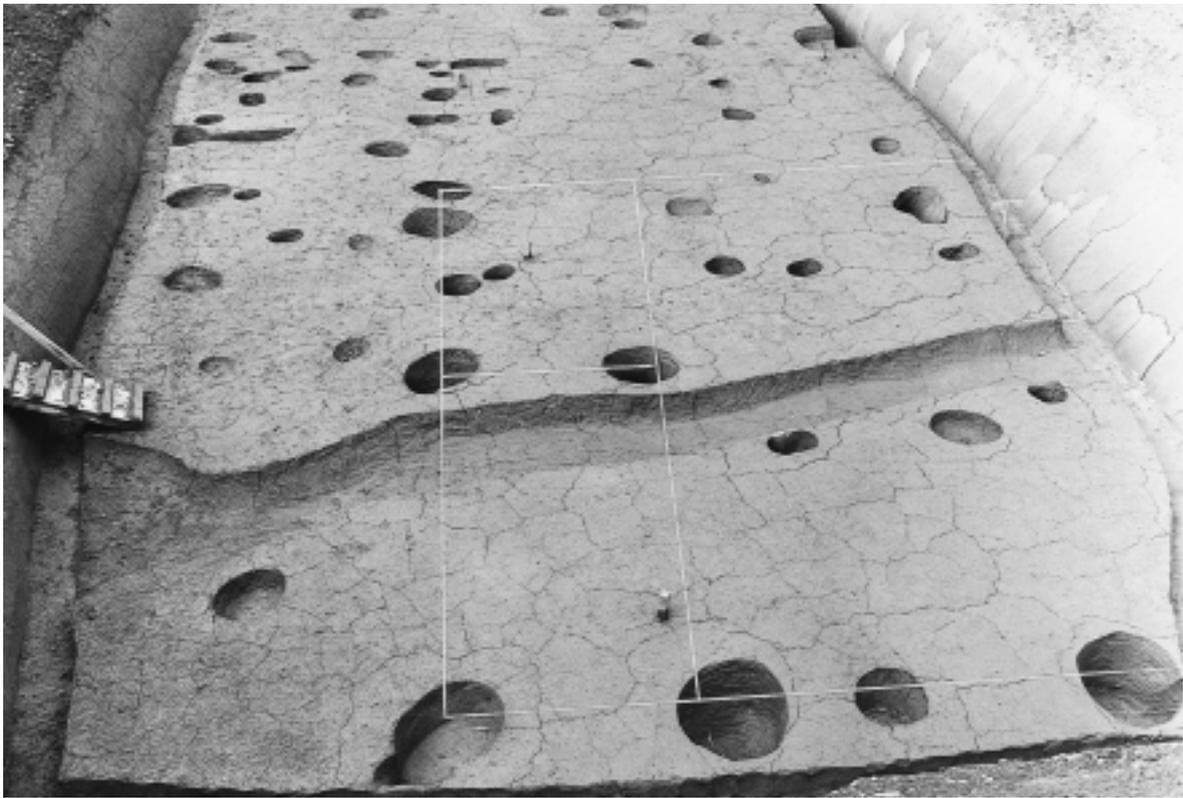
C区南東部遺構完掘状態(南西より)



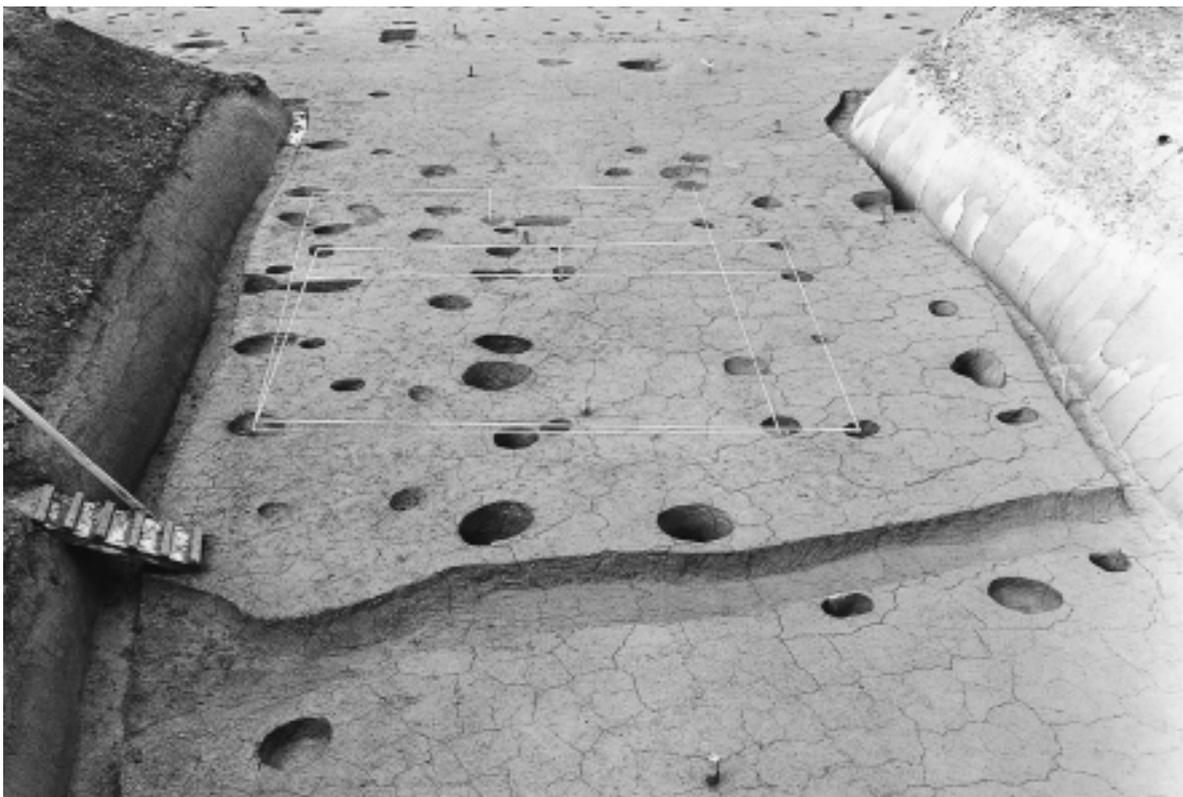
C区東部遺構検出状態(東より)



C区東部遺構完掘状態(東より)



SB - 10(東より)



SB - 11・12(東より)



SB - 13 , SA - 7(南より)



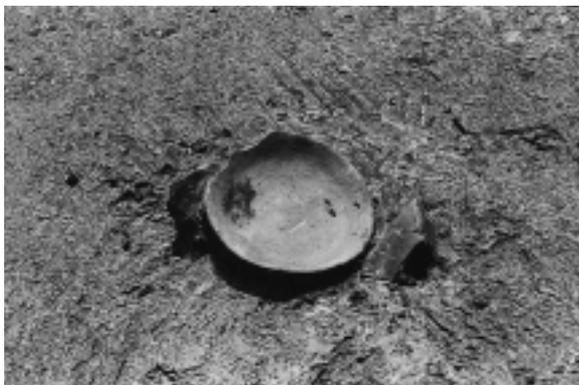
SB - 16・17(北より)



SK - 52遺物出土状態(南より)



落ち込み部分完掘状態(北より)



第 層瓦器(278)出土状態



第 層土師質土器(296)出土状態



第 層土師質土器(324)出土状態



第 層青磁(373)出土状態



第 層遺物出土状態(南より)



SK - 44(南より)



SD - 24・27(西より)



SD - 22(南より)



SD - 25(南より)



SD - 27(東より)



SD - 27遺物出土状態(南より)



SD - 27遺物出土状態(北より)



SD - 28(南より)



SD - 29(南より)



SD - 29土師質土器(558)出土状態(南より)



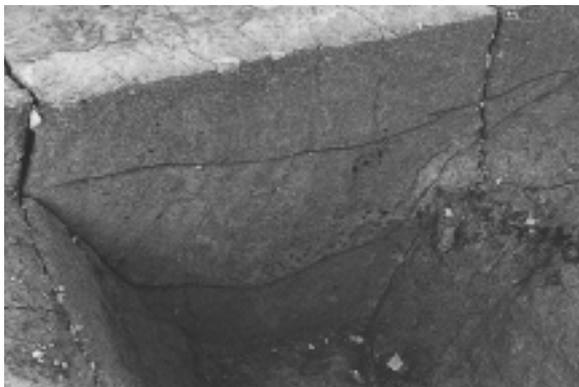
SD - 29遺物出土状態(東より)



SD - 30(西より)



SD - 31(北より)



SD - 33(南より)



SD - 34(南より)



SD - 35(東より)



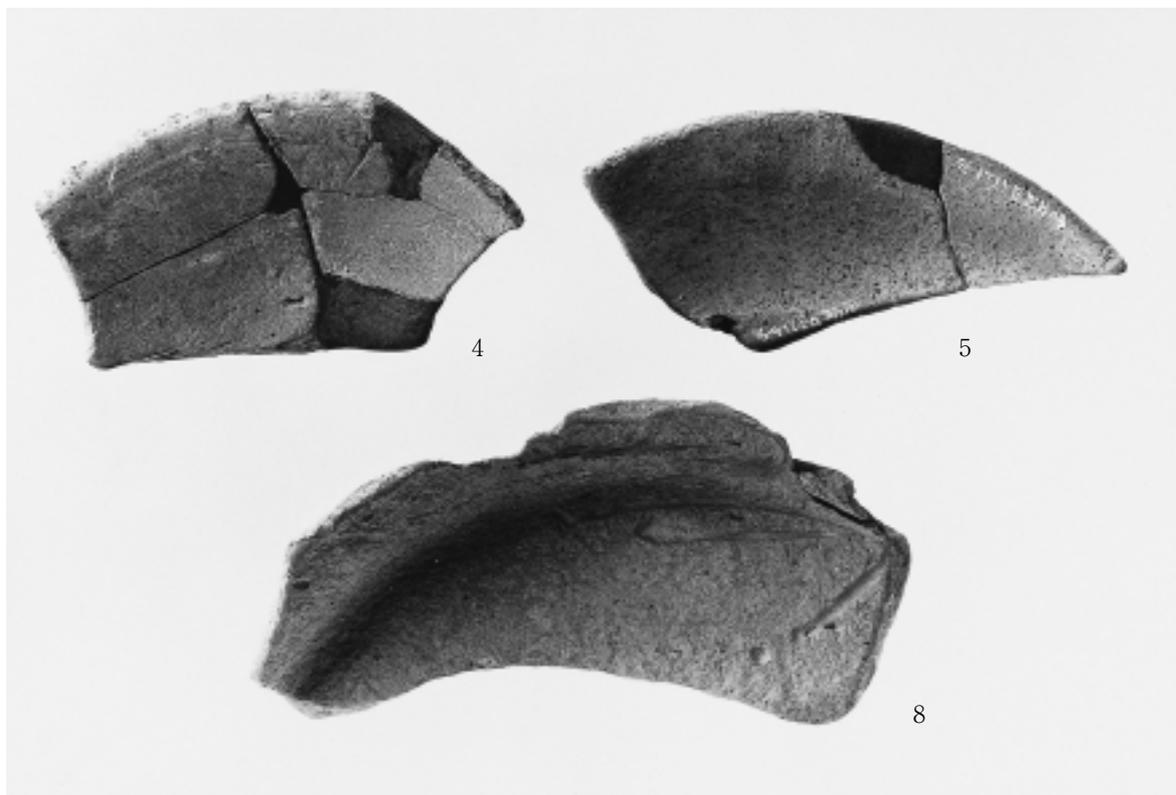
SD - 41(北より)



SR - 3(南より)



根石検出状態



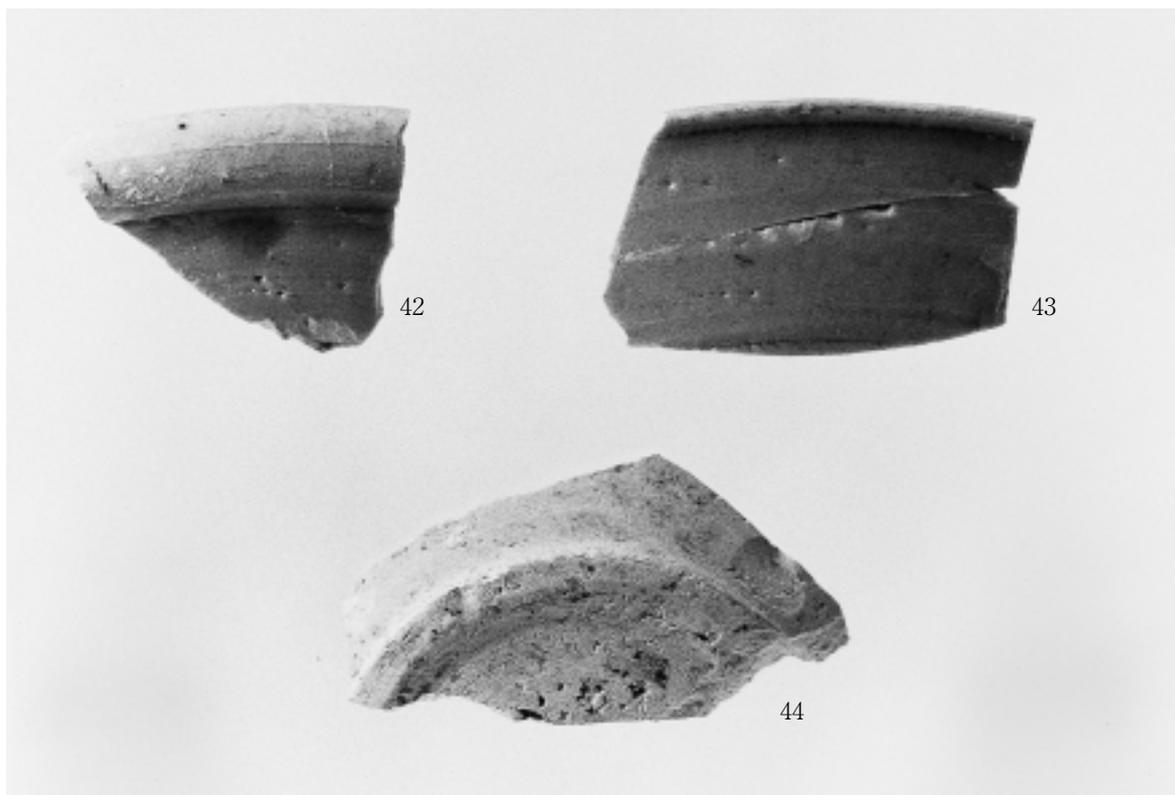
土師器(杯・皿)



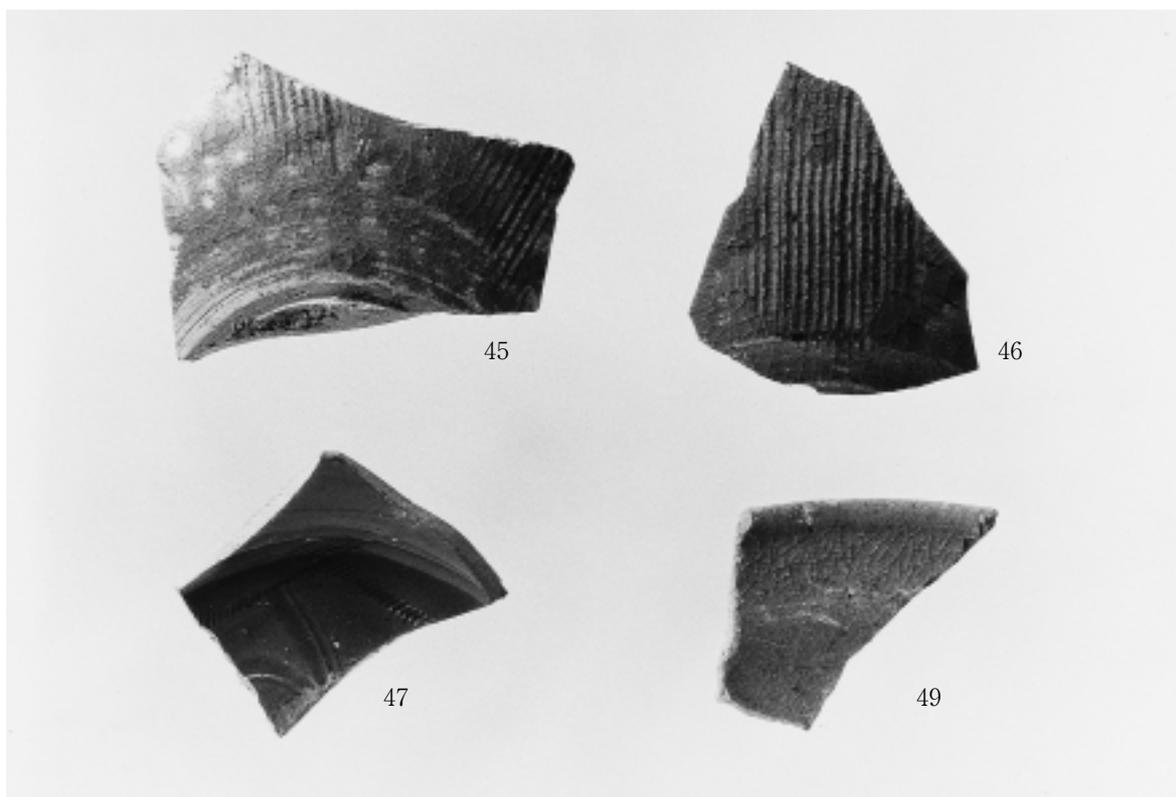
緑釉陶器(椀)



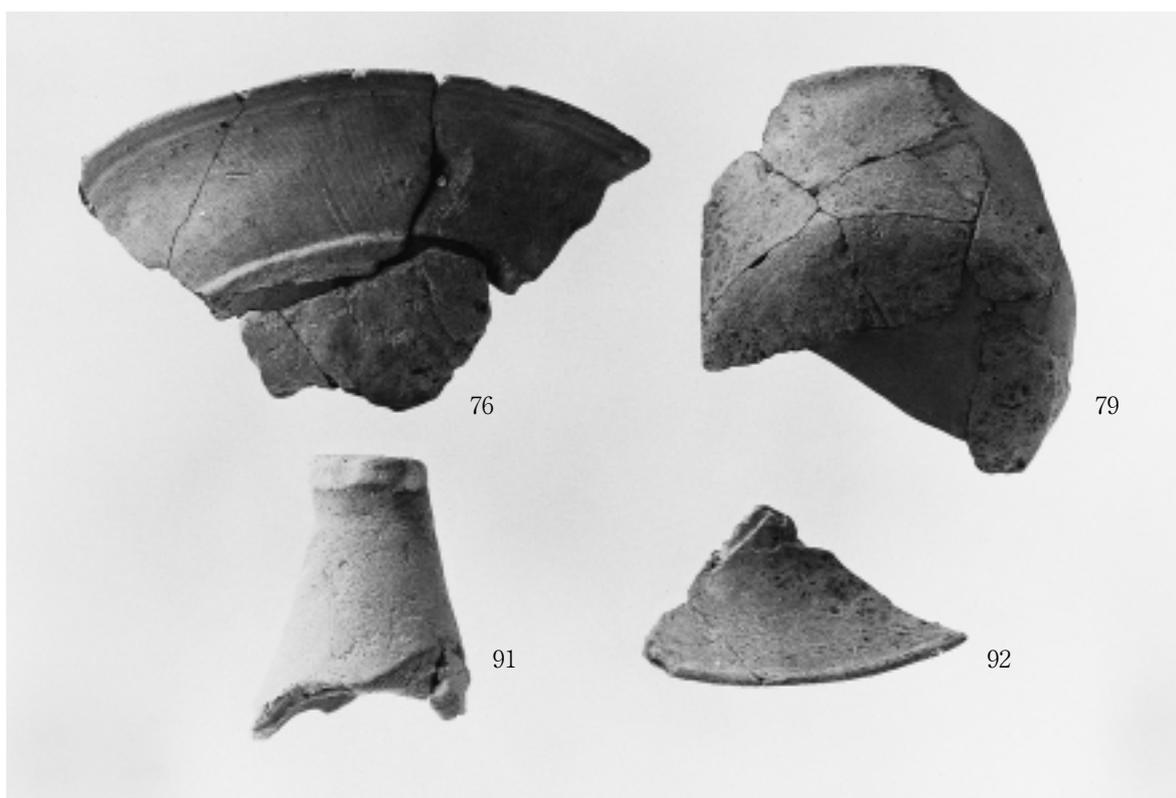
土師質土器(羽釜)



白磁(碗)



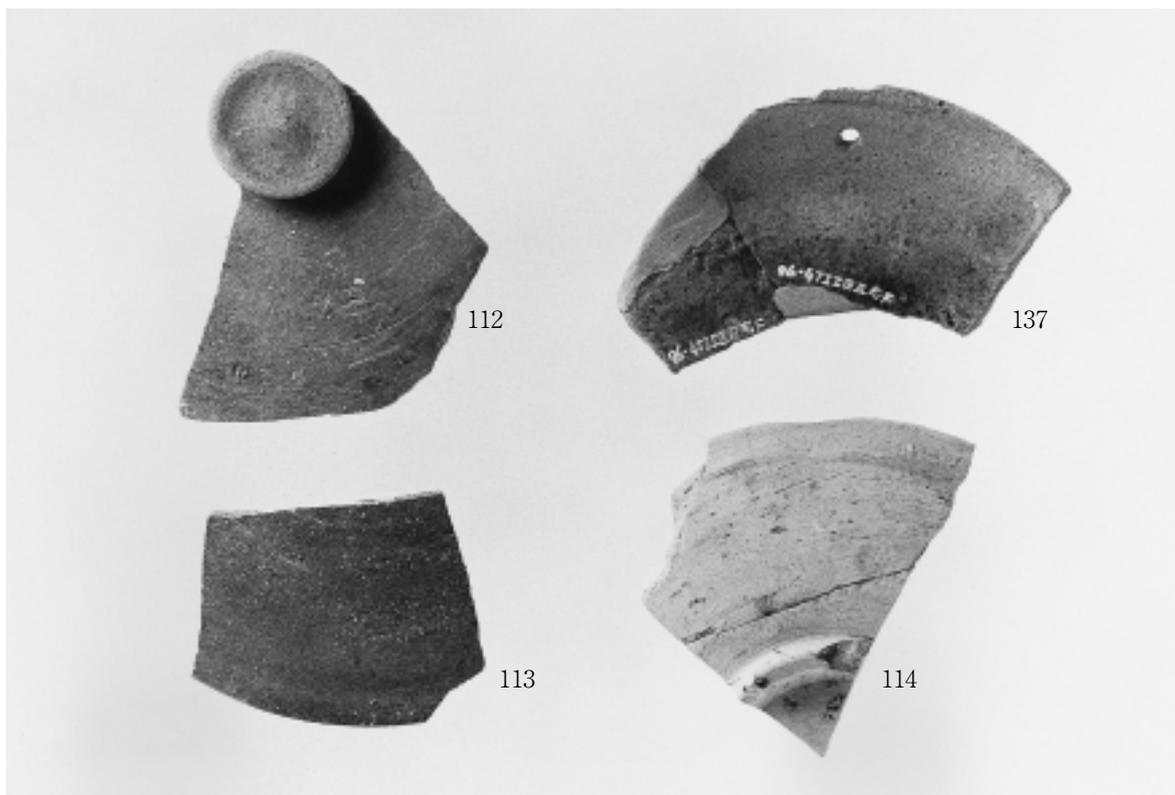
青磁(碗・皿・杯)



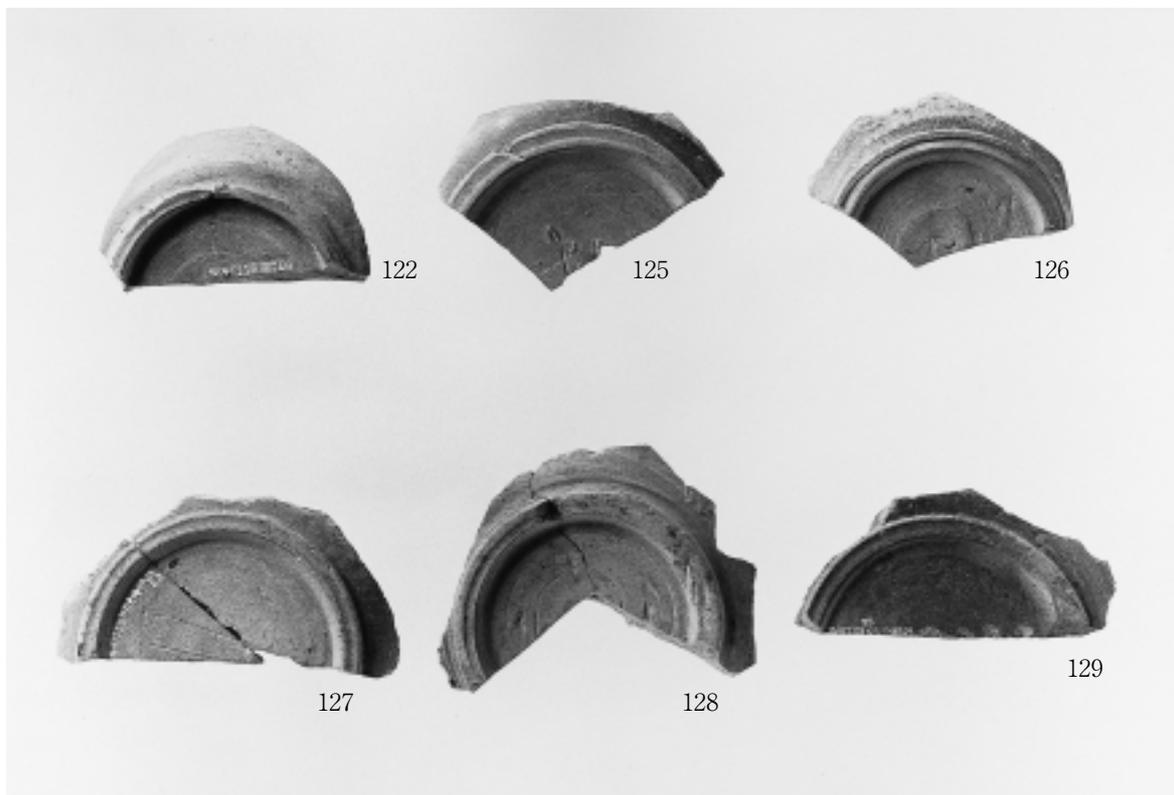
古式土師器(高杯)



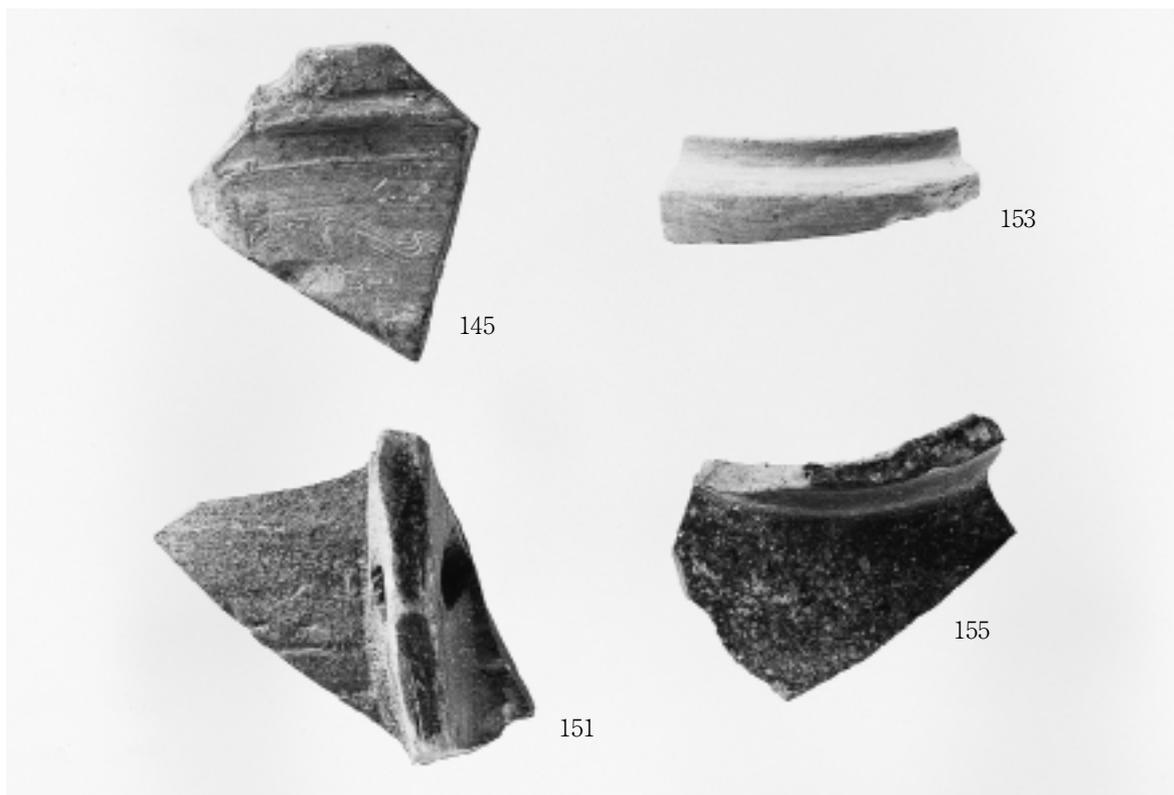
土師器(甕)



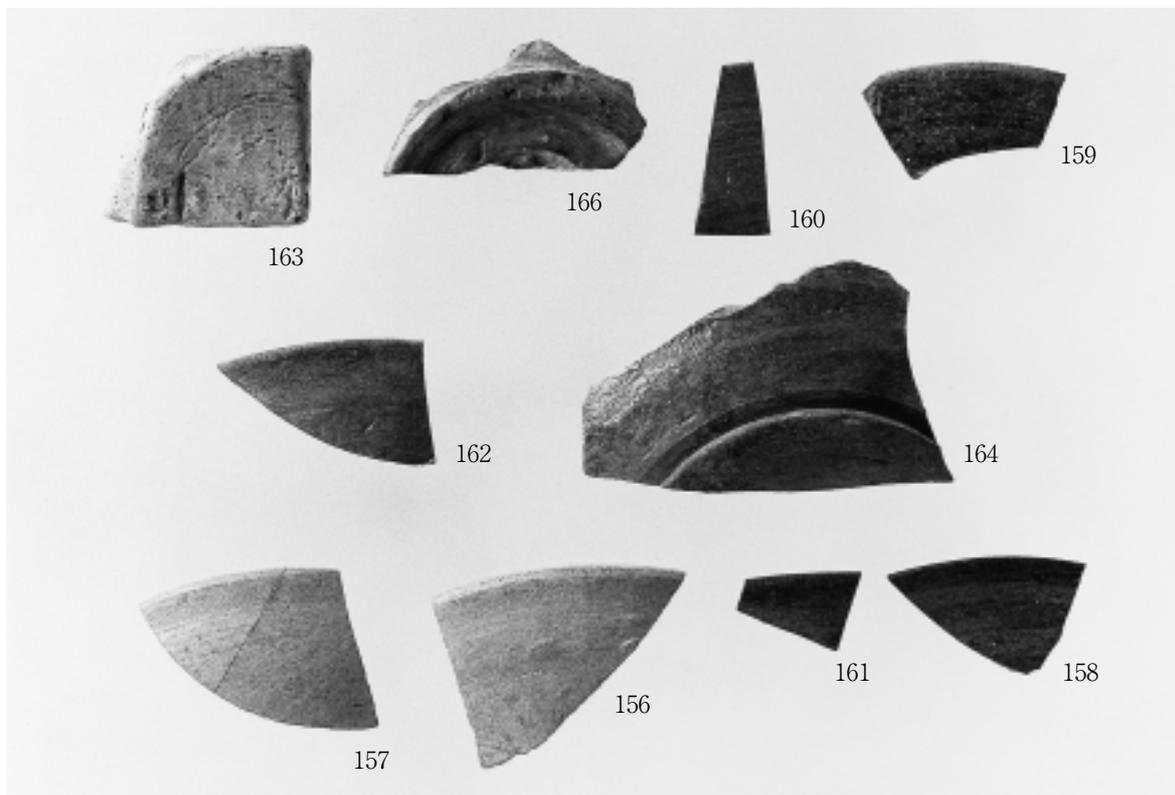
須恵器(蓋・皿)



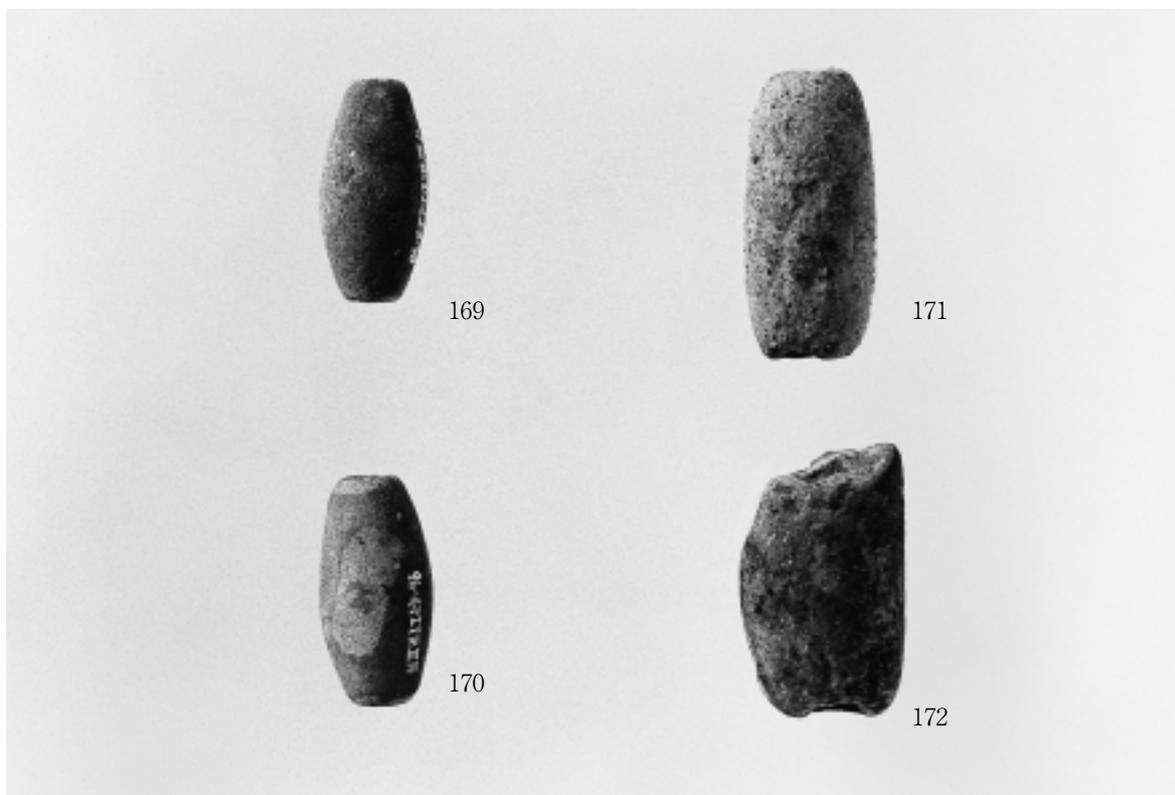
須恵器(杯)



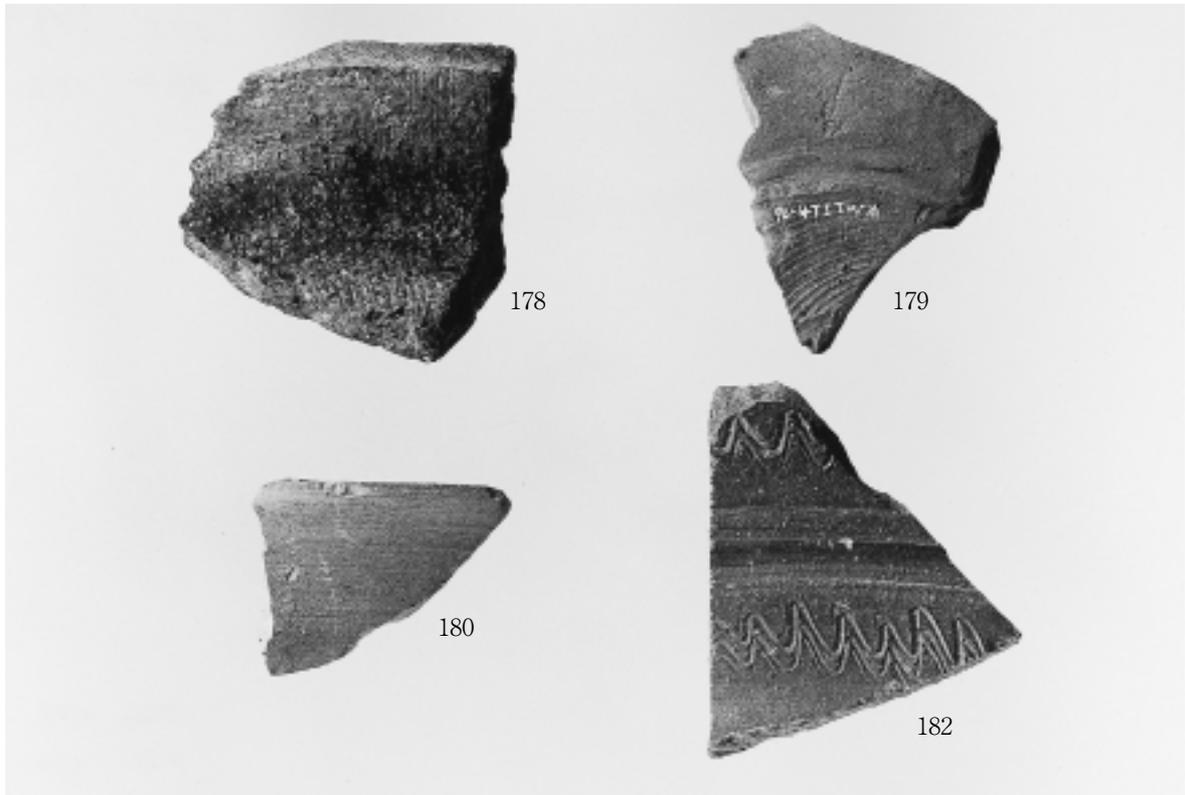
須恵器(壺・甕)



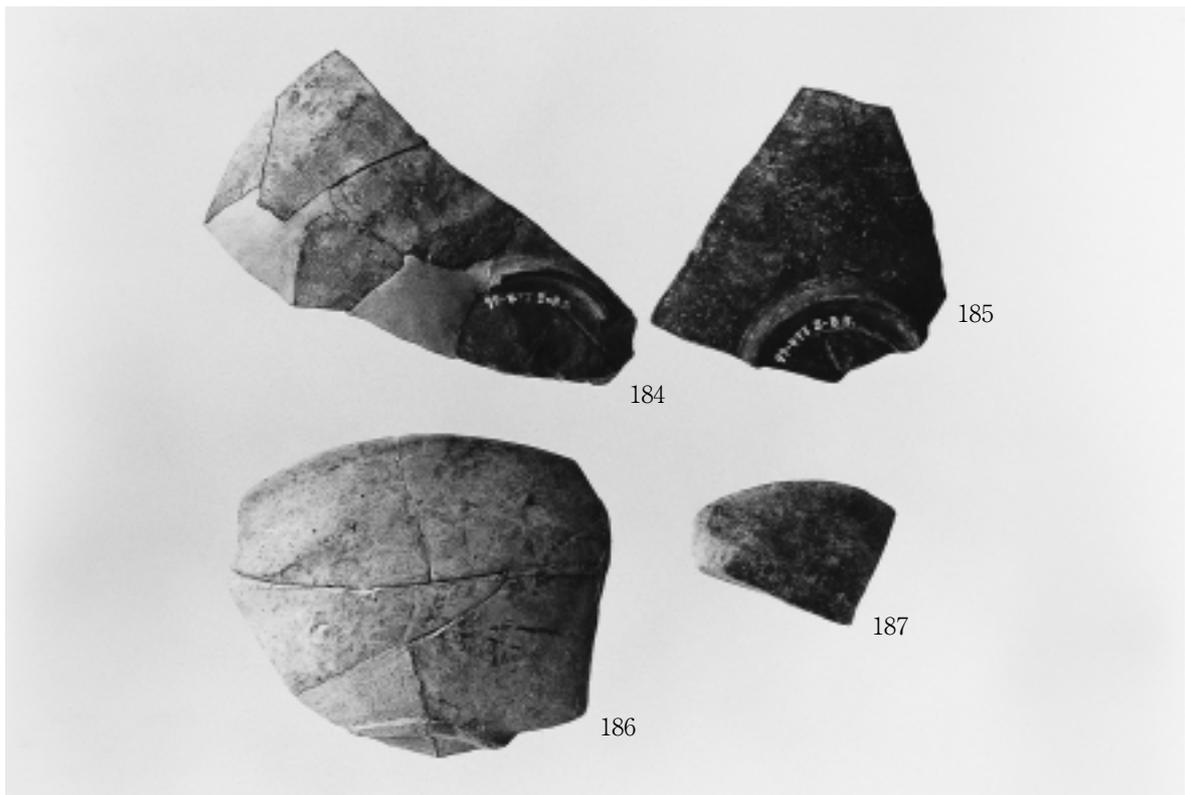
緑釉陶器(碗)



土製品(土錘)



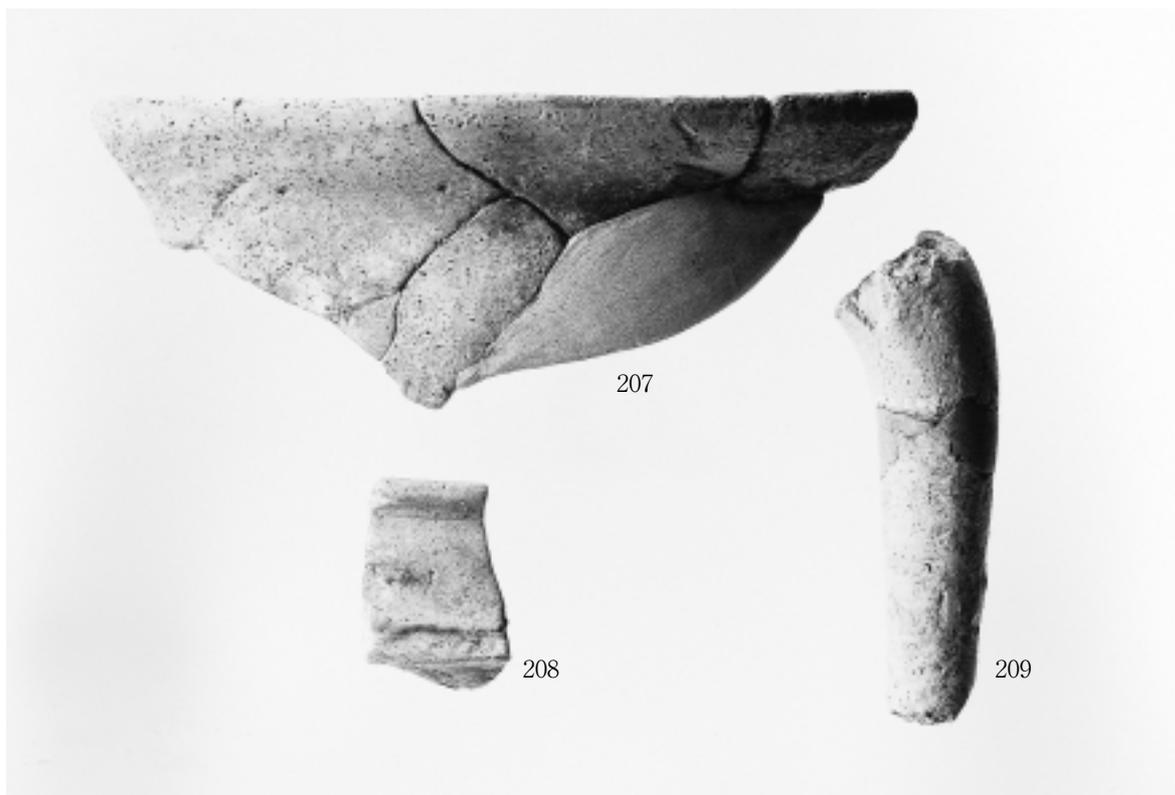
土師器(甕), 須恵器(杯・碗・甕)



瓦器(碗・小皿)



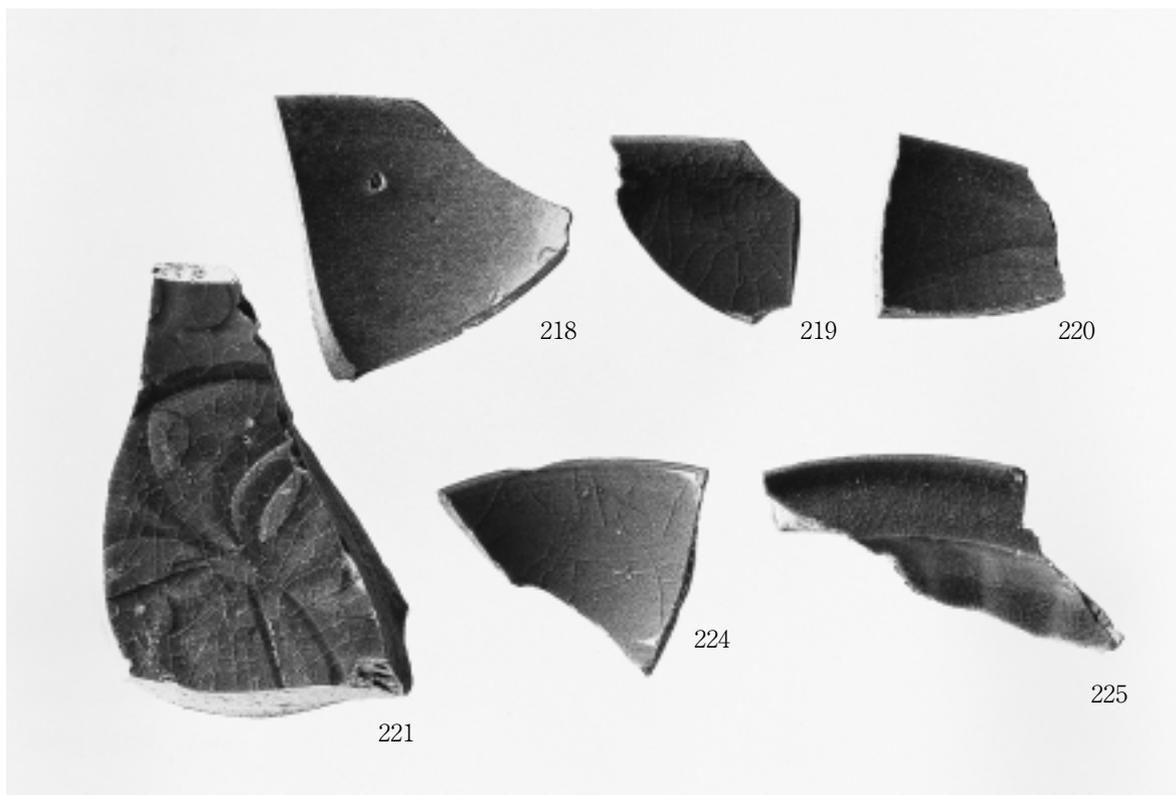
土師質土器(杯・小皿・碗)



土師質土器(鍋・羽釜)



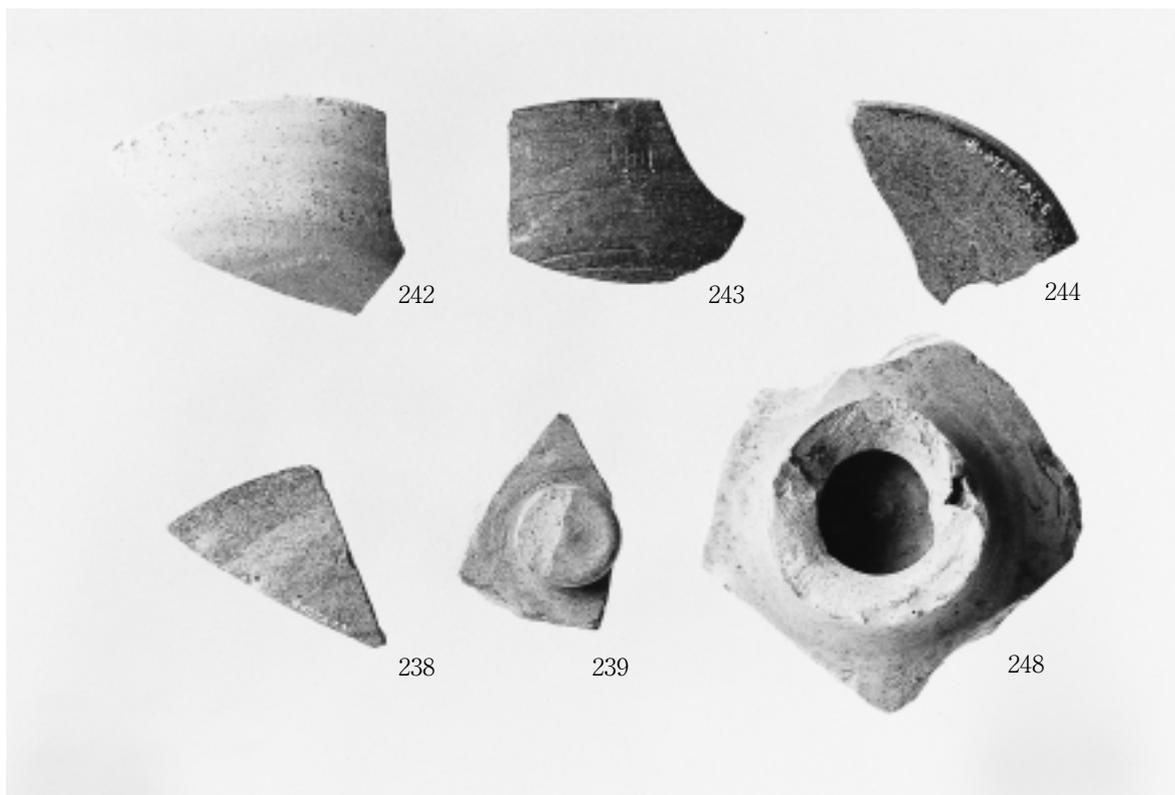
白磁(碗·皿)



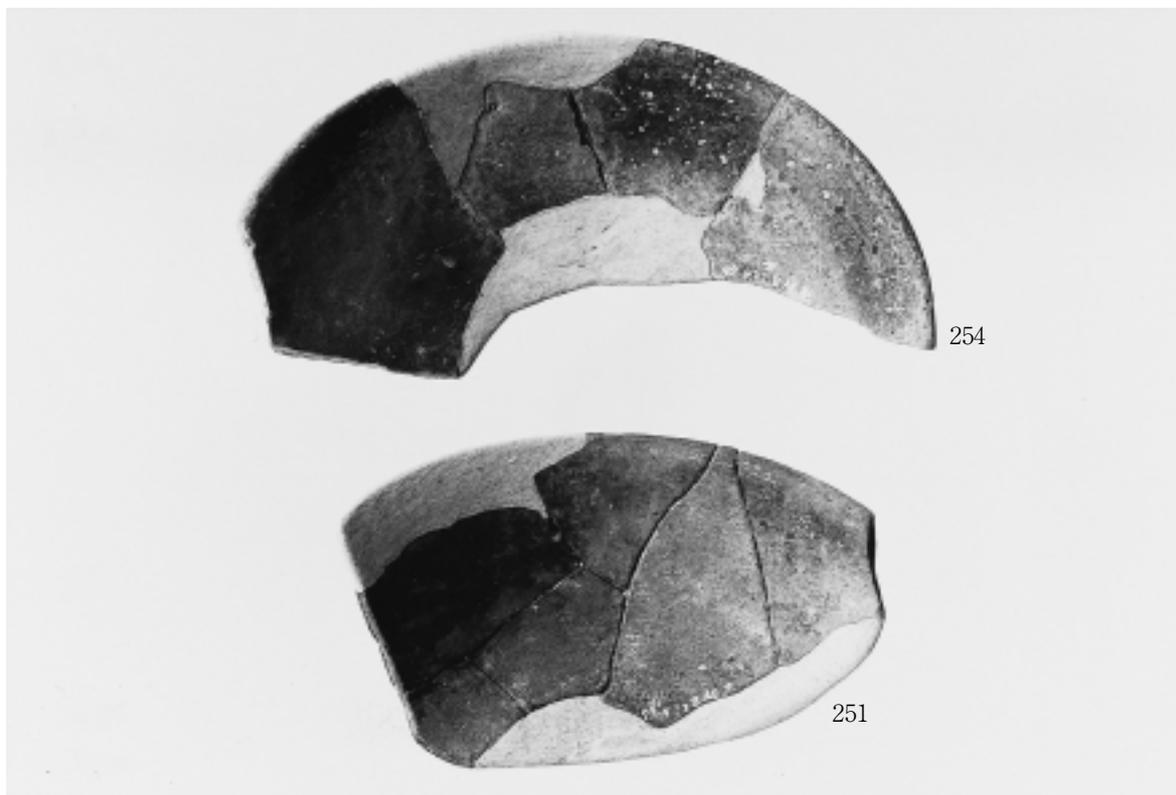
青磁(碗·小碗·杯)



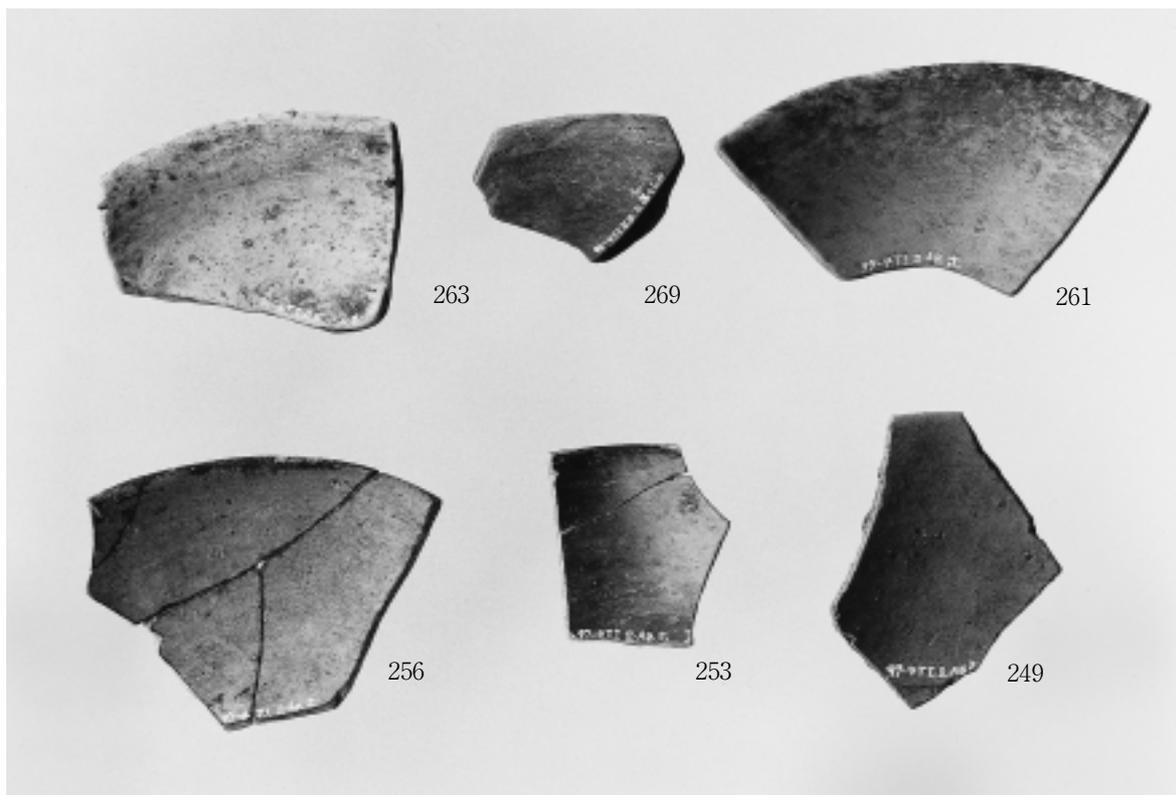
石製品(砥石)



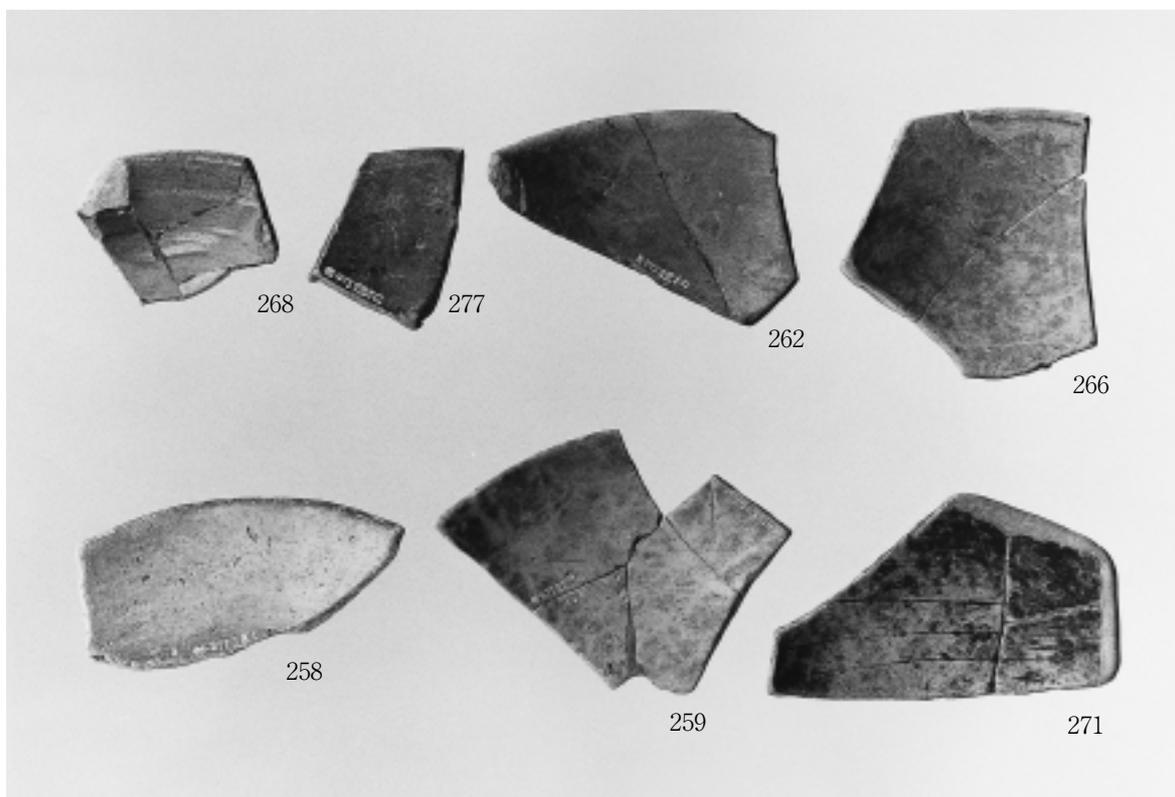
須恵器(蓋・杯・高杯)



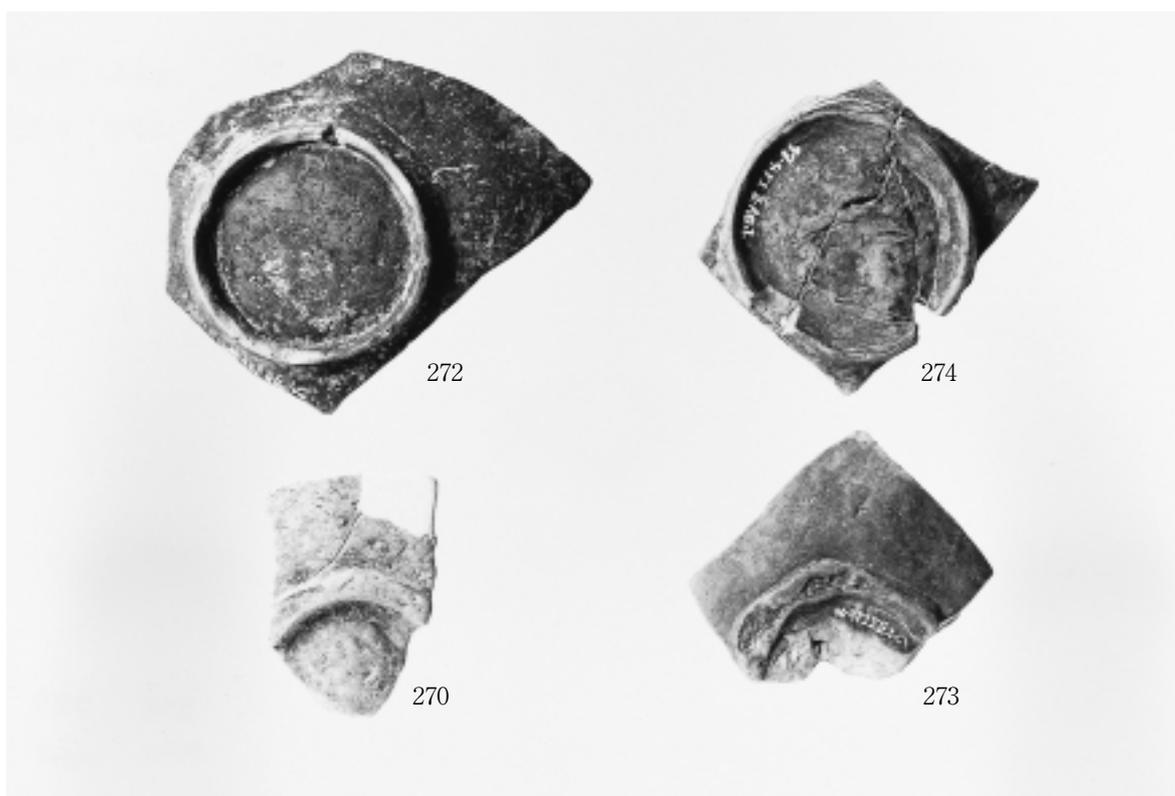
瓦器(碗)



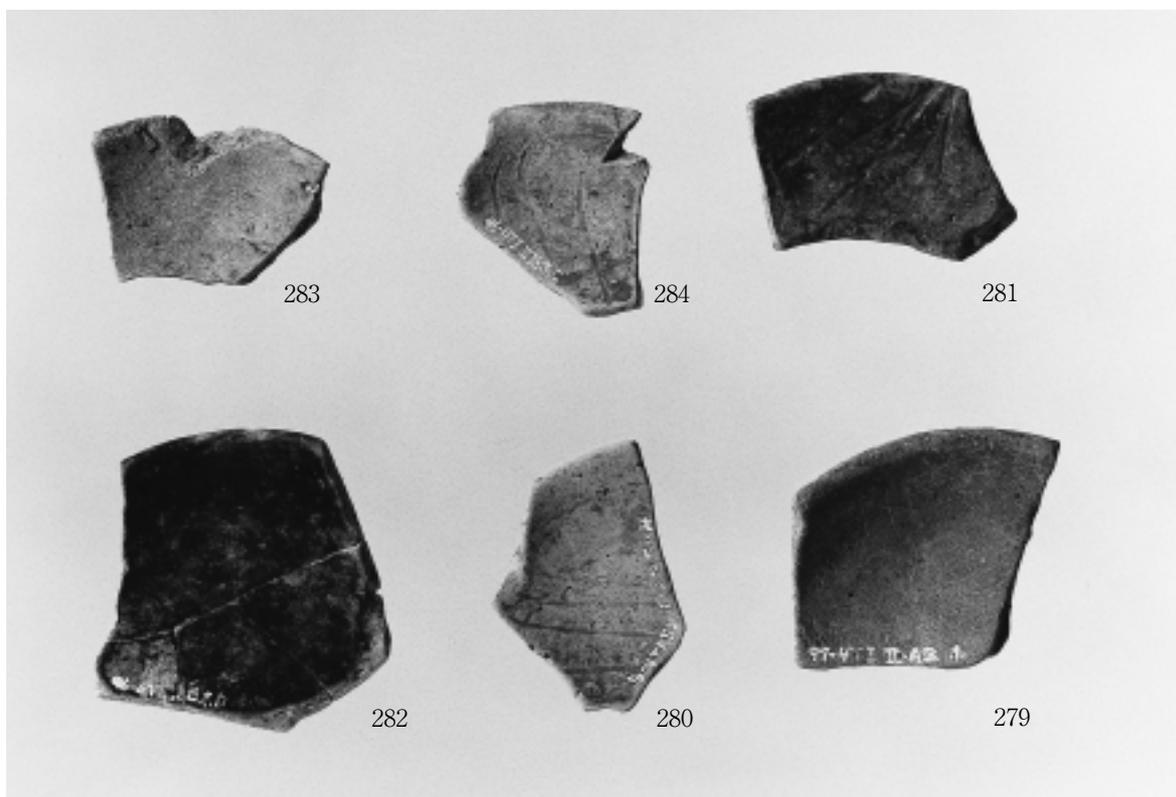
瓦器(碗)



瓦器(椀)



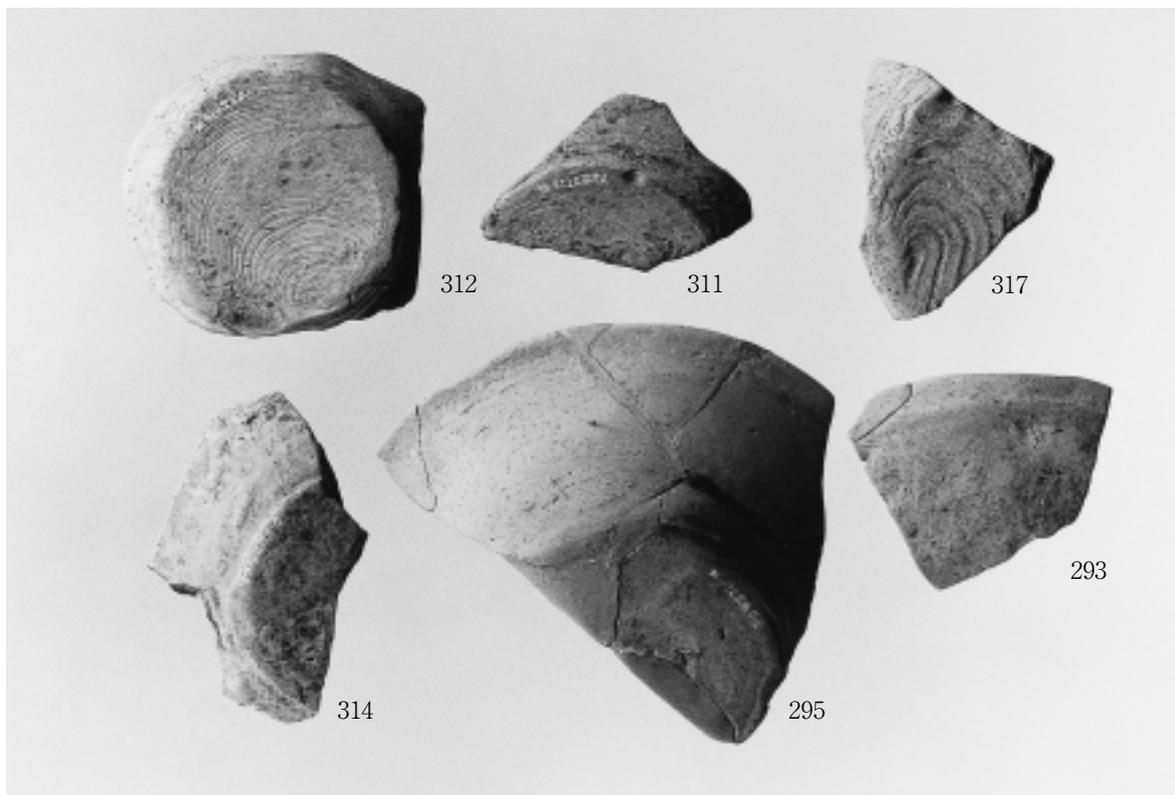
瓦器(椀)



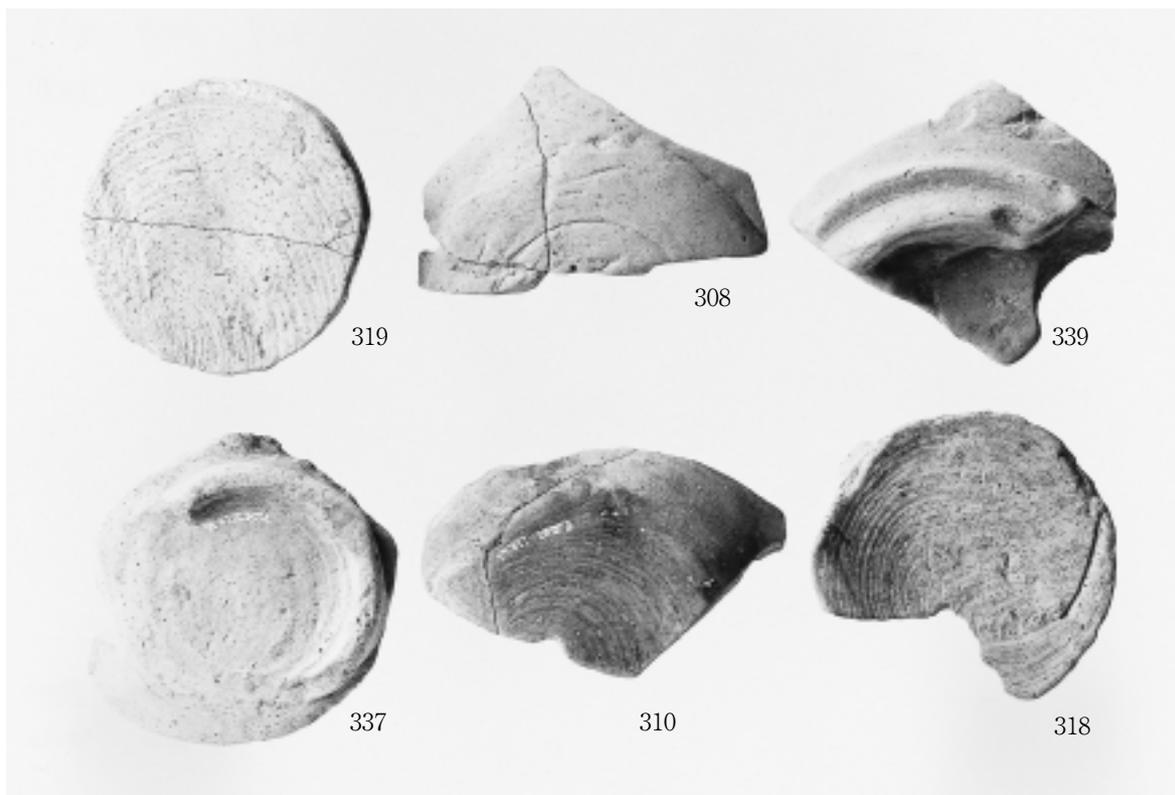
瓦器(小皿)



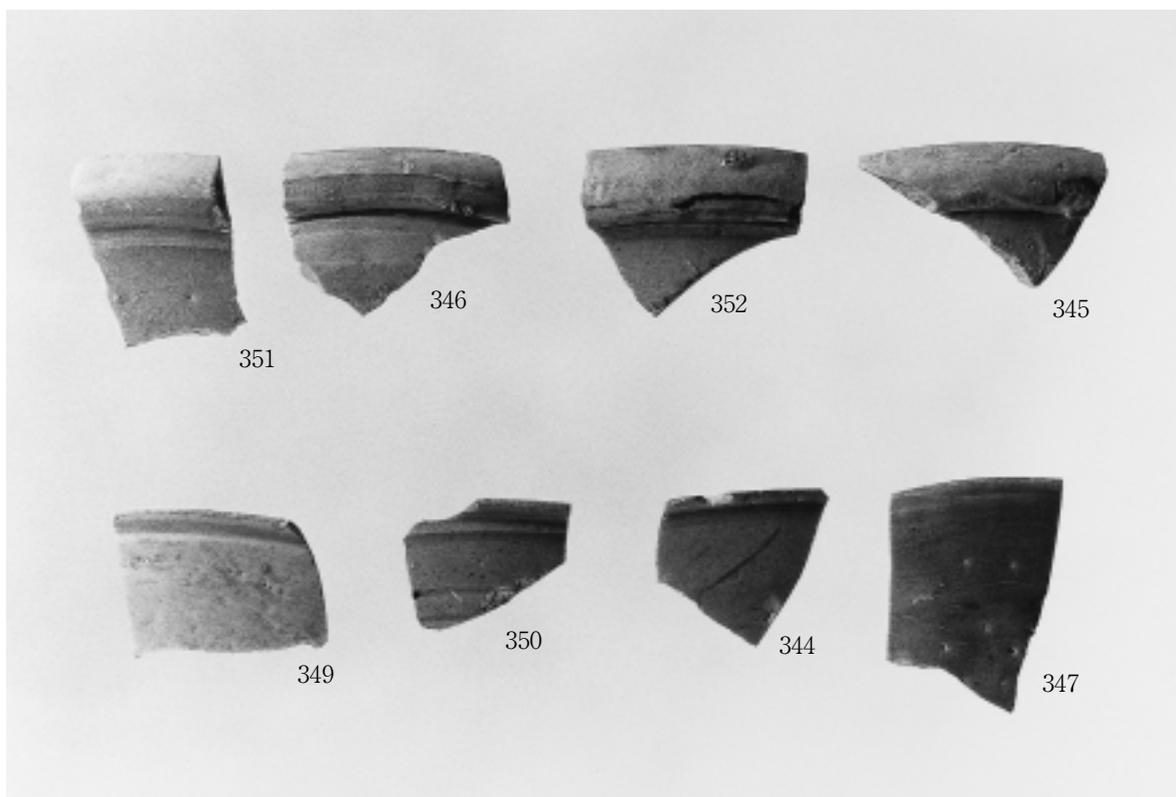
東播系須恵器(片口鉢)



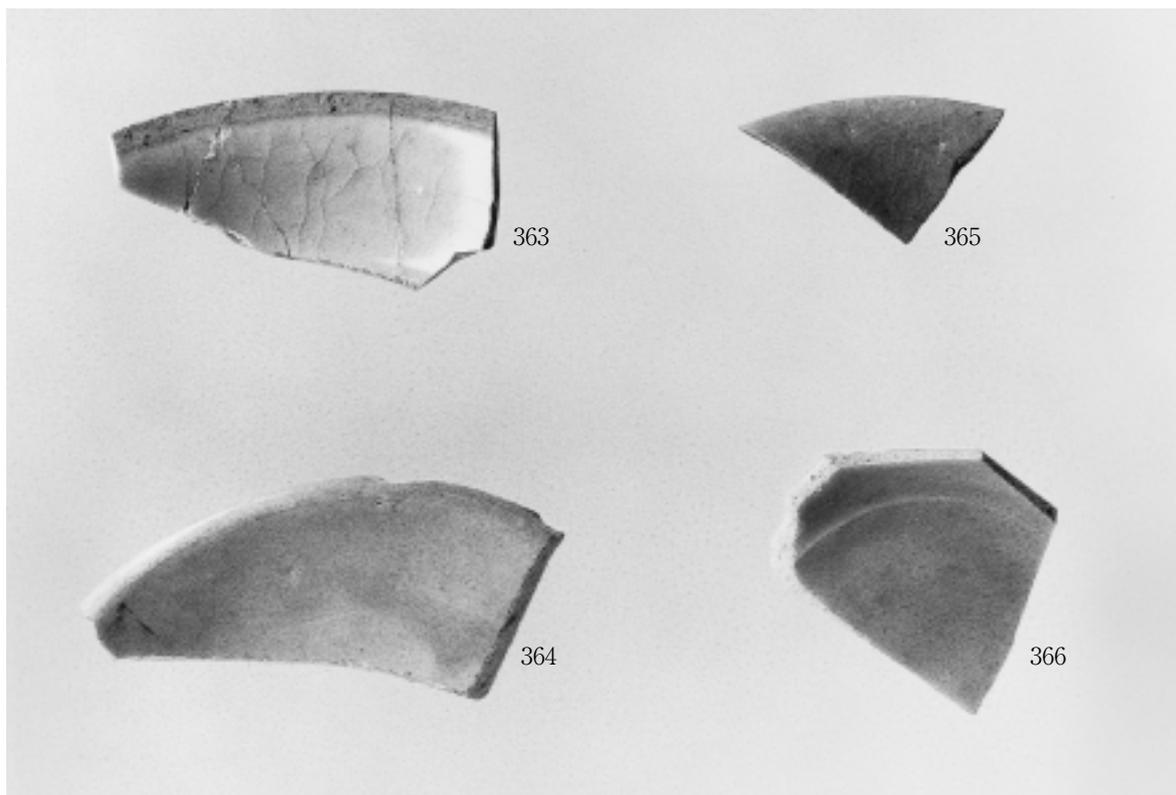
土師質土器(杯)



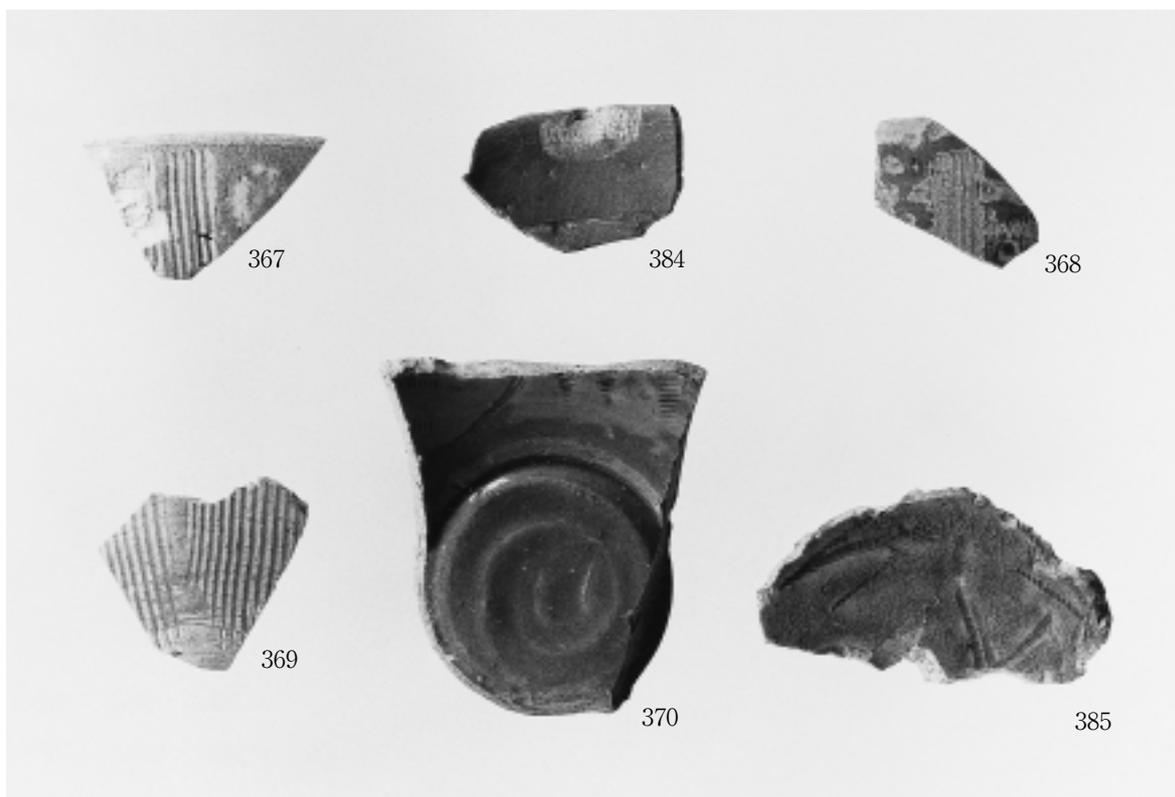
土師質土器(杯・椀)



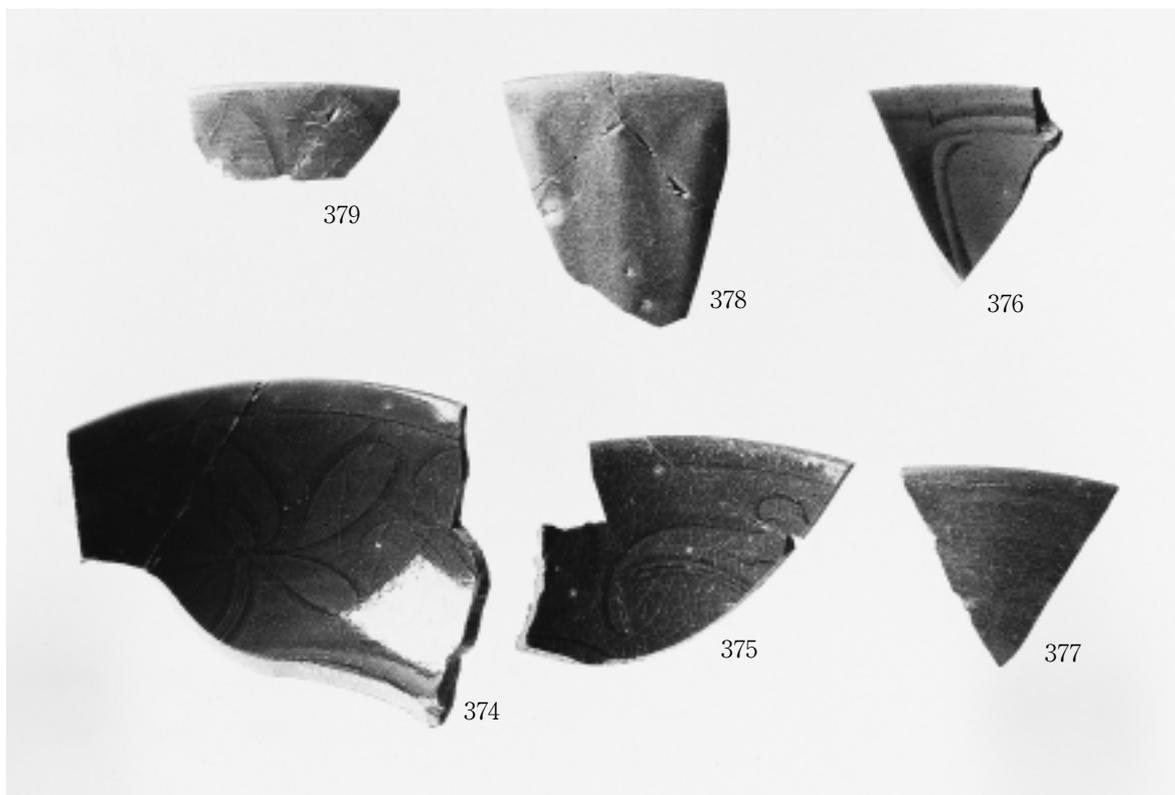
白磁(碗)



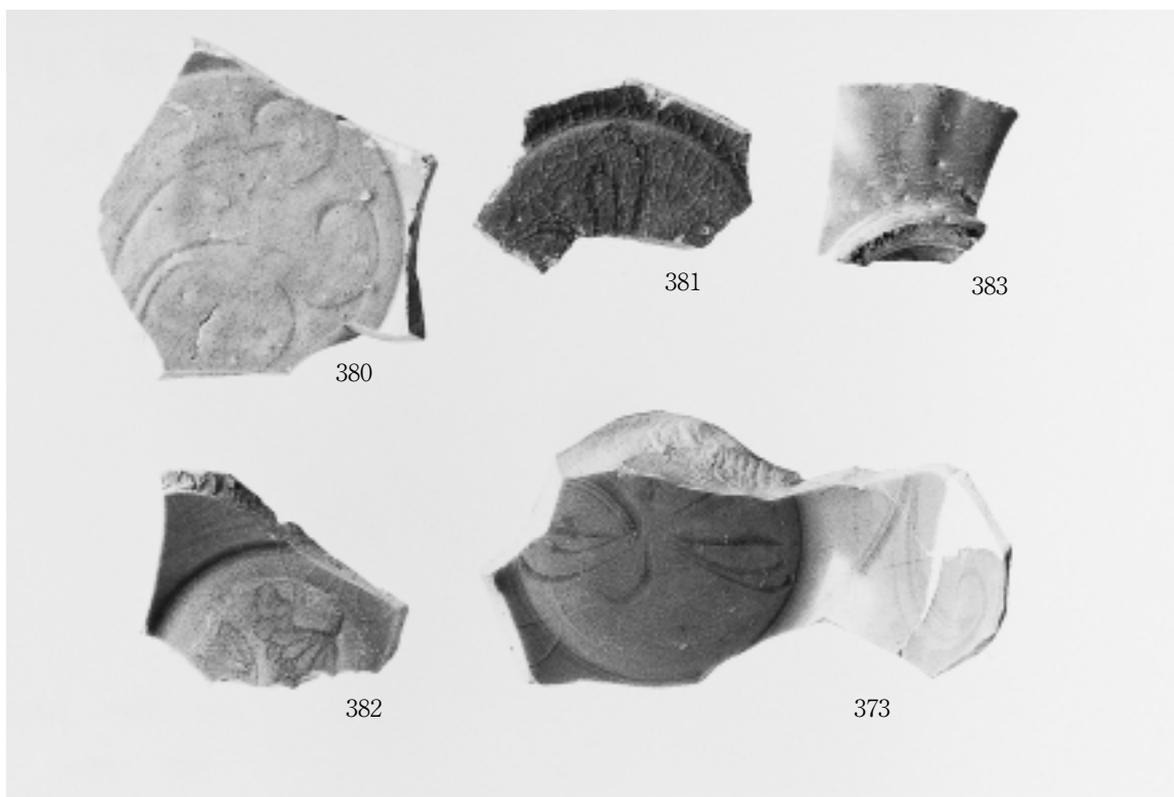
白磁(皿)



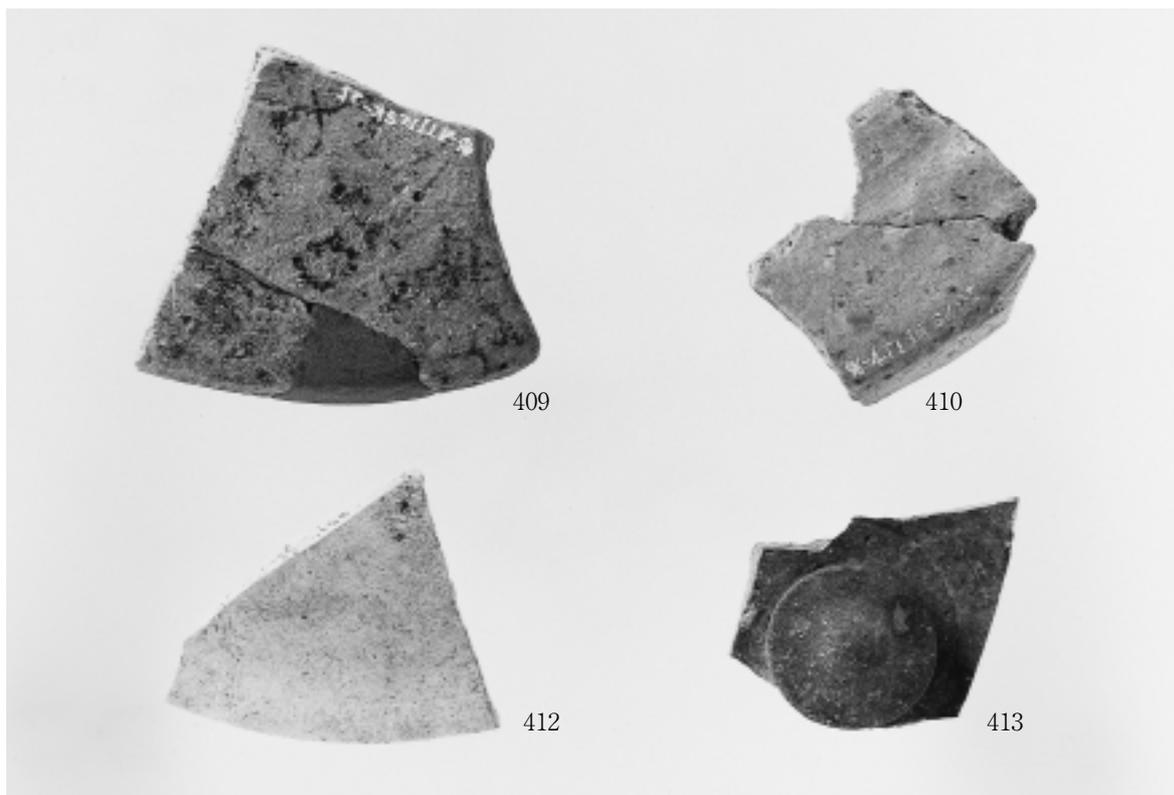
青磁(碗·皿)



青磁(碗)



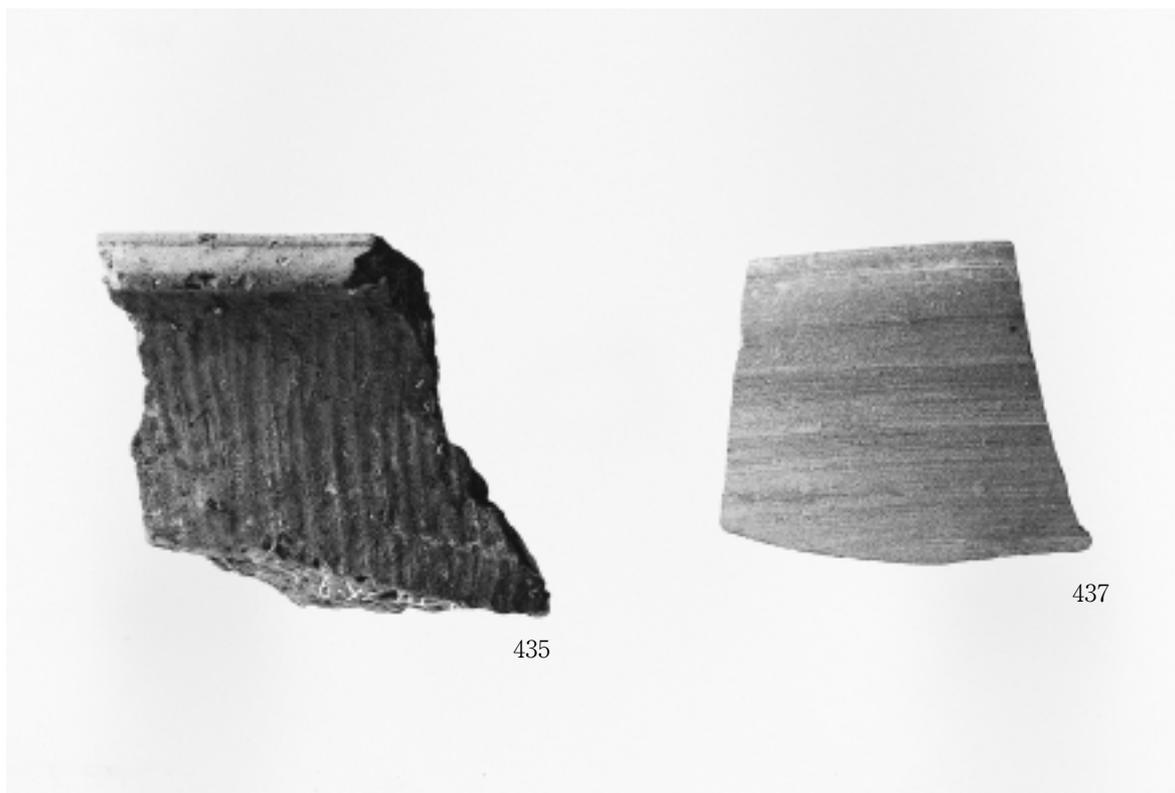
青磁(碗)



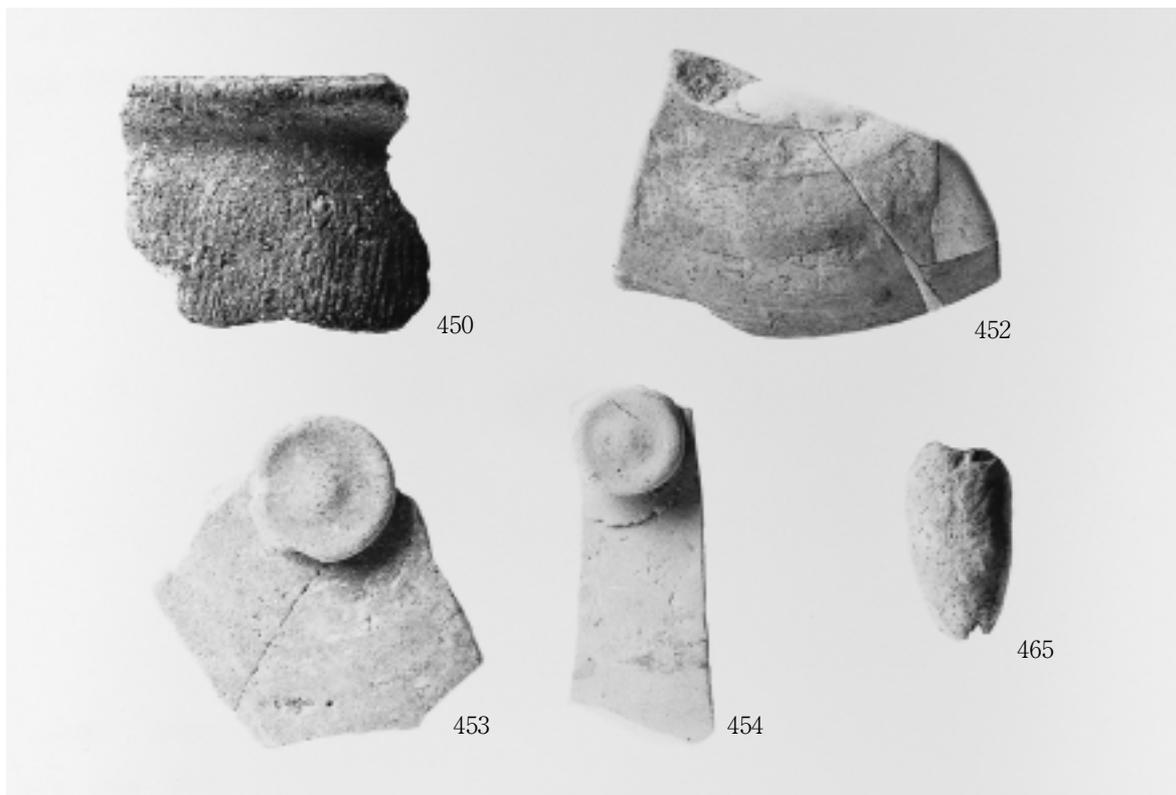
土師器(蓋), 須恵器(蓋)



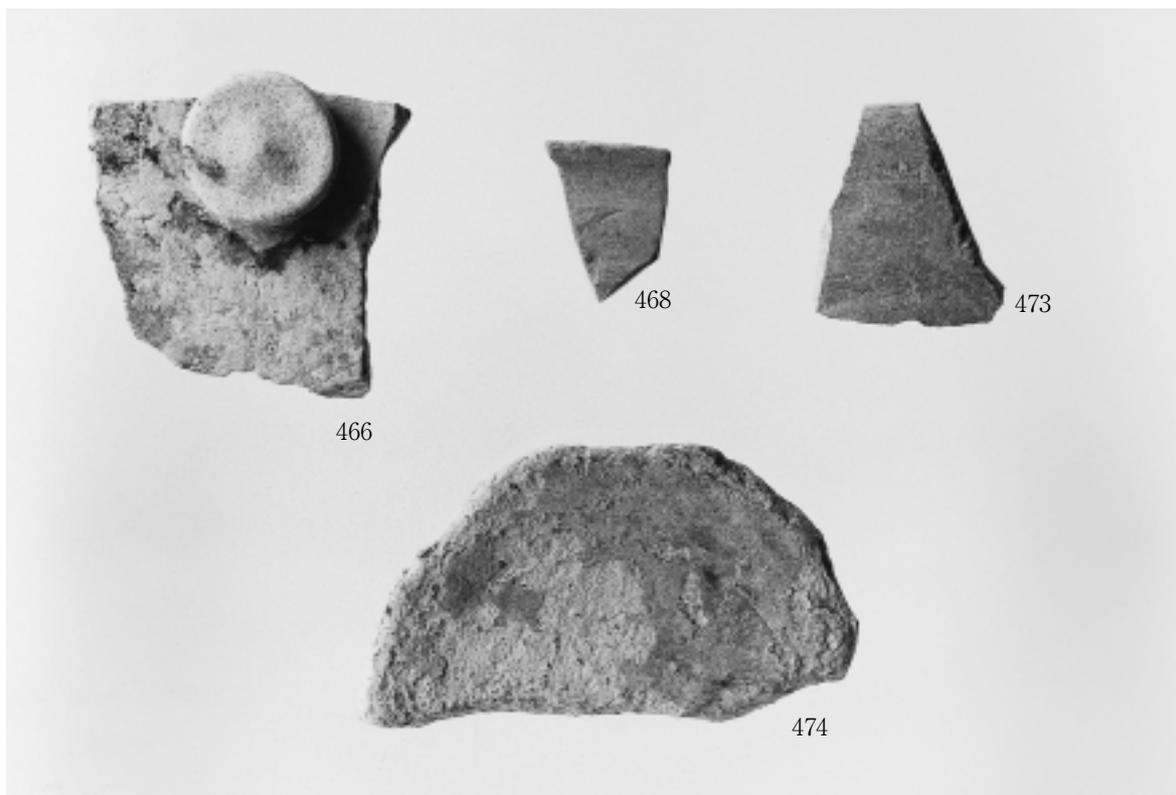
土師器(甕)



土師器(甕), 須恵器(杯)



土師器(甕), 須恵器(蓋), 土製品(土錘)



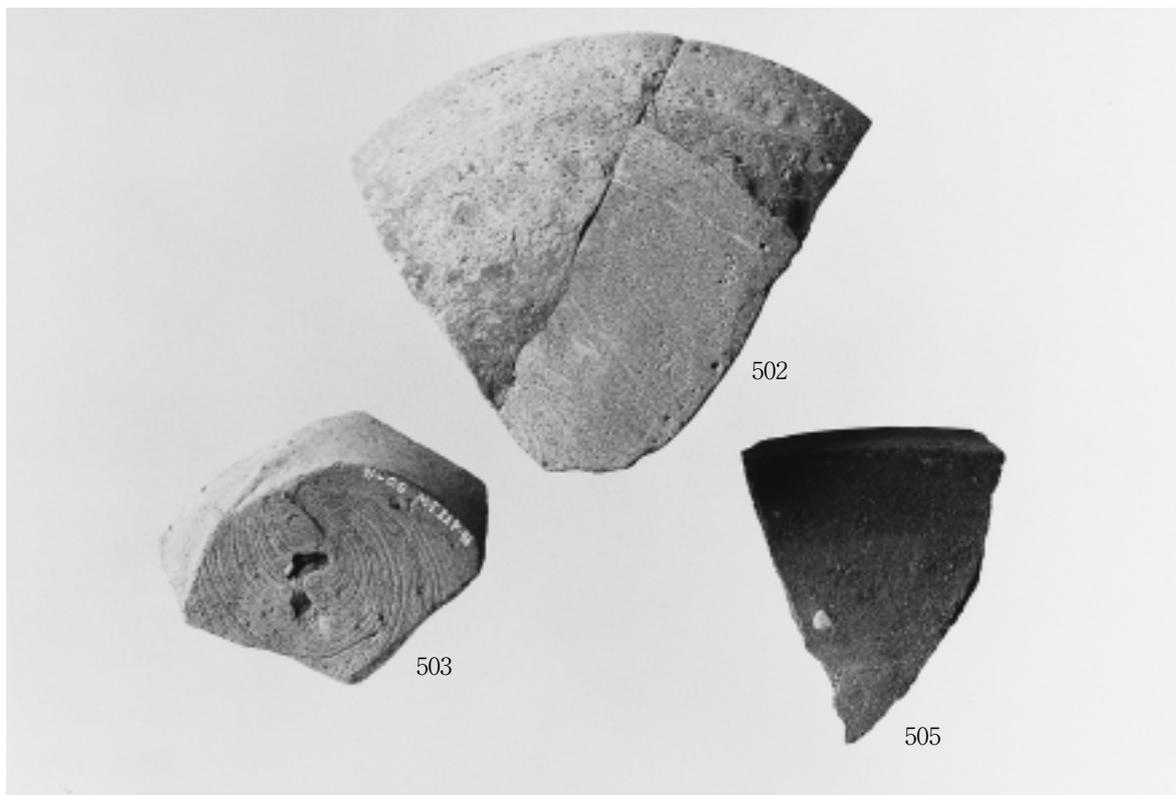
須恵器(蓋), 緑釉陶器(椀)



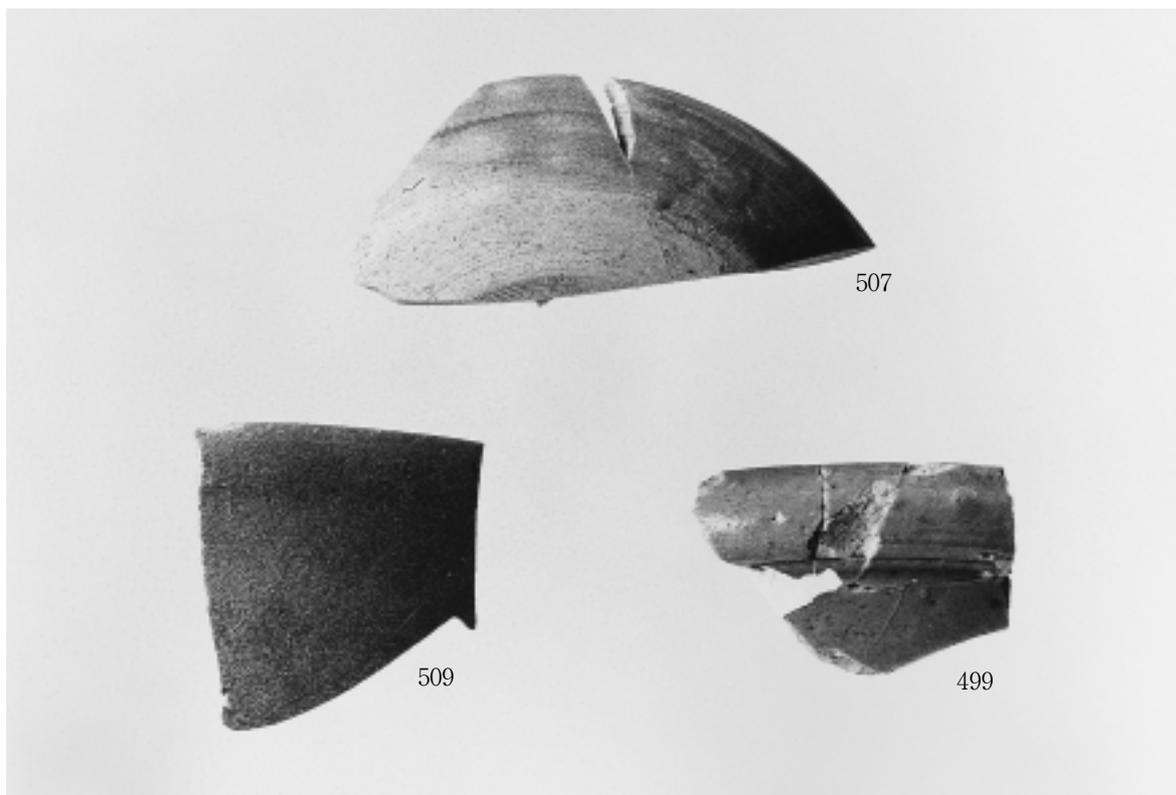
土師質土器(小皿), 瓦質土器(羽釜), 土製品(土錘)



土師器(甕), 黑色土器(椀), 備前(鉢)



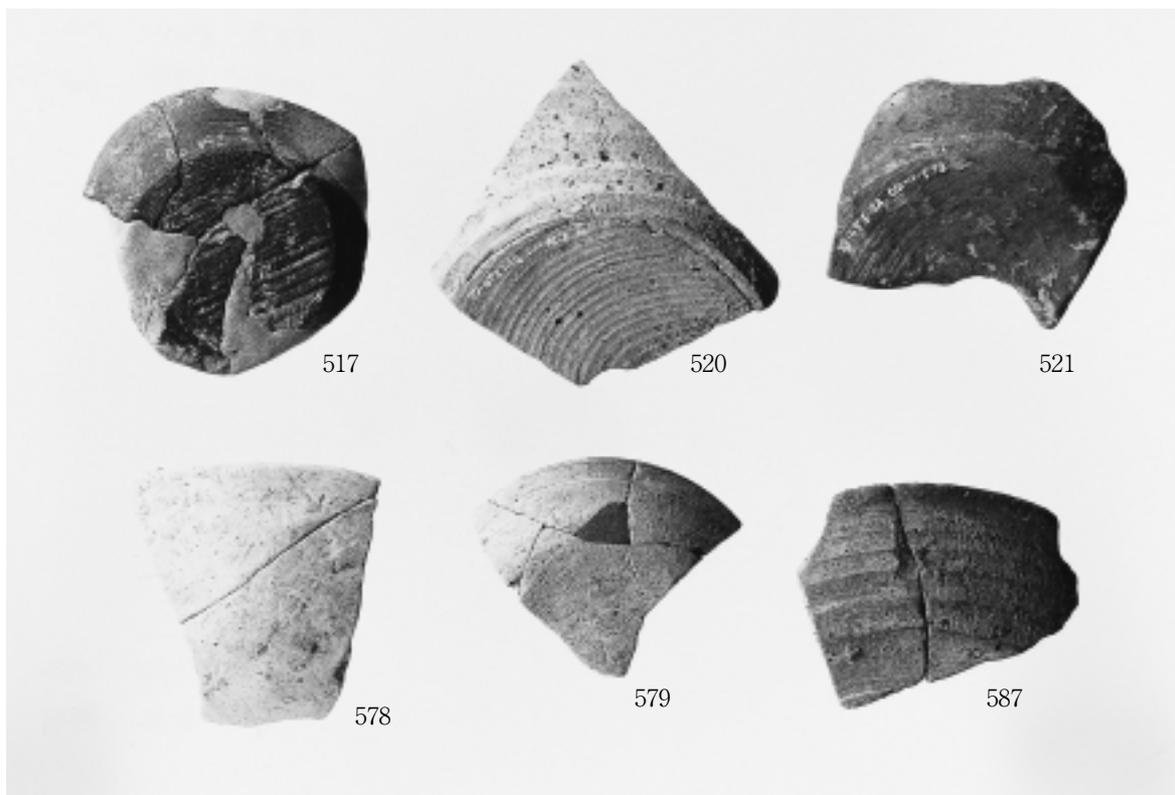
瓦器(碗), 東播系須惠器(片口鉢), 土師質土器(杯)



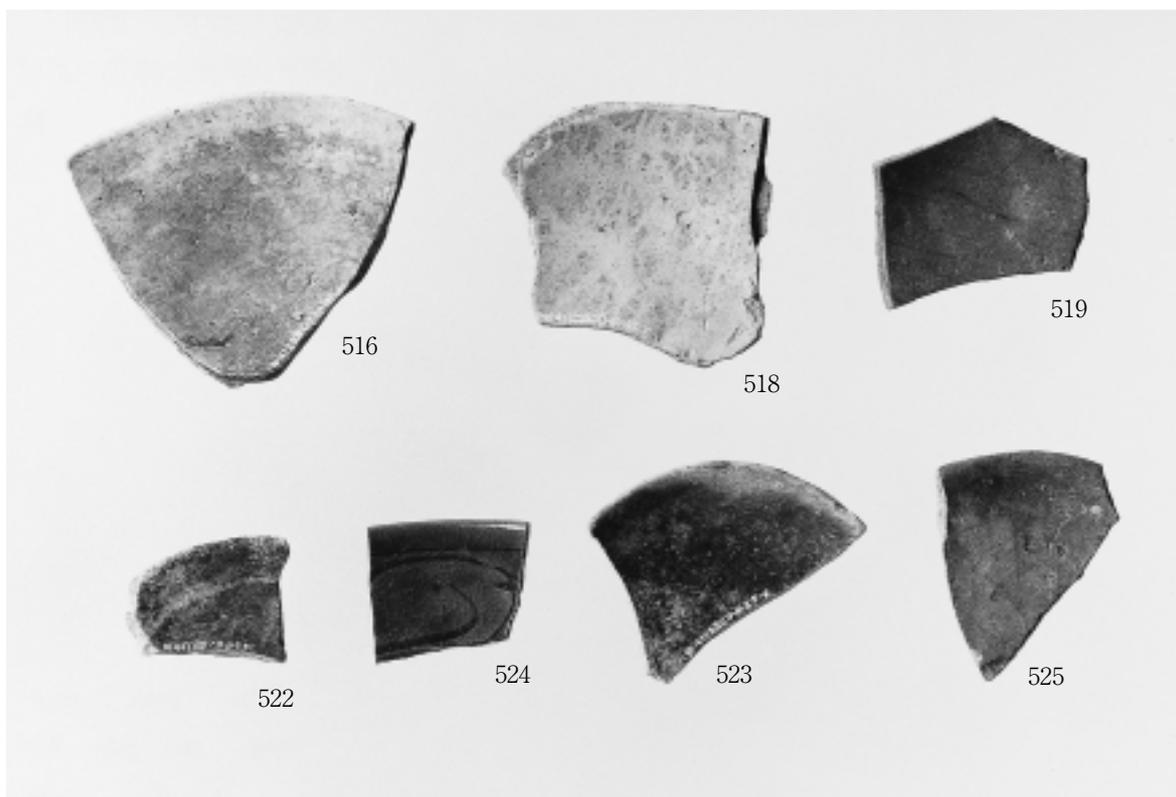
白磁(碗), 青磁(碗・皿)



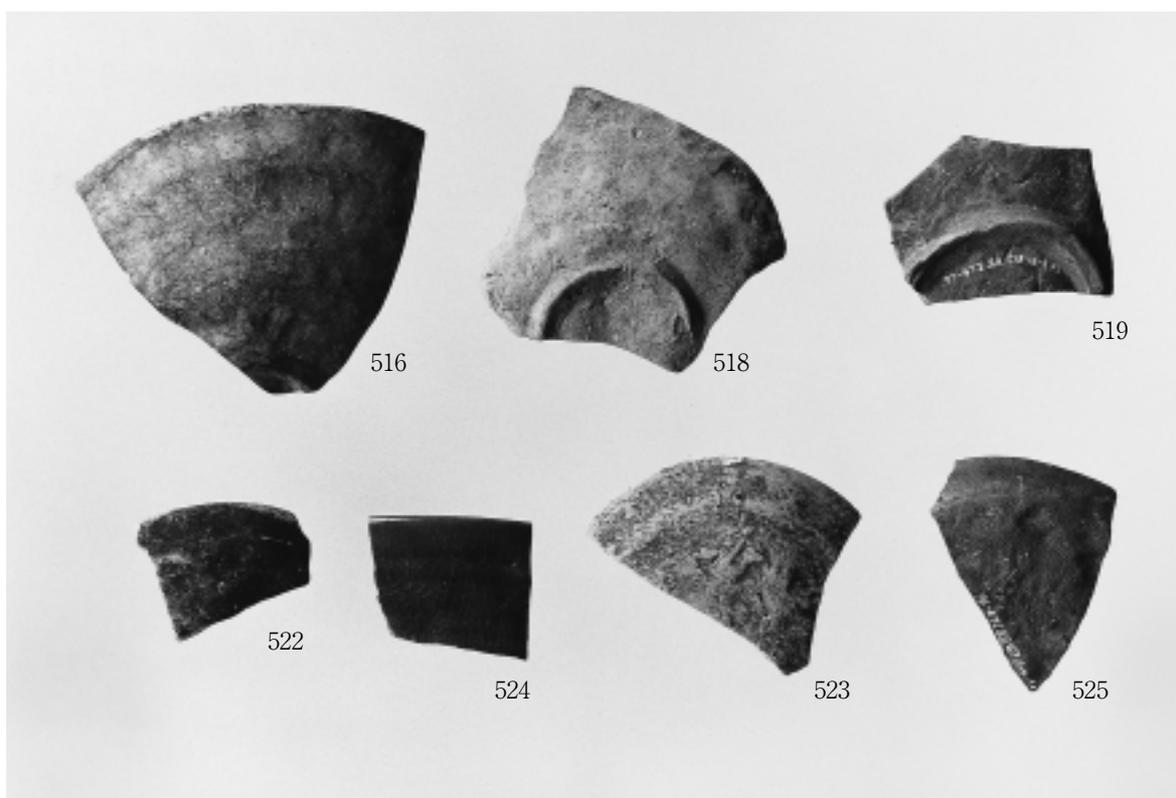
瓦器(椀), 土師質土器(小皿・椀)



土師質土器(杯・小皿・椀)



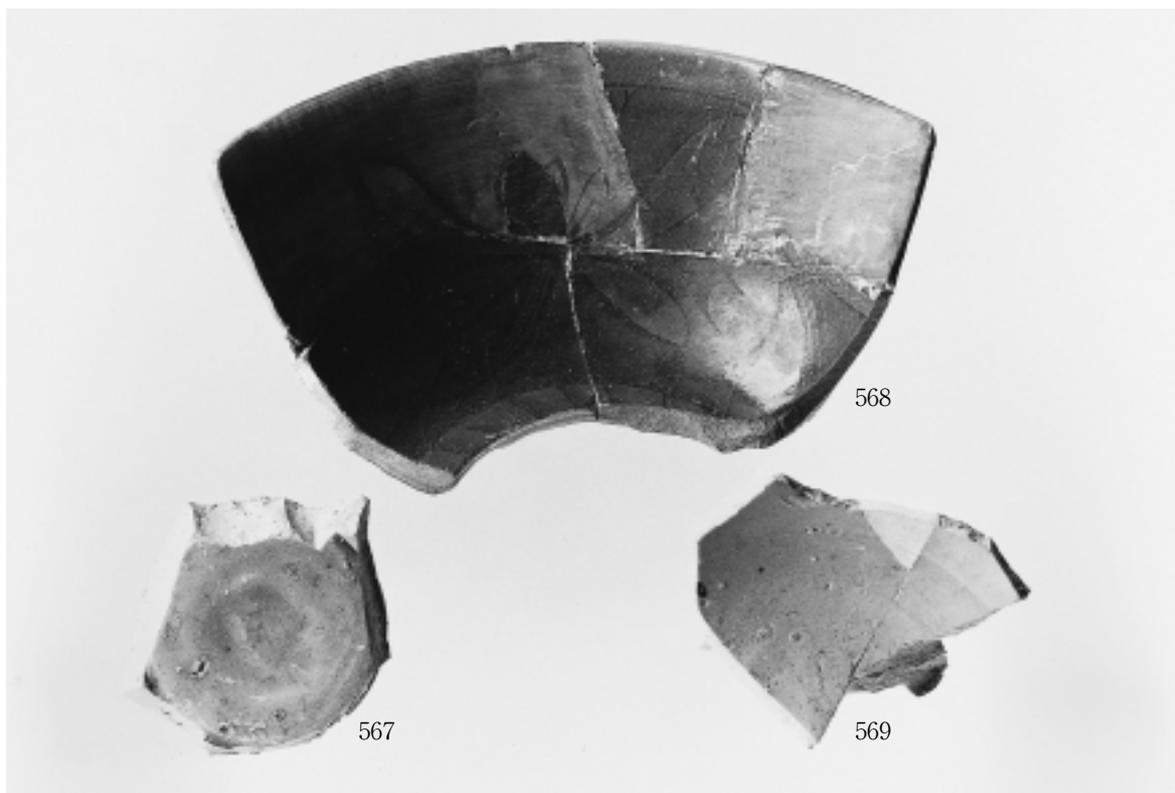
瓦器(碗·小皿), 青磁(碗)内面



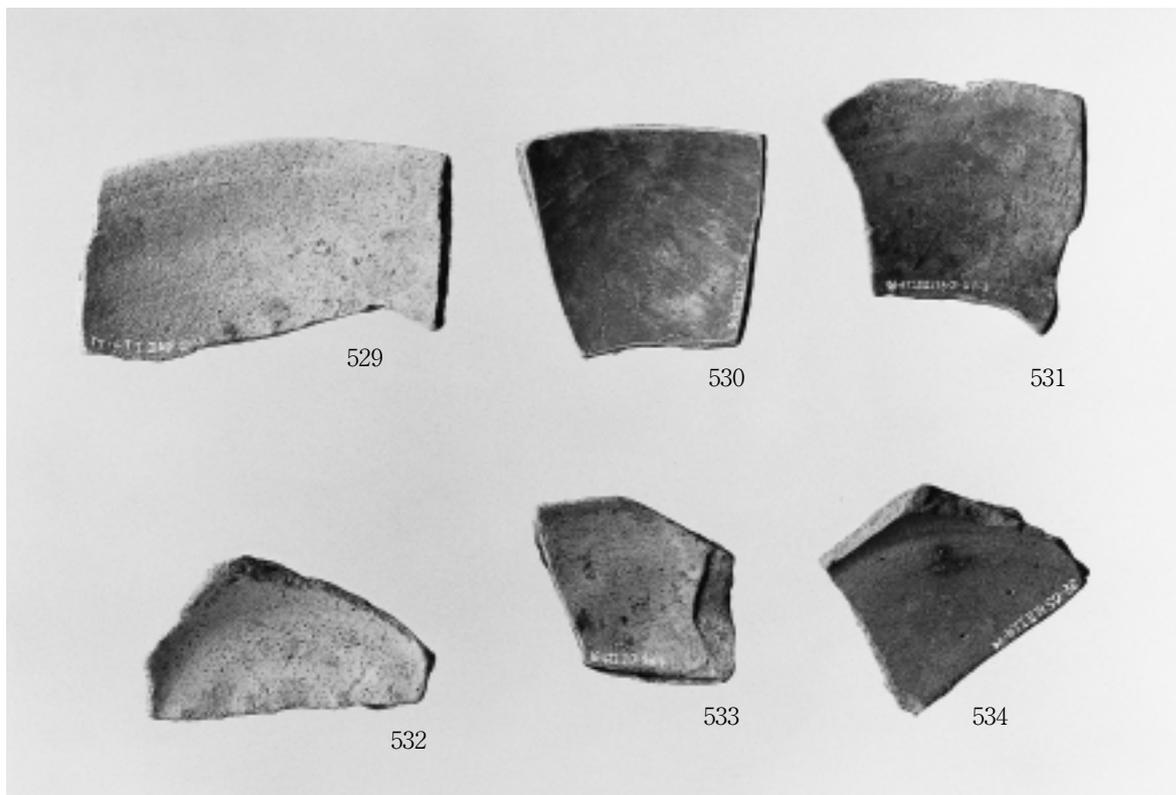
瓦器(碗·小皿), 青磁(碗)外面



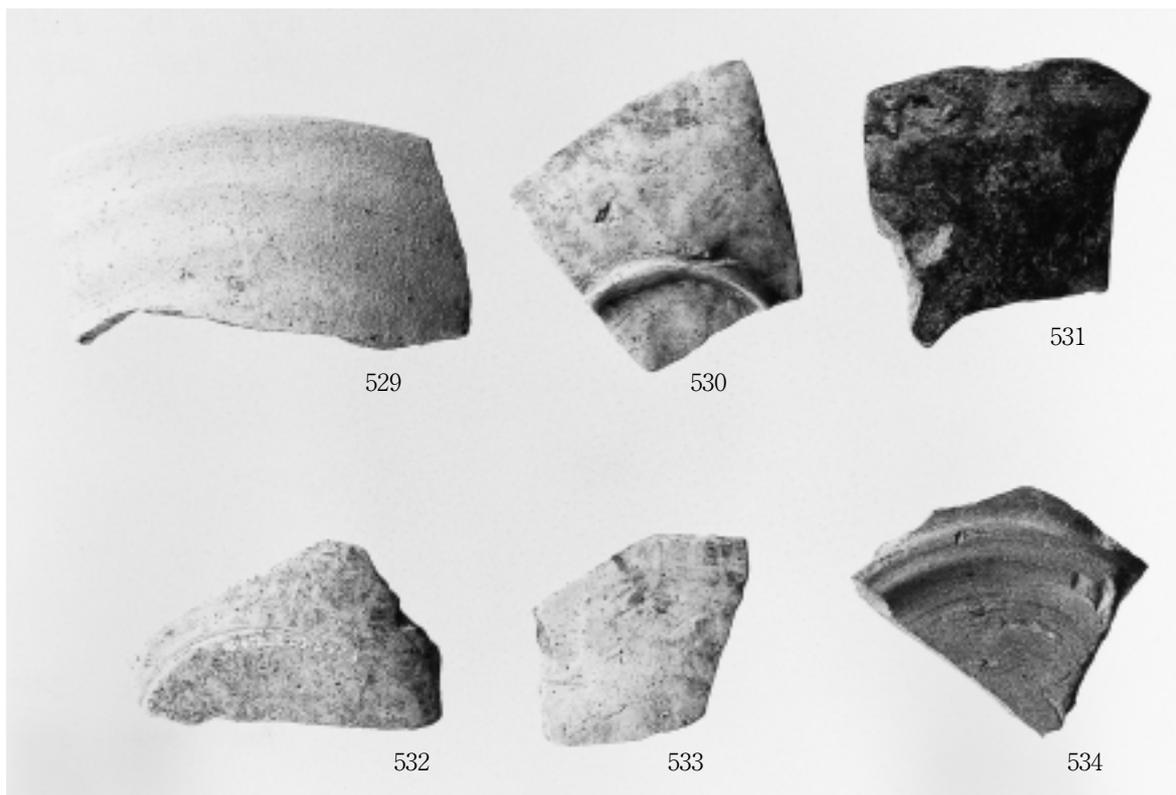
瓦器(碗)



白磁(碗), 青磁(碗)



須惠器(杯・椀), 瓦器(椀), 土師質土器(杯)内面



須惠器(杯・椀), 瓦器(椀), 土師質土器(杯)外面



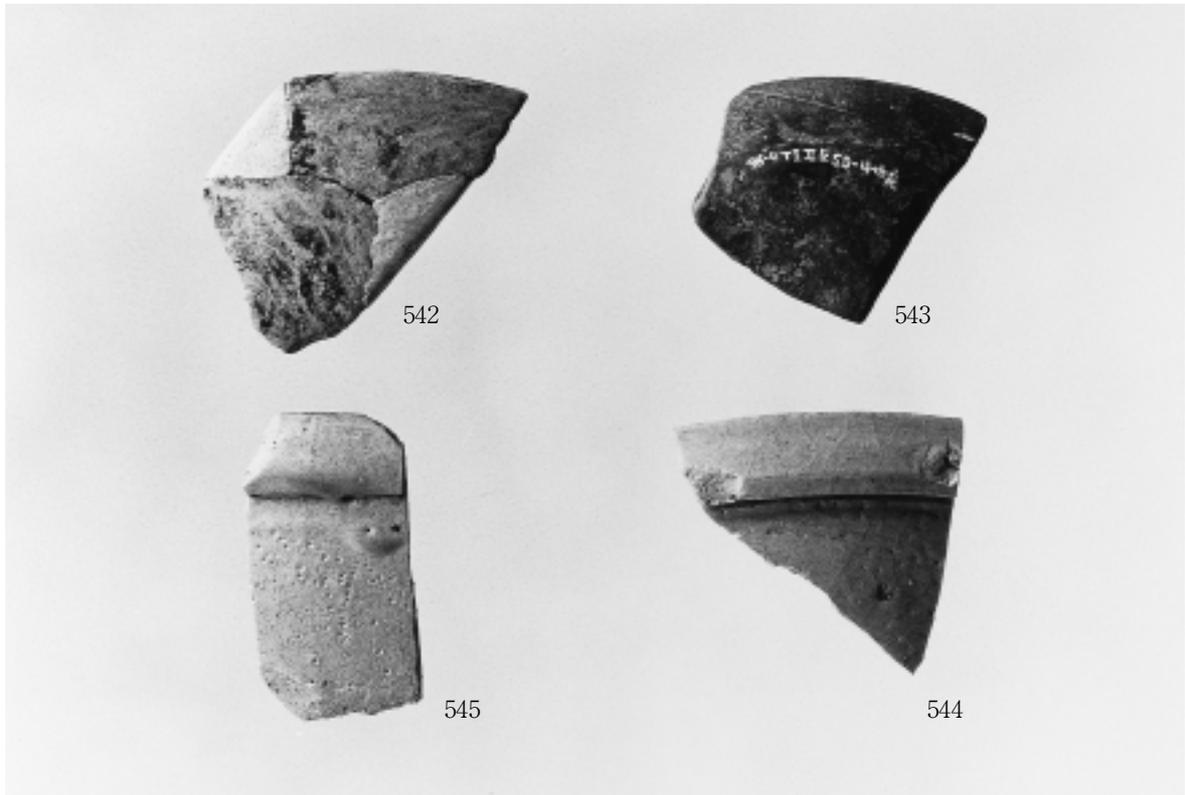
538

湖州方鏡



540

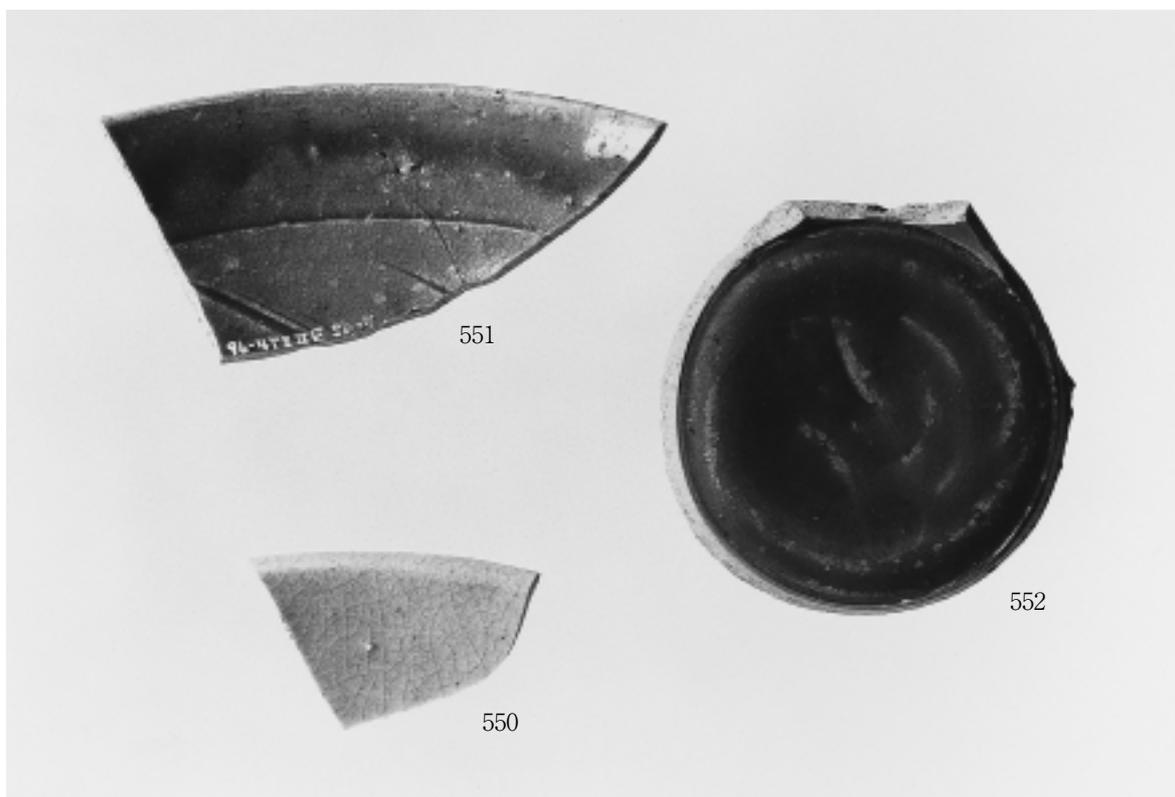
鉄製品(刀子)



土師器(椀), 土師質土器(小皿), 白磁(碗)



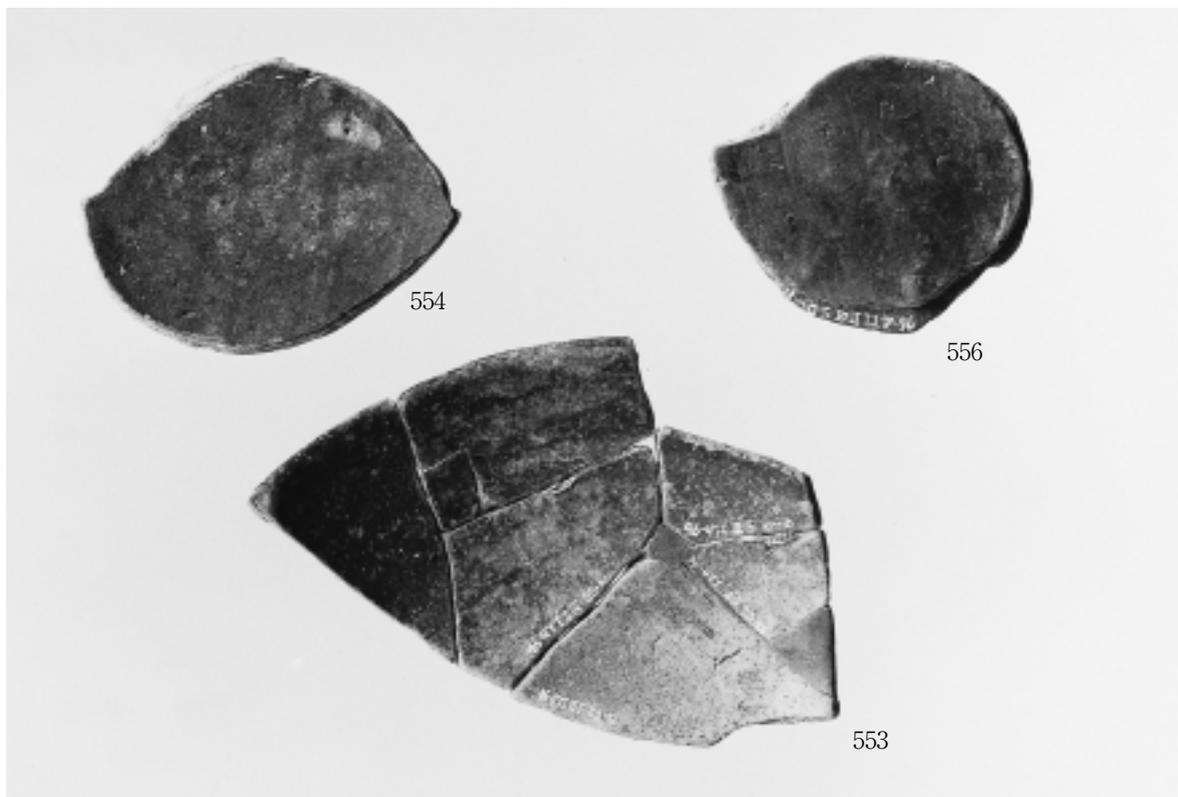
土師質土器(杯・椀), 白磁(碗・皿)



白磁(碗), 青磁(碗)内面



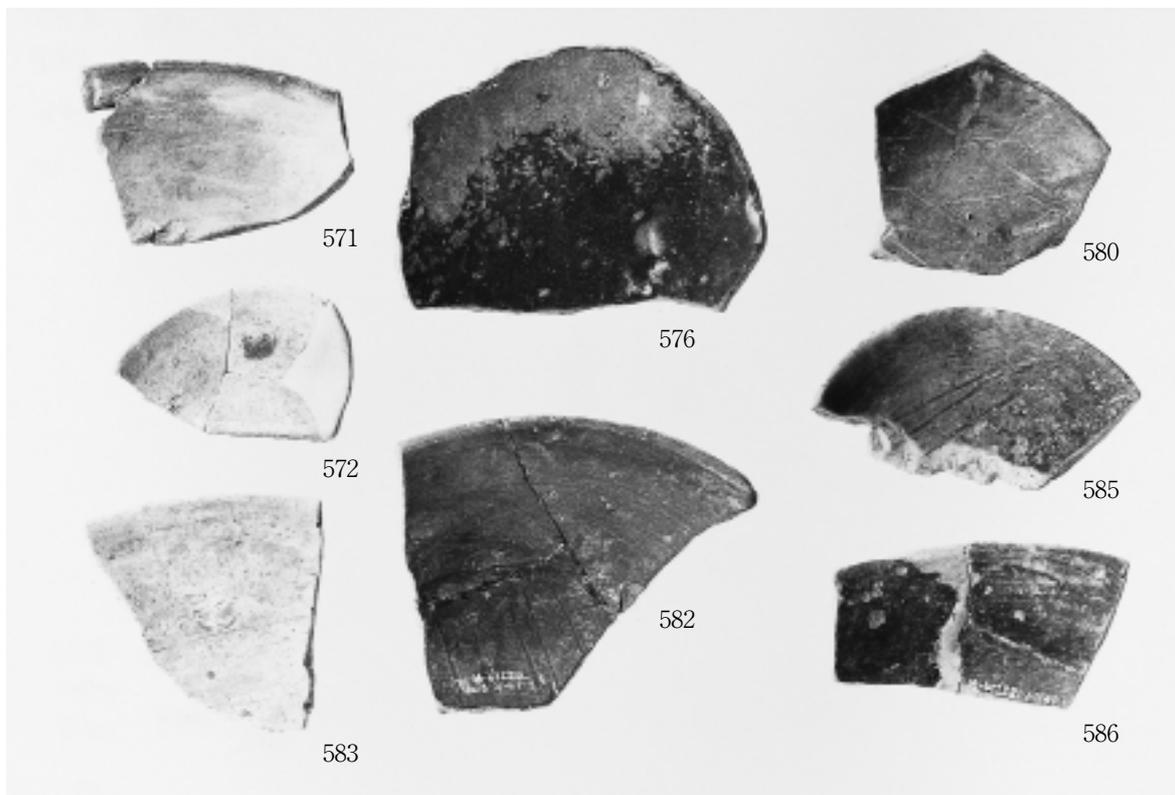
白磁(碗), 青磁(碗)外面



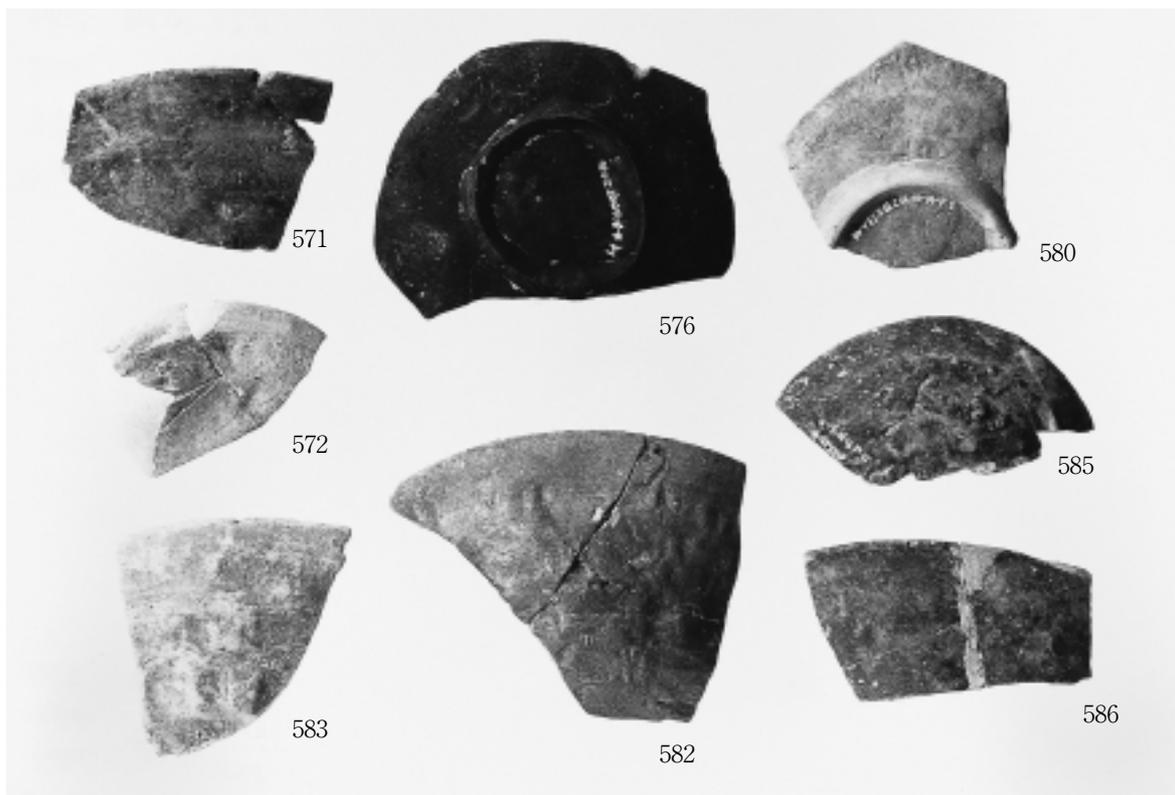
瓦器(碗)内面



瓦器(碗)外面



瓦器(碗・小皿)内面



瓦器(碗・小皿)外面



古式土師器(壺・甕), 須恵器(高杯・壺)



古式土師器(甕・高杯)



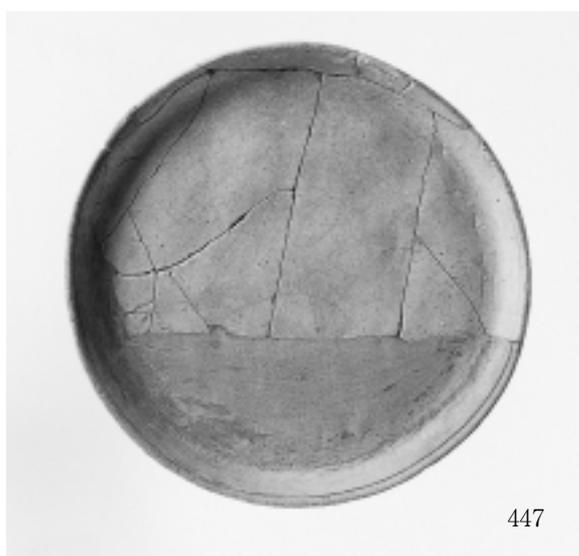
古式土師器(高杯)



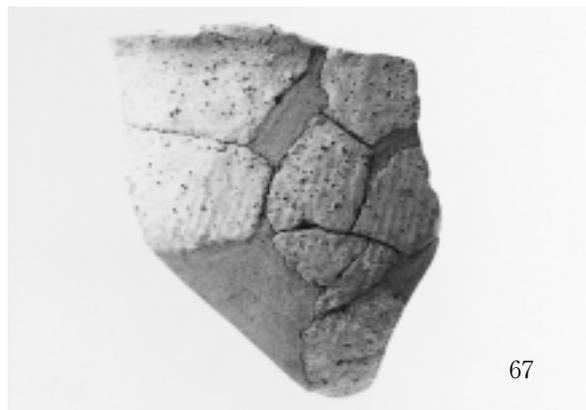
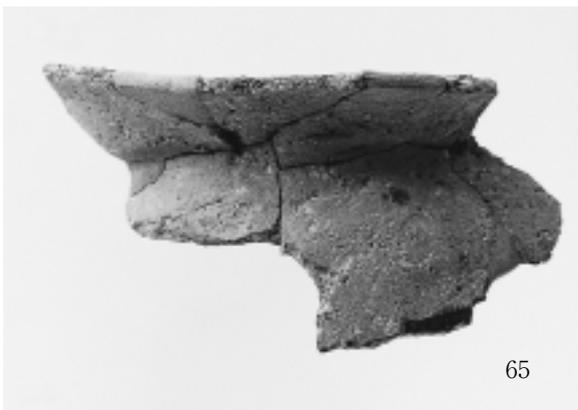
土師器(甕), 須恵器(高杯), 石製品(砥石・叩石)



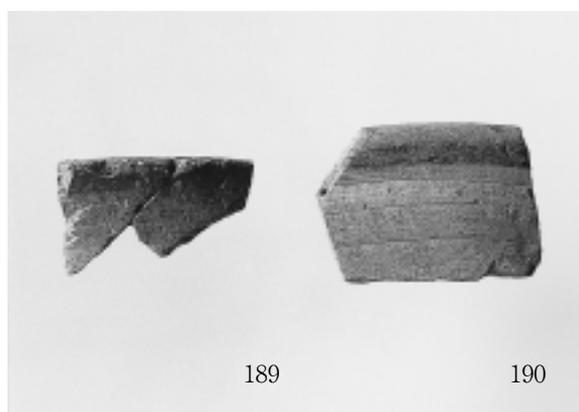
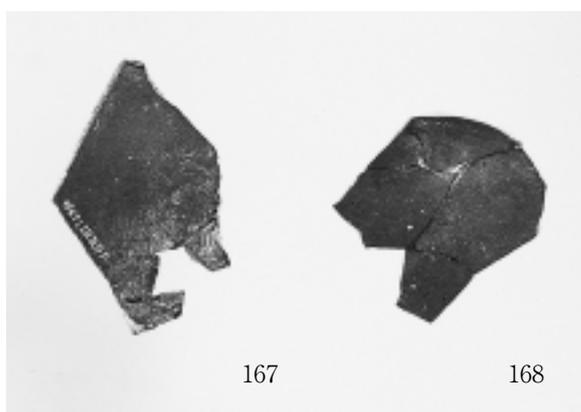
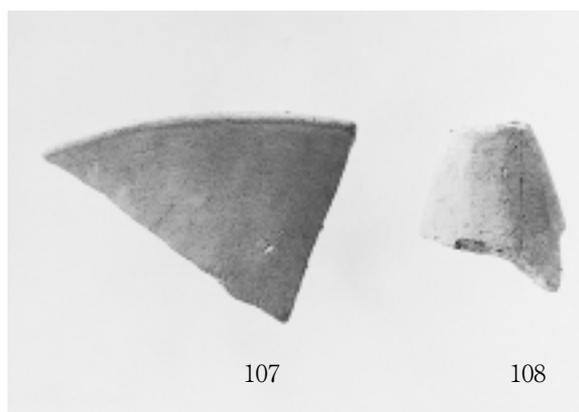
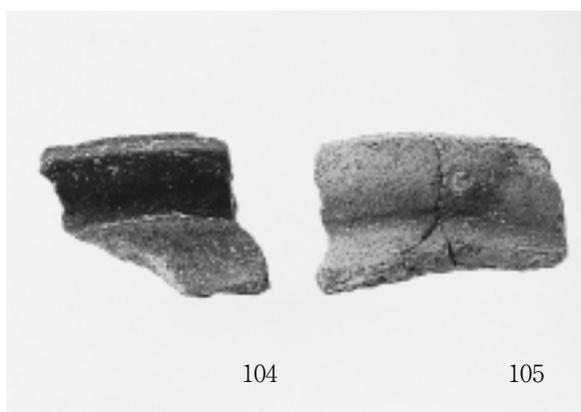
古式土師器(壺), 白磁(皿), 石製品(砥石・叩石)



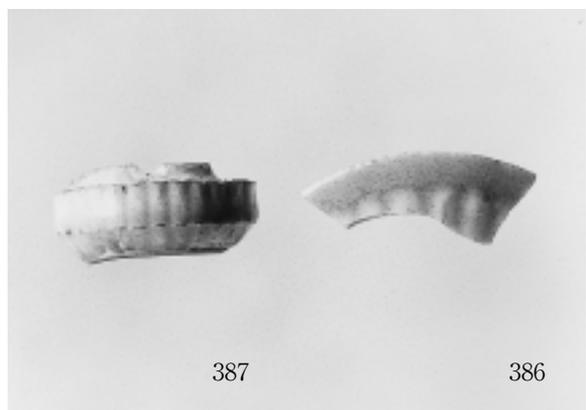
古式土師器(甕・高杯), 土師器(皿), 石製品(砥石・叩石)



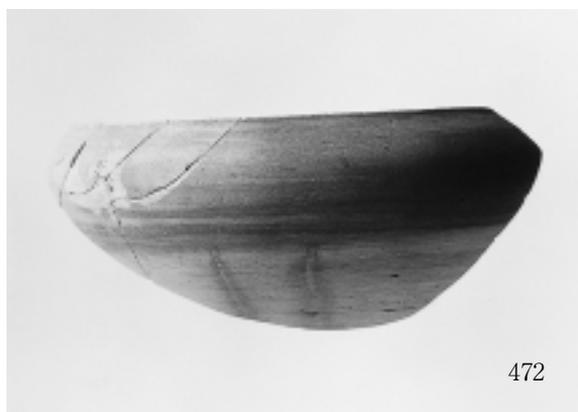
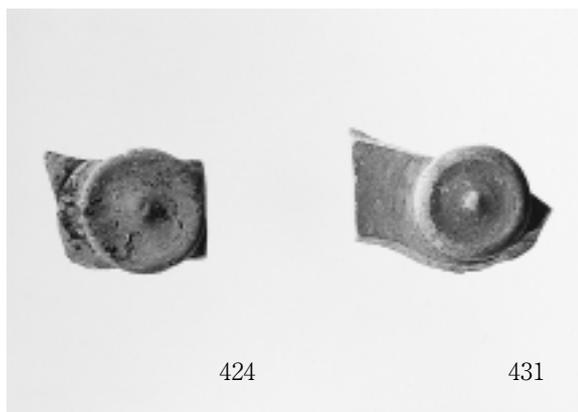
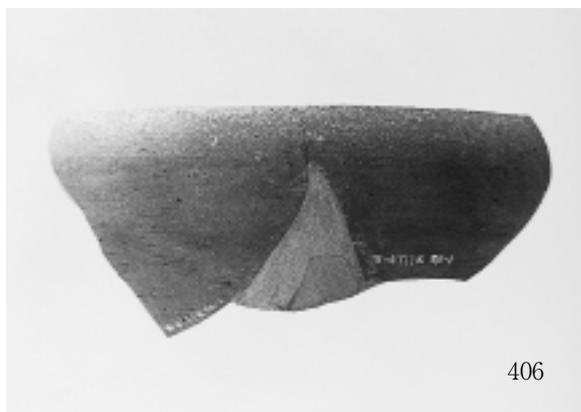
古式土師器(壺・甕・高杯), 土師器(甕)



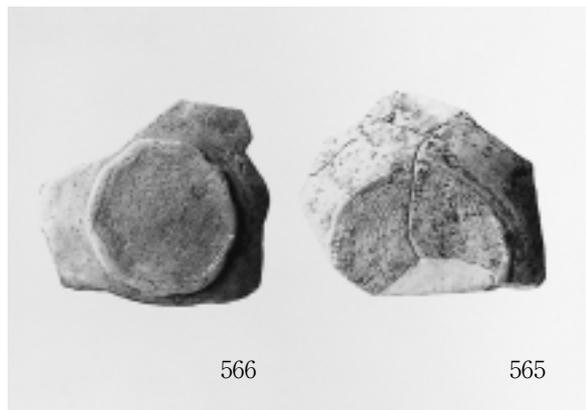
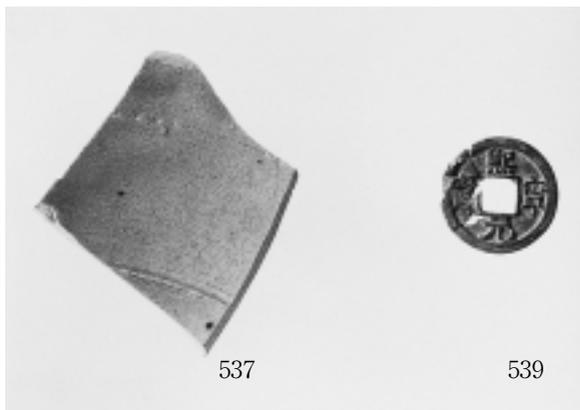
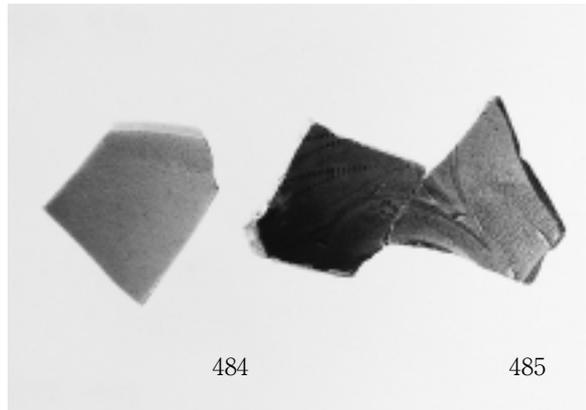
古式土師器(高杯), 土師器(甕・鉢・高杯・甑), 黑色土器(椀), 東播系須恵器(片口鉢)



東播系須恵器(甕), 土師質土器(小皿), 瓦質土器(羽釜), 青白磁(合子蓋), 染付(碗), 近世陶器(甕), 土製品(土錘), 石製品(石包丁)



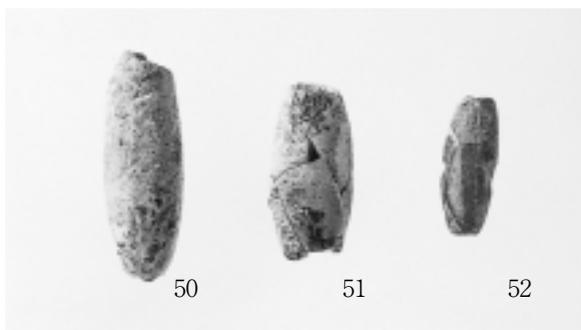
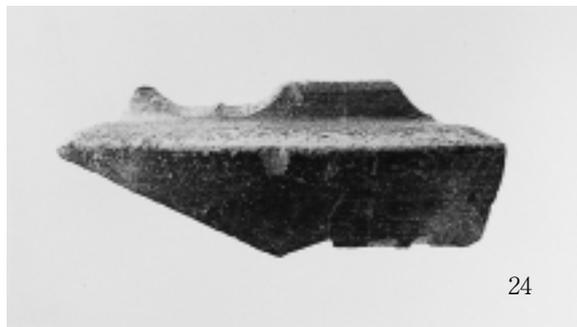
土師器(甕・杯), 須恵器(蓋・鉢), 土製品(土錘)



須惠器(蓋), 瓦器(椀), 土師質土器(杯・椀), 白磁(碗), 青磁(碗), 土製品(土錘), 古錢



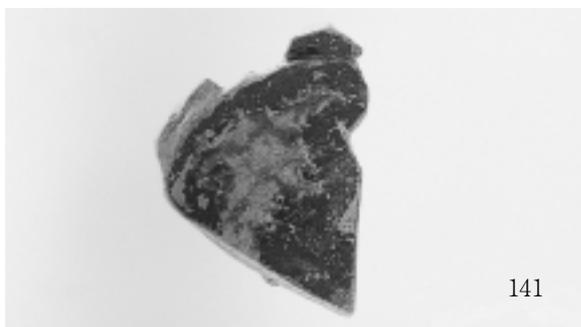
土師器(皿), 須恵器(蓋・杯・皿), 緑釉陶器(椀)



古式土師器(甕・鉢), 須恵器(皿・壺), 土師質土器(杯), 土製品(土錘), 石製品(砥石)



土師器(杯), 須恵器(蓋・杯)



須恵器(皿・椀)



須恵器(壺), 緑釉陶器(椀), 土師質土器(小皿)



瓦器(碗・小皿), 土師質土器(杯), 青磁(碗)



土師質土器(杯・小皿・椀), 白磁(碗)



土師器(蓋・杯・小皿), 須恵器(杯), 白磁(碗・皿)



土師器(皿), 須恵器(蓋・杯・皿・盤), 鉄製品(刀子)



須恵器(杯), 瓦器(椀), 土師質土器(杯・小皿), 鉄製品(短刀)



瓦器(小皿), 土師質土器(杯・小皿), 土製品(土錘)



瓦器(碗), 土師質土器(杯・小皿)

報告書抄録

ふりがな	みつなが・おかのしたいせき							
書名	光永・岡ノ下遺跡							
副書名	土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第55集							
編著者名	廣田佳久, 伊藤 強, 田中涼子							
編集機関	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	高知県南国市篠原南泉1437 - 1							
発行年月日	2000年11月30日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 。 ”	東経 。 ”	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みつなが 光永・ おかのした 岡ノ下 遺跡	こうちけん 高知県 とまし 土佐市 たかおかちょう 高岡町	39205	050083	33度 29分 54秒	133度 25分 42秒	19960711 19970210 19970530 19970701 20000124 20000125	6,785	土佐市バイ パス建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
光永・岡ノ下遺跡	祭祀跡	古墳	祭祀跡 1基		土 師 器	古墳時代前期 の祭祀跡		
	官衙関連	古代	土坑 6基 溝跡 3条 ピット 2個 性格不明遺構 5基 自然流路 2条		土 師 器 須 恵 器 緑 釉 陶 器 黒 色 土 器	官衙関連遺 構・遺物		
	集落跡	中世	掘立柱建物跡17棟 塀・柵列 7列 土坑 46基 溝跡 39条 ピット 19個 自然流路 2条		瓦 器 東播系須恵器 土師質土器 瓦質土器 白 磁 青 磁	12～13世紀の 集落跡,湖州方 鏡が出土		

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第55集

光永・岡ノ下遺跡

土佐市バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2000年11月30日

発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知県南国市篠原南泉1437 - 1
Tel. 088-864-0671

印刷 川北印刷株式会社